

六地蔵遺跡 I



1989. 3

熊本県教育委員会

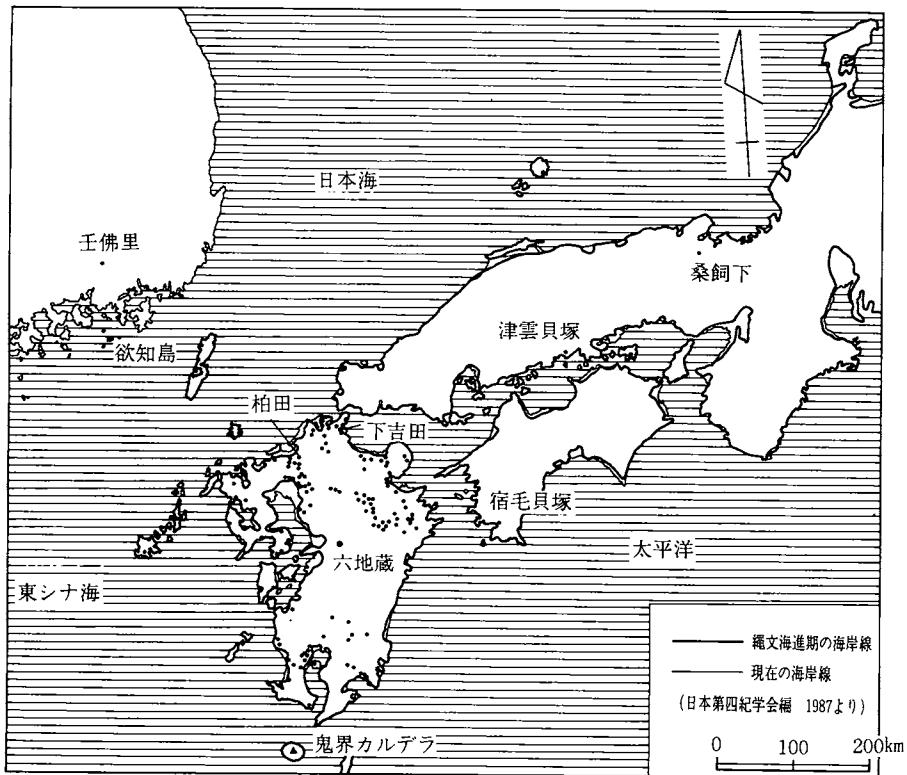
写 真 図 版



空中写真 遺跡遠望

ろくじぞう
六地蔵遺跡 I

—熊本県菊池郡菊陽町大字津久礼字六地蔵所在の遺跡—



1989. 3

熊本県教育委員会



序 文

農業の近代化をめざす県営農業基盤整備事業は、県下各地で実施されていますが、施工面積が広範囲におよぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきています。熊本県教育委員会としましては、その文化財の取扱いを、事前に地元や農政部局と協議し、保存できるものについては極力保存に努めているところですが、やむを得ず破壊される場合には発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

ここに報告する六地蔵遺跡は、昭和62年度県営圃場整備事業（菊陽地区）に伴って発掘調査を実施したものであります。発掘に先立ち試掘調査をおこない、その結果をもとに関係部局に現状保存を申し入れ、協議を重ねて、保存が困難な地区について発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代草創期から中世までの多種多様な遺構や遺物が出土しました。中でも、縄文時代後期の北久根山式土器を伴う堅穴式住居跡は九州内でも検出例が少なく、熊本県内外から注目を集めているところであります。

調査成果を報告するにあたり、この成果が学術的研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財愛護などに役立てられることを願って止みません。

最後に、発掘調査や保存問題などについて終始ご協力いただいた県農政部耕地第一課、県菊池事務所耕地課、菊陽町耕地課、菊陽町教育委員会、および地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成元年3月31日

熊本県教育長 松村敏人

例　　言

1. 本書は、県営圃場整備事業（菊陽地区）に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である。
2. 発掘調査は、熊本県菊池郡菊陽町大字津久礼字六地蔵に所在する六地蔵遺跡が対象で、熊本県農政部耕地第一課の依頼を受けて、熊本県教育委員会がおこなった。
3. 当遺跡の発掘調査は昭和62年度に実施し、本書は昭和62年度から63年度に整理をおこなった成果である。
4. 本書は、古い時代から順に記載している。
5. 本書に使用した地形図は、熊本県農政部耕地第一課から提供を受けた。
6. 現地調査に関する実測および写真撮影は、調査員がおこない、一部広田静学（文化課嘱託）・坂口圭太郎（奈良大卒業）・山下志保（熊本大学）の協力を得た。また、遺構の製図は、住田幸恵・吉内素子・瀬丸延子・加来恭子がおこなった。遺物の実測は、土器を吉内、石器を木崎康弘が担当し、製図は、実測者2名の他に瀬丸・加来・赤木美文がおこなった。なお、写真撮影では白石巖氏の協力があった。
7. 本書の執筆・編集は、熊本県教育庁文化課で木崎がおこなった。

凡　　例

1. 現地での実測図は、調査区地形図を200分の1、土坑や埋葬施設を10分の1、堅穴式住居跡を20分の1、溝状遺構を40分の1で作成したが、本書収録の際には土坑20分の1、埋葬施設30分の1、堅穴式住居跡60分の1、溝状遺構120分の1と160分の1にした。
2. 遺跡分布図中の記号は、●を包含地、■を古墳・横穴、■を中世城、△を寺院跡、○をその他としている。
3. 遺構の方位は、すべて磁北である。
4. 出土した遺物の番号は、それぞれの節ごとに1番から順に付している。なお、縄文時代後期に限って、土器と石器の番号はそれぞれでの通し番号にした。縮尺は、次のとおりである。
 - ・縄文時代早期　土器3分の2。石器原寸と3分の2。
 - ・縄文時代後期　土器3分の1。石器原寸（石鎌・石錐・石匙）、3分の2（削器・二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片・剥片）、2分の1（磨製石斧・打製石斧・楔形石器・石鎌・石核）、3分の1（磨石・敲石・石皿・台石・石核）、6分の1（石皿・台石）。
 - ・弥生時代　土器3分の1と6分の1。石器3分の1。
5. 特徴的な痕跡のある石器は、その部分を網目で表現し、そのつど凡例を付している。
6. 出土遺物の解説は本文中に記したが、石器の法量については計測表に掲載した。

本文目次

序文	
例言・凡例	
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の概要	1
第2節 調査の方法と経過	3
第Ⅱ章 遺跡の概要	5
第1節 遺跡の環境	5
第2節 遺跡の概要	9
第3節 遺跡の層位	11
第Ⅲ章 調査の成果	13
第1節 縄文時代草創期・早期の遺物	13
第2節 縄文時代後期の遺構と遺物	15
1. 壱穴式住居跡と出土土器	15
2. 土坑	48
3. ごみ捨て場と出土土器	49
4. 埋没谷と出土土器	55
5. 遺構外の出土土器	57
6. 石器	64
第3節 弥生時代の遺構と遺物	98
1. 土坑	98
2. 埋葬施設	100
3. 遺構外出土の遺物	105
第4節 歴史時代の遺構	109
第Ⅳ章 総括	113
1. 縄文時代草創期・早期について	113
2. 縄文時代後期について	114
参考文献	121
写真図版	

挿図目次

第1図 遺跡分布図	6	第32図 13号竪穴式住居跡実測図	44
第2図 地形断面図	9	第33図 14号竪穴式住居跡実測図	45
第3図 遺跡周辺地形図	10	第34図 15号竪穴式住居跡実測図	46
第4図 基本土層図	11	第35図 16号・17号竪穴式住居跡実測図	47
第5図 繩文式土器・石器実測図	14	第36図 土坑実測図	48
第6図 遺構配置図	15	第37図 ごみ捨て場内遺物出土状況図	49
第7図 1号竪穴式住居跡実測図	16	第38図 繩文式土器実測図	51
第8図 繩文式土器実測図	18	第39図 繩文式土器実測図	52
第9図 繩文式土器実測図	19	第40図 繩文式土器実測図	53
第10図 繩文式土器実測図	20	第41図 繩文式土器実測図	54
第11図 2号竪穴式住居跡実測図	21	第42図 谷部土層断面図	55
第12図 3号竪穴式住居跡実測図	22	第43図 繩文式土器実測図	56
第13図 4号竪穴式住居跡実測図	23	第44図 繩文式土器実測図	58
第14図 5号竪穴式住居跡実測図	24	第45図 繩文式土器実測図	59
第15図 6号竪穴式住居跡実測図	25	第46図 繩文式土器実測図	60
第16図 7号竪穴式住居跡実測図	26	第47図 繩文式土器実測図	61
第17図 繩文式土器実測図	27	第48図 繩文式土器実測図	62
第18図 8号竪穴式住居跡実測図	28	第49図 繩文式土器実測図	63
第19図 繩文式土器実測図	30	第50図 石器実測図	66
第20図 繩文式土器実測図	31	第51図 石器実測図	67
第21図 繩文式土器実測図	32	第52図 石器実測図	68
第22図 繩文式土器実測図	33	第53図 石器実測図	69
第23図 繩文式土器実測図	34	第54図 石器実測図	70
第24図 繩文式土器実測図	35	第55図 石器実測図	71
第25図 9号竪穴式住居跡実測図	36	第56図 石器実測図	72
第26図 繩文式土器実測図	37	第57図 石器実測図	74
第27図 10号竪穴式住居跡実測図	38	第58図 石器実測図	75
第28図 11号竪穴式住居跡実測図	39	第59図 石器実測図	76
第29図 12号竪穴式住居跡実測図	40	第60図 石器実測図	77
第30図 繩文式土器実測図	41	第61図 石器実測図	78
第31図 繩文式土器実測図	42	第62図 石器実測図	79

第63図 石器実測図	80	第78図 土坑実測図	99
第64図 石器実測図	81	第79図 壺棺墓実測図	101
第65図 石器実測図	82	第80図 襟棺墓実測図	102
第66図 石器実測図	83	第81図 木棺墓実測図	103
第67図 石器実測図	85	第82図 弥生式土器実測図	104
第68図 石器実測図	86	第83図 弥生式土器実測図	106
第69図 石器実測図	87	第84図 弥生式土器実測図	107
第70図 石器実測図	88	第85図 弥生式土器・石器実測図	108
第71図 石器実測図	89	第86図 遺構配置図	109
第72図 石器実測図	90	第87図 溝状遺構実測図	110
第73図 石器実測図	91	第88図 6号溝状遺構実測図	111
第74図 石器実測図	92	第89図 溝状遺構土層断面・断面図	112
第75図 石器実測図	93	第90図 竪穴式住居跡の規模	114
第76図 石器実測図	94	第91図 土器分類図	116
第77図 遺構配置図	98	第92図 脚台の製作過程	119

表 目 次

第1表 調査行程表	4	第4表 縄文時代後期石器組成表	64
第2表 遺跡地名表	7	第5表 石器計測表	95~97
第3表 石器計測表	13	第6表 遺構等別土器組成表	118

図版目次

- 図版1 遺跡遠望・遠景
1. 遺跡遠望（東方）
2. 遺跡遠景（東方）
- 図版2 遺跡遠景
3. 遺跡遠景（西方）
4. 遺跡遠景（西方）
- 図版3 1号竪穴式住居跡
5. 写真方向A
6. 写真方向B
- 図版4 2号竪穴式住居跡
7. 写真方向A
8. 写真方向B
- 図版5 3号竪穴式住居跡
9. 写真方向A
10. 写真方向B
- 図版6 4号竪穴式住居跡
11. 写真方向A
12. 写真方向B
- 図版7 5号竪穴式住居跡
13. 写真方向A
14. 写真方向B
- 図版8 6号竪穴式住居跡
15. 写真方向A
16. 写真方向B
- 図版9 7号竪穴式住居跡
17. 写真方向A
18. 写真方向B
- 図版10 8号竪穴式住居跡
19. 写真方向A
20. 写真方向B
- 図版11 9号竪穴式住居跡
21. 写真方向A
22. 写真方向A. 5号住居跡との切り合い
- 図版12 10号竪穴式住居跡
23. 写真方向A
24. 写真方向B
- 図版13 11号竪穴式住居跡
25. 写真方向A
26. 写真方向B
- 図版14 12号竪穴式住居跡
27. 写真方向A
28. 写真方向B
- 図版15 13号竪穴式住居跡
29. 写真方向A
30. 写真方向A. 切り合い状況
- 図版16 14号竪穴式住居跡
31. 写真方向A
32. 写真方向B
- 図版17 15号竪穴式住居跡
33. 写真方向A
34. 写真方向B
- 図版18 16号竪穴式住居跡
35. 写真方向A
36. 写真方向B
- 図版19 17号竪穴式住居跡
37. 写真方向A
38. 写真方向B
- 図版20 土坑と遺構調査終了風景
39. 1号土坑
40. 遺構の調査終了風景
- 図版21 ごみ捨て場
41. 写真方向A

42. 写真方向B

70. 縄文式土器 147~154

図版22 谷部（埋没谷）

(151は欠)

43. 写真方向A

71. 縄文式土器 125~135

44. 写真方向B

72. 縄文式土器 136~146

図版23 縄文時代の遺物

(140・141は欠)

45. 縄文式土器・石器 1~5

73. 縄文式土器 169~173

46. 縄文式土器 254

図版27 縄文時代の遺物

47. 縄文式土器 87

74. 縄文式土器 174

48. 縄文式土器 108

75. 縄文式土器 181~189

49. 縄文式土器 25

76. 縄文式土器 223~234

図版24 縄文時代の遺物

(224・229・233は欠)

50. 縄文式土器 1~7 (3は別掲)

77. 縄文式土器 196~204

51. 縄文式土器 3

78. 縄文式土器 206~210

52. 縄文式土器 8~14 (10は別掲)

79. 縄文式土器 190~195

53. 縄文式土器 16

80. 縄文式土器 235~240

54. 縄文式土器 10~15

図版28 縄文時代の遺物

55. 縄文式土器 17~23

81. 縄文式土器 241~248

56. 縄文式土器 41~50

82. 縄文式土器 249~253

57. 縄文式土器 31~40

83. 縄文式土器 277~292

図版25 縄文時代の遺物

84. 縄文式土器 255~263

58. 縄文式土器 58~66

85. 縄文式土器 293~301

59. 縄文式土器 51~56

86. 縄文式土器 264~276

60. 縄文式土器 79~83

87. 縄文式土器 335~344

61. 縄文式土器 68~78

88. 縄文式土器 345~356

62. 縄文式土器 84~86

図版29 縄文時代の遺物

63. 縄文式土器 88~96

89. 縄文式土器 357~367

64. 縄文式土器 97~103

90. 縄文式土器 368~374

65. 縄文式土器 104~106

91. 縄文式土器 375~382

図版26 縄文時代の遺物

92. 石器 15~18

66. 縄文式土器 107

93. 石器 1~6

67. 縄文式土器 109~112

94. 石器 12~14

68. 縄文式土器 155~162

95. 石器 7~11

69. 縄文式土器 163~168

96. 石器 19~20

97. 石器 112	117. 写真方向 B
図版30 縄文時代の遺物	118. 写真方向 A
98. 石器 21~24	119. 2号壺棺
99. 石器 25~32	図版34 3号甕棺墓
100. 石器 48~54	120. 写真方向 A
101. 石器 59~63	121. 写真方向 B
102. 石器 64~69	122. 3号甕棺
103. 石器 70~72	図版35 4号木棺墓
104. 石器 93~98	123. 写真方向 A
105. 石器 99	124. 写真方向 B
図版31 縄文時代の遺物	図版36 弥生時代の遺物
106. 石器 100	125. 弥生式土器 4
107. 石器 104~106	126. 弥生式土器 13
108. 石器 110	127. 弥生式土器 11
109. 石器 103	128. 弥生式土器 6~9
110. 石器 111	129. 弥生式土器 14
111. 石器 101・102	130. 弥生式土器 16
112. 石器 107~109	131. 弥生式土器 15
113. 石器 113~115	132. 弥生式土器 17
図版32 1号壺棺墓	133. 弥生式土器 26
114. 壺棺露出状況	図版37 溝状遺構
115. 壺棺埋設状況	134. 1・2号溝状遺構
116. 1号壺棺	135. 3・4・5号溝状遺構
図版33 2号壺棺墓	136. 6号溝状遺構

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の概要

菊陽地区（菊池郡菊陽町）での県営圃場整備事業は現在も進行中であるが、その開始は昭和56年度にまで遡る。その対象面積は252haに及び、熊本市境から大津町境までの白川氾濫原がその範囲となる。こうした広範囲に及ぶ事業では、必然的に幾つかの遺跡がその対象地域の中に含まれる場合が多く、菊陽地区も例外ではなかった。すなわち、「梅ノ木遺跡」「津久礼六地蔵遺跡」「津留遺跡」「久保田中岡遺跡」「楠ノ木遺跡」などがそれで、結果的に、上記事業を契機とした埋蔵文化財調査が実施された。遺跡には、梅ノ木遺跡（昭和57年度、担当 平岡勝昭・鶴島俊彦）、楠ノ木遺跡（昭和58年度、担当 古森政次・坂田和弘）、久保田中岡遺跡（昭和59年度、担当 古森政治・坂田和弘）、六地蔵遺跡（昭和60年度、担当 村井真輝・野田拓治：昭和62年度、担当 園村辰実・木崎康弘）がある。

さて、六地蔵遺跡の調査は、昭和60年度（第1次調査）と昭和62年度（第2次調査）に実施されたが、今回報告するのは昭和62年度調査分に限ってである。

熊本県教育委員会は、昭和62年度菊陽地区圃場整備事業に伴い、年度当初に事業対象地域の試掘調査を実施し、遺跡範囲と文化財の埋没深度についての具体的な資料を採集した。試掘担当者は、野田拓治・黒田裕司である。試掘調査の報告によると、当地には広く弥生時代の遺構・遺物が埋没し、しかもその密度は極めて濃い状況である。さらに、これまでこの地区一帯でははっきりしていなかった縄文時代後期中頃の北久根山式土器も検出され、この周辺が縄文時代以来の古い歴史をもっていることが明らかにされた。

こうした試掘結果をもとに、熊本県教育委員会は県農政部耕地第一課と設計等について協議を行い、最終的に今回報告を行う範囲の発掘調査の実施が決定した。

発掘調査は、6月より実施し、調査対象地を二つの地区に分けてその作業の便宜を企った。A地区は今回報告分の地区であり、B地区はそのA地区の南東方向へ距離をおいた部分にある。そして調査は、まずB地区から実施することを決定した。担当者は、今回報告の任に当たった木崎康弘と、園村辰実の2名である。B地区の調査は、予想どおり弥生時代中期から後期にかけての集落跡が対象となった。しかしながら、その規模は当初の予想を遥かに上回り、200基以上の堅穴式住居跡が連綿と切り合うといった状況であった。そのため調査担当者は到底当初の予定期間内での処理は不可能と判断すると同時に、当時の大集落という埋蔵文化財としての重要性を考慮し、県教育委員会はこの部分の設計変更について県耕地第一課・菊池事務所耕地課・町耕地課に協議を求めた。その結果、このB地区問題については、設計変更を実施して現状保存することで決着した。

一方調査員は、その決定をまって調査の対象をB地区からA地区へ移した。その結果は、歴史時代の遺構や弥生時代の遺物、それに試掘調査で予想されていた縄文時代後期中頃の遺物とそれに伴う遺構群が多数顔を出すこととなる。特に、縄文時代の遺構確認は土質の関係で困難を極めた。

その後の調査は比較的順調に進み、10月30日をもって当初の予定をすべて終了し、その撤収を行った。なお、その具体的な経過については、次節に譲り、次に調査の組織について示していくこととする。

調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

〔発掘調査、昭和62年度〕

調査総括 丸木保賢（文化課長）

林田敏嗣（文化課課長補佐）・隈昭志（文化課課長補佐・文化財調査係長）

調査担当 野田拓治（主任学芸員、試掘調査）・黒田裕司（嘱託、試掘調査）

園村辰実（文化財保護主事、調査）・木崎康弘（文化財保護主事、調査）

調査事務 松崎厚生（文化課主幹・経理係長）

谷 喜美子（文化課主任主事）・上村祐司（文化課主事）

〔報告書作成、昭和63年度〕

調査総括 江崎 正（文化課長）

林田敏嗣（文化課課長補佐）・隈昭志（文化課課長補佐）

松本健郎（文化財調査第一係長）

調査担当 木崎康弘（文化財保護主事）

調査事務 松崎厚生（文化課主幹・経理係長）

上村祐司（文化課主事）・泉野順子（文化課主事）

調査指導及び協力者〔昭和62・63年度〕（敬称略、順不同）

山田昌久・白石典之（筑波大学）・西健一郎（九州大学）・木村幾多郎（佐賀大学）・白木原和美・甲元眞之・友口恵子（熊本大学）・東潮（奈良県立橿原考古学研究所）・小池史哲（福岡県教育委員会）・山崎純男・山口讓治・杉山富男・小畠弘己・吉武学（福岡市教育委員会）・松尾吉高（佐賀県教育委員会）・下川達彌（長崎県立美術博物館）・萩原博文（長崎県平戸市教育委員会）・新東晃一・中村耕治・長野真一（鹿児島県教育委員会）・三島格（肥後考古学会会長）・富田紘一（熊本市立熊本博物館）・熊本県農政部耕地第一課・熊本県菊池事務所耕地課・菊陽町教育委員会・菊陽町文化財保護委員会・菊陽町耕地課・広田静学・住田幸恵・吉内素子（熊本県文化課嘱託）・赤木美文・瀬丸延子・加来恭子

第2節 調査の方法と経過

調査は、重機による表土の取り除きとその個所の清掃の後、実測図作成に給するための基準として、トランシットを使用したグリッド設定から開始した。グリッドの大きさは、 $10\text{m} \times 10\text{m}$ である。グリッド設定では座標軸などの基準点が周囲に見当たらないので、調査区内に任意に点を落して基準点とした。そして、この基準点にトランシットを設置し、磁北を求めて縦軸（南北軸）となし、 90° 振って横軸（東西軸）となした。なお場所の指定は、南西隅から縦軸方向にI～V、横軸方向にA～Jという呼称によって行った（第3図）。そしてさらに、その大グリッドを $1\text{m} \times 1\text{m}$ の100グリッドに分割しそれぞれを南西隅から横方向に1～100と呼称した。従って場所の指定は、例えばII B（大グリッド）-1（小グリッド）というかたちとなる。調査は、 $10\text{m} \times 10\text{m}$ のグリッドを基本的な単位として実施したが、遺構の実測にかかる作業には $1\text{m} \times 1\text{m}$ の小グリッドを利用した。また標高は、圃場整備事業に伴って設置されたベンチマーク（BM26、59,621m）からの原点移動で割出した（遺跡内BM=57,909m）。

遺構は、平面形や切り合い関係の確認の後に、土層観察用の土手を残しながら掘り始めた。次に土層観察と土層断面図の作成・写真撮影をし、終了後に土手を取り除いて柱穴や炉などの付属施設の確認・掘り上げと実測図の作成をおこなった。その種類には、平面実測図と断面図がある。縮尺率は、原則として土坑などの小型遺構が10分の1、堅穴式住居跡が20分の1、溝状遺構が40分の1とした。写真是モノクロとカラースライドの2種類で撮影し、その方向は、主軸に平行して1景とそれに直行させて1景を原則とした。

次に調査の手順と経過を月別に示していこう。

6月は、発掘調査開始でもあり調査の準備等に中心があった。つまり現地での作業は、調査事務所の建設（10日）と重機による表土層の削除、そして遺構の確認であった。確認の中心はB地区で、弥生時代中期から後期にかけての堅穴式住居跡が、200基を越えることが推定されたのはこの月の終わりである。一方、A地区でも歴史時代に所属する溝状遺構の掘り下げをおこなった。

7月に入って調査も本格化しなければならないところである。しかし、6月末以来のB地区問題がまだ尾を引いて本格化できない。そうした状況の中で、6日に協議が持たれることとなった。その結果、盛土保存と調査期間の延長の両案で検討していくことが決定した。なお、これについては、その後盛土保存に決着する。そして漸く、A地区での本格的調査に着手できることとなった。唯、縄文時代の遺構の埋土が確認面の土と同質であるという点や、調査員がこの地域の土壤に不慣れであったということより遺構の検出に大きく手間取った。しかし、熊本県下ではめずらしい住居跡の発見もあり、内外の注目を集めることになった。

8月は、梅雨があけ、一年の内で最も土の状態の悪い乾燥期である筈だが、この年は比較的雨の多い冷夏であった。したがって土の乾燥を心配することはほとんど無く、極めて良好な環境下での調査であった。

9月も上旬はやや雨が多く、作業進行上少々困ったが、これまでの経過は極めて順調である。縄文時代後期の堅穴式住居跡の調査も佳境に差し掛かり、その目途がたつ。

10月は、発掘調査終了の月であると共に、現地を業者に明け渡す月である。周囲の圃場整備関係の工事も本格化し、調査区の中にも工事音がこだまする。12日には縄文時代後期の堅穴式住居跡の調査が終了する一方、新たに弥生時代中期末から後期初頭にかけての埋葬施設（甕棺・壺棺・木棺）4基が顔を出す。しかし調査は順調に進み、30日をもって無事完了した。

第Ⅰ表 調査行程表

月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
調査区	B地区			盛土保存			
調査対象時代							
備考	・調査準備の開始	・表土剥ぎ	・設計変更の協議	・堅穴式住居跡の調査開始	・表土剥ぎ	・佐賀大木村氏 ・福岡県教委小池氏 ・筑波大山田・白石両氏 ・熊本大白木原・甲元両氏 ・九州大西氏来跡	・福岡市教委山崎氏 ・30日調査終了 ・弥生時代遺構確認

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

1. 地理的環境

九州は、福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地、大分県・熊本県北半と長崎県南半の中北部火山地域、宮崎県・熊本県南半の中部山地そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の4地域に区分される。そして、これらの地域はそれぞれに地形的特徴を異にしている。例えば、北部山地は広い平野部と険しい山地であるし、中部山地は深い渓谷が作られた険しい山地、南部火山地域は広いシラス台地に地形的特徴がある。では、六地蔵遺跡が所属する中部火山地域は、どのような地形的特徴を示しているのであろうか。

中部火山地域には、今でも活発に活動を続ける多くの活火山がある。しかし、これらは1箇所に集中するのではなく、大きく2箇所に分かれ。それが東の阿蘇を始めとする火山群と西の雲仙岳である。そして、この二つの火山地帯の間には、有明海と熊本平野が西と東に対称的に広がり、その境を画するように金峰山（休火山 665m）がそびえている。六地蔵遺跡は、この中部火山地域内の熊本平野にある。

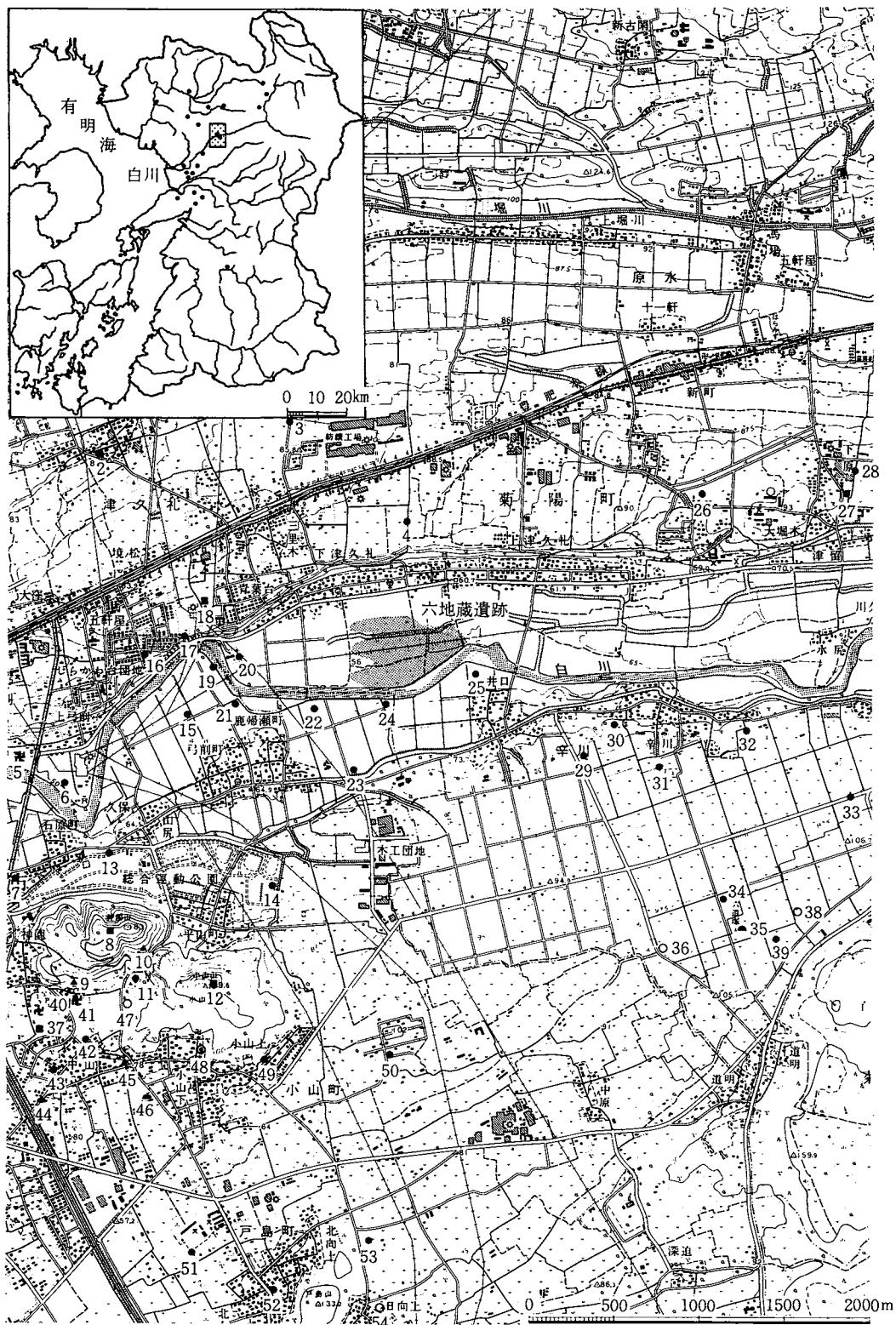
熊本平野は阿蘇外輪山の西麓に形成された広大な平野であるが、その形成には、阿蘇に源を発する菊池川や白川や緑川などの河川が深くかかわっている。このことは、中部火山地域に及ぼす阿蘇山の影響の大きさを物語るものであろうか。そして白川は、この雄大な阿蘇カルデラ内に源をもつ唯一の川である。

阿蘇カルデラ内の二つの谷には、東から西へと貫流する二つの川がある。阿蘇谷の黒川と、南郷谷の白川である。この二つの川は、長陽村立野で合流して白川となり、阿蘇外輪内の谷間を急激な速度で流れ下る。そして、熊本平野へ現れるやいなや急速に速度を落として悠々とした流れに変わる。六地蔵遺跡は、まさにこの流れの変化点付近にある。

2. 歴史的環境

熊本市周辺の先土器時代遺跡は、白川下流域遺跡群（木崎 1985）にあたり、現在11遺跡が確認されている。ナイフ形石器文化の遺跡5遺跡、ナイフ形石器文化～細石器文化1遺跡、細石器文化3遺跡、所属不明2遺跡である。六地蔵遺跡に比較的近い遺跡では、熊本市庵の前遺跡・竜田陳内遺跡（丸山・平井 1988）・大津町陣内遺跡（ナイフ形石器文化）、熊本市榆木遺跡・葉山遺跡（細石器文化）、熊本市新南部遺跡・天拝山遺跡（不明）がある。

六地蔵遺跡の周辺では、多くの縄文時代関係の遺跡がみられる（第1図・第2表）。早期では、



第1図 遺跡分布図

第1節 遺跡の環境

第2表 遺跡地名表

①文化庁文化財保護部編 1981 『全国遺跡地図』 43 熊本県

② 熊本市教育委員会編 1973 『昭和46年度 熊本市東部地区文化財調査報告』

『熊本県文化財調査報告第30集』中世城跡・熊本城文化財調査報告書

④ 1976年熊本県教育委員会 高木正文氏発掘調査。

⑤ 1975年熊本県教育委員会 高木正丈民衆掘調
緒方勉氏発掘調査

⑥平岡勝昭『梅ノ木遺跡』熊本県文化財調査報告第62集

⑦故光沢徳幸氏新発見遺跡。富田紘一 1978 「旧石器・縄文時代の熊本」『新・熊本の歴史』1。

熊本市カブト山遺跡・庵の前遺跡や大津町瀬田裏遺跡群など、比較的大規模な遺跡が目立つ。前期では熊本市上古閑遺跡（19）や竜田陳内遺跡から轟式土器や曾畠式土器が検出されている。また中期では、熊本市中山遺跡（42）・中江町遺跡・竜田陳内遺跡、菊陽町楠ノ木遺跡（古森1984）から阿高式土器が出土しているが、その関係の遺跡としては規模も數も乏しい。これに對して、後期や晚期では急激に遺跡数が増加し、またその規模も大きくなる。例えば、熊本市上南部遺跡（富田 1981）は、後期後半から晚期中頃にかけての大集落であり、土偶が多数出土している。また、この他に熊本市宮原遺跡（15）・瀬々井遺跡（7）・新南部遺跡・小閑原遺跡・中原道明遺跡・八反田遺跡・迎八反田遺跡などがある。

ところで、六地蔵遺跡では後期中頃の資料が検出されている。それは、北久根山式土器前後にあたる資料である。白川の中・下流域には、この種の遺跡も多くみられる。例えば、熊本市北久根山遺跡はその標識遺跡として著名であるし、熊本市渡鹿貝塚では鐘ヶ崎式土器から北久根山式土器にかけての時期の資料が多く検出されている。また、北久根山式土器後続の辛川式土器の標識遺跡である菊陽町辛川遺跡は、白川を隔てて六地蔵遺跡の対岸にある。なお、六地蔵遺跡から北西へ4.25km行ったところには、二子山石器製作跡（後期、国史跡）がある。

弥生時代の遺跡も、六地蔵遺跡周辺で多数みられる（第1図・第2表）。特に、熊本市石原龜の甲遺跡（13）・山尻遺跡（14）は、六地蔵遺跡に距離的にも時期的にも近く、後期の大集落である点と共に注目すべき遺跡である。また、六地蔵遺跡と同じ立地の遺跡として、遺跡の西方にある菊陽町梅ノ木遺跡（20）（平岡・鶴島 1983）も、ほぼ同時期の集落である。

一方、今回の調査で検出された甕棺の例も、六地蔵遺跡周辺に多くみられる。例えば、黒髪式土器の標識遺跡である熊本市黒髪町遺跡や、熊本市小山山伏塚遺跡（46）・中山遺跡（42）・小閑原遺跡・宮原遺跡（15）・梅ノ木遺跡がある。

古墳時代になると、六地蔵遺跡周辺では急に有力な遺跡が減少するが、その中で菊陽町六道塚古墳（35）や今石横穴群（17）・熊本市浦山横穴群・つつじヶ丘横穴群・小磧橋際横穴群などがある。特に、菊陽町津久礼から熊本市黒髪にかけては横穴の密集地域の一つである。

六地蔵遺跡では、現在まで奈良・平安時代関係の資料の検出はないが、近接する梅ノ木遺跡では奈良時代の堅穴式住居跡4基が確認されている。また、同じ白川の氾濫原上にある菊陽町楠ノ木遺跡では、平安時代前期の堅穴式住居跡54基、掘建柱建物跡37基などの遺構群や、石帶（巡方）などが検出されている。また、神園山周辺では熊本市中山窯跡（9）・神園山窯跡（10）・小山窯跡（45）などの瓦窯群がある。

一方、中世以降の遺跡として、長嶺城跡（8）や小山城跡（12）、菊陽町今石城跡（18）があるまた、熊本市御船塚遺跡（50）では中世墳墓群が調査されている。

第2節 遺跡の概要

六地蔵遺跡は、熊本県菊池郡菊陽町大字津久礼字六地蔵に所在し、白川右岸の氾濫原上に立地する（第2図）。この氾濫原は、近世以降の開田工事等により著しい地形改変を受けて、本来の地形を示してはいないが、その中央部が僅かに窪んでその横断面形が皿状を呈していることから、もともと白川沿いに自然堤防が延びていたことが推察される。そして本遺跡は、この自然堤防上に南北約400m・東西約700mの範囲に広がっている（第1図）。標高55m～59mで、白川との比高差は5m程である。

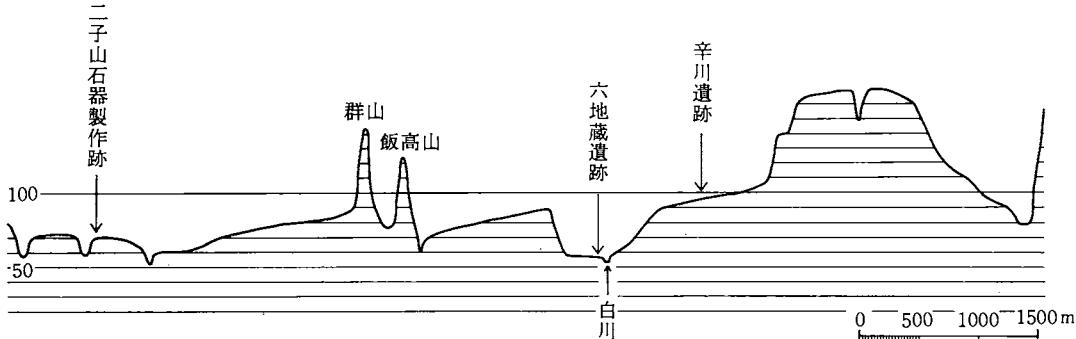
発掘調査は、県営圃場整備事業に伴って昭和60年度と昭和62年度（今回報告分）の2度実施され、その際に縄文時代草創・早・後・晚期、弥生時代中・後期、古墳時代前期、中、近世に関する資料が検出されている。それでこれらの調査成果を踏まえ、時代ごとの概要を示しておこう。

縄文時代では、草創・早・後・晚期の遺構・遺物が検出されている。草創・早・晚期は、包含層と表面採集によってその存在が確認されているのみで、遺構を伴うものではなく、しかも資料数も少ない。これに対して、後期では北久根山式土器の時期を中心に、その集落跡が検出されている（第2次調査）。

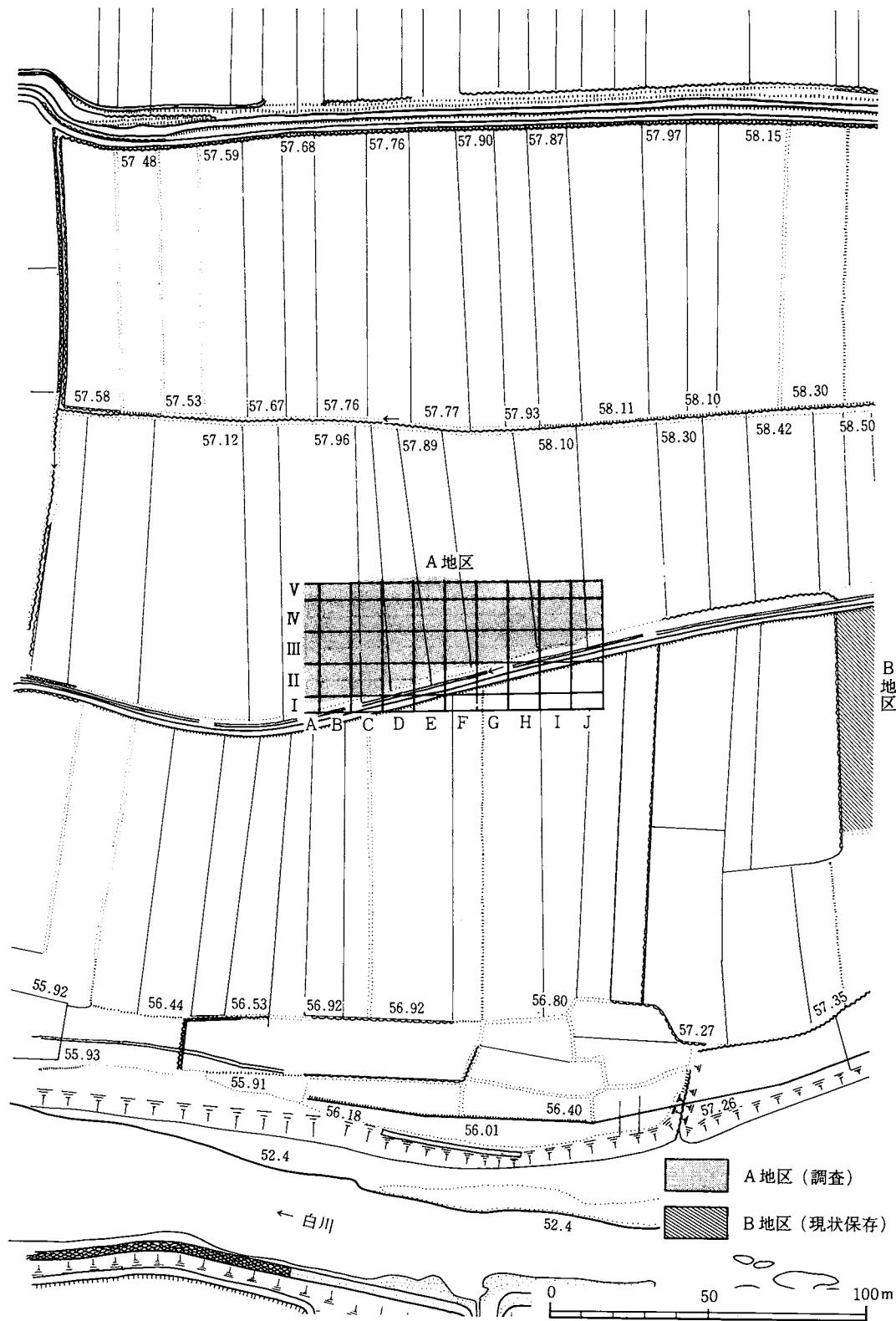
弥生時代は、中期と後期の遺構・遺物が検出されている。中期～後期は黒髮式土器の時期の墓地（第2次）で、後期は野辺田式土器の時期の集落跡（第1次）である。

中・近世では集落跡としての明確な遺構群は検出されていないが、それに付属する墓地（第1次）や溝状遺構（第2次）などが確認されている。また、下津久礼公民館の入口にある六地蔵も、字名が示すごとく、もともとこの付近から移転されたものであり、さらに近世のある時期に当時の集落がこの遺跡付近から現在の場所へ移動したという伝承も残されている。

以上のように、発掘調査によって時代を越えた遺構や遺物が検出されているが、調査地区以外にさらに時代・時期の異なる遺構群が含まれているものと考えられる。



第2図 地形断面図



第 3 図 遺跡周辺地形図

第3節 遺跡の層位

遺跡層位に関する柱状図（第4図）は、調査区の北西隅に設けた深掘り坑の観察によって作成した。その結果、現状で5枚の土層を確認した。しかし、前節でも述べているように近世以降の地形改革が著しく、本来の土層堆積の状態を観察することはできなかった。そこで本来の土層堆積を遺構の埋土の状態を参考にして復原し、第I層～第VII層までの7枚の土層を提示することにしたい（第4図）。

第I層 表土層（耕作土）

第II層 黒色土層

この層は現在、遺跡周辺では観察されないが、中・近世の遺構の覆土の基本をなしている。よって自然層の状態での観察ができないので、その性質を具体的に示すことはできない。

第III層 黒褐色土層

第II層同様に、遺跡周辺では観察できず、その具体的性質を示すことはできない。弥生時代の遺構の埋土の基本をなす。

第IV層 明褐色土層

アカホヤ火山灰の火山ガラ

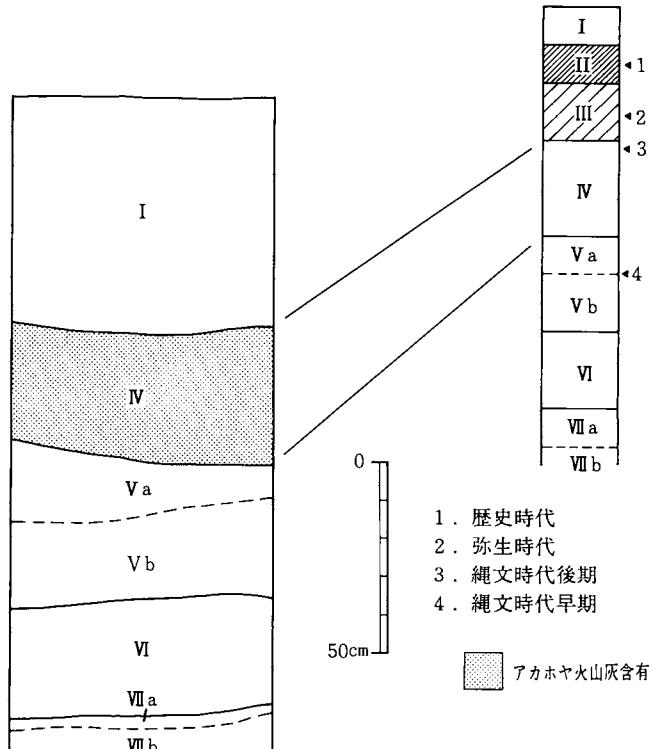
スを含んだ層である。粒子は比較的細かいが、中に砂粒を多く含んでいて均質ではない。縄文時代後期以降の遺物を包含し、堅穴式住居跡やその他の遺構の覆土（上部）の主体をなす。

第V層 暗褐色砂質土層

この層はその色調によって、a・b 2枚の亜層に細分される。

第Va層は、第V層が第IV層のアカホヤ火山灰によって汚染された土層、漸移層である。したがって、色調はVb層に比べて、やや明るい。

第Vb層は、粒子が大きく



第4図 基本土層図

てザラザラとした層である。層を構成する粒子も均質ではなく、しまりもない。この層は、縄文時代早期の包含層である。

第VI層 暗褐色砂質土層

色調については第V b層と比べてもほとんど変化はないが、土質は、層を構成する粒子が大きくなつて砂質化がさらに進んで、しまりがなく、ザラザラとした状態となる。縄文時代草創期の包含層の可能性が高い。

第VII層 暗褐色砂質土層

この層は土質の違いによって、a・b 2枚の亜層に細分される。

第VII a層の色調は、第VI層と比べてもほとんど変化が観られないが、層を構成する粒子がさらに大きくなつて砂質化が一段と進んでいる。したがつて、さらにしまりがなくなりザラザラとした状態となっている。無遺物層である。

第VII b層は、第VII a層の土が基本となるが、層中に硬化したブロックが多くみられる層で、無遺物層である。

なお、第VII b層以下の地層については調査を実施しておらず、その状態を観察することはできなかつたが、第VII b層までの堆積状態からすれば、さらに砂質化を強めた後に礫層へ移行すると推定される。

第III章 調査の成果

第1節 縄文時代草創期・早期の遺物

縄文時代草創期の遺物としては、第5図4の石器がある。これは、表面採集に近い状態で検出されたものであり、そのため包含層を特定することはできなかった。唯、縄文時代早期の包含層が第V b層にあたっているので、その下の第VI層あたりに包含層を比定できそうである。

資料は、安山岩製の細石核用原形である。厚手で幅広の縦長剥片を素材とし、その先端の平坦面を打面にあて、側面調整を実施した後に、横方向からの調整剝離を加えて打面部を作り出している。側縁調整の状態としては、左側面側の下縁で微細な剝離が、右側面側では打面からの粗い剝離と下縁の一部の微細な剝離が観察される。以上の技術的特徴から判断すれば、この細石核は両面加工の精巧な原形を作るのではないが、長崎県泉福寺洞穴遺跡（麻生編 1984）出土の資料に近似するものといふことがいえる。

縄文時代早期の遺物（第5図1～3・5）は、3の資料を除けばすべて第V b層に包含された状態で検出されている。

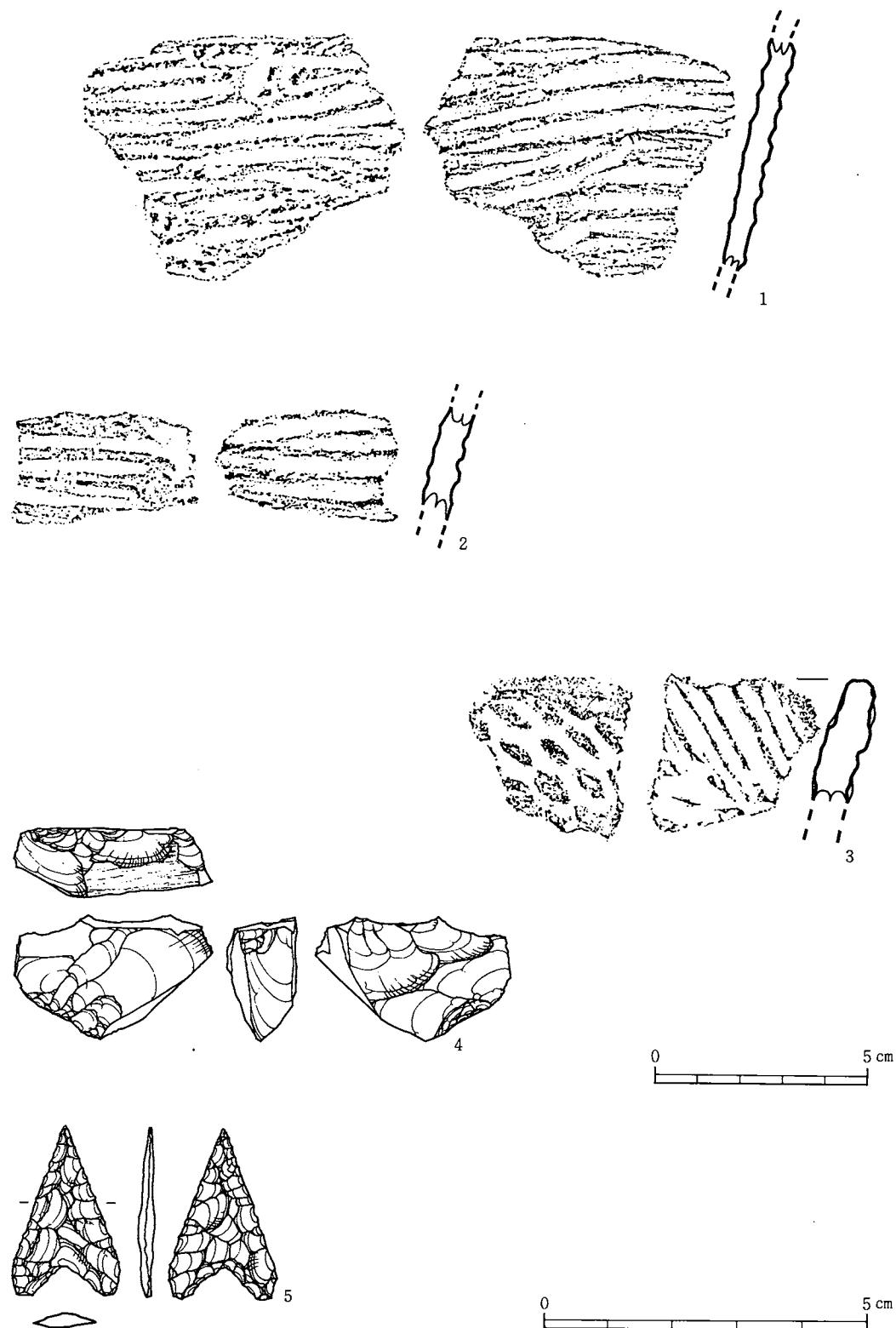
1・2は、表裏面ともに貝殻による粗い整形痕をそのまま残した貝殻条痕土器である。焼成は良好で、胎土も均質である。色調は、表面が黒色で、裏面が暗褐色を呈している。3は、押型文土器の口縁部片である。表面の文様は楕円文でその施文方向は右下がりで、裏面では横位に施文された楕円の押型文が施文された後に、その中程までに口唇部から右斜め下方向の、所謂「原体条痕」が加えられる。焼成は極めて良好で、胎土も均質である。色調は、表面が黒褐色で、裏面が褐色を呈している。なお小破片のため、原体の復原は不可能であった。

5は、安山岩製の石鏃である。形状は二等辺三角形で呈し、その基部にV字状の抉入加工が施される。表裏面とも入念な調整加工であり、その素材となる剥片の形状については判らない。この種の石鏃は、熊本県狸谷遺跡（木崎ほか 1987）や大丸・藤ノ迫遺跡（木崎ほか 1986）などの縄文時代早期の遺跡で特徴的にみられるものの一つである。

以上のように、河川近くの自然堤防上で縄文時代草創期や早期の資料が検出されることは、これまで熊本県下ではあまり例の無いことであり、今後その種の遺跡のあり方についても注意を要しよう。

第3表 縄文早期石器計測表

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(m)	厚さ(cm)	重さ(g)	
4	細石核用原形	安山岩	4.90	4.64	1.62	22.83	VJ区一括
5	石鏃	安山岩	2.65	1.78	0.28	9.85	早期包含層5号住床面下



第5図 繩文式土器・石器実測図

第2節 縄文時代後期の遺構と遺物

縄文時代後期の遺構・遺物の包含層は、基本層位の中で第IV層という明褐色土層にあたっている。この層は、鬼界火山を起源とするアカホヤ火山灰を取り込みながら堆積したもので、火山灰降灰以後の堆積物である。調査は、この第IV層を遺構検出面として、遺構が集中する調査区の西側から開始した。その結果、ほぼ北久根山式土器に限定できる時期の竪穴式住居跡や、土坑などの遺構群とそれに伴う土器・石器などの遺物群を検出した。以下、その具体的な内容と成果について詳しく述べていくことにしよう。

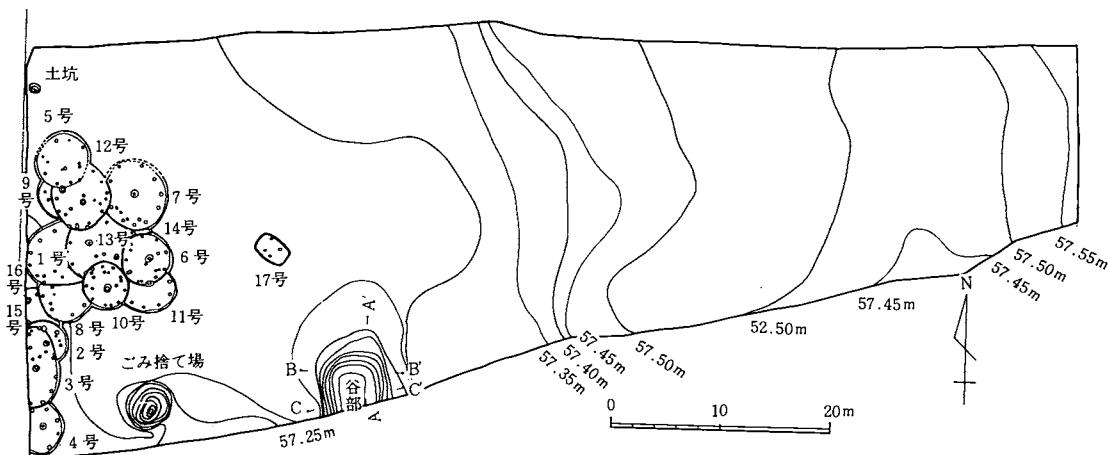
1. 竪穴式住居跡と出土遺物

竪穴式住居跡は、調査区西側の傾斜が特に緩やかとなる部分で検出された（第6図）。その数は17基で、その中の16基は切り合っている。住居跡の平面形態では、円形を呈するものが最も多く13基、楕円形のもの3基、長方形のもの1基という内訳であった。

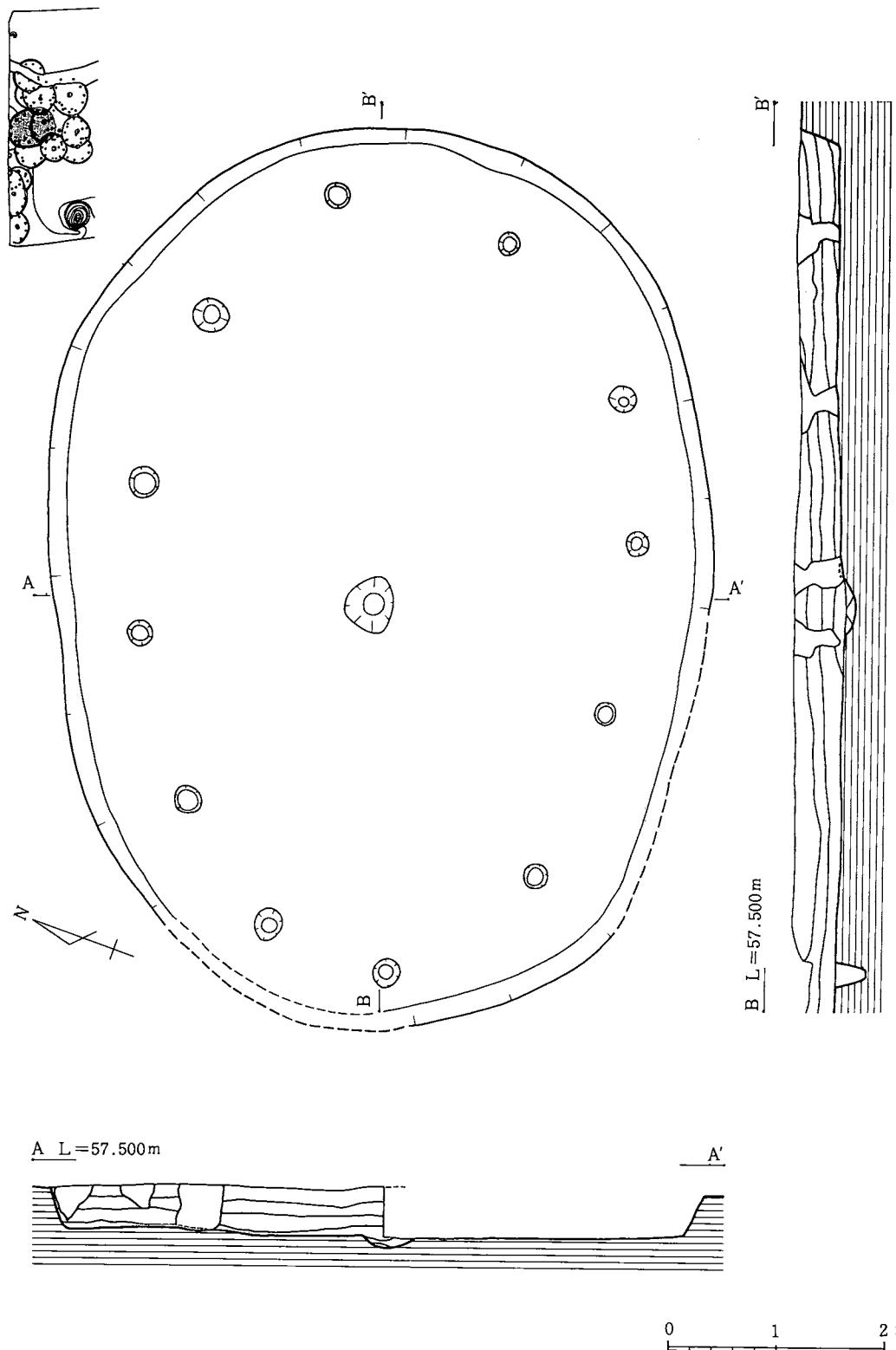
1号住居跡（第7～10図）

1号住居跡は、調査区西端のちょうど中程で検出された（第7図）。住居跡の規模は長軸8.3mで短軸6.2mを測り、その平面形態は楕円形を呈している。確認面から床面までの深さは、40cmである。

住居跡の床面は、長軸が7.92mで短軸が5.9mを測る規模をもち、楕円形の平面形態を呈している。床面積は、約37m²である。硬化面の発達は悪い。柱穴は壁沿いに12個が並び、その径は20～30cmで床面からの深さは20～30cmである。住居跡の中央には炉と考えられる穴があり、焼土や炭化物や灰が顕著に認められるが、底面は明確に焼けた状況を示してはいない。覆土は、5層に分層される。1層は締りのない暗褐色土、2層は上層よりもやや明るい暗褐色土、3層



第6図 遺構配置図



第7図 1号竪穴式住居跡実測図

は褐色土、4層は焼土が目立って多くなり、緒りも悪い褐色土、5層は壁沿いにみられる暗褐色土である。

出土土器は、ほとんどのものが北久根山式土器（第8～10図）で、それに属きないものとしては、攪乱層中から三万田式土器片が数点出土しているのみである。石器としては、削器（第51図7）・磨製石斧（第53図15）・二次加工ある不定形石器（第56図25）・使用痕ある剥片（第56図28～30）・磨石・敲石（第57図33・第65図85）・石核（第73図113）・剥片（第75図119・120）が出土している。そこで次に、土器について説明をおこなっていこう。なお、石器については本節6の石器の項に譲ることにする。

すでに前記しているように、出土土器の主体を占めるものは北久根山式土器である。形態組成は、深鉢形土器（1～30）・鉢形土器（31～43）・浅鉢形土器（44～46）・皿形ないし高壺形土器（47）によっている。

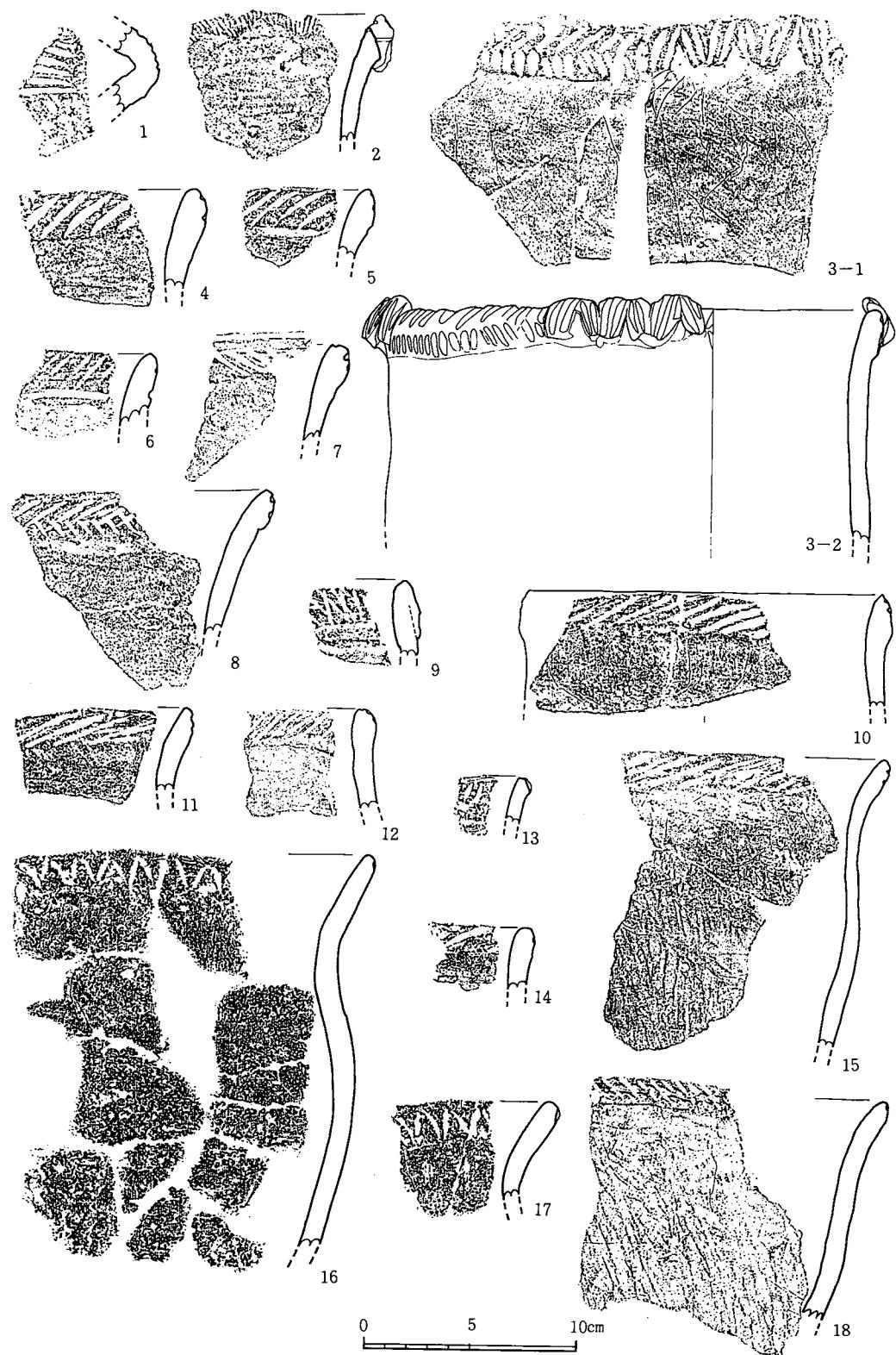
深鉢形土器には有文のもの（1～23）と無文のもの（25・26・30）があるが、前者は、さらに文様によって細分が可能である。すなわち、口縁部文様が沈線によるもの（1～18）と二枚貝の圧痕による貝殻擬似繩文+沈線文のもの（19）、二枚貝の圧痕による貝殻擬似繩文のもの（20～22）、そして繩文（原体はRL）のもの（23）である。ただこれらは、文様の種類による違いだけであって、全体の形状や文様帶などの状況から判断すれば、同じ形態中の変異と理解できる。

有文の深鉢形土器は、口縁部が外反し、胴部上半部がやや張出すという器形である。文様帶は口縁部のみに限定され（7のように口唇部に沈線文がみられるものもある）、そこに上記した種類の文様が施されるが、沈線文にはさらに斜行単沈線（4～7・10～15・18）、綾杉状（3・8）、交叉沈線（9）、「ハ」の字状（16・17）がある。またこの種の土器の口縁部には橋状把手（1・2）やM字状の貼り付け文（2・3）が付される部分もあり、貼り付け文上では貝殻擬似繩文が施されたもの（2）や単に沈線だけのもの（3）がある。

無文の深鉢形土器には、最大径が胴部にあって口縁部がやや外反するもの（24）や、口縁部が僅かに外反してしかも最大径がそこにあるもの（26・30）などがあるが、資料数が少なく類型化は困難である。なお、後者の口縁は波状を呈している。

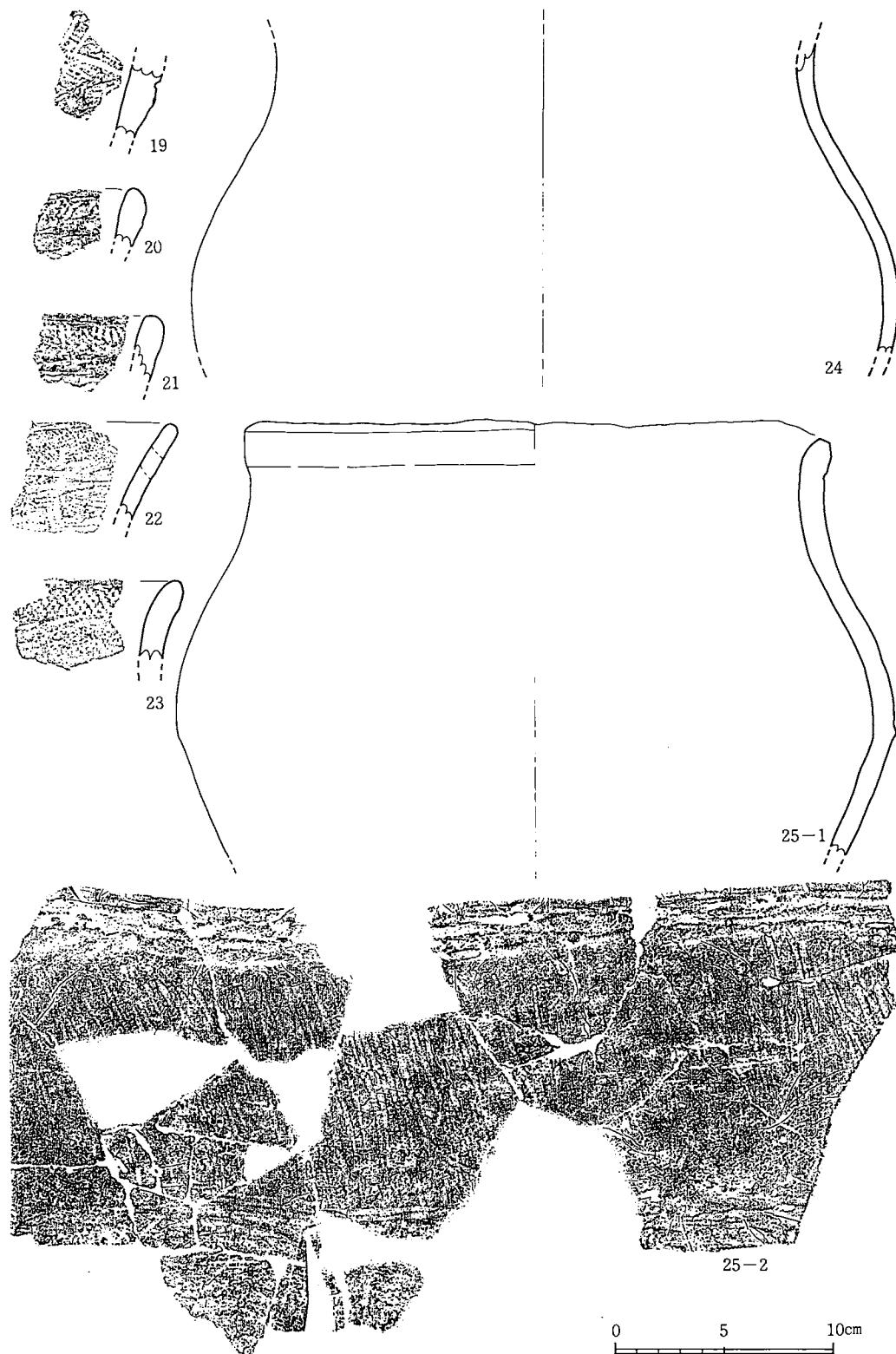
鉢形土器には、口縁部を外に強く折って広く採られた口唇部文様帶に沈線文や刺突文が加えられるもの（31）と、口縁部が大きく外反して胴部が強く折れる器形をとり、口縁部と胴部に文様帶をもつもの（32～43）の二つがある。後者の土器の文様には、二枚貝圧痕による擬似繩文と胴部でその上に引かれる沈線文がある。また、38のように擬似繩文のみのものや43のように竹管による刺突文や沈線文だけのものもみられる。

浅鉢形土器には、口縁部直下で強く折れ、その部分の狭い文様帶にRLの繩文（45）や貝殻圧痕文・沈線文（46）を施すものと、屈曲しないでRLの繩文と沈線文が施されるもの（44）

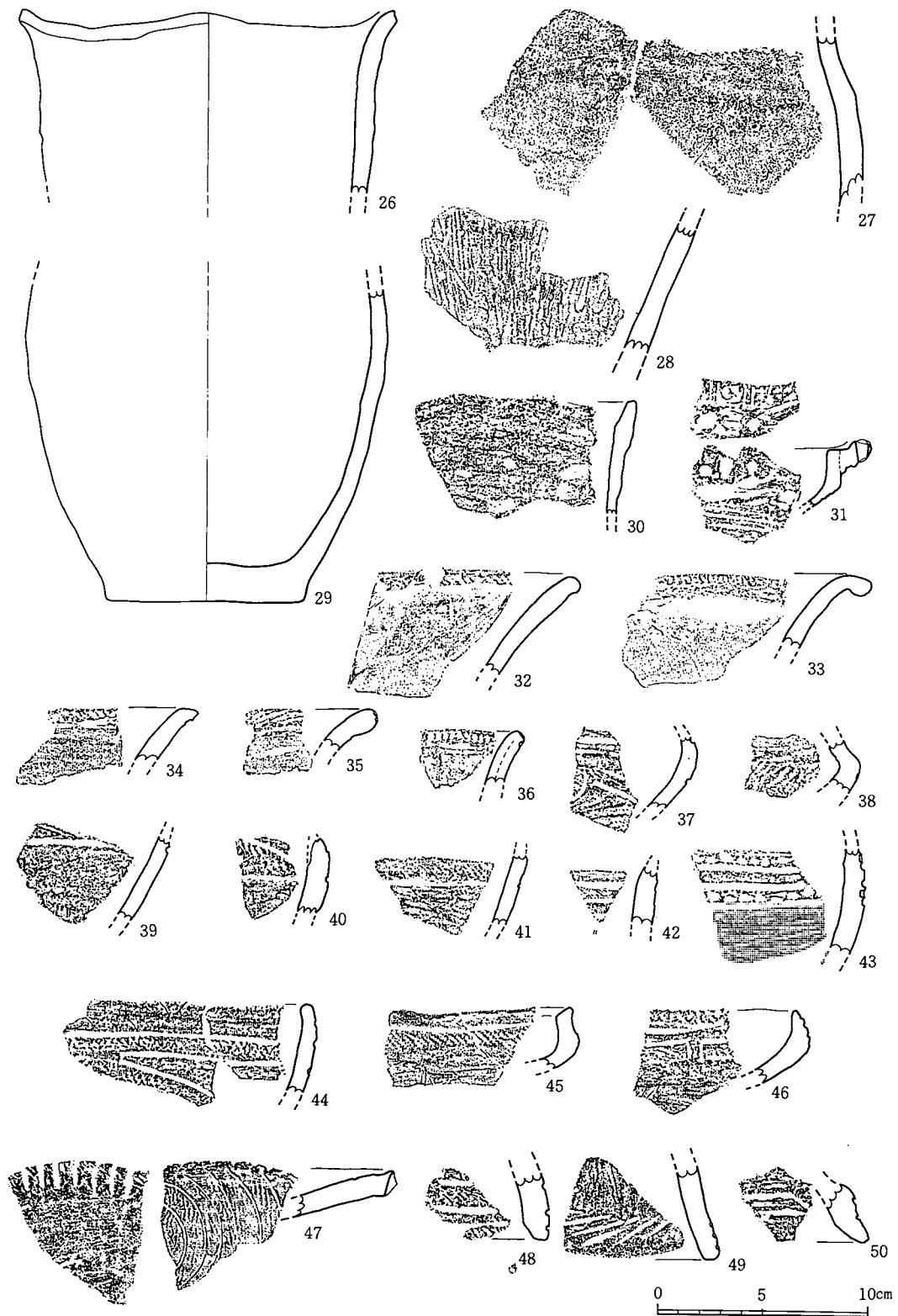


第8図 繩文式土器実測図

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



第9図 繩文式土器実測図



第10図 繩文式土器実測図

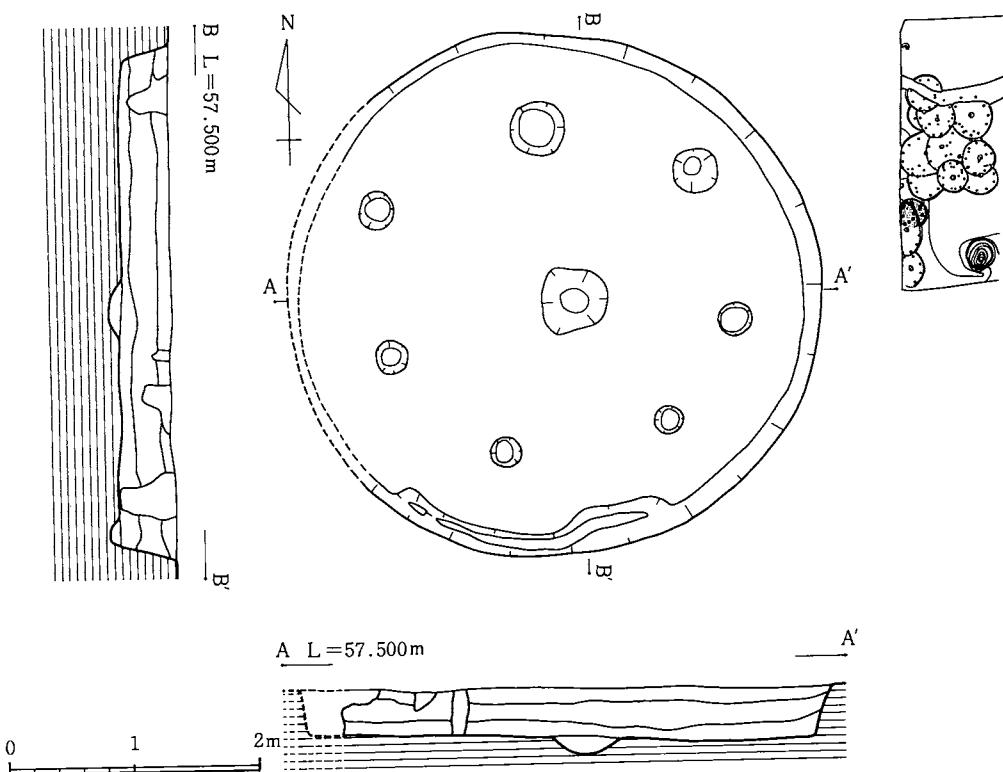
の二つがある。また文様帶の構成では、口縁部直下に無文帶が走るもの（44・45）と、その部分にも施文されて二段の文様帶に分かれるもの（46）がある。

皿形ないし高杯形土器（47）には貝殻压痕文と沈線文を付す口唇部と、貝殻压痕文と弧を描く沈線文が施された内面の二つの部位に文様帶がある。なお、この土器の底部の形状については不明であるが、48～50のような脚台が付くのかもしれない。ただ、脚台については他の形態の土器に付く場合もあり、それぞれの対応関係を知ることは困難である。

2号住居跡（第11図）

2号住居跡は、調査区西端にあり、1号住居跡の南側に位置している。その平面形態は直径4.2mの円形を呈する。確認面から床面までの深さは、43cmである。

住居跡の床面は、直径3.9mの円形を呈している。その床面積は、約12m²である。硬化面の発達は悪い。柱穴は、直径が24～43cmで深さが26～38cmのもの7個が円形に並んでいる。住居跡の中心には炉穴があり、その埋土の中には焼土や炭化物を多量に含んでいるが、その底面はあまり焼けた状況を示してはいない。また、住居跡南側の壁寄りには幅10～20cmで深さ7～11cmの側溝がみられる。覆土は、3層に分層できる。1層は締りのある褐色土層、2層はさらに締りの強い褐色土層で1層に比べて色調が明るく、3層は暗褐色土で締りがなくなる。



第11図 2号竪穴式住居跡実測図

出土土器には深鉢形土器の無文部が35点、浅鉢形土器片1点があるが、図化に耐えるものではない。石器では削器（第51図9）と石核（第73図114）が出土しているが、後述する。

3号住居跡（第12図）

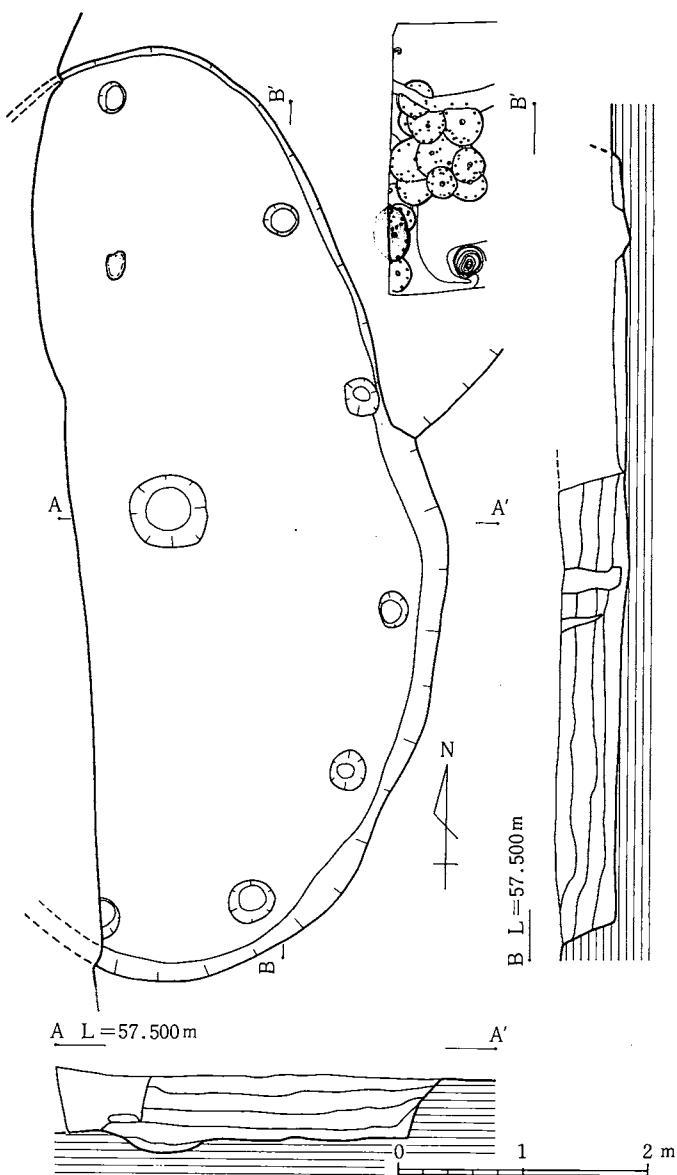
3号住居跡は、2号住居跡の南隣に位置し、平面形態は橢円形を呈する。その規模は、住居跡の一部が調査区外にあるために完全な調査を行うことができなかつたが、長軸7.4m・短軸4.4mと推定できる。確認面からの深さは50cmである。

住居跡の床面は長軸7.2m・短軸3.8m（推定値）で、その床面積は約21.7m²（推定値）である。硬化面の発達は悪い。柱穴は、その配列と住居跡の規模を参考にして10個と推定される。径25～40cmで、深さ19～39cmである。炉穴は住居跡の中央にあり、その埋土中に多量の焼土・炭化物がみられた。しかし、底面では焼けた痕跡を確認することはできなかった。覆土は、4層に分層できる。1層は締りのある褐色土、2層は締りがやや弱くなり、やや明るい褐色土、3層は2層に近似しながらもやや締りが強い褐色土、4層は暗褐色土である。

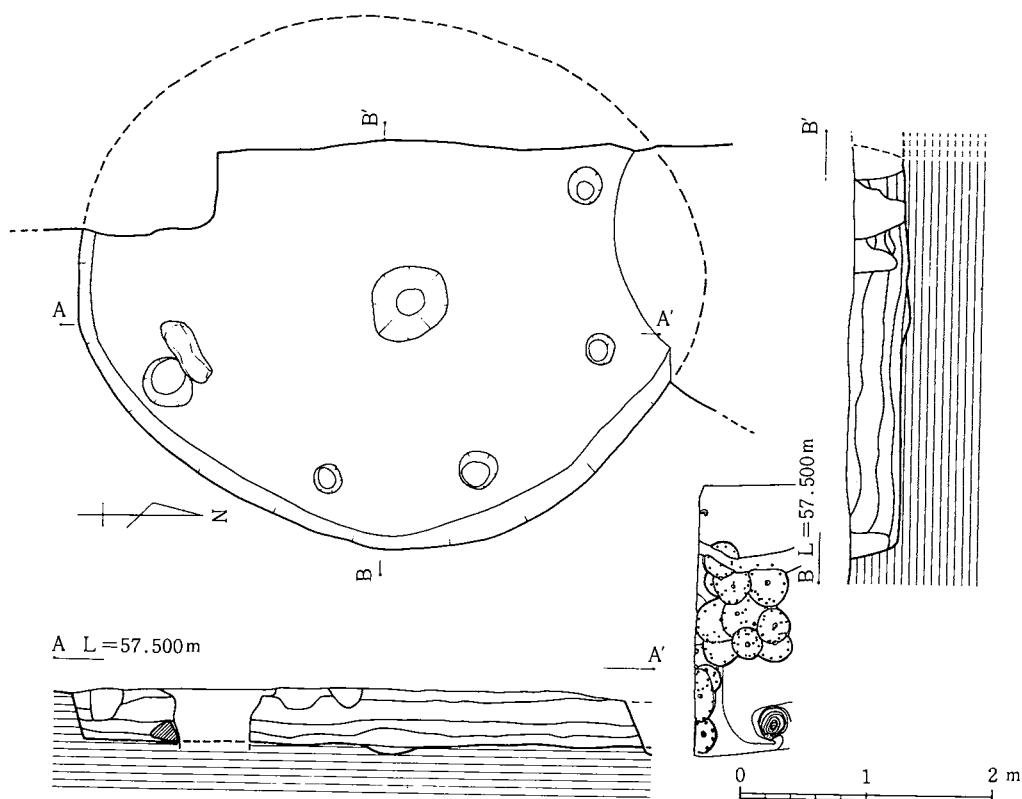
出土した土器としては、深鉢形土器の無文部が3点と少ないが、住居跡の床面に密着した状態で石皿・台石1点（第67図99）が検出された。

4号住居跡（第13図）

4号住居跡は、3号住居跡の南隣に位置し、平面形態は南北軸がやや長い円形を呈している。



第12図 3号竪穴式住居跡実測図



第13図 4号竪穴式住居跡実測図

その規模は径4.2（推定値）～5.0mで、確認面からの深さは40cmである。

住居跡の床面は、径4（推定値）～4.8mの円形を呈し、その床面積は約14.8m²と推定できる。硬化面の発達は悪い。柱穴は、径23～40cmで深さ25～33cmの大きさのものがその配列の状態から8個と推定できる。炉穴は住居跡の中心にあり、その埋土中に焼土や炭化物が多くみられた。しかし、底面では焼土が多量に密着していたのみで、明確に焼けた痕跡を確認することはできなかった。覆土は4層に分けられ、その状態は3号住居跡の覆土と同様である。

出土土器としては、深鉢形土器の無文部片が14点出土しているのみだが、床面に密着した状態で石皿・台石1点（第72図111）が検出された。

5号住居跡（第14・17図）

5号住居跡は、住居跡群の中で最も北に位置するもので、歴史時代の溝状遺構によって分断されている（第14図）。平面形態は、径4.8～5.4mの円形をとり、確認面から床面までの深さは55cmである。

住居跡の床面は、径4.5～4.8mの円形を呈し、その床面積は約18m²である。硬化面の状態は不良である。炉穴は住居跡の中心にあったものと考えられるが、溝状遺構によって破壊を受けている。覆土は3層に分層される。1層は締りがある褐色土、2層はさらに締りが強く色調も

暗い褐色土、3層は暗褐色土である。

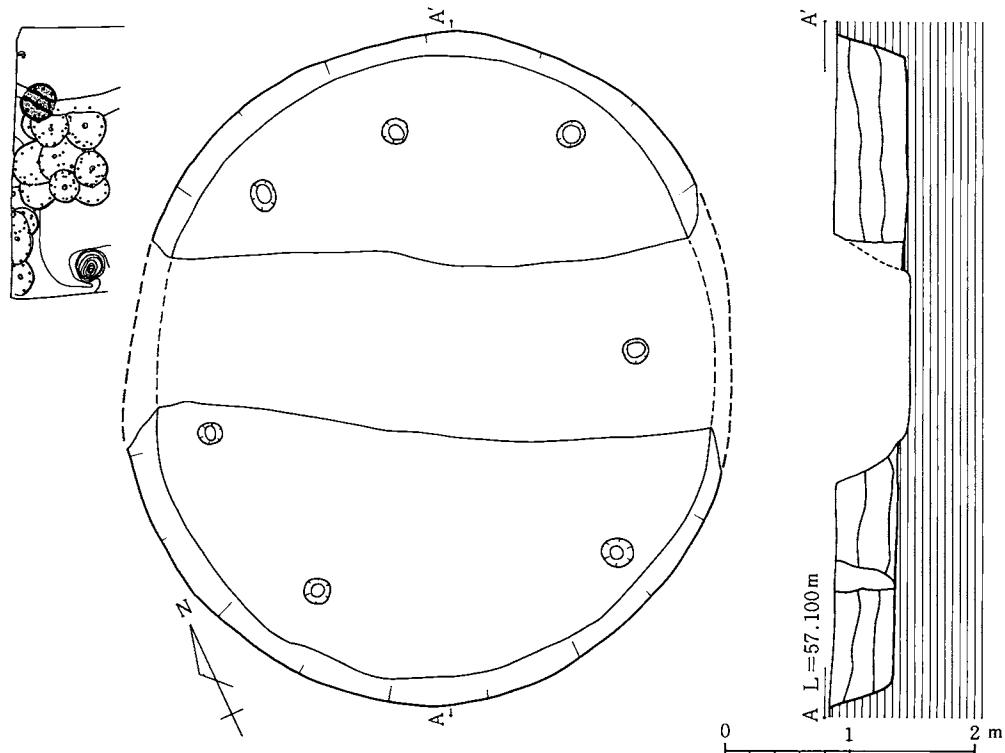
出土土器としては特徴的なもの7点（第17図51～57）をとり上げているが、この他に深鉢形土器の無文部片が25点出土している。また、石器では磨石・敲石1点（第57図34）がある。

51と52は、深鉢形土器の口縁部である。文様には、斜行単沈線文（52）と「ハ」の字状文（51）がある。53と54は鉢形土器の胴部で、二枚貝圧痕による擬似縄文と沈線文である。55は無文であるが、浅鉢形土器である。56と57は底部で、深鉢形か鉢形のものと考えられる。

6号住居跡（第15・17図）

6号住居跡は、切り合った16基の住居跡の中で最も東側にあるものの一つである（第15図）。平面形態は直径5.4mの円形を呈し、確認面から床面までの深さは44cmである。

住居跡の床面は直径約4.5m前後の円形で、その面積は15.8m²である。硬化面の発達は良くない。柱穴は、径25cmで深さ17～25cmのものが9個円形に並んでいる。炉穴は住居跡のほぼ中央にあり、埋土中に多量の焼土・炭化物が混入している。しかし、その底面では明確に受熱の痕跡を観察することはできなかった。覆土は、4層に分層できる。1層は締りのない暗褐色土、2層は締りのある褐色土、3層は締りがさらに強くなる暗褐色土、4層は色調がさらに暗くなる暗褐色土である。



第14図 5号竪穴式住居跡実測図

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物

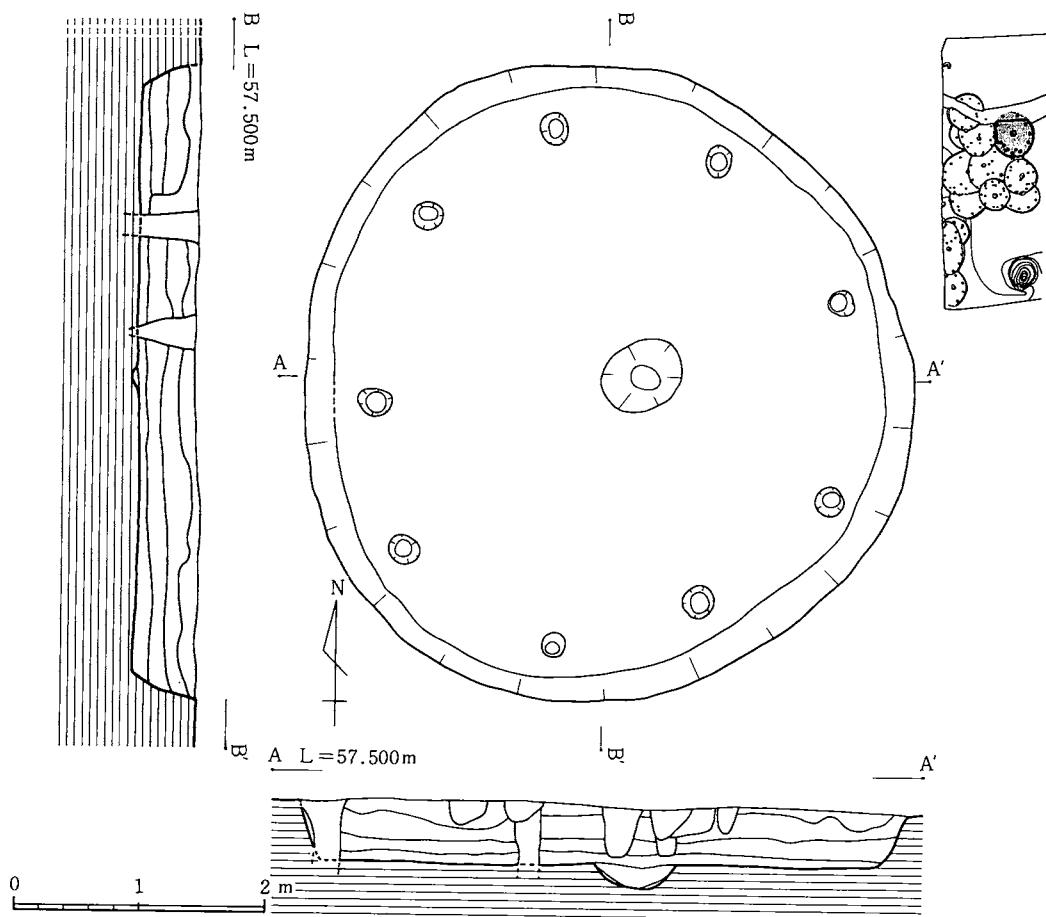
出土土器としては、型式的特徴を示すもの10点（第17図58～67）をとりあげているが、この他に深鉢形土器の無文部片41点が出土している。また、石器では磨石・敲石1点（第57図35）、石皿・台石1点（第68図101）、剝片3点（第75図121～123）がある。

59～63は、深鉢形土器の口縁部で、59は貝殻擬似縄文施文のM字状貼り付けを持つ橋状把手である。文様はすべて斜行単沈線文（59～63）であるが、59のように口縁部文様帯が段をもって明確に作り出されているものもある。64～66は、鉢形土器の口縁部である。文様には、貝殻擬似縄文（64・65）と縄文（原体RL）（66）がある。66は土器の内面に縄文と沈線文、穿孔文による文様がみられる。67は、深鉢形土器の底部であろう。

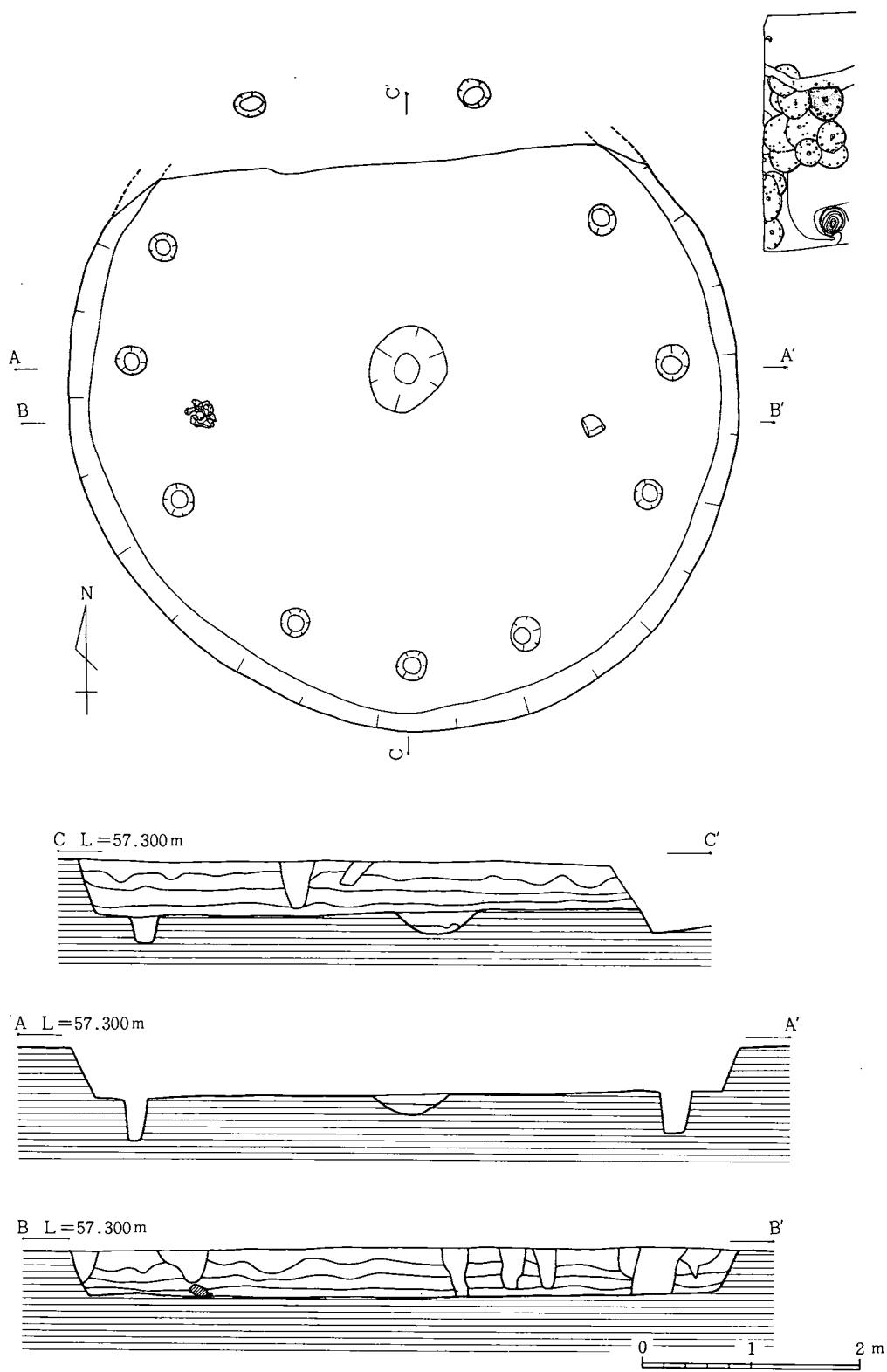
7号住居跡（第16・17図）

7号住居跡は、遺構群中の北東隅に位置している（第16図）。平面形態は円形を呈し、直径6.2mで床面までの深さは46cmである。

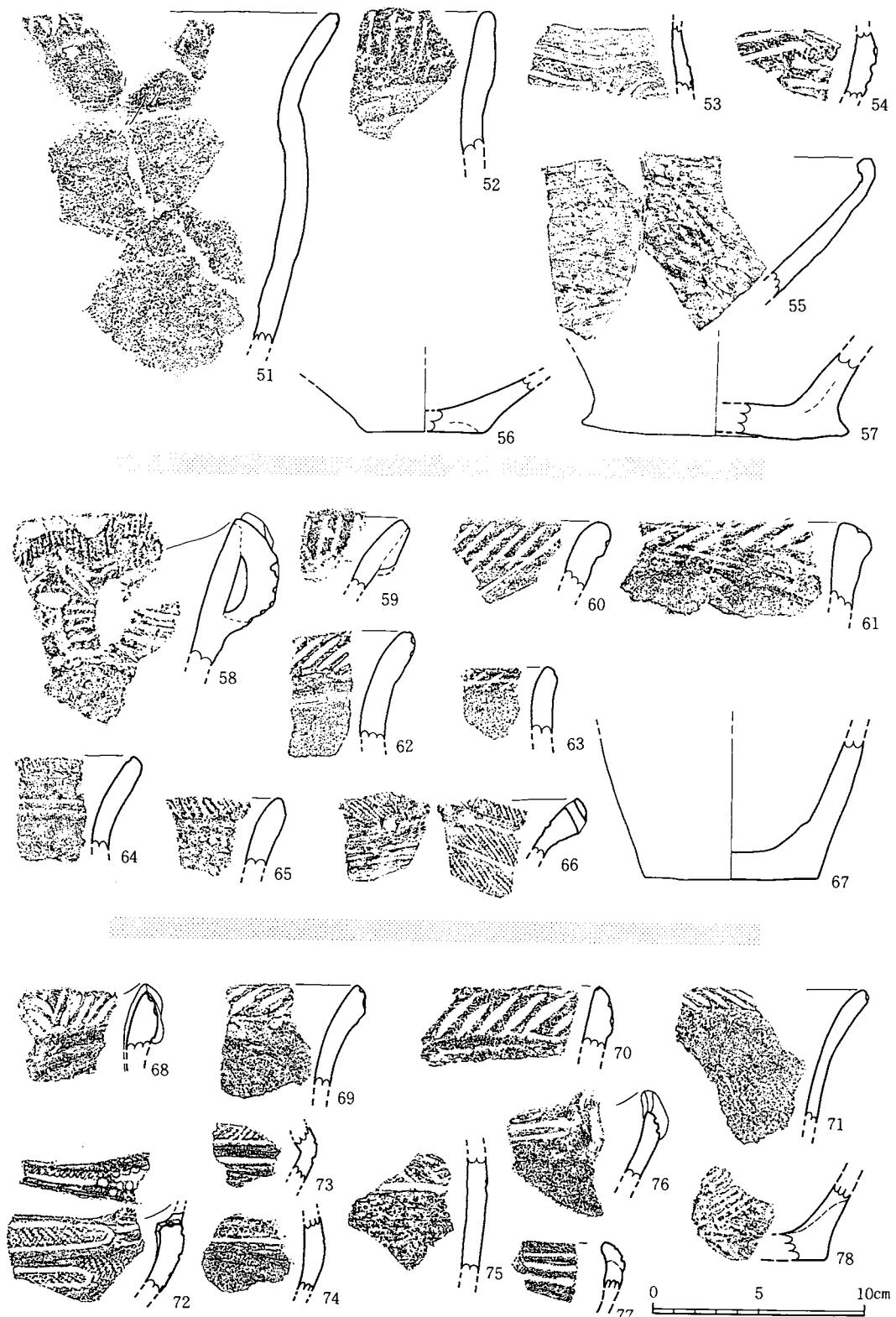
住居跡の床面は直径5.8mの円形で、その面積は26.4m²である。硬化面の発達は不良。柱穴



第15図 6号竪穴式住居跡実測図



第16図 7号竪穴式住居跡実測図

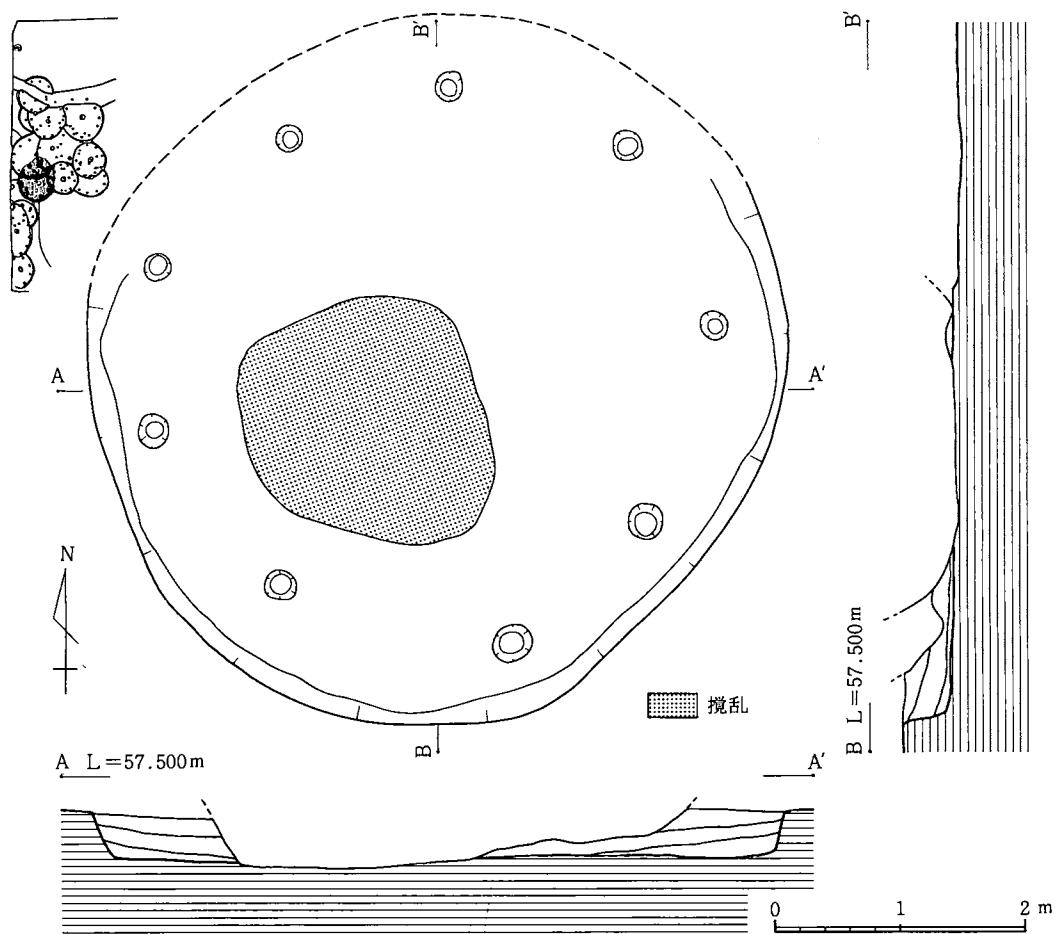


第17図 縄文式土器実測図

は、径30cm前後で深さ25~40cmのものが11個ある。炉穴は住居跡の中心部にあり、その埋土中に焼土・炭化物が多量に含まれている。埋土は、4層に分層できる。1層は締りのある暗褐色土、2層は締りのない褐色土、3層はやや締りのある褐色土、4層はさらに締りのある暗褐色土である。

出土土器では、型式的特徴を示すもの（第17図68~78）を中心に提示しているが、この他に無文部片117点が出土している。石器では削器1点（第51図10）、打製石斧1点（第53図16）、磨石・敲石2点（第57図36・38）、石皿・台石2点（第67図100・第68図102）がある。

68~71は深鉢形土器の口縁部で、68は沈線文施文のM字状貼り付けがある土器で、橋状把手が左に付いていたようである。文様はいずれも斜行単沈線文（68~71）である。72~75は鉢形土器で、二つに細分される。一つは、72のように口唇部にも文様帯があり、そこに刺突文や沈線文がみられる土器で、もう一つは、文様が口唇部には無く、口縁部と胴部にみられる土器



第18図 8号竪穴式住居跡実測図

(73~75) である。器形は、胴部片のみの出土ではっきりしないが、恐らく1号住居跡出土の32~43の土器と同じものであろう。文様は、72がR Lの縄文・沈線文(口縁部)と刺突文・沈線文(口唇部)で、73が貝殻擬似縄文と沈線文、75がR Lの縄文と沈線文である。76と77は浅鉢形土器である。口縁部に横走する沈線があり、文様の集束部には突起部がある。78は、深鉢形土器の底部である。

8号住居跡（第18図～第24図）

8号住居跡は、1号住居跡の南隣にあってそれに切られた状態で検出された。(第18図)。円形の平面形態をとり、直径5.6mで床面までの深さは34cmである。

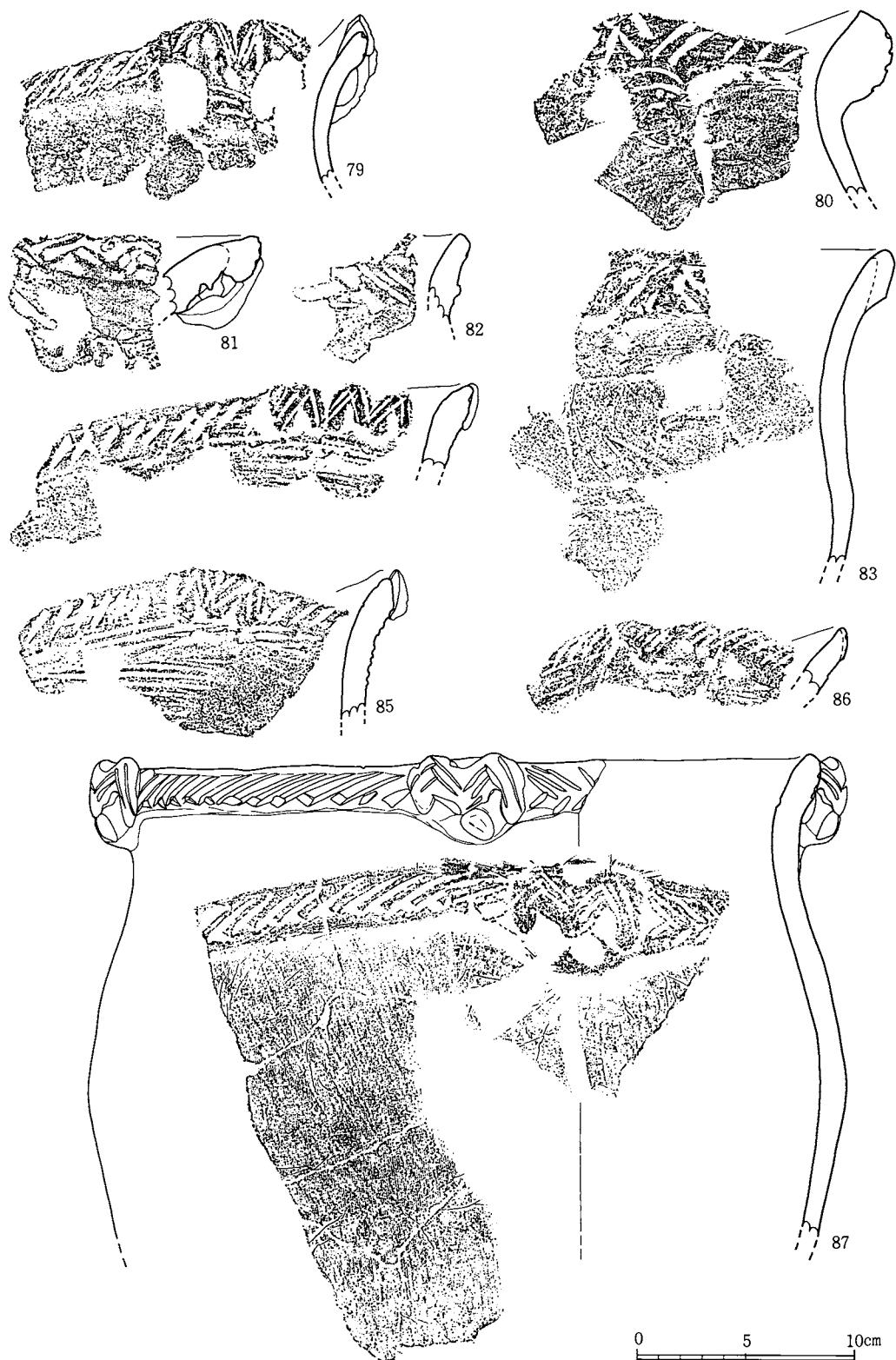
住居跡の床面も円形を呈し、直径5.2mで、床面積は21.2m²と求められる。硬化面の状態は不良である。柱穴は9個あり、径25~35cmで深さは16~20cmである。炉穴については、住居跡内のかなりの部分に攪乱が及んでいて、その位置の確認ができなかった。覆土は3枚に分層できる。1層は締りの弱い暗褐色土、2層はやや締りが強くなる褐色土、3層は締りのある暗褐色土である。

遺物は、17基の住居跡の中で最も多く出土しているが、ここでは型式的特徴を良く示すものに限って67点（第19図79～第24図146）を報告している。また石器は石鏃1点（第50図1）、石錐1点（第50図4）、石匙2点（第50図5・6）、削器1点（第51図8）、磨石・敲石15点（第57図37・39、第58図40～42・44～47、第59図48～53）出土している。

出土した土器は、すべて北久根山式土器で、その形態組成は、深鉢形土器(79～111・113～124)と鉢形土器(125～134)、浅鉢形土器(112)そして皿形ないし高壺形土器(135)によっている。

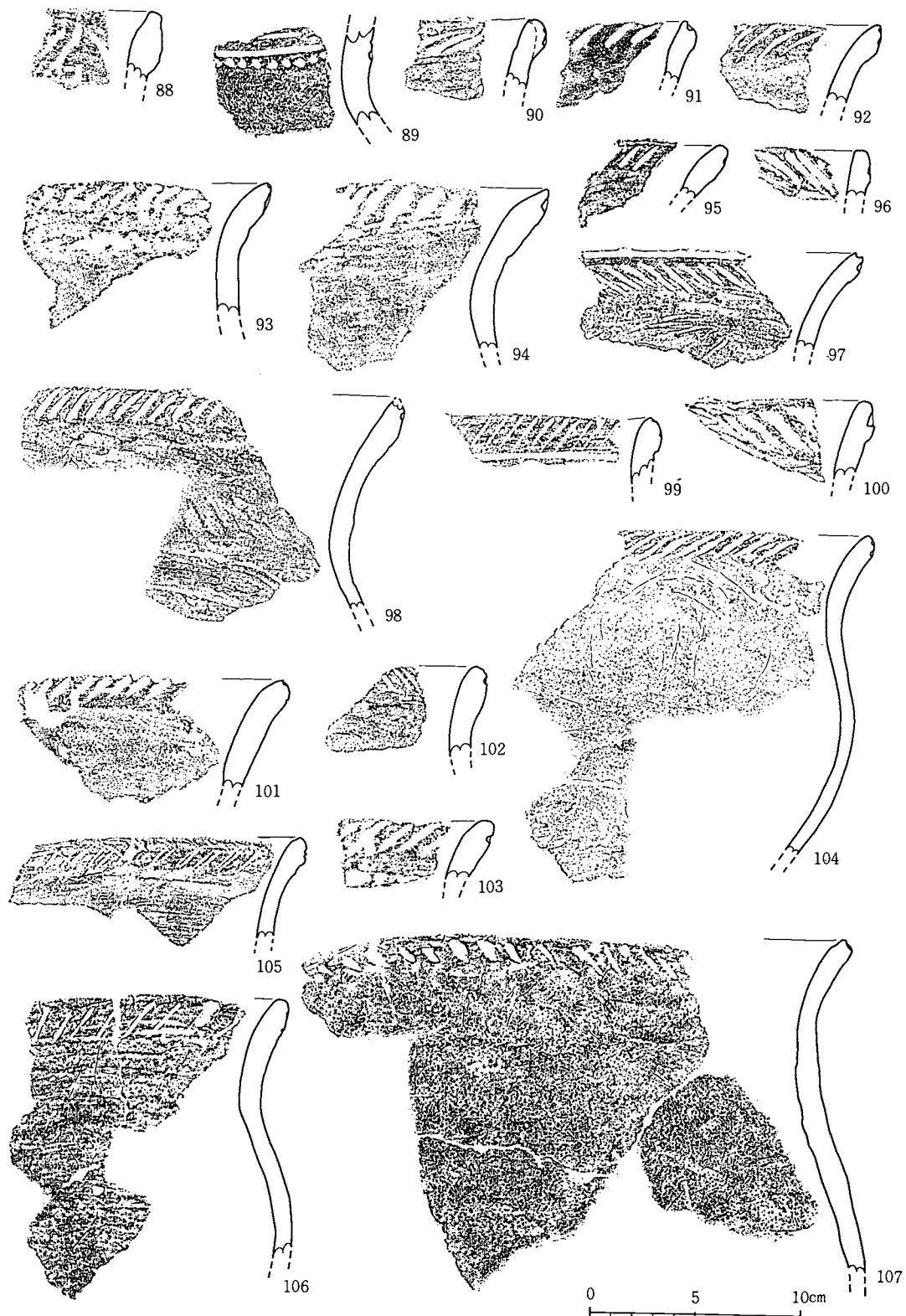
深鉢形土器には有文のもの(79～111)と無文のもの(122)がある。有文の土器は、口縁部が外反して胴部が張出す器形をとり、口縁部に文様帶がある。その文様には、沈線文のもの(79～109)と貝殻擬似縄文のもの(110・111)がある。さらに前者には、斜行単沈線文(79～82・84～88・90～98・100～109)と刺突文+斜行・横走沈線文(89・99)がある。文様帶作出の状態では、ほとんど作り出さないもの他に、83・88・90のように口縁部を肥厚させるものがある。また、この種の土器では橋状把手+M字状貼り付け文(79)、橋状把手+M字状沈線文(80～82)、M字状貼り付け文(貝殻擬似縄文無)(84～87)、M字状沈線文のみ(83)という組合せで装飾される場合が多いが、108のように明らかにつかないものもある。

鉢形土器には125～127のように口唇部に文様帶がみられるものと、128～134のように口縁部が大きく外反して胴部が屈曲する器形をとり、口縁部と胴部に文様が施文されるものの二つがある。また、中には土器の内面にまで施文される例(130)もある。前者の文様は、口唇部に刺突文+沈線文(125)や貝殻擬似縄文と沈線文(127)が、口縁部周辺では貝殻擬似縄文+沈線文(126)がみられる場合もある。後者の文様では口縁部が貝殻擬似縄文で、胴部には貝殻擬似縄文+沈線文のもの(132～134)と131のように縄文+沈線文のものがある。

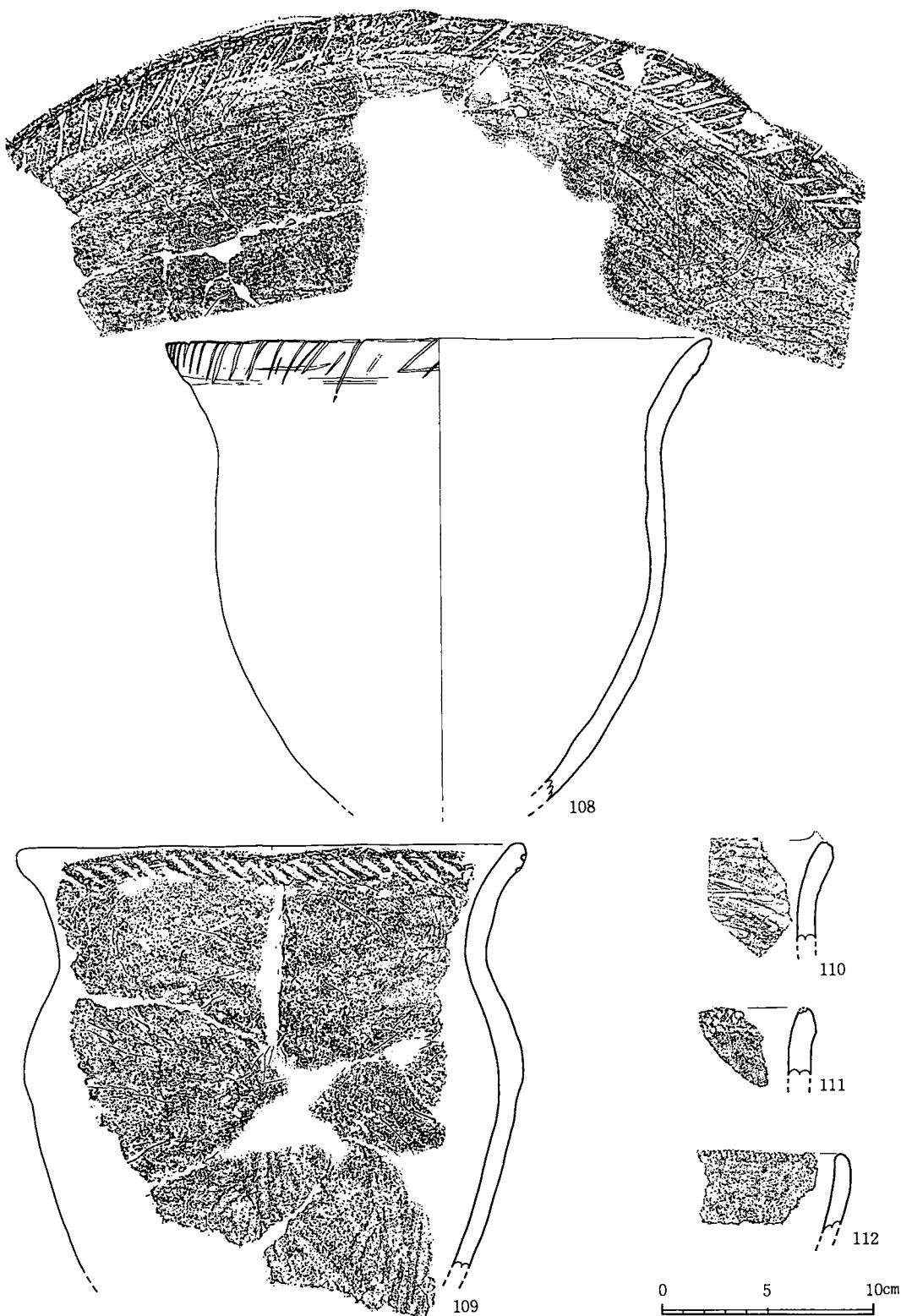


第19図 繩文式土器実測図

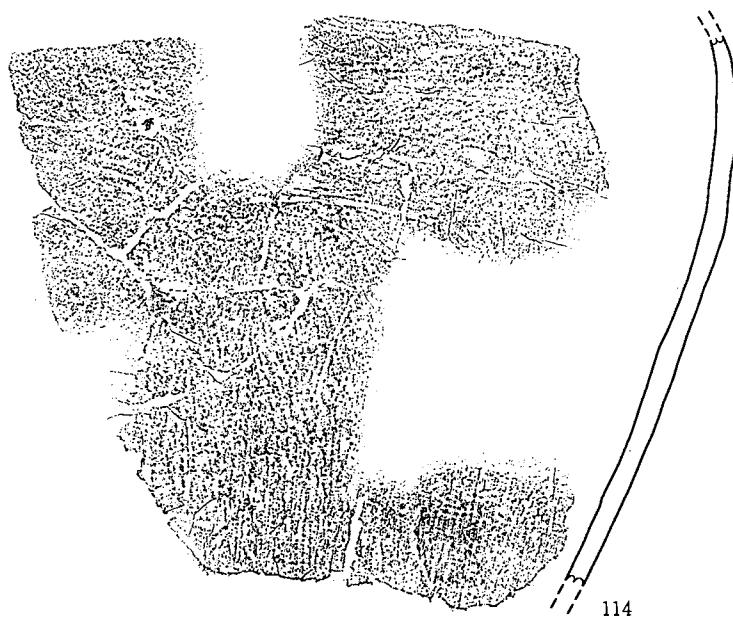
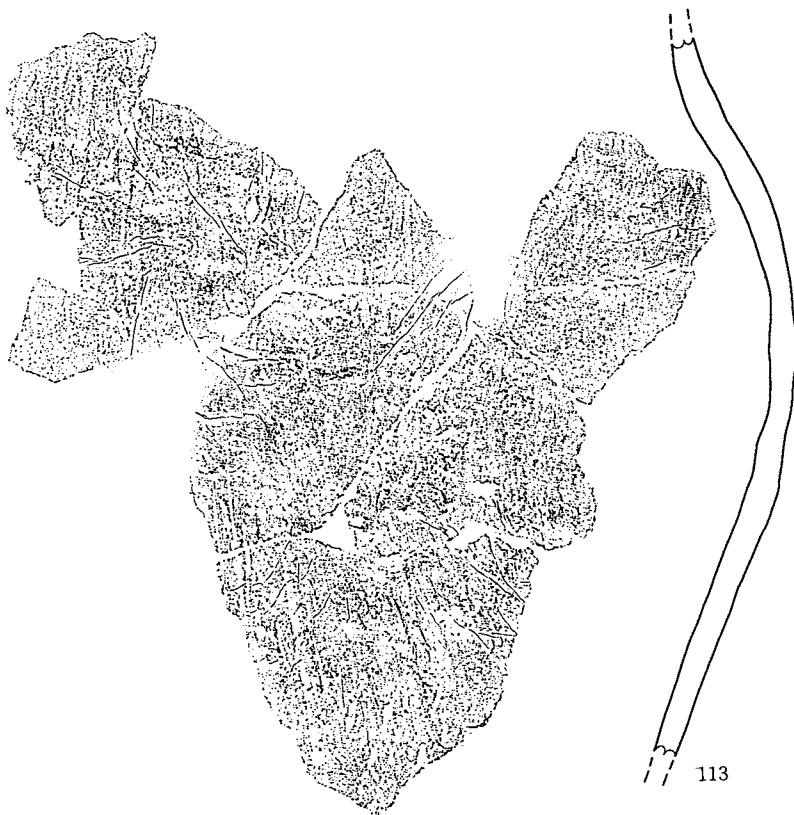
第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



第20図 繩文式土器実測図

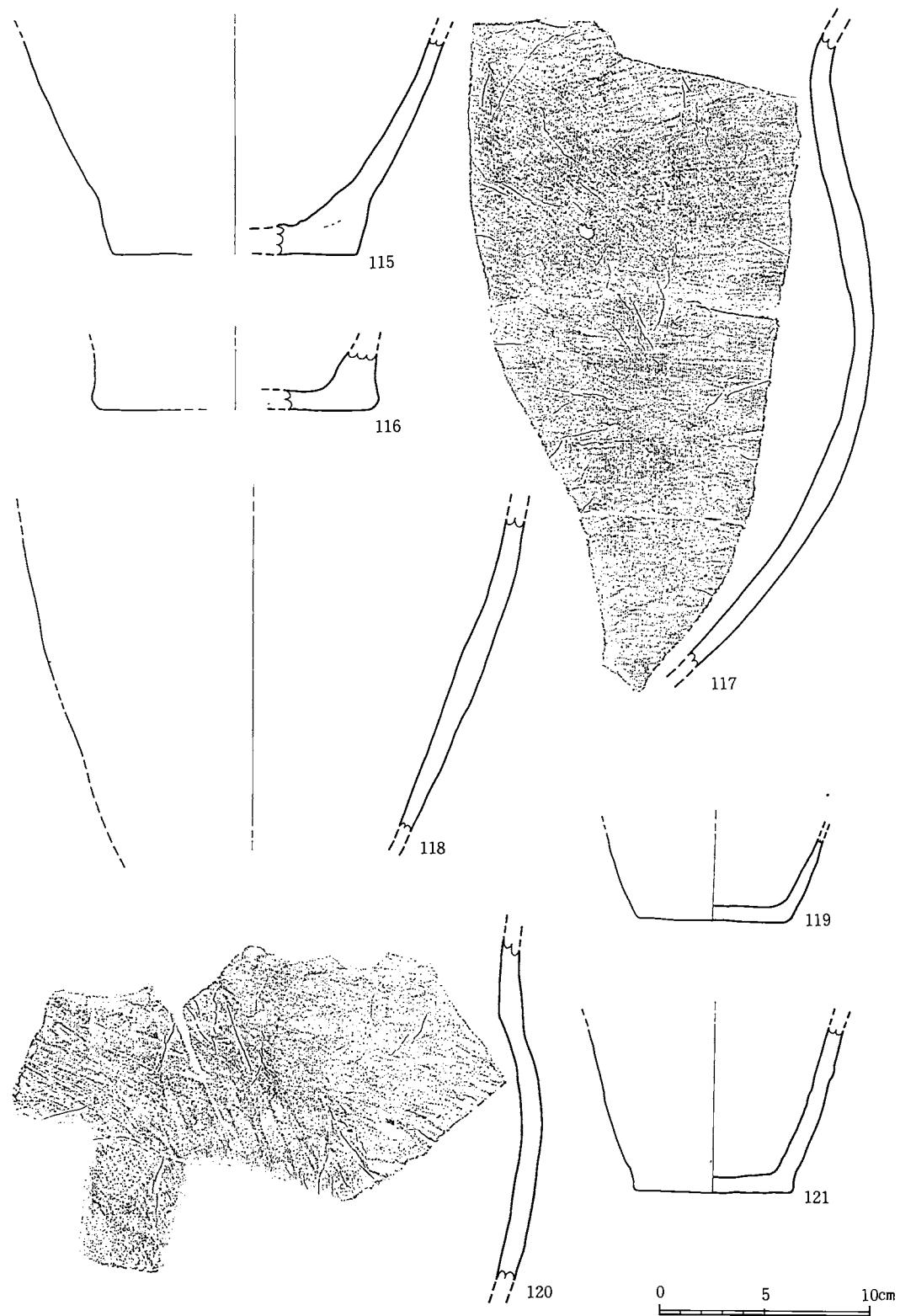


第21図 縄文式土器実測図



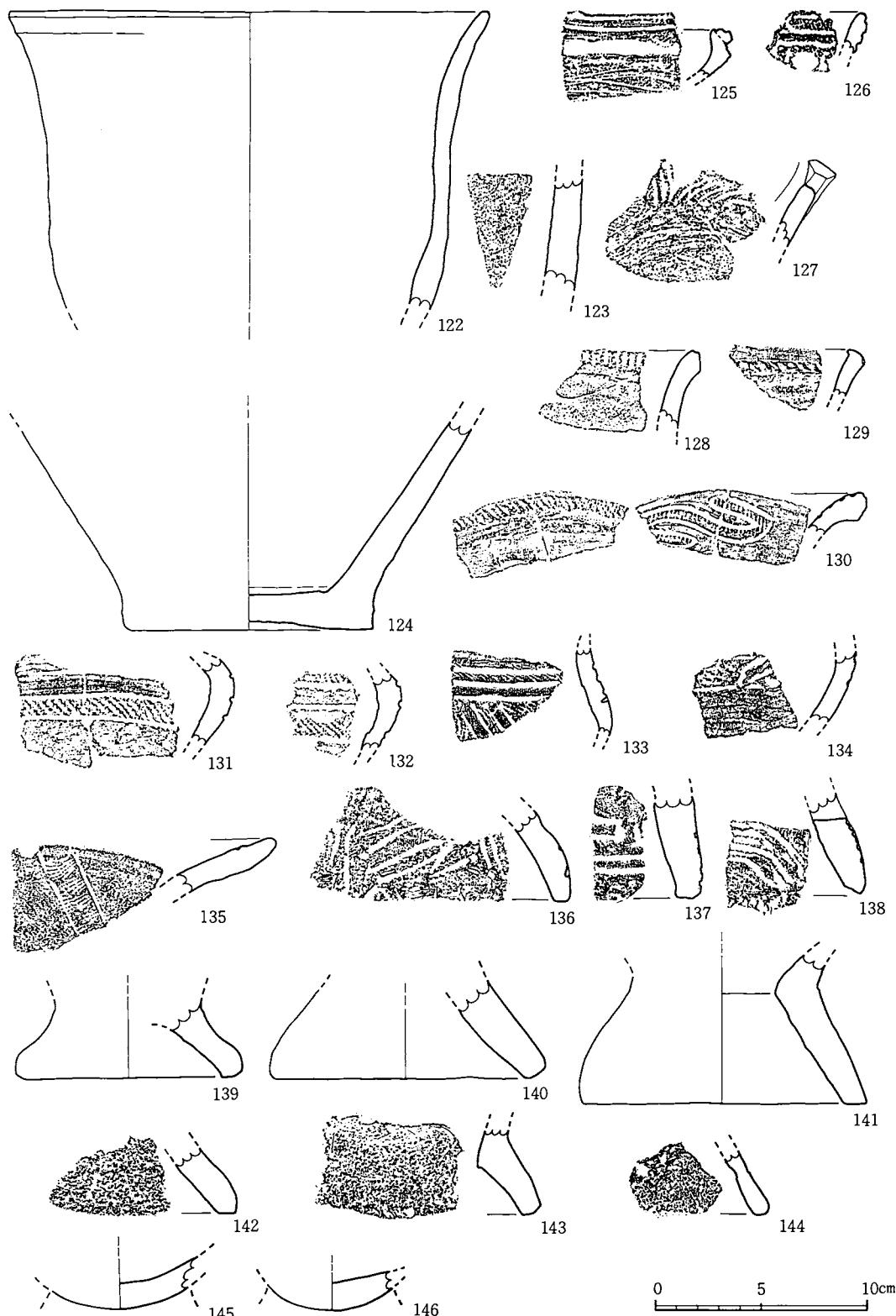
0 5 10cm

第22図 繩文式土器実測図



第23図 縄文式土器実測図

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



第24図 繩文式土器実測図

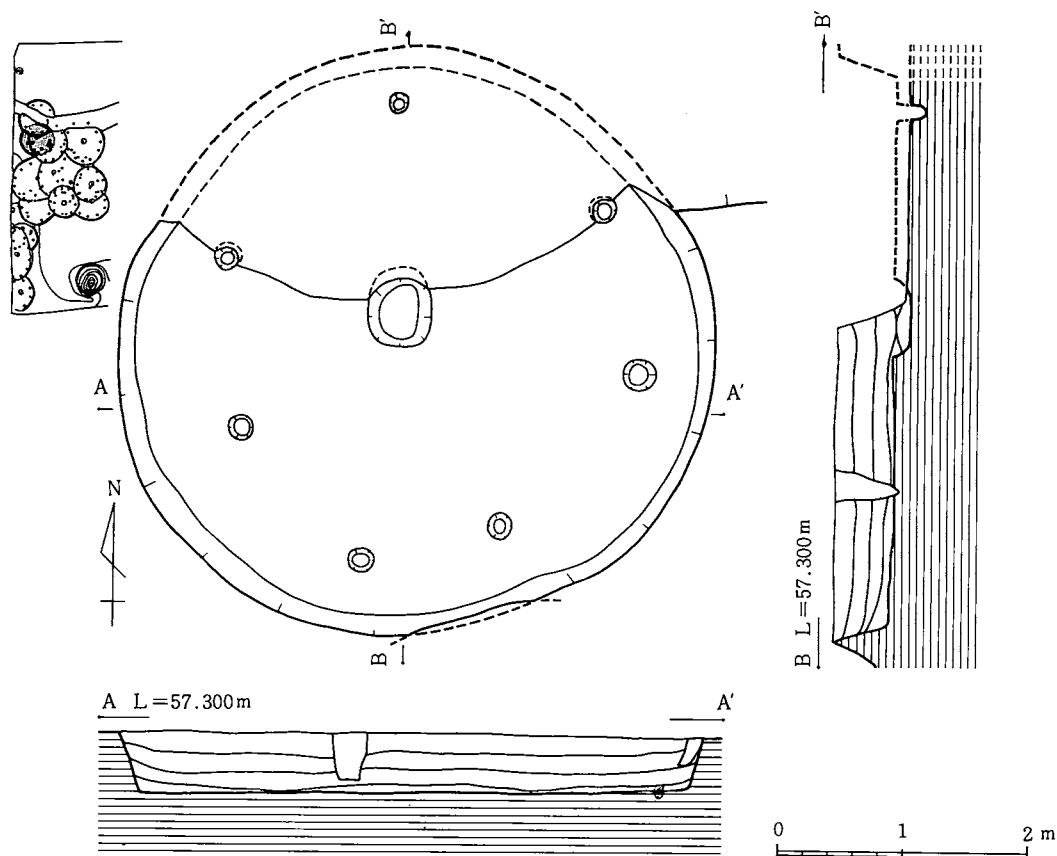
浅鉢形土器は1点あり、口縁部に貝殻擬似縄文が施文されている。皿形ないし高壺形土器は、土器の内面に沈線文と貝殻擬似縄文による文様が施文されている。なお、この土器の底部は不明であるが、136～138のような有文の脚台がつくのかもしれない。

136～146は、脚台関係の資料である。136～144は脚台で、沈線文が施文されるもの（136～138）と無文のもの（139～144）がある。145と146は、土器の内面の底部をなすもので、脚台と組み合わされる。これについての詳細は、脚台の製作にかかわるもので、次章に譲る。

9号住居跡（第25・26図）

9号住居跡は遺構群の北側にあり、5号住居跡の南隣でその住居跡に切られた状態で検出された。平面形態は円形を呈し、直径4.7mで床面までの深さ50cmを測る。

住居跡の床面は、直径4.4mの円形を呈し、床面積は15.2m²である。硬化面の発達は悪い。柱穴は7個あり、径20～25cmで深さ20cm前後の大さきである。炉穴は住居跡の中心部にあり、底面が明確に焼けた痕跡を示してはいないが、埋土中に多量の焼土・炭化物・灰が確認された。覆土は、4層に分層される。1層は締りのある褐色土、2層はやや明るい褐色土、3層は締り



第25図 9号竪穴式住居跡実測図

がやや強くなる褐色土、4層は締りがなくなる暗褐色土である。

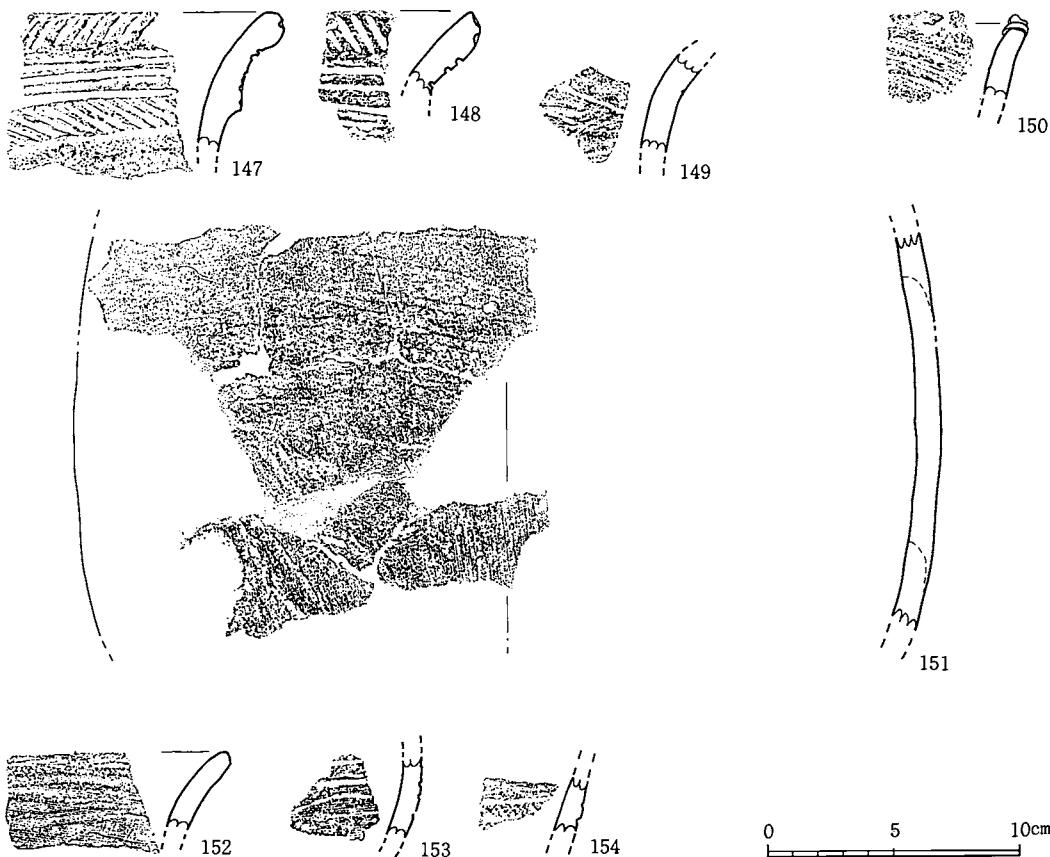
出土土器としては、型式的特徴をよく示したもの8点（第26図147～154）を提示しているが、これらの他に深鉢形土器の無文部片46点が出土している。また石器では、磨石・敲石3点（第58図43・第59図54・第60図55）、剝片3点（第75図125～127）が出土している。

147～151は、深鉢形土器である。147・148・150が口縁部で、149は口縁部から頸部にかかる部分、そして151は胴部である。147と148は口縁部文様帯が明確に作り出された土器で、斜行単沈線文と横走沈線文の組み合わせによる文様が施文されている。149には斜行する沈線文がみられる。150の土器には粘土紐の貼り付けが口唇部にみられる。

152～154は、鉢形土器である。152は口縁部にあたり、貝殻による擬似縄文が口縁部に施文されている。153と154は胴部である。153には貝殻擬似縄文と沈線文、154にはR Lの縄文と沈線文がみられる。

10号住居跡（第27図）

10号住居跡は、8号住居跡の東隣にあってその住居跡や1号・6号住居跡などに切られた状

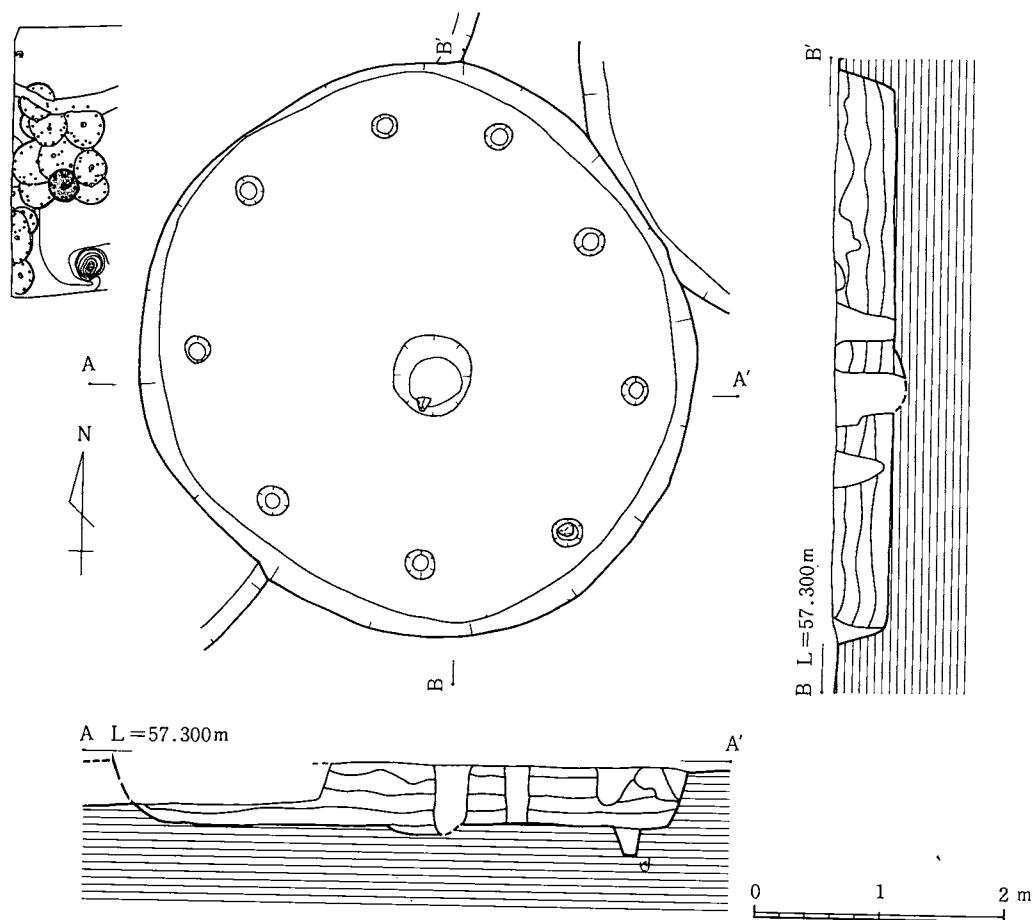


第26図 繩文式土器実測図

態で検出された。その平面形態は、直径4.6mの円形を呈している。確認面から床面までの深さは、50cmである。

住居跡の床面の平面形態は円形を呈し、その床面積は直径4.1mで 13.2m^2 である。硬化面の発達は不良である。柱穴は9個が円形に並んでおり、その大きさは直径20cm前後で深さ20~31cmである。炉穴は住居跡のほぼ中心部にあり、その埋土の黒褐色土中には焼土や炭化物を多量に包含している。しかしその底面は、明確に熱を受けたような状態を示してはいない。覆土は、4層に分層できた。1層は締りのある暗褐色土、2層は締りがあまり無い褐色土、3層は上層よりも締りのある褐色土、4層は砂粒を多く含んではいるが堅く締った黒褐色土で、焼土や炭化物を多く含んでいる。

出土した土器は少なく、深鉢形土器の無文部片が19点出土しているのみである。したがってここでは図示していない。石器は、3点出土している。石鏃1点（第50図2）は覆土中、磨石・敲石1点（第60図56）は床面に密着した状態、石皿・台石1点（第69図105）は炉穴部分から



第27図 10号堅穴式住居跡実測図

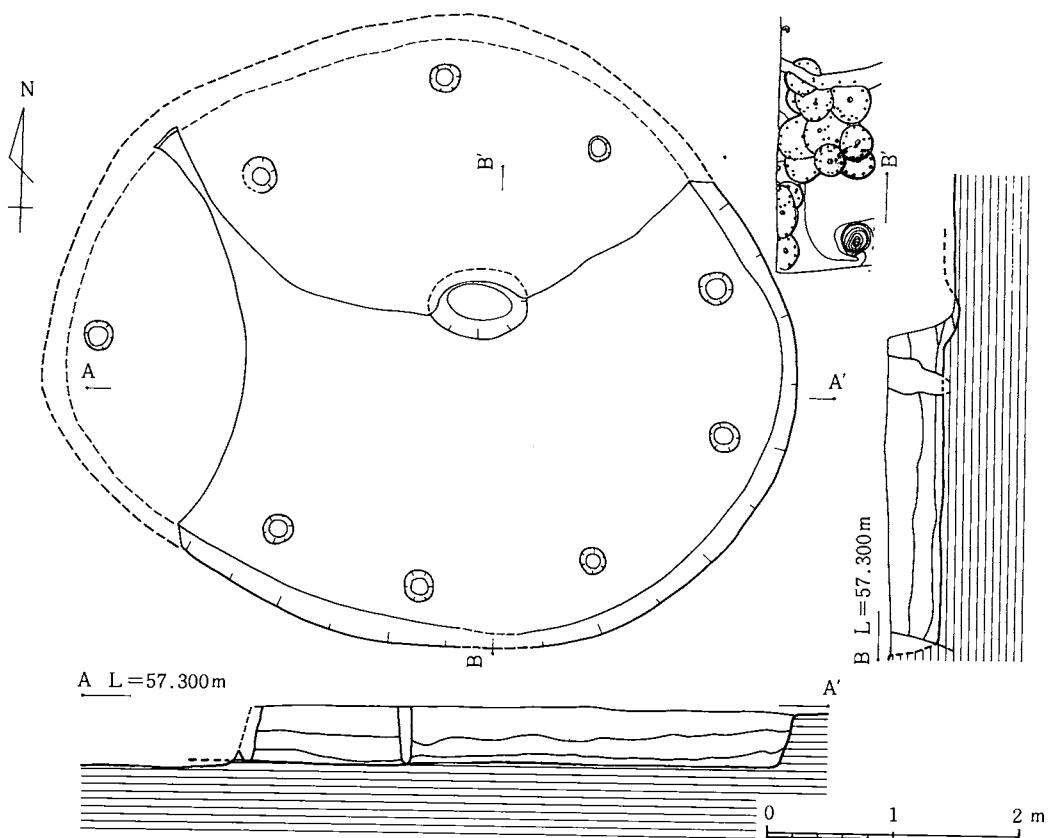
の出土である。詳細については後述する。

11号住居跡（第28図）

11号住居跡は、10号住居跡の東隣にあり、その住居跡と6号住居跡に切られた状態で検出された。その平面形態は、直径5.0~6.0mのやや東西に長い円形を呈している。確認面から床面までの深さは、50cmを測る。

床面の平面形態は円形を呈し、その直径は4.6~5.7mを測る。床面積は、 21.2m^2 である。硬化面の発達は不良である。柱穴は9個あり、その大きさは径25~35cmで深さ20~29cmである。炉穴は、住居跡の中央というよりもやや東側に偏っており、その埋土中には焼土や炭化物が大量に包含されていた。しかしその底面は、明確に焼けた状況を呈してはいない。覆土は、4層に分層できる。1層は締りのある褐色土、2層はやや締りがなくなつて、色調も暗くなる褐色土、3層は上層が締まった状態の褐色土、4層は砂粒を多く含み締りがない暗褐色土である。

出土資料としては、石器の出土もなく、土器も少なくて深鉢形土器の無文部片6点があるのみであった。

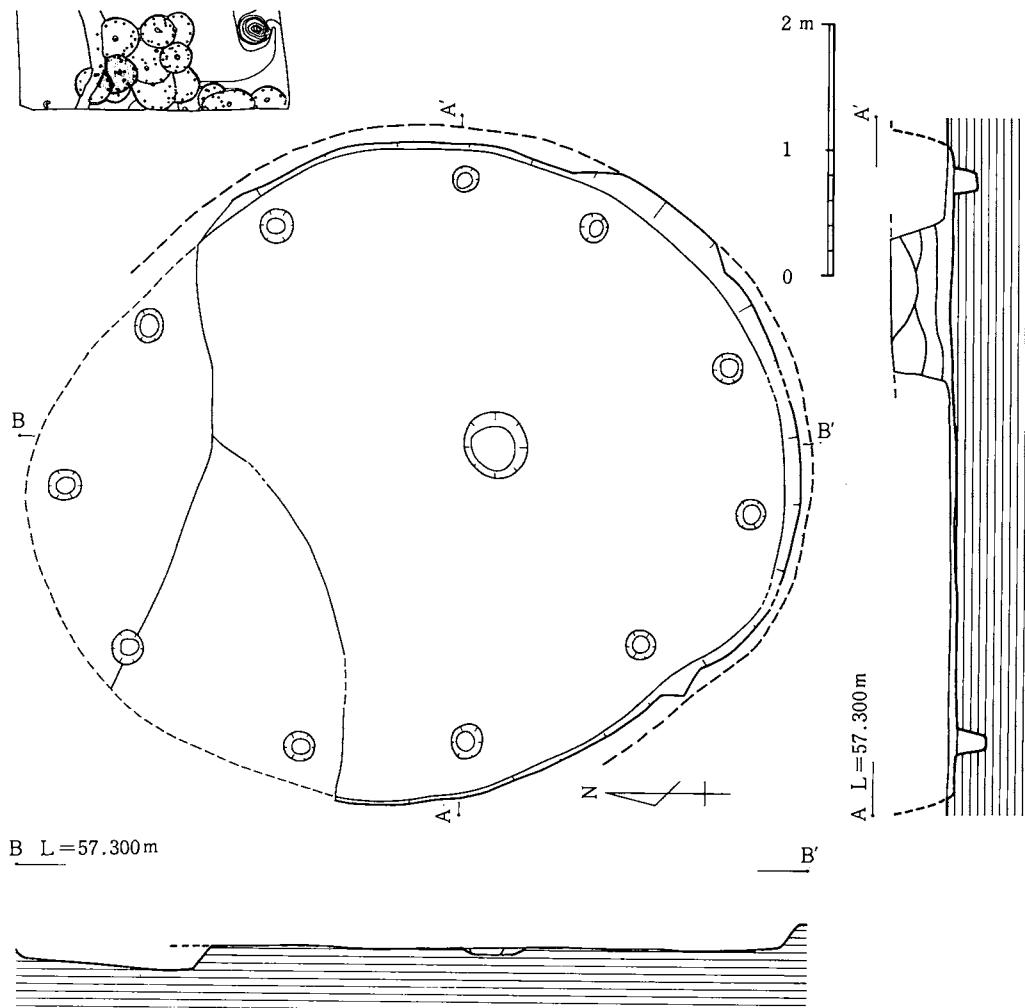


第28図 11号竪穴式住居跡実測図

12号住居跡（第29～31図）

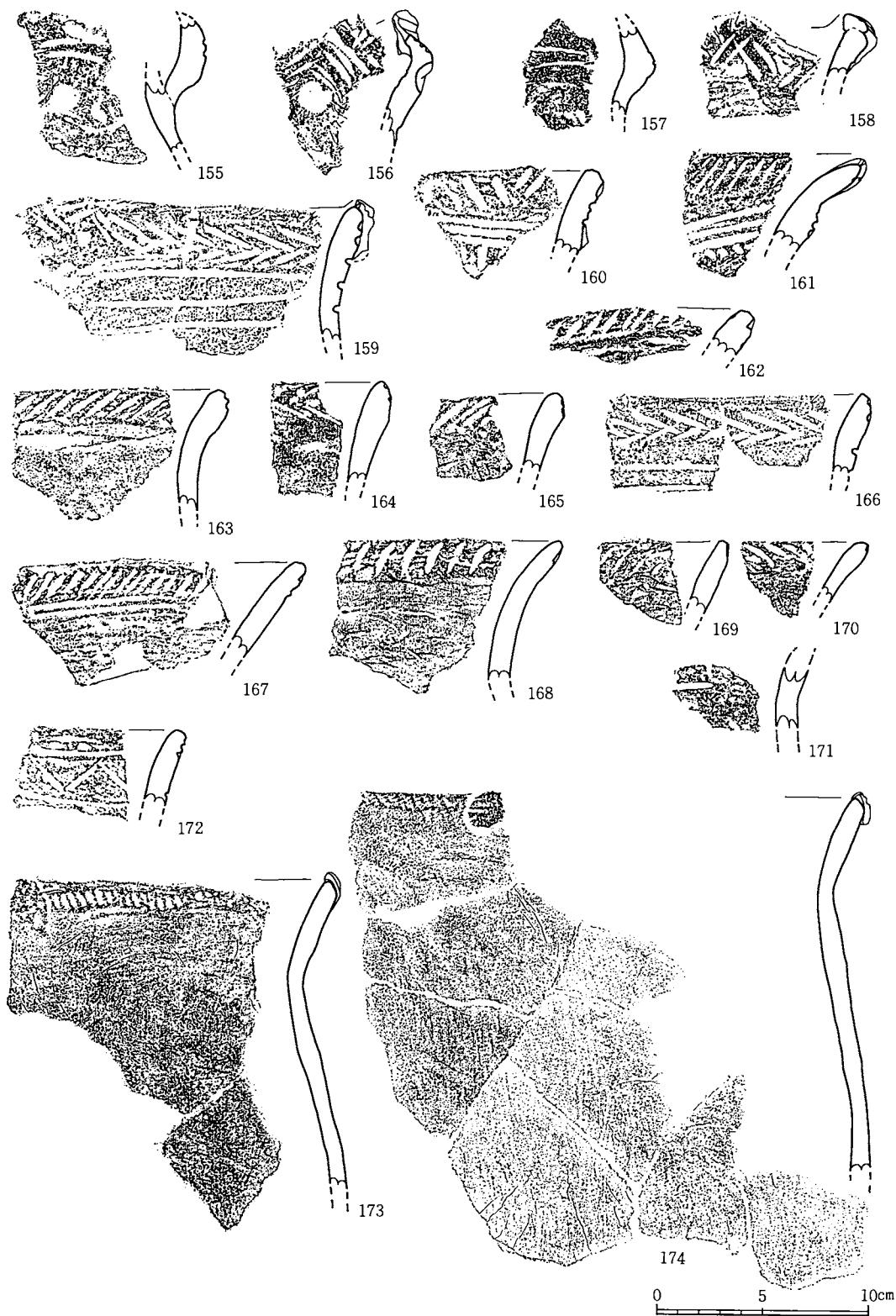
12号住居跡は、1号住居跡と5号住居跡との間にはさまれ、1号・5号・7号・9号住居跡に切られた状態で検出された。その平面形態は、直径5.2～6.3m（推定値）のやや南北に長い円形を呈している。確認面から床面までの深さは、43cmである。

床面の平面形態は円形で、その直径は5.1～6.1m（推定値）、床面積は24.8m²である。硬化面の状態は不良である。柱穴は11個あり、その大きさは径20cm前後で深さ23～29cmである。炉穴は、住居跡の中心部分よりもやや南側へ寄った位置にある。その状態は、底面がはっきりと熱を受けた痕跡を示してはいないが、埋土中に焼土や炭化物を多く含んでいる。埋土は、3層に分層できる。1層は締りのない暗褐色土、2層はやや締りがでてくる褐色土、3層は、堅くし

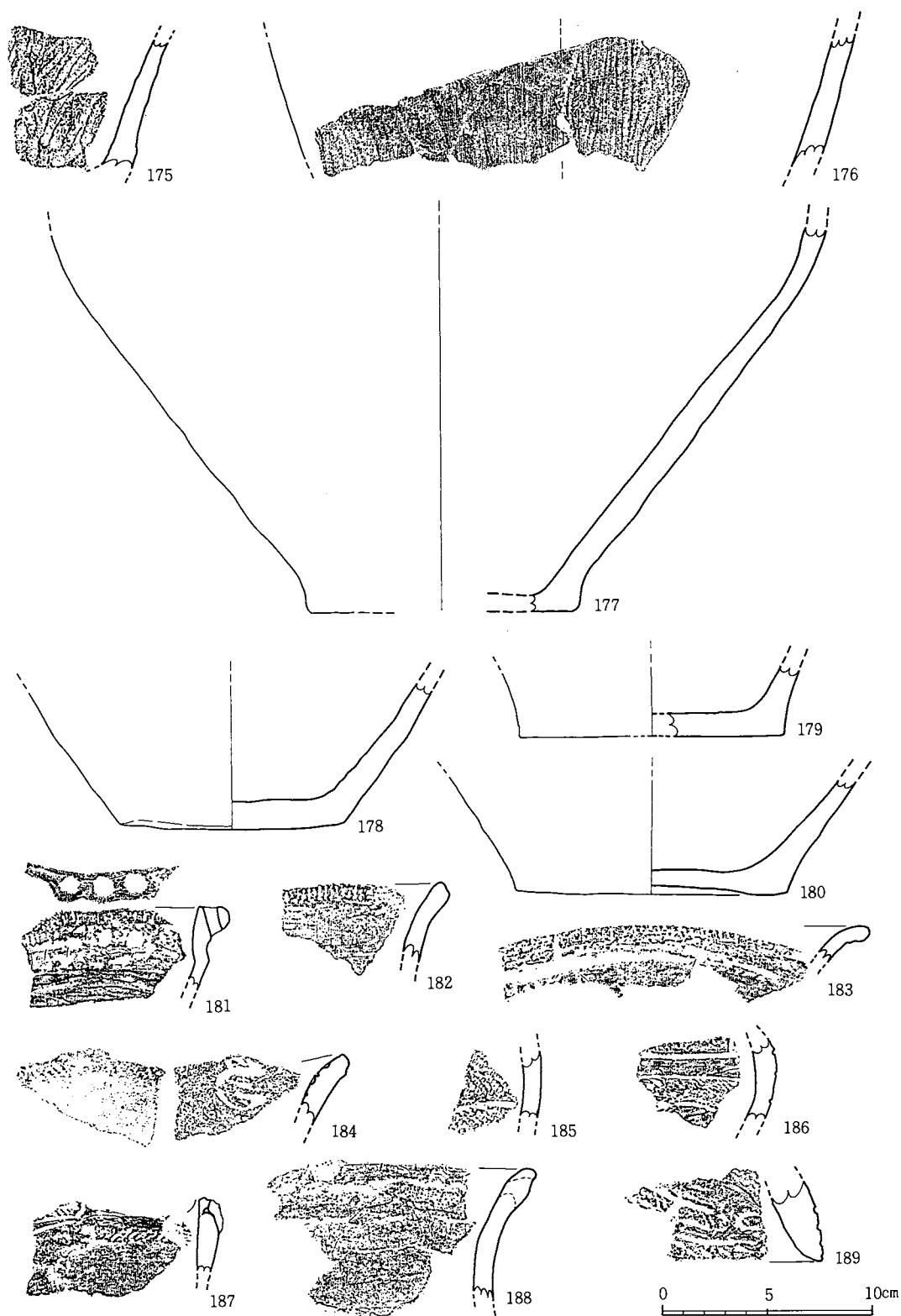


第29図 12号竪穴式住居跡実測図

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



第30図 繩文式土器実測図



第31図 縄文式土器実測図

また黒褐色土である。

出土土器は17基の住居跡中8号住居跡に次いで多いが、ほとんどのものが無文部片であり、ここでは型式的特徴を示すもの35点を図示している（第30図155～第31図189）。石器は、削器1点（第51図11）、打製石斧1点（第54図19）、二次加工ある不定形石器2点（第56図26・27）、使用痕ある剝片1点（第56図31）、磨石・敲石2点（第60図57・58）の計7点であった。

深鉢形土器は、155～177・188で、有文のもの（155～177）と無文のもの（188）がある。前者は、173や174のように口縁部が外反して胴部がやや張出した器形をとり、160や161のように口縁部を肥厚させて文様帯を作り出す例もある。その種類は、沈線文（158～172）と貝殻擬似繩文（173・174）で、さらに沈線文には斜行単沈線（162・163・165・167～170）、綾杉状（164）、綾杉状+横走沈線（159・166）、斜行単沈線+横走沈線+刺突（160・161）、その他（172）の種類がある。また、この種の土器にはその部位によって、橋状把手（155～159）やM字状ないしそれに類した貼り付け文（156・158・159・173・174）がみられる場合がある。

鉢形土器は、181～187である。この形態に属する土器は、全体の器形が具に判らずに判然としないが、181・187のように口唇部にまで文様帯がみられるものと、口縁部が大きく外反して胴部が丸く張出すもの（182～186）に細分されるようだ。施文される文様は、口縁部や口唇部で貝殻擬似繩文（181～183・187）とR Lの繩文（184）であり、胴部では貝殻擬似繩文+沈線文（186）とR Lの繩文+沈線文（185）がある。また、184のように土器の内面に貝殻擬似繩文と沈線文で逆「つ」の字状の文様が施文されるものもある。

178～180は深鉢形土器の底部で、189は脚台部である。

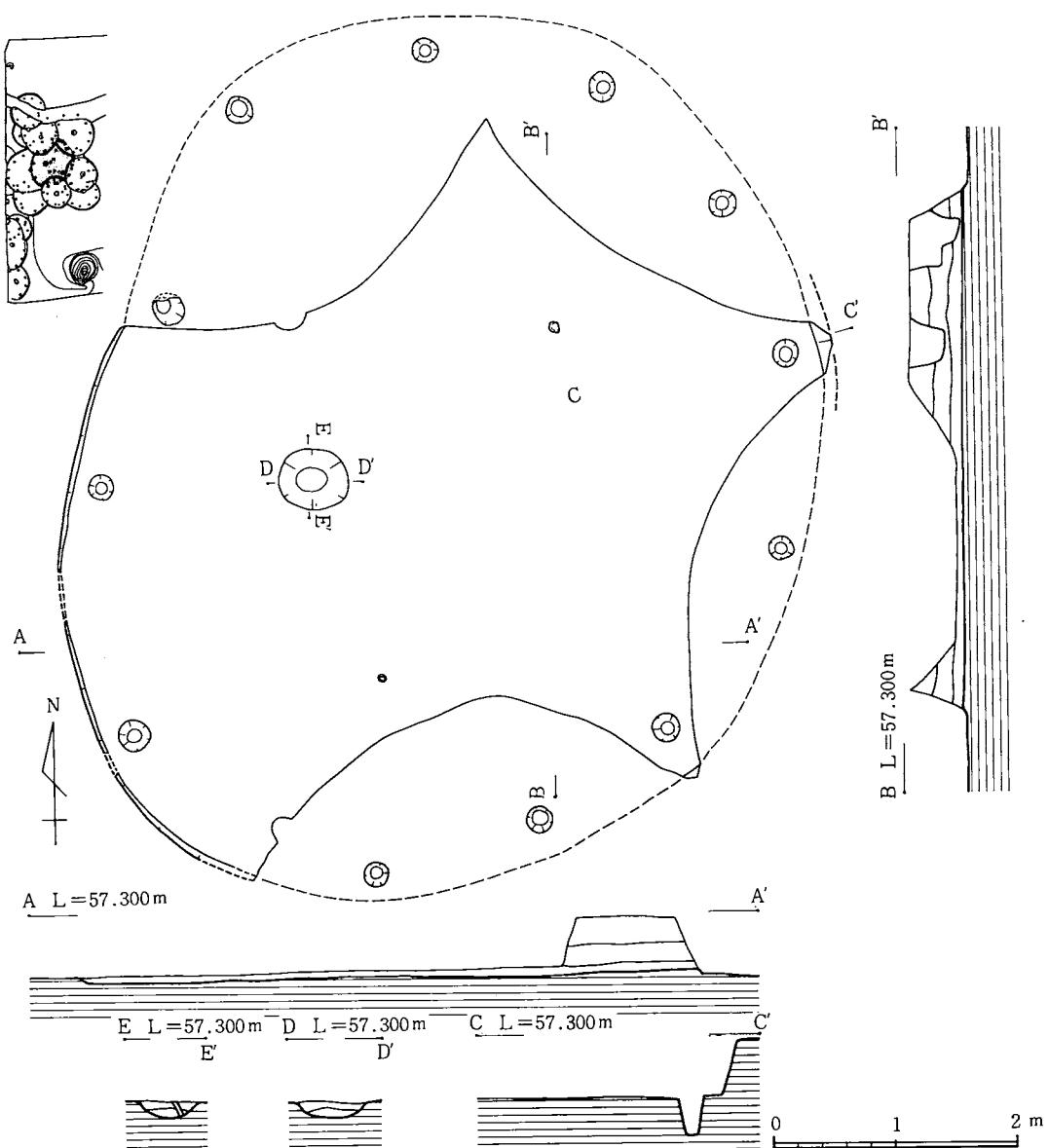
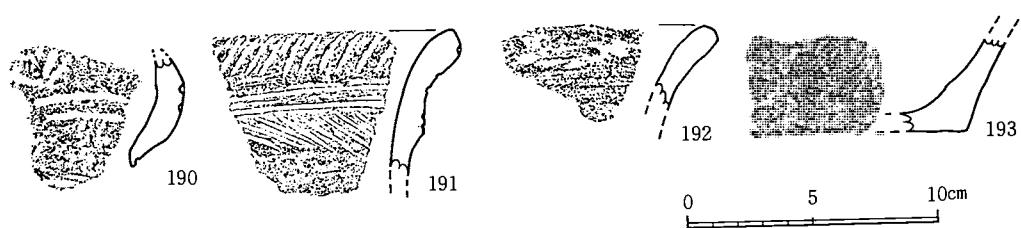
13号住居跡（第32図）

13号住居跡は、1号・6号・7号・10号・12号住居跡の間にあり、それらの住居跡によって切られた状態で検出された。平面形態は、直径6.4～7.8m（推定値）の南北に長い長円形を呈している。確認面から床面までの深さは、46cmである。

床面の平面形態は長円形を呈し、その直径は6.0～7.4m（推定値）で、床面積は35.0m²と推定される。柱穴は12個あり、その大きさは、直径25cm前後で深さ20～29cmである。炉穴は、住居跡の中央部よりもやや南西にずれた部分にある。炉の底面は、明確に受熱した状態を示してはいないが、埋土中に焼土や炭化物を多量に包含していた。覆土は、3層に分層できる。1層は締りがある褐色土、2層はさらに締りが強くなる褐色土、3層は2層よりもさらに締りが強くなり、しかも層中に焼土や炭化物が多く含まれる暗褐色土である。

出土土器では、型式的特徴を示すもの4点（190～193）の他に、深鉢形土器や鉢形土器の無文部片12点がある。石器では、床直の状態で3点の磨石・敲石（第61図59～61）、覆土中から剝片1点（第76図129）が出土している。

図示している土器は、いずれも深鉢形土器である。190は、橋状把手でM字状の貼り付けがみ



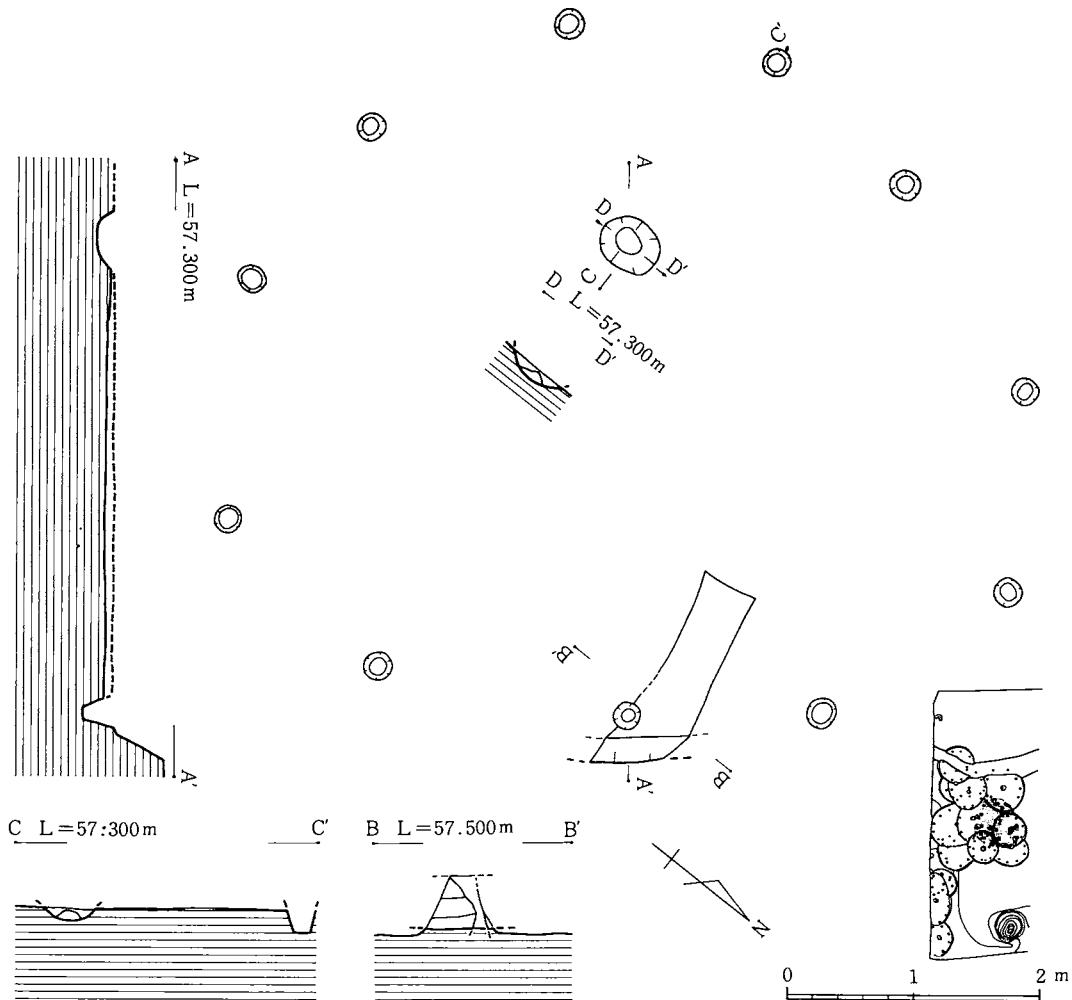
第32図 13号竪穴式住居跡実測図

られる。191は、口縁部を肥厚させて文様帶を作り、そこに斜行単沈線文と横走沈線文を施文している。192は、無文土器である。193は、底部である。

14号住居跡（第34図）

14号住居跡は、1号・6号・7号・10号・11号住居跡の間にあり、それらの住居跡に切られた状態で検出された。その平面形態は、直径6.8~7.4m（推定値）の円形を呈している。確認面から床面までの深さは、38cmである。

この住居跡は5基の住居跡によって切られているために、床面の残りが極めて悪く、東側で僅かに残存するだけである。したがって、その状態について具に知ることはできないが、その部分にあっては硬化面の発達は悪い。推定される床面積は、29.2m²である。柱穴は11個あり、径20cm前後で深さ26cmほどであったと考えられる。炉穴は、南西方向にずれた部分にあり、埋



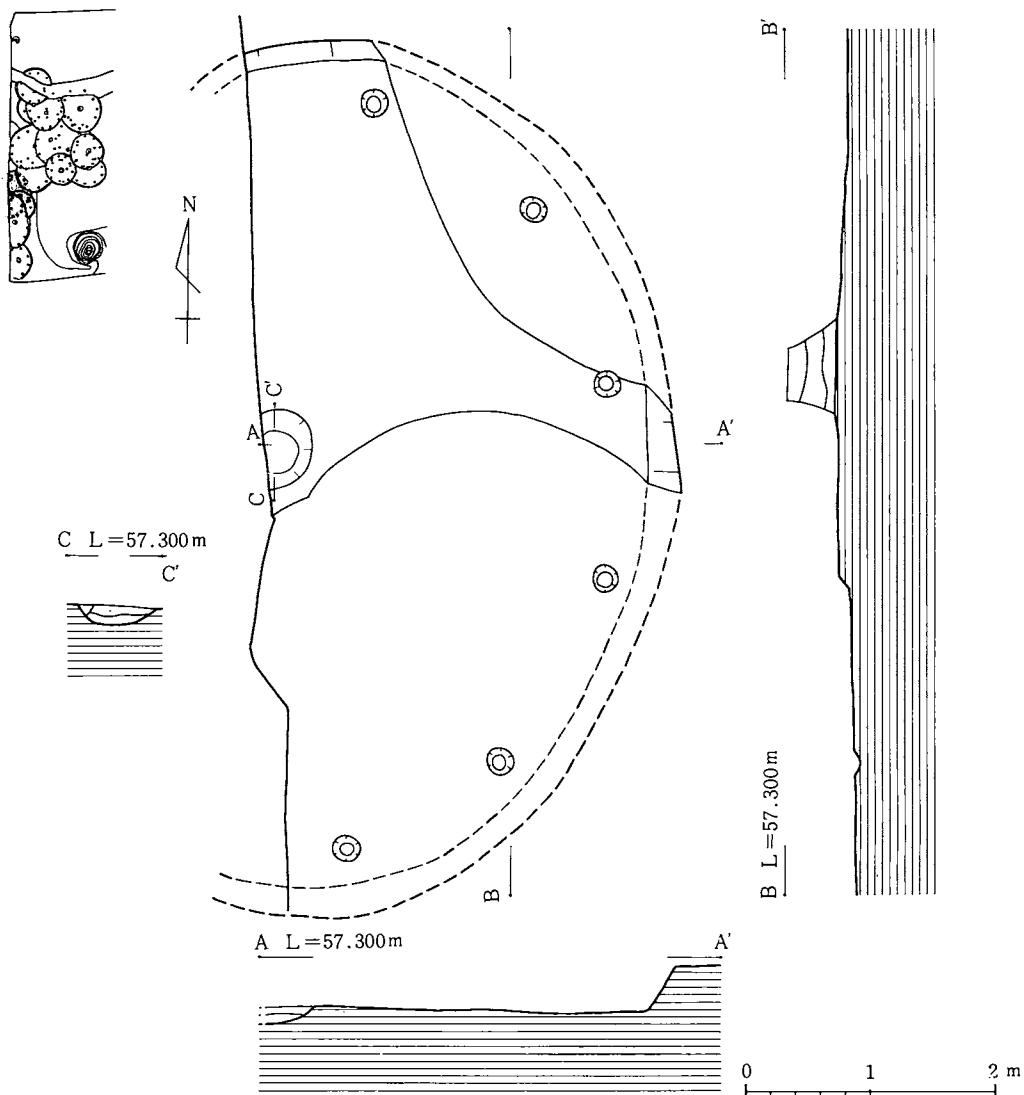
第33図 14号竪穴式住居跡実測図

土中に焼土や炭化物を多量に包含している。しかし、その底面ははっきりと熱を受けた状況を呈してはいない。覆土は、3層に分層される。1層は締りのある暗褐色土、2層はさらに締りのある褐色土、3層は1層に近似し、中に焼土や炭化物を多く包含する暗褐色土である。

15号住居跡（第35図）

15号住居跡は、2号・3号・8号住居跡に切られた状態で検出され、その西半分は調査区外にあるために半分しか調査できなかった。その平面形態は、長軸7.0m（推定値）短軸4.5m（推定値）の楕円形を呈する。確認面から床面までの深さは、38cmである。

床面の平面形態は楕円形で、長軸6.5m（推定値）・短軸4.4m（推定値）を測る。推定される

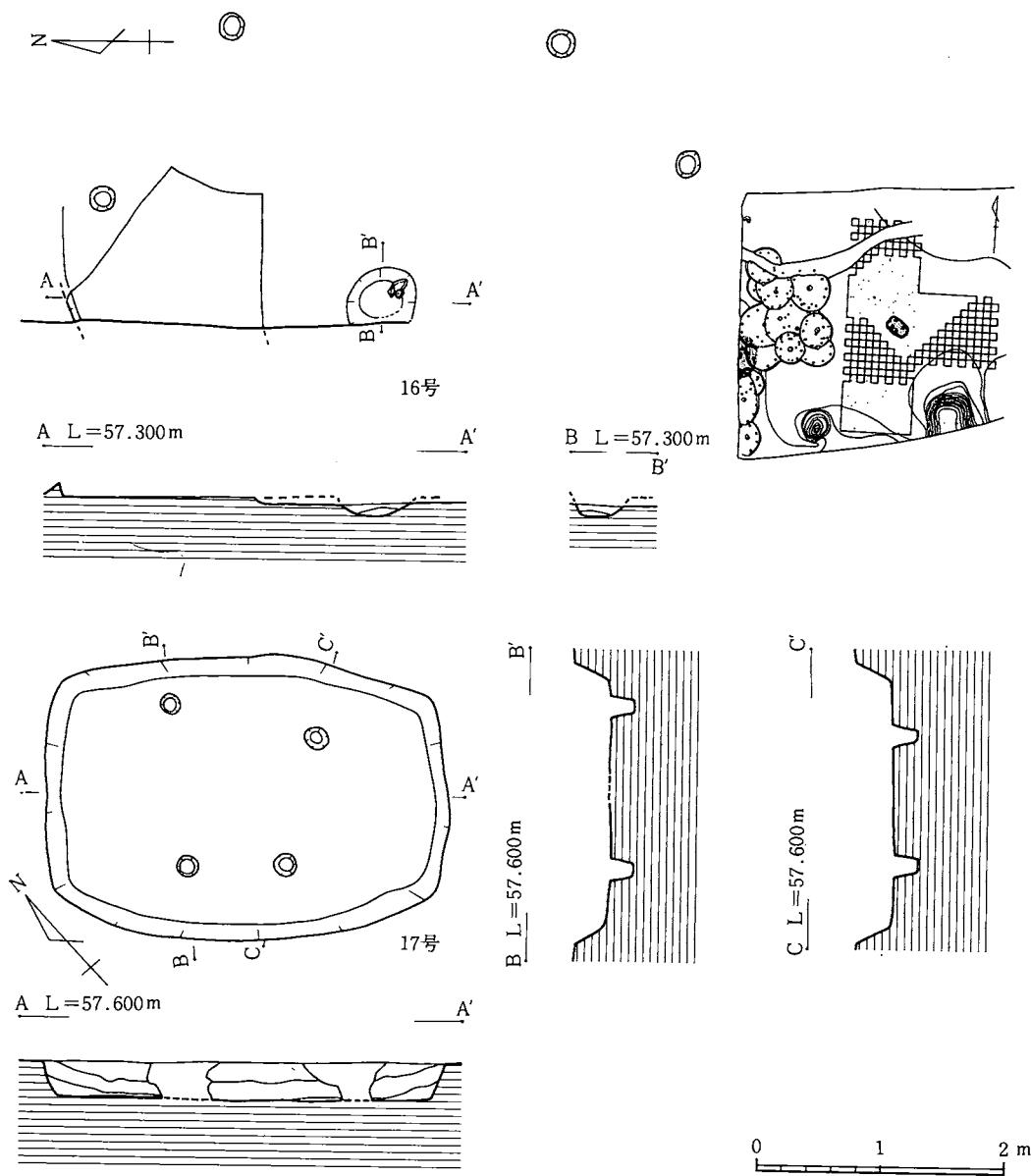


第34図 15号竪穴式住居跡実測図

床面積は、 26.2m^2 である。柱穴は10個と推定され、その大きさは径20cm前後で深さ22~29cmである。炉穴は住居跡のほぼ中央にあり、底面は明確に焼けた状況を示してはいないが、その埋土中に多量の焼土や炭化物が含まれている。覆土は、3層に分層される。1層は締りのよい暗褐色土、2層はやや締りがなくなる褐色土、3層は締まった暗褐色土である。

16号住居跡（第36図上）

16号住居跡は、1号・2号・3号・8号住居跡に切られた状態で検出され、その西半分は調



第35図 16号・17号竪穴式住居跡実測図

査区外にあるために東半分のみの調査であった。平面形態は、直径5.5m（推定値）の円形を呈すると考えられる。

床面は北側に僅かに残存するのみで、その全体の状況を知ることはできないが、硬化面の発達は悪い。平面形態は円形を呈し、直径5.4m（推定値）で床面積は22.9m²である。柱穴は8個と推定され、その大きさは径23cm前後で深さ20cmほどである。炉穴は住居跡のほぼ中心にあり、埋土中に焼土や炭化物が多量に含まれる。しかし、炉の底面には明確に焼けた形跡を留めてはいない。

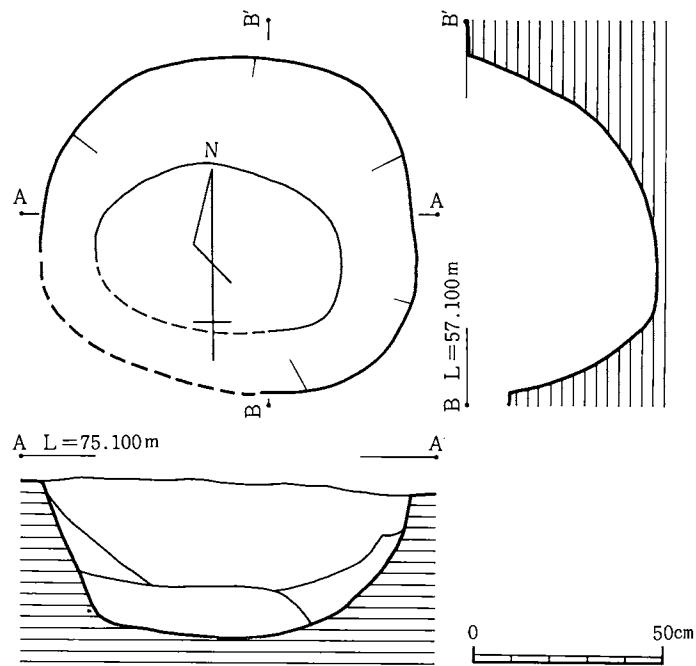
17号住居跡（第36図下）

17号住居跡は、6号住居跡から東側約7m置いた位置で検出された。その平面形態は、隅丸でやや胴張りの長方形を呈している。長辺3.3mで短辺2.3m、確認面から床面までの深さは、30cmを測る。

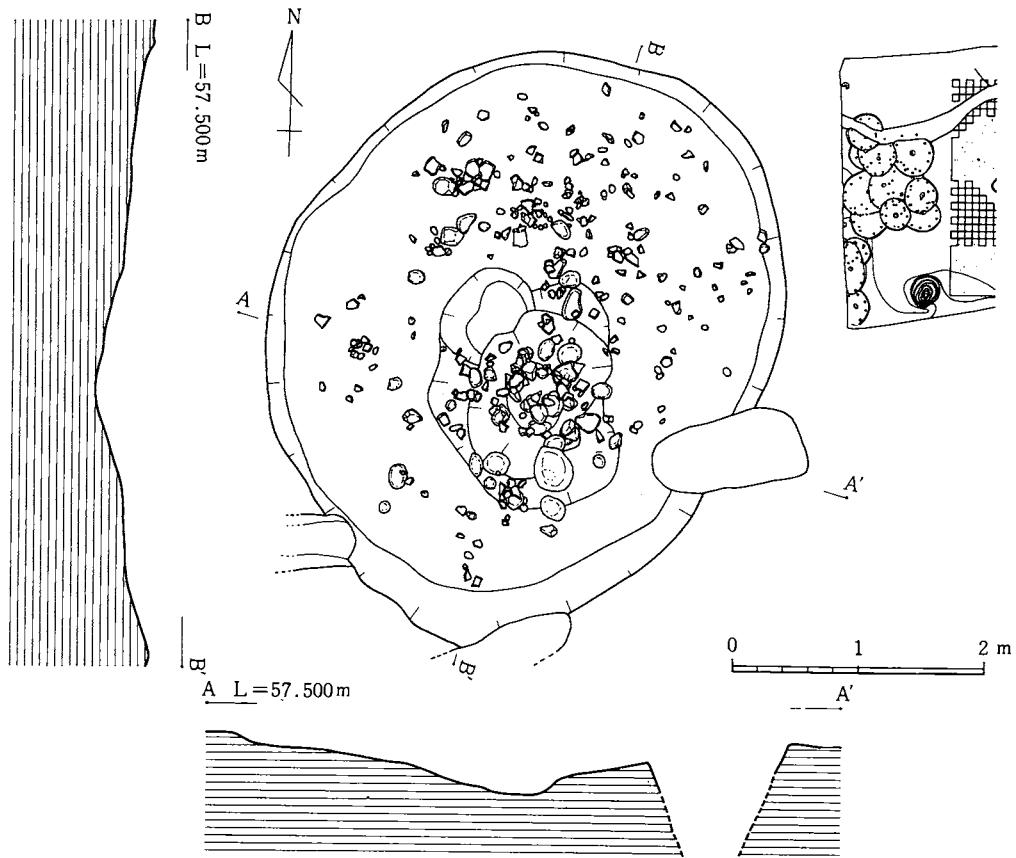
床面の平面形態は隅丸・胴張りの長方形で、長辺3.0m・短辺2.0mを測り、床面積は5.3m²である。硬化面の発達は不良である。柱穴は4個あり、その大きさは径20cm前後で深さ20cmである。炉は無い。覆土は、3層に分層される。1層はアカホヤ火山灰を含んで、あまり締りがない褐色土、2層は締りが強く、色調もやや暗くなる褐色土、3層はさらに締りが強くなって焼土や炭化物の量も増える暗褐色土である。

2. 土坑（第36図）

縄文時代後期に属する土坑が1基、5号住居跡の北側約4m離れた位置で検出された（第6図）。土坑の平面形態は直径が0.8～1mの不整の円形で、その底面では長軸0.65m・短軸0.45mを測る楕円形の平面形を呈している。確認面から底面までの深さは42cmであった。覆土は、大きく3層に分層できる。1層はアカホヤ火山灰を含んで、締りのある褐色土、2層は1層よりも色調が暗くなった暗褐色土、3層はさらに締りが強くなる暗褐色土である。



第36図 土坑実測図



第37図 ごみ捨て場内遺物出土状況図

3. ごみ捨て場と出土土器（第37～41図）

北久根山式土器を中心とした土器片や石器が多く纏まって出土した個所が、11号住居跡の南側約6mを置いた所にある（第37図）。ここは、深さ50cmで直径4.0～4.7mの円形を呈する自然の落ち込みをごみ捨て場として利用したものと考えられる。恐らく分解されない土器・石器のみが残って、食料にかかる残飯・残菜類などの有機質は分解してしまったのであろう。

出土土器としては、型式的特徴を示す土器片41点（第38図194～第41図234）を図示している。これら土器の形態組成は、深鉢形土器（194～222）、鉢形土器（223～227）、浅鉢形土器（228）である。唯、これらの他にも図示していないが、194点に及ぶ無文部片が出土している。また石器では楔形石器1点（第55図22）、磨石・敲石30点（第61図62・63・第62図64～69・第63図70～72・第64図73～78・第65図79～84・86～92）、石皿・台石2点（第69図106・第70図107）、石核1点（第73図115）、剝片2点（第76図130・131）が出土しているが、詳細については石器の項に譲ることにしたい。

深鉢形土器には、有文のもの（194～210）と無文のもの（221・222）がある。

有文の土器は、その口縁部の作出法と文様の特徴によって、大きく二つに分類できる。一つは、194のように口縁部分に粘土帯を貼り付けて口縁部と頸部との境に段を作り、その口縁部に沈線文、さらに平坦な面をもつ口唇部に連続の刺突文を施文する土器で、口縁部が僅かに外反して胴部上部が僅かに張るという器形をとる。

もう一つは、上記土器に比べて口縁部の外反の度合が大きく、また口縁部の文様帶の作出が明確に行われない土器である。施文される文様は斜行单沈線文（198～205）や綾杉状文（206～208）などの沈線文、貝殻擬似繩文+綾杉状文（209）、貝殻擬似繩文（210）がある。またこの種の土器には、橋状把手（195・196・198）やM字状の貼り付け（197～199）がつけられる部位がある。なお、M字状の貼り付け上には、沈線文が施文されている。土器の底部は、平底の他に229～231のような脚台がつく場合もある。しかし、土器の器形と底部の状態との対応関係については資料が少なく判らない。

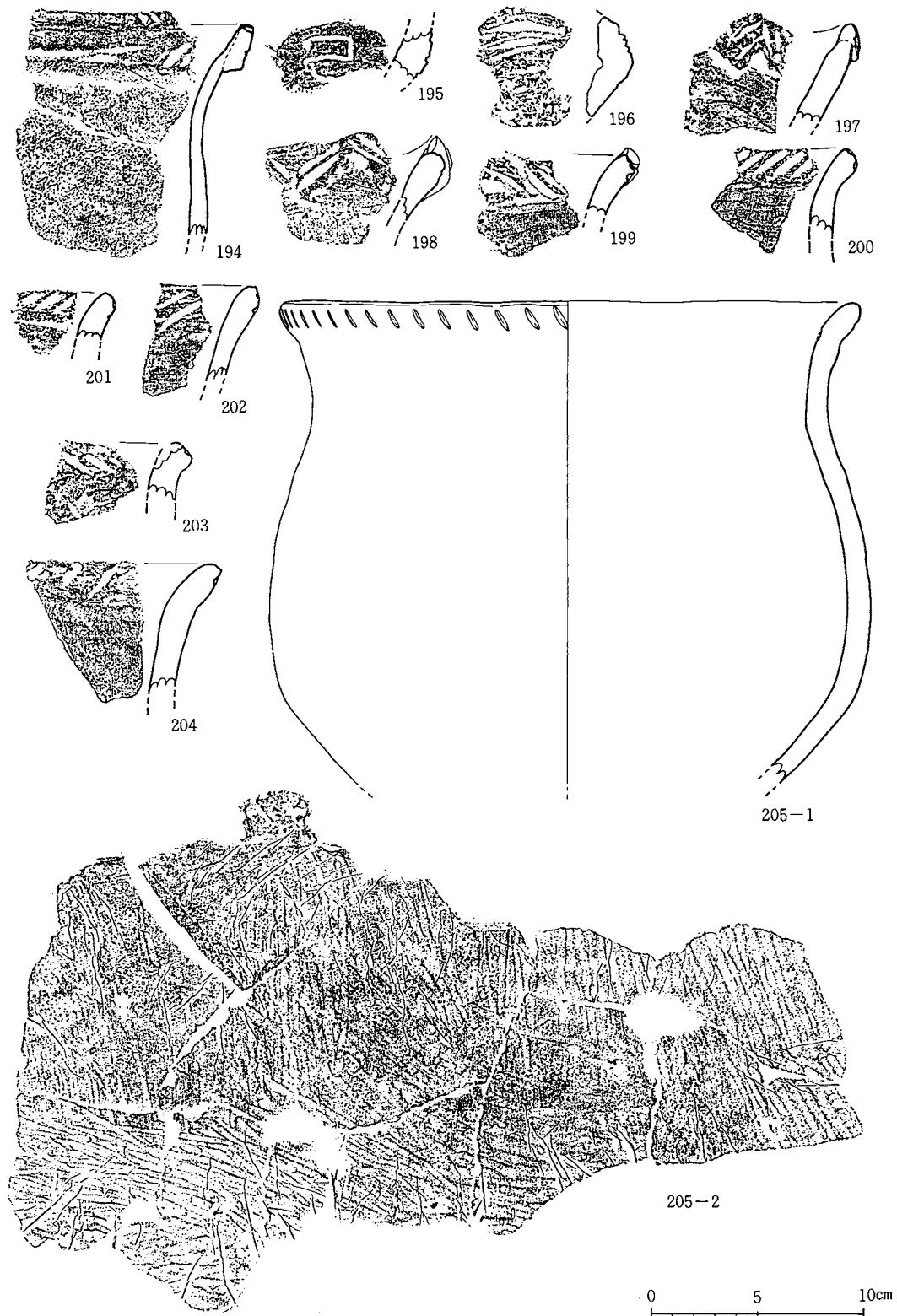
無文土器の器形は、口縁部が僅かに外反し、ほとんど胴部が張り出さない形状を呈する。器面は、比較的丁寧に撫でられているが、221のように口縁部に器面整形のための貝殻条痕が残されている場合もある。

ここから出土した鉢形土器は、すべて同じ形態として分類されるもので、口縁部（223）が外反して胴部（224～227）が屈曲する器形を呈し、口縁部と胴部に文様帶がある。ただ、胴部の屈曲の仕方では、226のように強く折れ曲がるものと、223のように弧を描くように曲がるもの2種がある。文様には、貝殻擬似繩文（226）とR Lの繩文（223・224・227）が施文され、胴部では223のように磨消繩文手法が用いられる場合もある。胴部文様の展開では、223のように垂下する鉤手状の文様と下で受ける二重の括弧状の文様を中心におき、その左右両側に直沈線と先端を鉤手状に折り曲げた直沈線との組合せた文様を配するものや、226のように頸部と胴部との境付近と胴部下半部上位に沈線文を引き、その平行する2本の沈線区画内で、縦の平行沈線を中心としてその左右両側に斜行する平行沈線を引いたものがある。

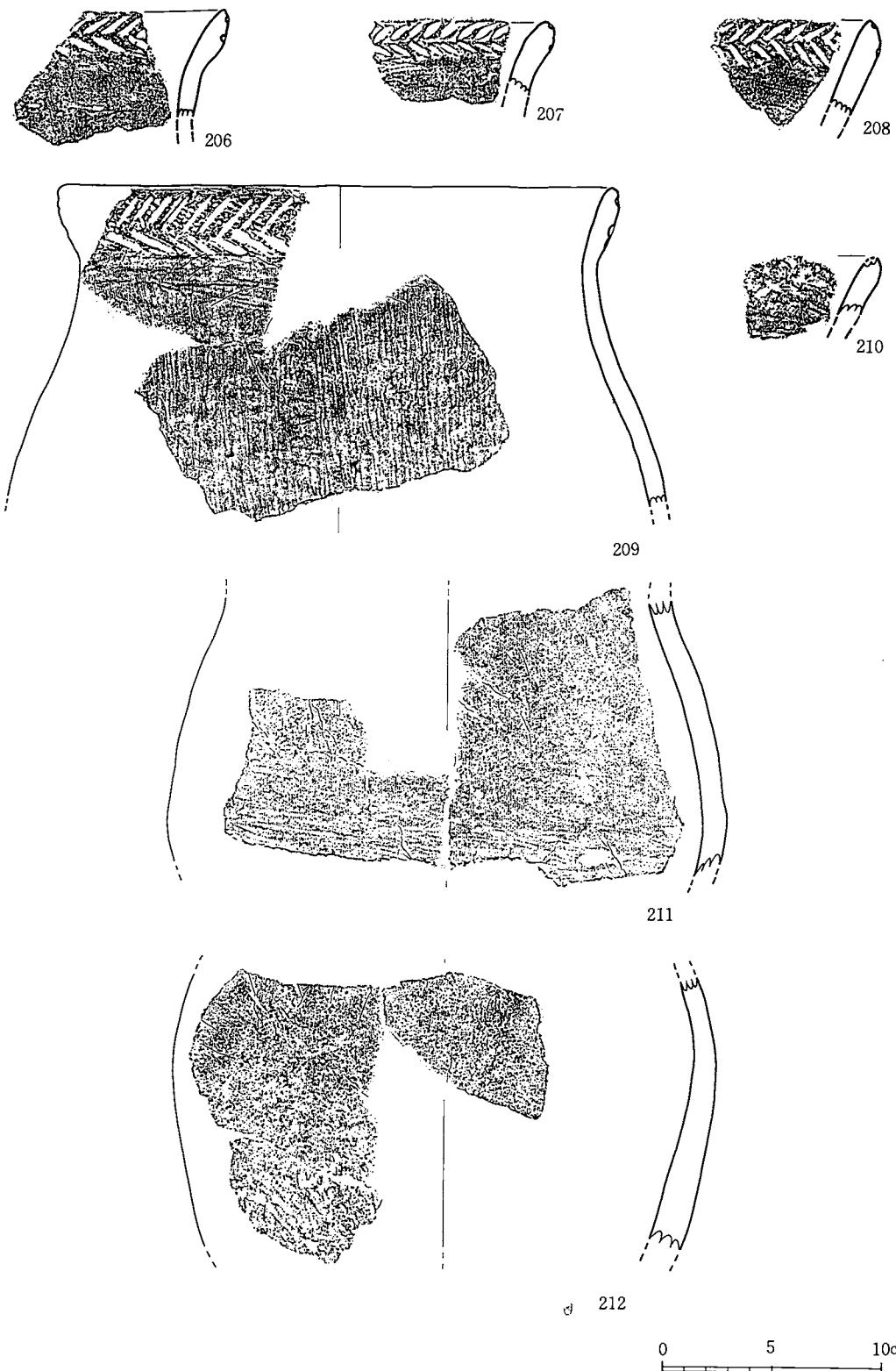
228は、口縁部と胴部との境が折れ曲がる器形の浅鉢形土器で、その口縁部に文様帶がある。文様は、R Lの繩文と沈線文である。

229～234は、脚台を集めている。229～231は無文で、その残り具合から深鉢形土器のものと考えられるが、その残存状態が比較的良好で脚台製作法についてその様子を良く示しているものがある。230がそれで、胴部と脚台とをつなぎ合せた土器本体と底部となる粘土板との接合状態が良く判る資料である。232や233は、有文の脚台である。232は、貝殻擬似繩文を地文として弧状の沈線文と沈線末端の刺突文が施されている。233は、貝殻擬似繩文を地文に沈線末端の刺突文を頂点において両側に弧線が引かれている。なお、この種の脚台と土器の形態との対応関係については不明である。

第2節 縄文時代後期の遺構と遺物

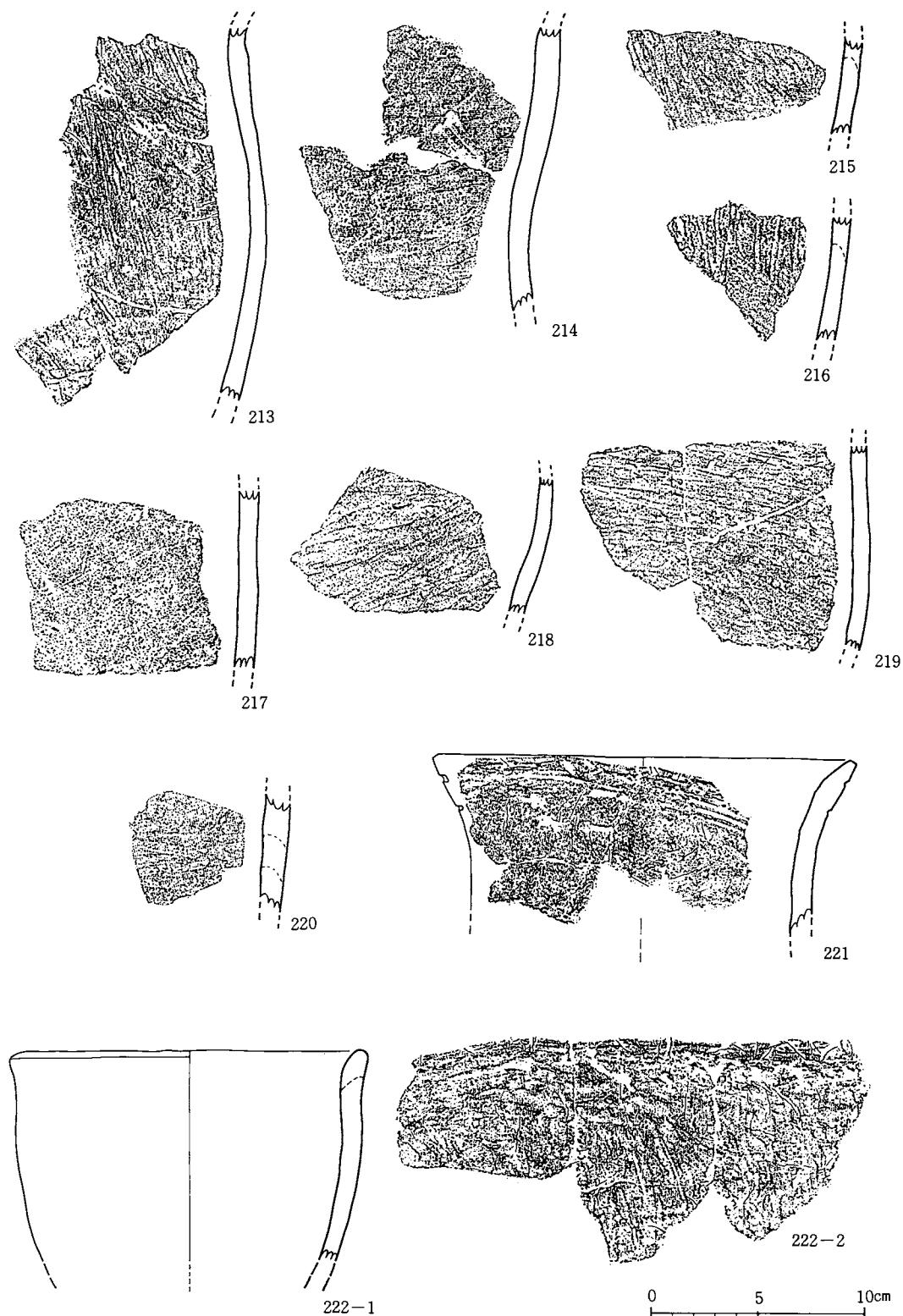


第38図 縄文式土器実測図

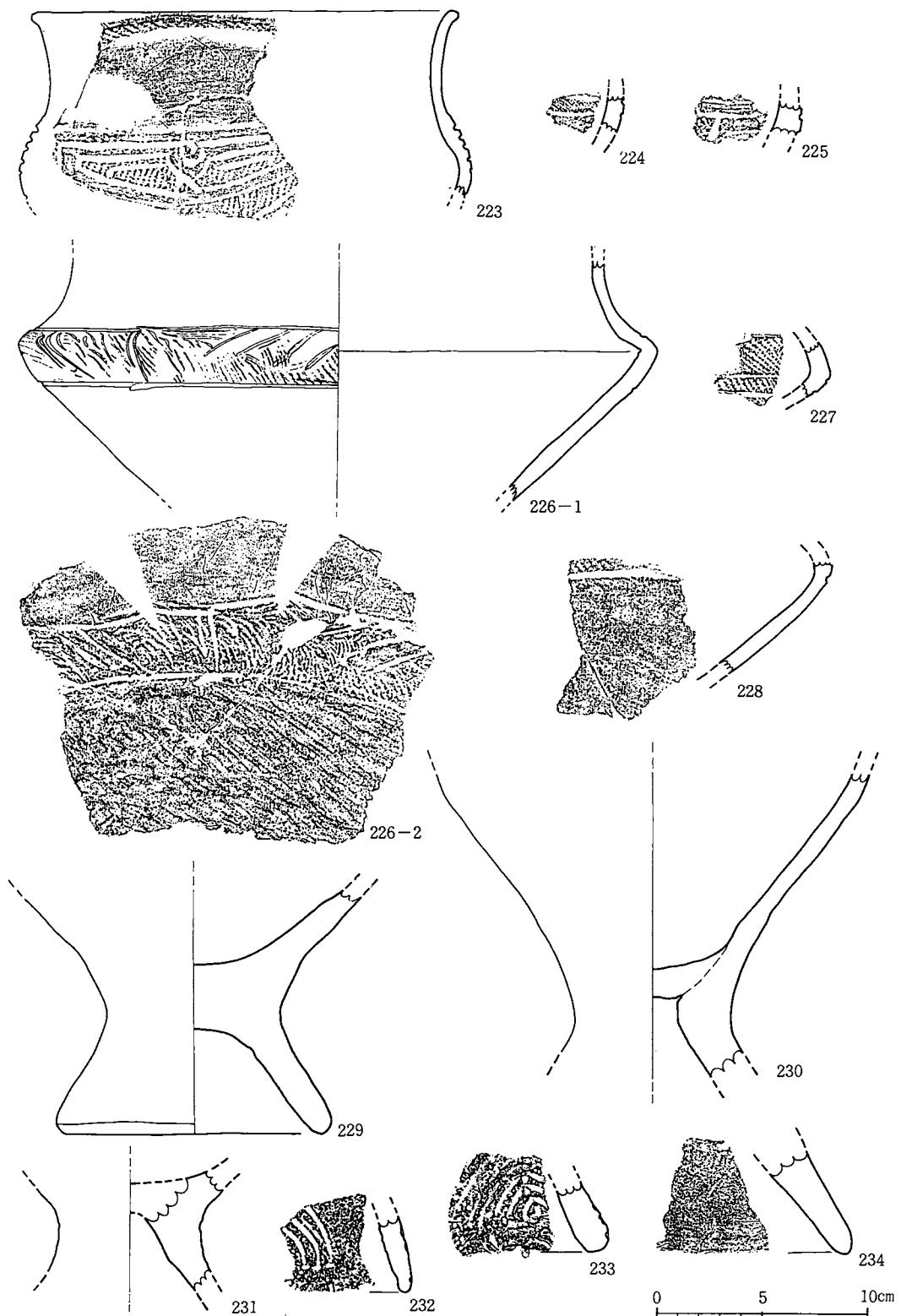


第39図 繩文式土器実測図

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



第40図 繩文式土器実測図

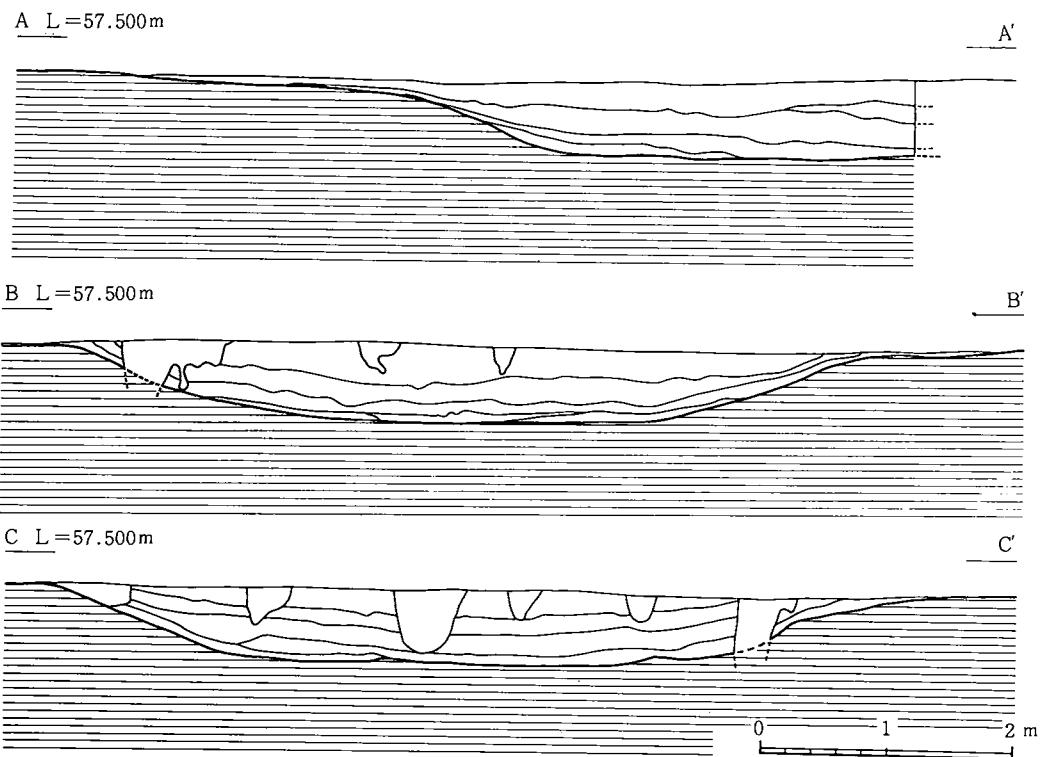


第41図 繩文式土器実測図

4. 埋没谷と出土土器（第42・43図）

ごみ捨て場から15m東へ行った部分で谷部の存在を確認できた（第6図）。これは表土層を除去した後に確認されたもので、現況でその存在を知ることのできない埋没谷である。谷部は、当然のように遺構群がのる微高地の南側縁辺に形成されており、知り得る範囲でも幅7m以上で深さ60cmの規模であった。なお、ごみ捨て場として利用されていた自然の落ち込みは、こうした小さな谷の形成途上のものの可能性が高い。

次に、谷部の埋没の状況を土層堆積の状況を観察することによって知ることにしよう。谷部の埋積土は、6層に分層される（第42図）。1層はアカホヤ火山灰を含んだ、締りのない褐色土（基本土層の第IV層に類似）、2層は締りがでてきて、やや暗い色調を示す褐色土（第IV層類似）、3層はアカホヤ火山灰を含んだ暗褐色土（第IV層類似）、4層はさらに暗くなり、砂質化する暗褐色土、5層はさらに色調が暗い暗褐色土、6層は5層よりも締りのある暗褐色土である。こうした埋土の状況は、繩文時代後期関係の遺構とほとんど同じ状態にあり、さらに弥生時代関係の遺構内覆土とは大きく異なるものである。しかも弥生時代の遺構内に堆積している土は、一切谷部の埋積土にはなっておらず、こうしたことから、この小谷の埋没時期がある程度類推される。恐らく繩文時代後期からそれほど離れない時期に埋没が完了し、弥生時代にあ



第42図 谷部土層断面図

ってはすでに谷部は存在していなかったのであろう。

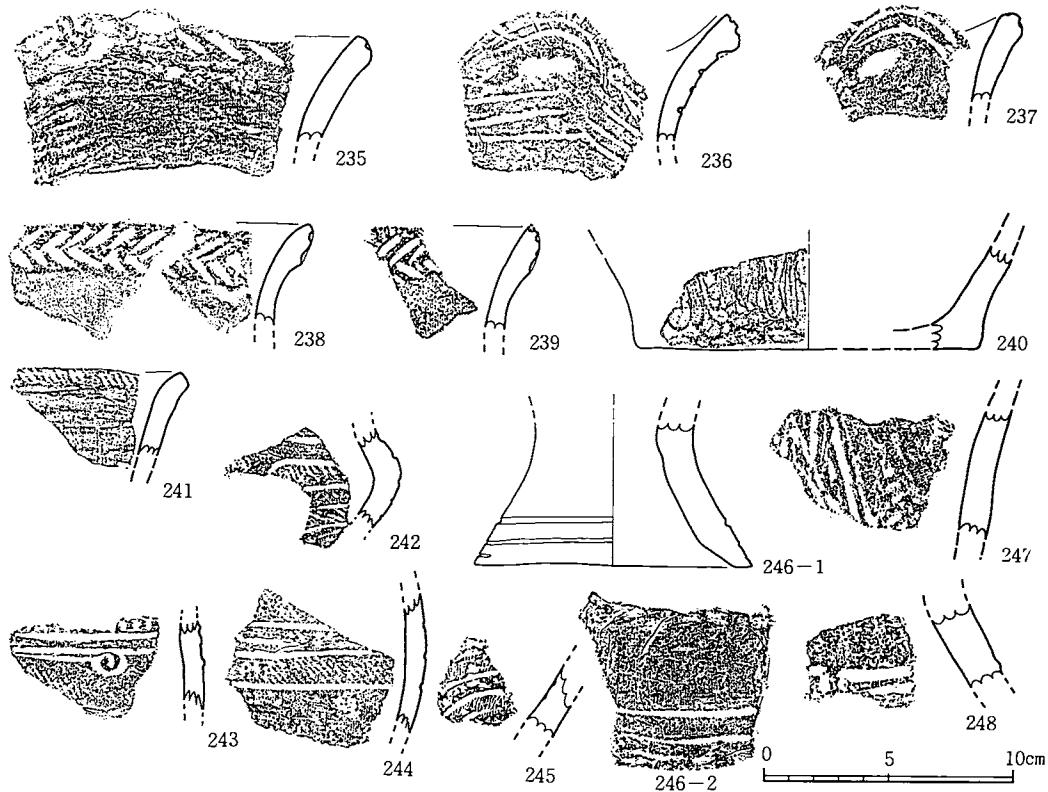
この谷部からも、僅かではあるが遺物が出土している。土器では図示した14点（235～248）の他に深鉢形土器などの無文部片59点が出土し、石器では磨石・敲石6点（第66図93～98）、石皿・台石2点（第70図108・第72図112）が出土している。

235～239は、深鉢形土器の口縁部である。口縁部文様には、斜行单沈線文（235）と綾杉状の沈線文（238・239）がある。さらに235にはM字状貼り付け、236と237には弧状に盛り上がった粘土紐の貼り付けがみられる。240は、深鉢形土器の底部である。

241～244は、口縁部が外反して胴部が屈曲する器形の鉢形土器である。241は口縁部に貝殻擬似縄文が、242～244は胴部で、貝殻擬似縄文（242）やRLの縄文（243・244）が地文の磨消縄文である。

245は、皿形ないし高壺形土器で、内面に沈線文と貝殻擬似縄文が施文されている。

246と248は、有文の脚台である。246は横走する沈線文で、248は沈線文と末端の刺突文である。



第43図 縄文式土器実測図

5. 遺構外の出土土器（第44～49図）

竪穴式住居跡・ごみ捨て場・谷部などから出土した遺物の他にも、包含層や時期の異なる遺構内から多量の出土遺物があった。それらには多量の土器の他、石鏃1点（第50図3）、削器3点（第52図12～14）、打製石斧4点（第53図17・18・第54図20・第55図21）、使用痕ある剥片1点（第56図32）、磨石・敲石70点、石皿・台石7点（第70図109・第71図110）、石核1点（第74図117）、剥片1点（第74図118）がある。ここではこれらを一括して扱い、石器については次項に譲り、土器を中心に説明を加えることにしたい。なお、出土土器の中には三万田式土器（383）や晩期の土器（384～390）もあるが、これらについては資料数も少なく、それに伴う遺構も無い等、この遺跡の内容上、この調査地点の主体を占める時期ではないという理由から記述を割愛し、北久根山式土器を中心にして述べていくこととした。

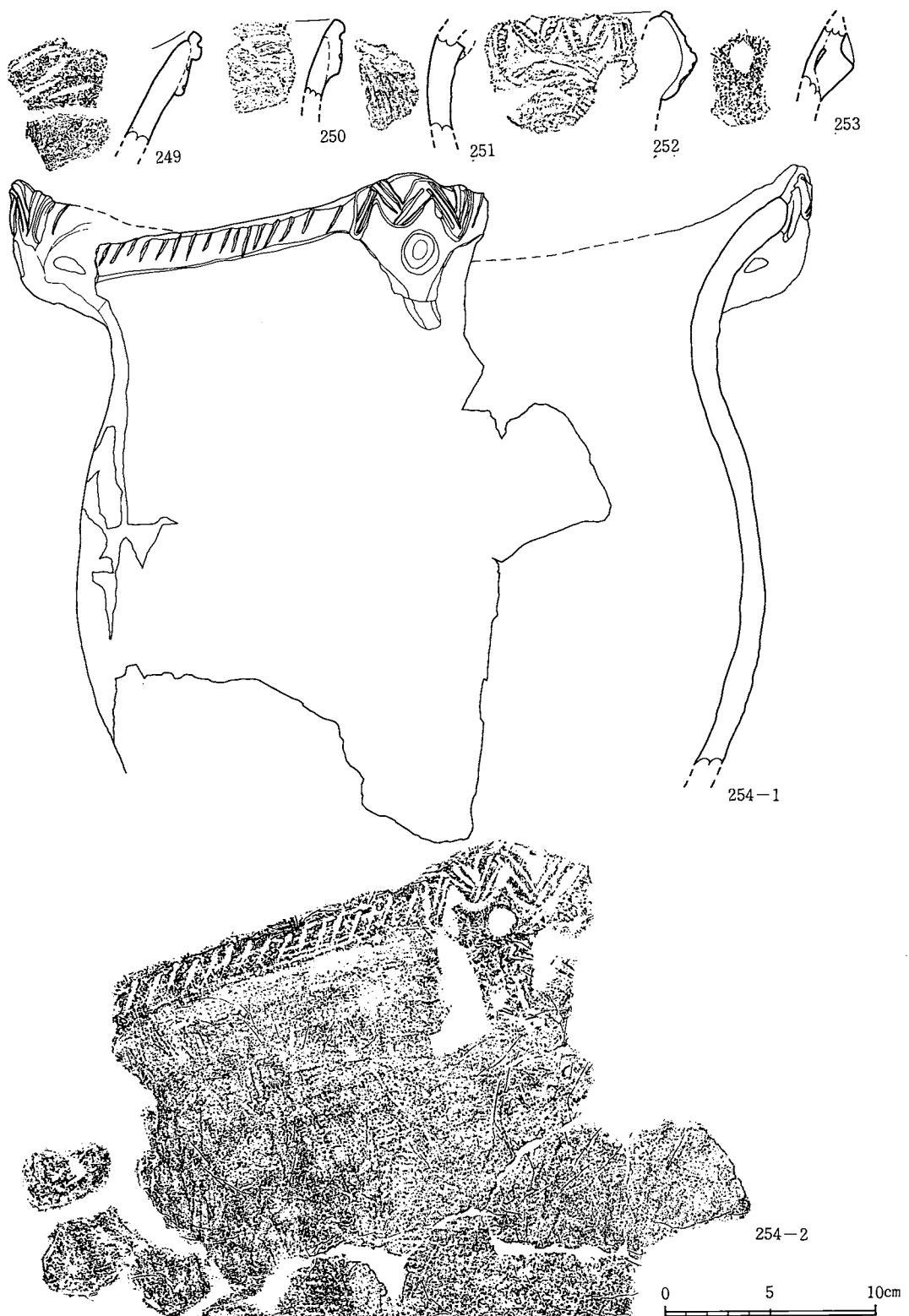
土器の形態には深鉢形土器（第44図249～第46図318）、鉢形土器（第47図335～第48図367）、浅鉢形土器（第48図368～372）、皿形ないし高壺形土器（第48図373・374）がある。また、319～334は平底、375～382は脚台部である。

深鉢形土器には、有文（249～302）と無文（303～314）がある。

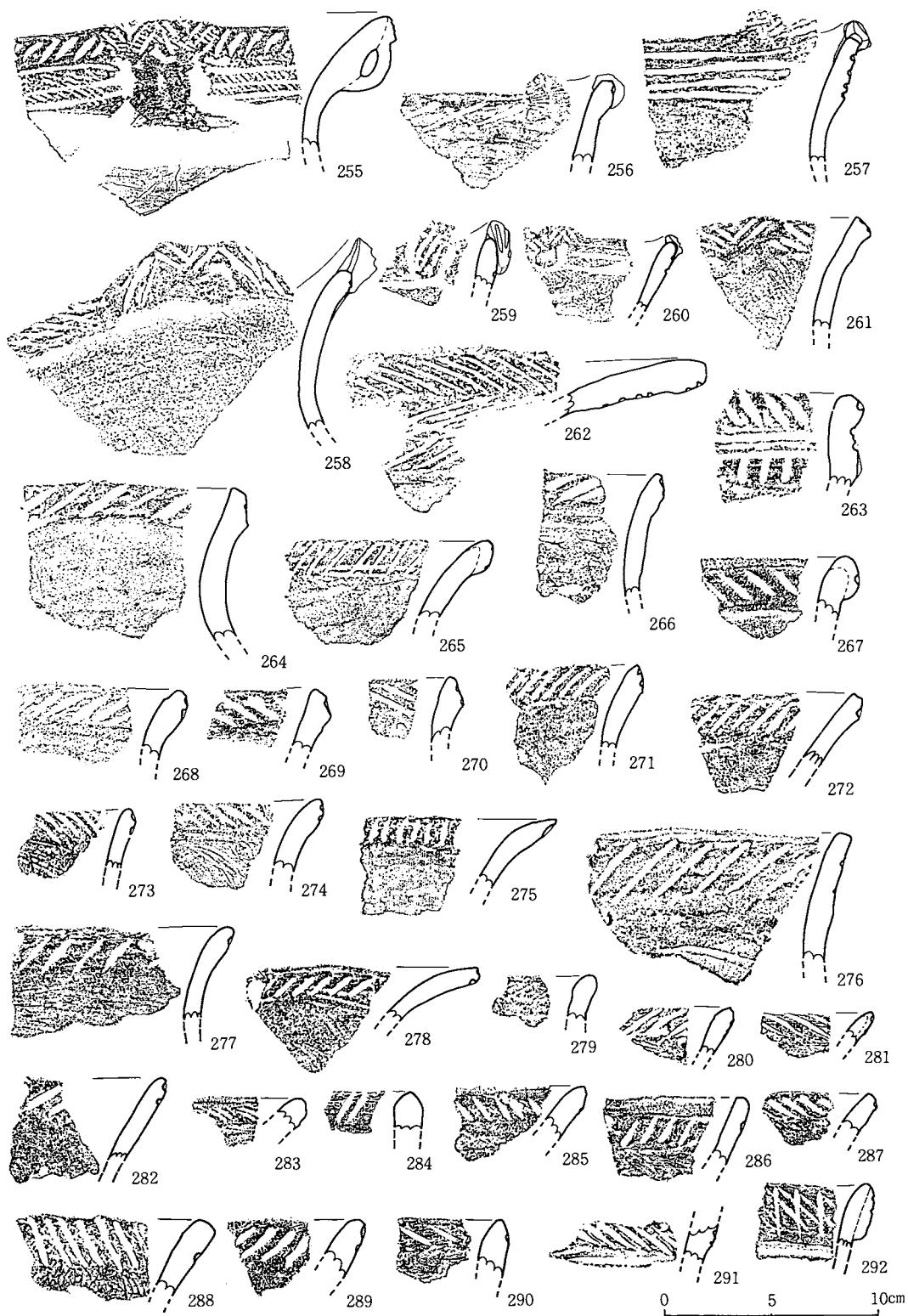
有文の土器は、口縁部が外反し、胴部が張るという器形を呈し、口縁部文様帶に沈線文や貝殻擬似縄文が施文されるという型式的特徴をもっている。これらの土器は、基本的にはすべて同じ分類中に入るものであるが、細部を観ればさらに分類が可能である。それは、口縁部における文様帶の作出法に着目した3分類である。すなわち、口縁部分に粘土帯を貼り付けるなどして文様帶部が明確に作り出されるもの（249～251・292）、比較的明瞭に作り出されるもの（263・267）、そして作り出されないものである。これについては、ごみ捨て場から出土した194の土器との関係で興味深い。文様では前記したように沈線文や貝殻擬似縄文が施文されるが、その施文方法においていくつかの種類がある。斜行単沈線と縦位単沈線の交叉文（292）、斜行単沈線文（249・250・254・256・258・261・264～291）、綾杉状文（262・293～295・298～300）、逆「ハ」の字状文（296・297）、横走沈線文（257・259・260・301）、斜行単沈線文+横走沈線文（263）、斜行単沈線文+貝殻擬似縄文地の横走沈線文（255）、貝殻擬似縄文地の斜行単沈線文である。また、この種の土器には橋状把手（252～255）やM字状などの粘土紐貼り付け（249・252・254～261）が付される部位があり、粘土紐貼り付け上には貝殻擬似縄文が施文される例（252・255～257）もある。

無文の深鉢形土器はいずれも小破片のため、その器形の特徴を捉えることはできないが、口縁の状態ではやや内湾するもの（303）、やや外反するもの（304・306・311）、直口するものがあるようだ。

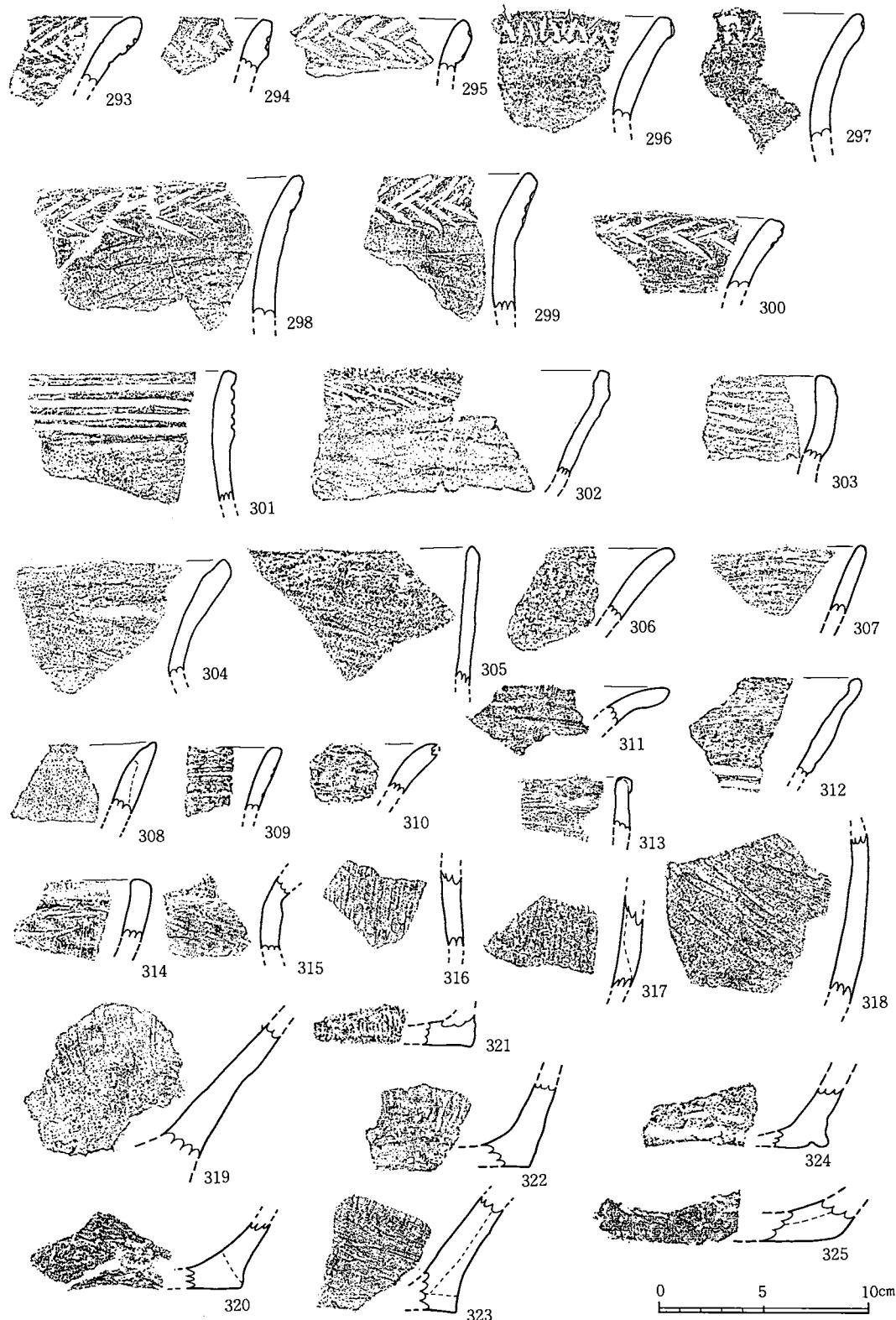
鉢形土器は、口唇部にも文様が施されるもの（335～337）と口縁部が外反し、胴部が屈曲す



第44図 縄文式土器実測図

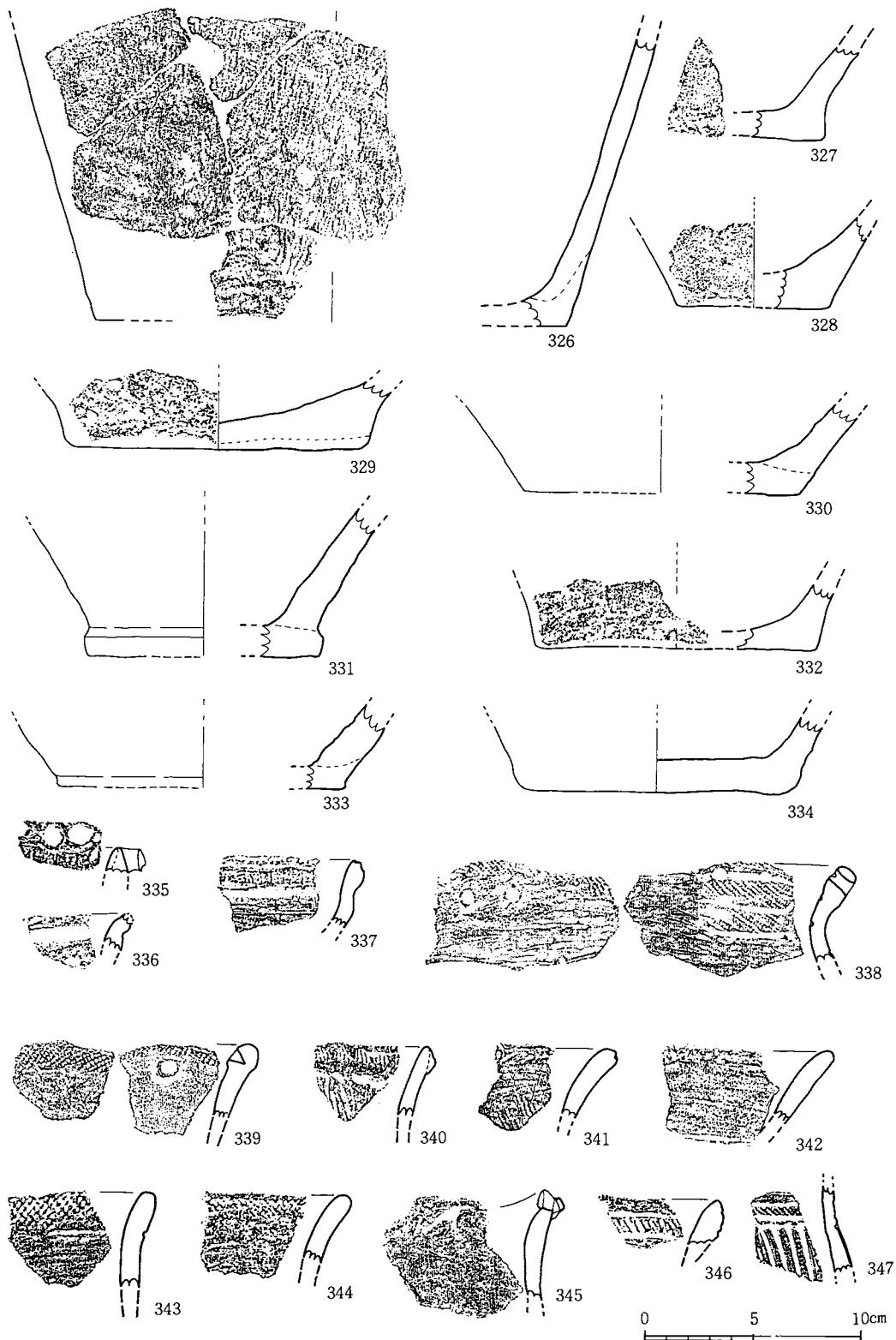


第45図 縄文式土器実測図

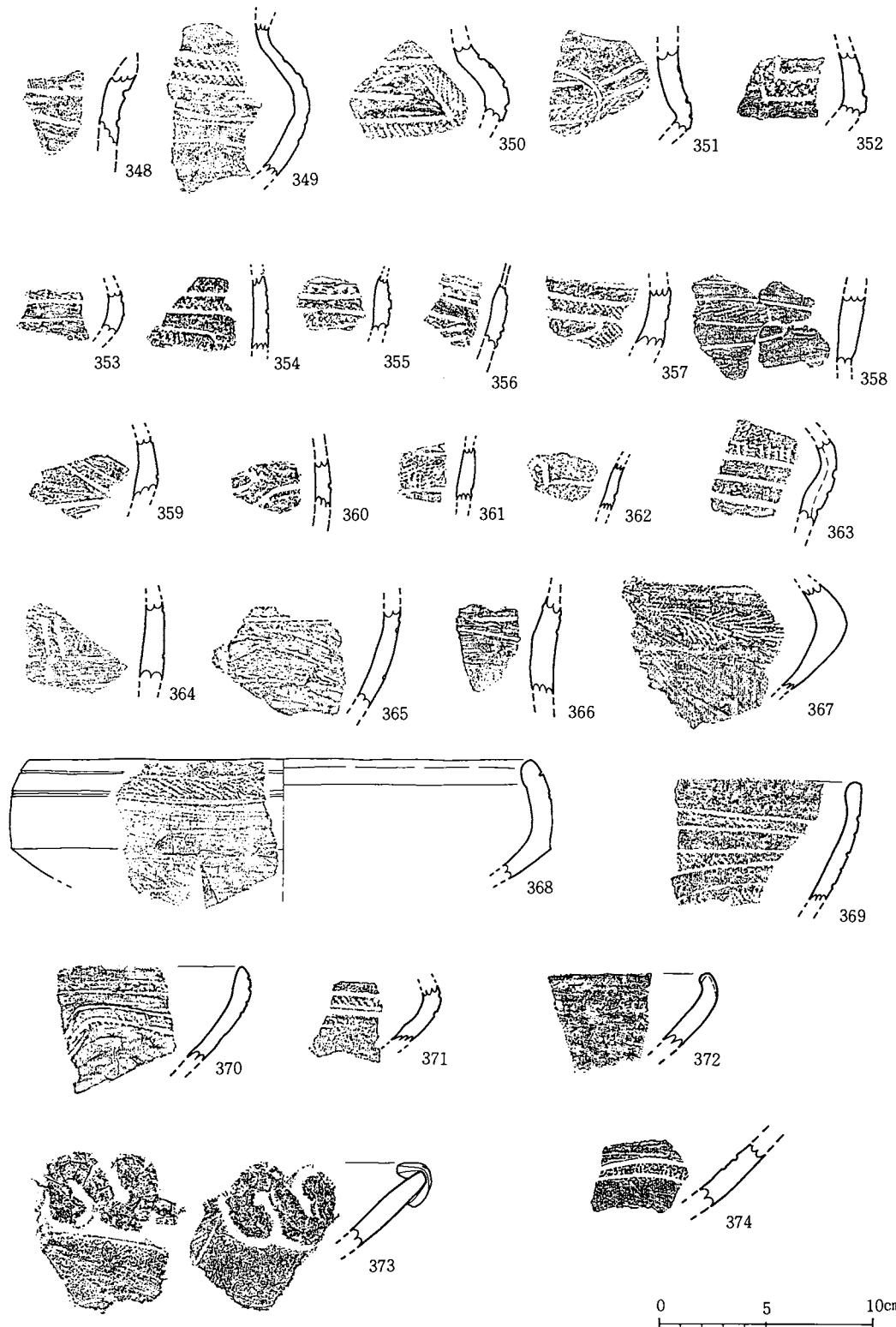


第46図 縄文式土器実測図

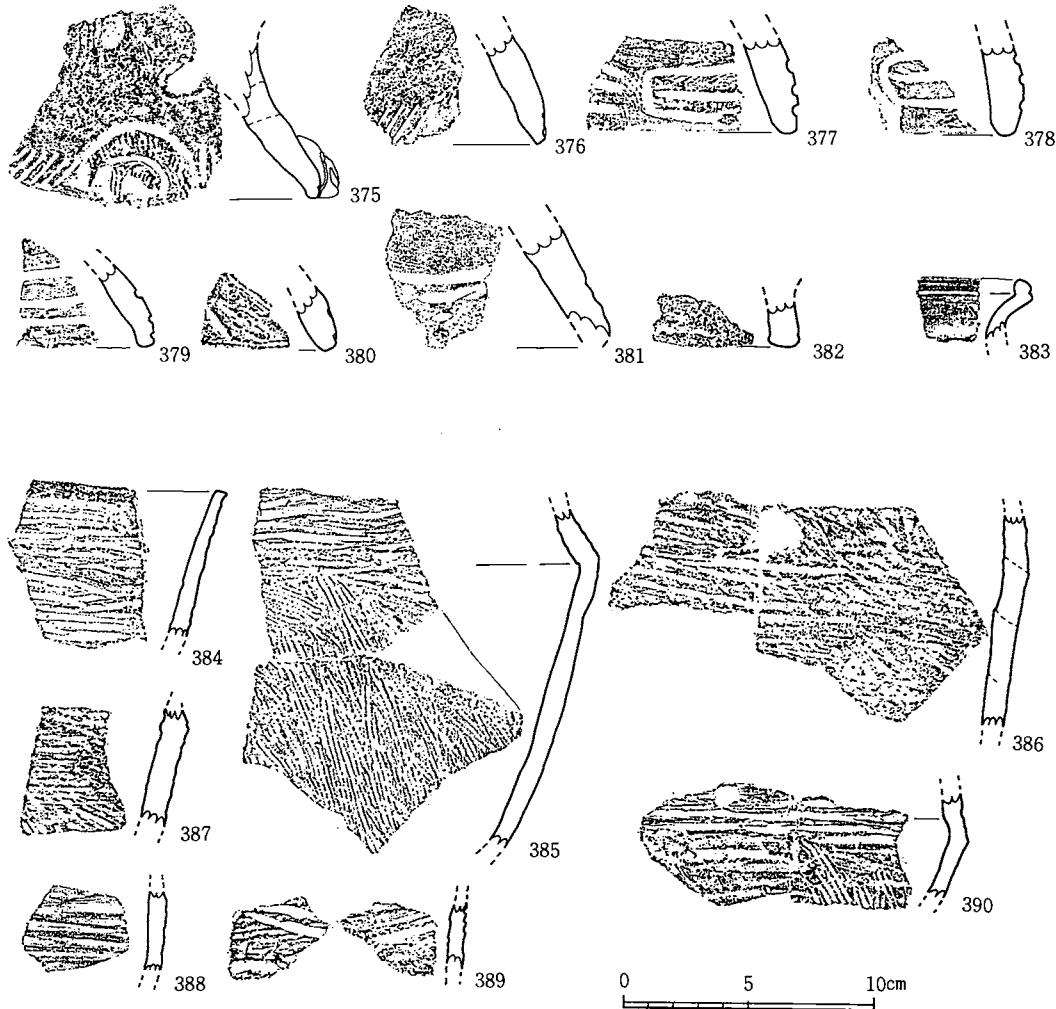
第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



第47図 繩文式土器実測図



第48図 縄文式土器実測図



第49図 繩文式土器実測図

る器形をし、口縁部と胴部（338・339のように内面にも文様がある場合もあるが）に文様帯があるもの（338～367）に細分される。

前者については資料不足で器形や文様帯などの状態について具体的なことは判らないが、文様は貝殻擬似縄文である。後者の土器の口縁部には貝殻擬似縄文（340～342）、RLの縄文（338・343・344）、LRの縄文（339）、沈線文（348）があり、338や339の土器の内面にはそれぞれ口縁部と同じ原体の縄文が施文されている。また、345のようにS字状の粘土紐貼り付けが口縁部にみられる土器もある。胴部文様は、磨消縄文が文様の中心である。文様の地文には、貝殻擬似縄文（352～354・356・359・362・364～367）とRLの縄文（348・350・351・355・358・361）がある。

浅鉢形土器には有文のもの（368～371）と無文のもの（372）があり、器形では、口縁部と胴

部との境が明瞭なもの（368）と明瞭でないもの（369～372）とがある。文様の地文には、貝殻擬似縄文（368・370）とR Lの縄文（369・371）がある。

373と374は、皿形ないし高壺形土器である。373には口縁部にS字状の粘土紐貼り付けがあり、内面に貝殻擬似縄文と沈線による文様が施され、374では土器の内面に貝殻擬似縄文と沈線文がみられる。

375～382は脚台で、375～381は有文、382は無文である。文様は、貝殻擬似縄文と沈線文によるもの（375・377・378）と沈線文のみのもの（376・379～381）があるが、中でも375は特殊で、円形の透と蛇に似た渦巻き状の粘土紐貼り付けがみられる。なお、これらの脚台と土器の器形との対応関係は判らない。

6. 石器（第50図～第76図）

石器では石鎌3点（第50図1～3）、石錐1点（第50図4）、石匙2点（第50図5・6）、削器8点（第51図7～第52図14）、磨製石斧1点（第53図15）、打製石斧6点（第53図16～第55図21）、楔形石器1点（第55図22）、石鎌2点（第55図23・24）、二次加工ある不定形石器3点（第56図25～27）、使用痕ある剥片5点（第56図28～32）、磨石・敲石136点（第57図33～第66図98）、石皿・台石19点（第67図99～第72図112）、石核4点（第73図113～115・第74図117）、剥片14点（第74図118～第76図131）が出土した（第4表）。そこでこれより、器種ごとに分けて記述していきたい。

第4表 縄文時代後期石器組成表（遺構外出土物を除く）

器種 \ 遺構等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	13	ごみ捨て場	谷	計 (%)
石鎌	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	2 (2)
石匙	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2 (2)
石錐	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1 (1)
削器	1	1	—	—	—	—	1	1	—	—	1	—	—	—	5 (5)
磨製石斧	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1 (1)
打製石斧	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	2 (2)
楔形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1 (1)
二次加工ある 不定形石器	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	3 (3)
使用痕 ある剥片	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	4 (4)
磨石・敲石	2	—	—	—	1	1	2	15	3	1	2	3	30	6	66 (67)
石皿・台石	—	—	1	1	—	1	2	2	—	1	—	—	2	2	12 (12)
石器計	8	1	1	1	1	2	6	22	3	3	7	3	33	8	99 (100)
石核	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	3
剥片	2	—	—	—	—	3	—	1	3	—	1	1	2	—	13

石鎚（第50図1～3）

石鎚は、8号住居跡（1）と10号住居跡（2）から各々出土し、残り1点（3）は出土場所不明である。いずれも形状は二等辺三角形であるが、基部の作り出しで微妙に異なっている。1はやや開きぎみのU字状の抉入加工で、2は浅い抉入加工、そして3は深く入ったV字状の抉入加工である。素材となる剥片の形状は1と2では判らないが、3では打面部が比較的狭くて先端部に向かって幅が広がった台形状を呈し、剥片の打面を石鎚の先端に置いていることが判る。石質は第5表に示しているのですべてについて触れるとはしないが、3は漆黒で良質の腰岳産の黒曜石である。

石錐（第50図4）

石錐は1点、8号住居跡から出土している。その出土状態は、床面密着である。素材となる剥片の形状は判らないが、恐らく横長の剥片であろう。比較的厚手で、その断面形は菱形である。先端部は、使用によって丸く磨耗している。

石匙（第50図5・6）

石匙は、2点出土している。いずれも8号住居跡の覆土中から出土している。5は、表裏面ともに入念な調整加工がみられるものであり、刃部は僅かに内湾する。6は、粗い調整加工が基部周辺と刃部のみにみられる資料である。素材となる剥片は横長剥片で、その主要剥離面を石器の表面にし、その打面部を基部側において石器を製作している。

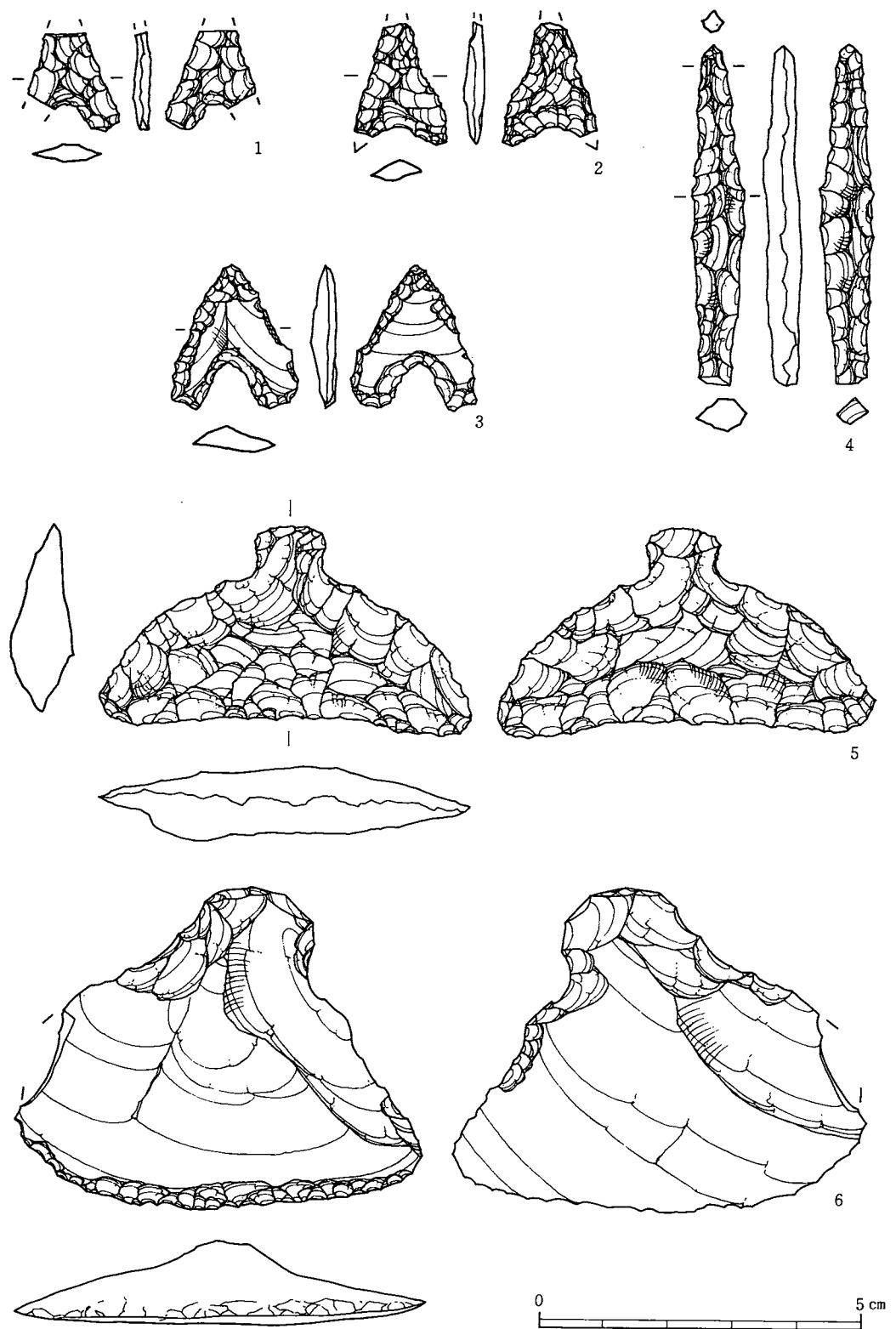
削器（第51図7～第52図14）

削器は、1号住居跡（7）・2号住居跡（9）・7号住居跡（10）・8号住居跡（8）・12号住居跡（11）から1点ずつと遺構外から3点（12～14）の計8点が出土した。遺構内からのものは、いずれも覆土中からの出土である。刃部には、片刃（8～12）と両刃（7・13・14）があり、その外形では直刃（10～13）と僅かに弧を描くもの（7・9・14）、そして僅かに内湾するもの（8）がある。素材となる剥片は、縦長剥片（9・10）と横長剥片（8・12～14）、それに寸詰りの幅広剥片（7・11）である。

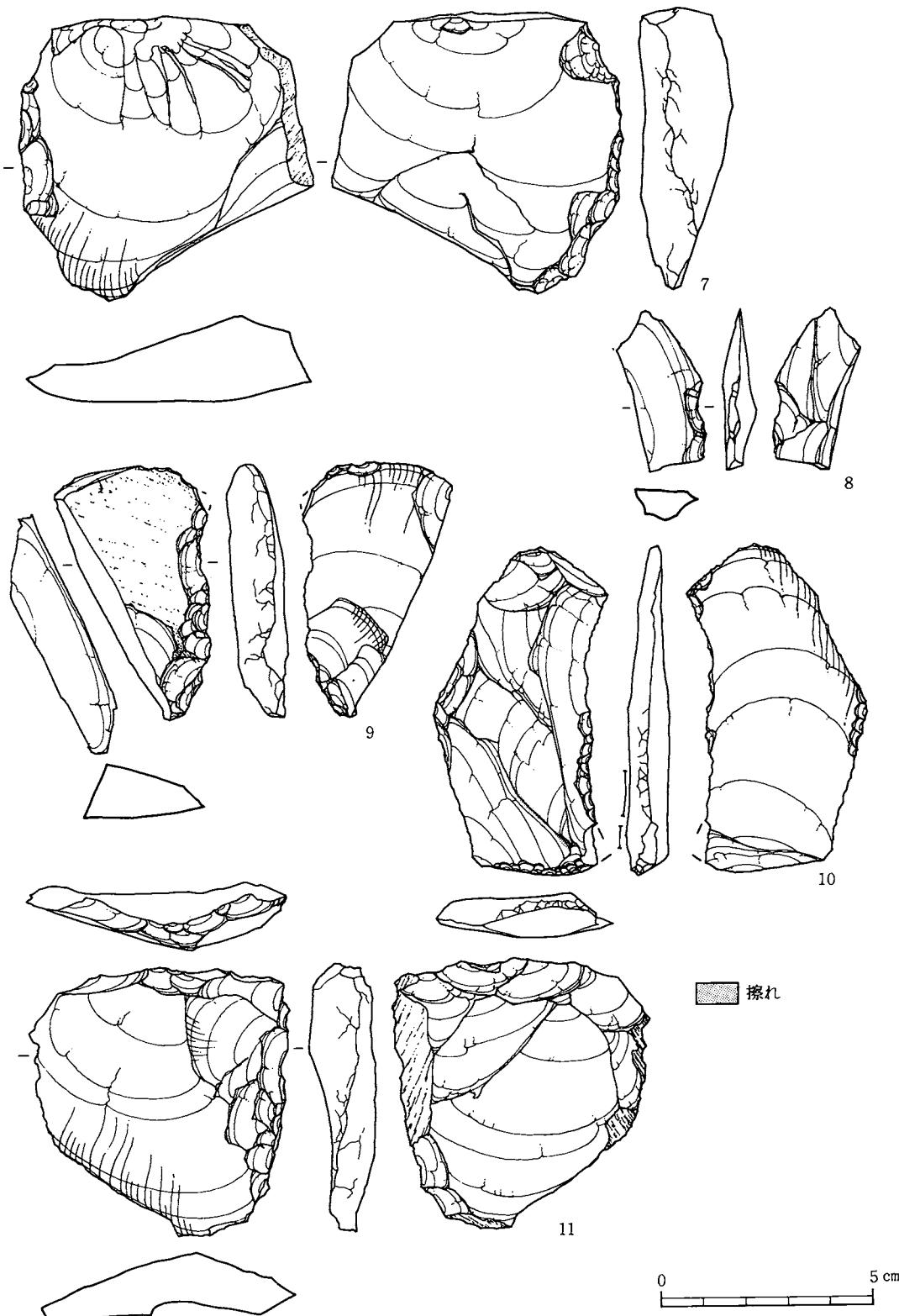
なお、10のように石器の先端部に調整加工がみられ、その周辺の稜線で激しい擦れが観察される資料がある。これについては搔器に似た使用方法が考えられ、削器の範疇で扱うには少々無理があるような気がする。ただ、現時点では資料数が少なく、明確な判断が下せない実情にある。類例の増加を待って一つの器種として独立化させる必要がある。いずれにしても、注意を要する資料であろう。

磨製石斧（第53図15）

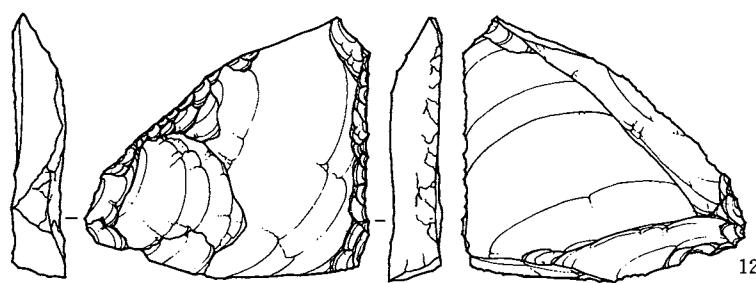
磨製石斧は、1号住居跡の覆土中から1点出土した。縦斧である。刃部は両刃で、その右側が大きく欠損している。使用時の欠損であろう。基部は、着柄のために調整を加えて全体的に細く作り出され、器面の磨きは、表裏面とも入念である。



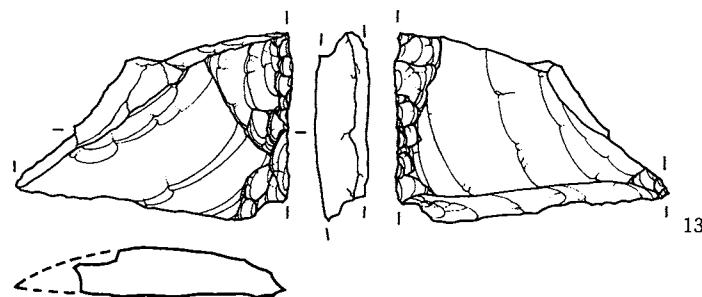
第50図 石器実測図



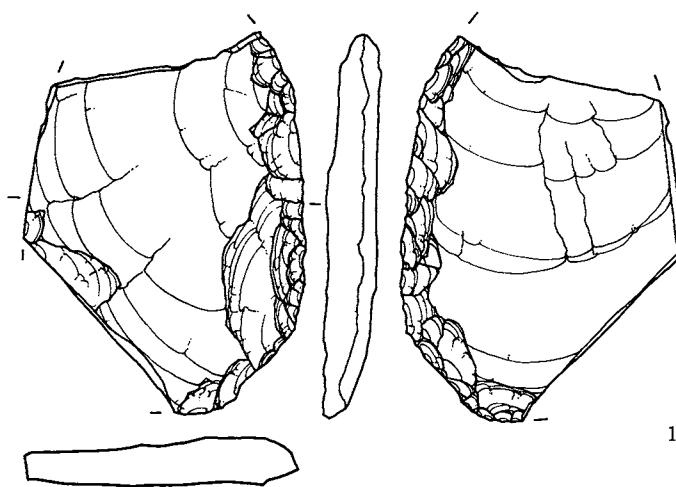
第51図 石器実測図



12



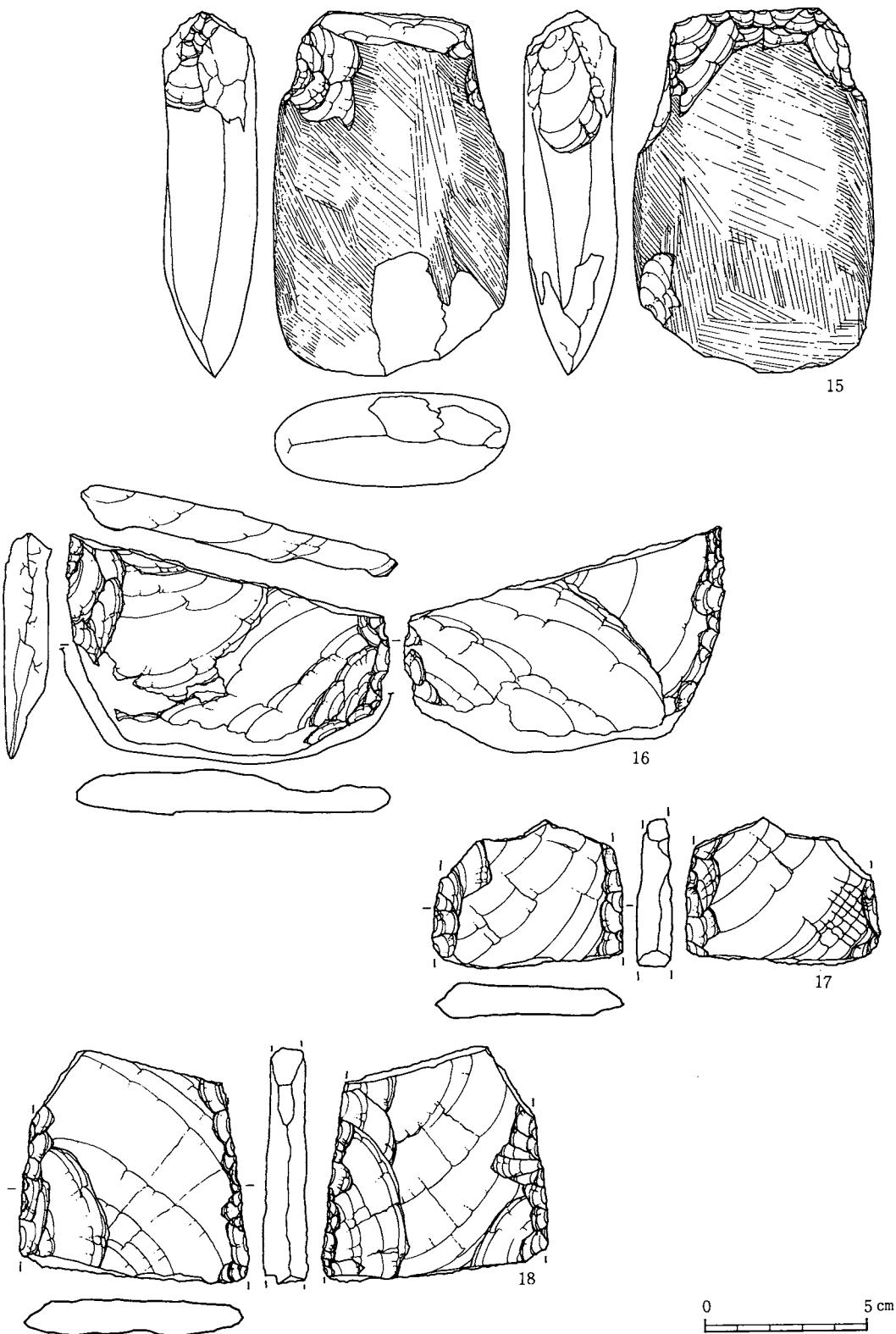
13



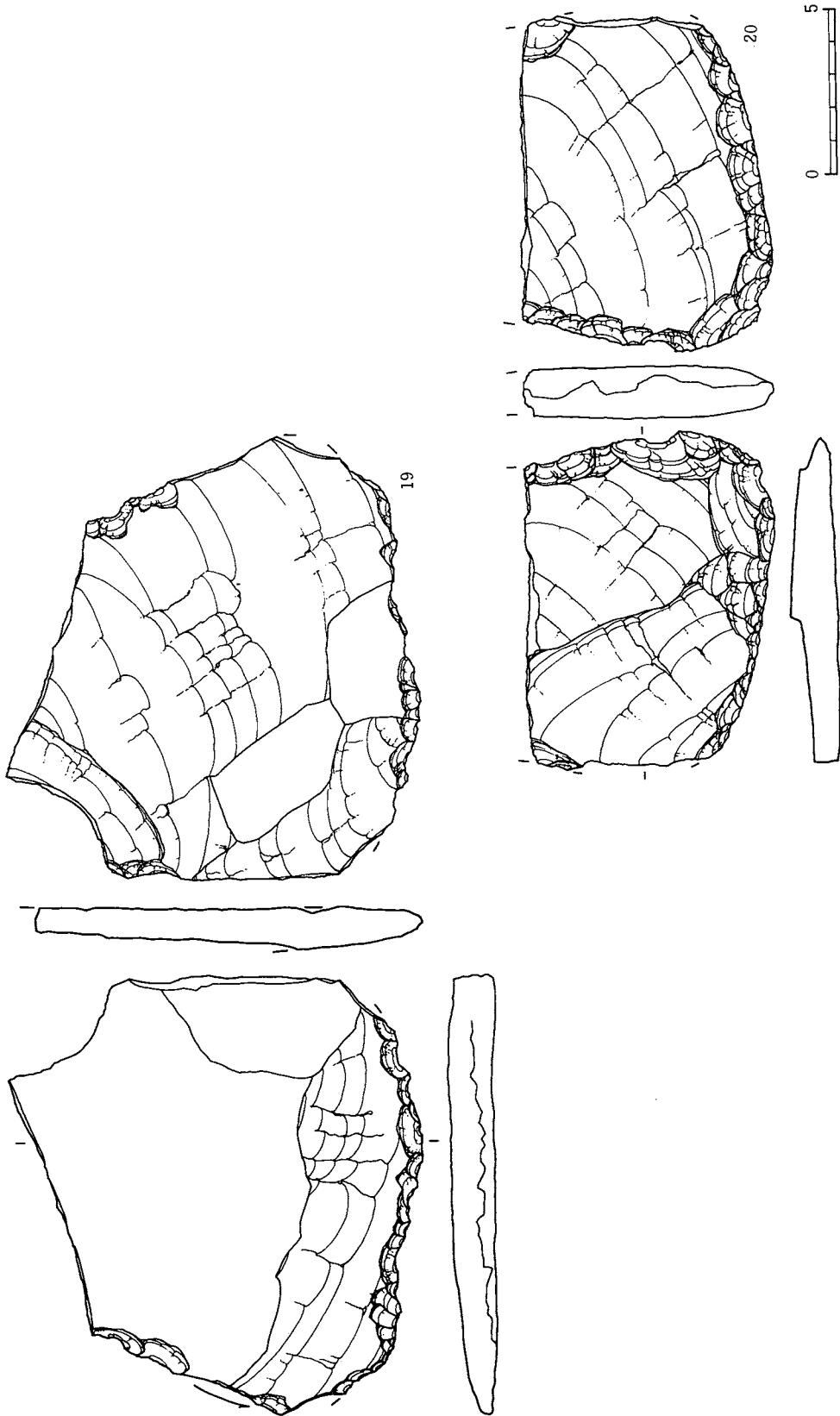
14



第52図 石器実測図

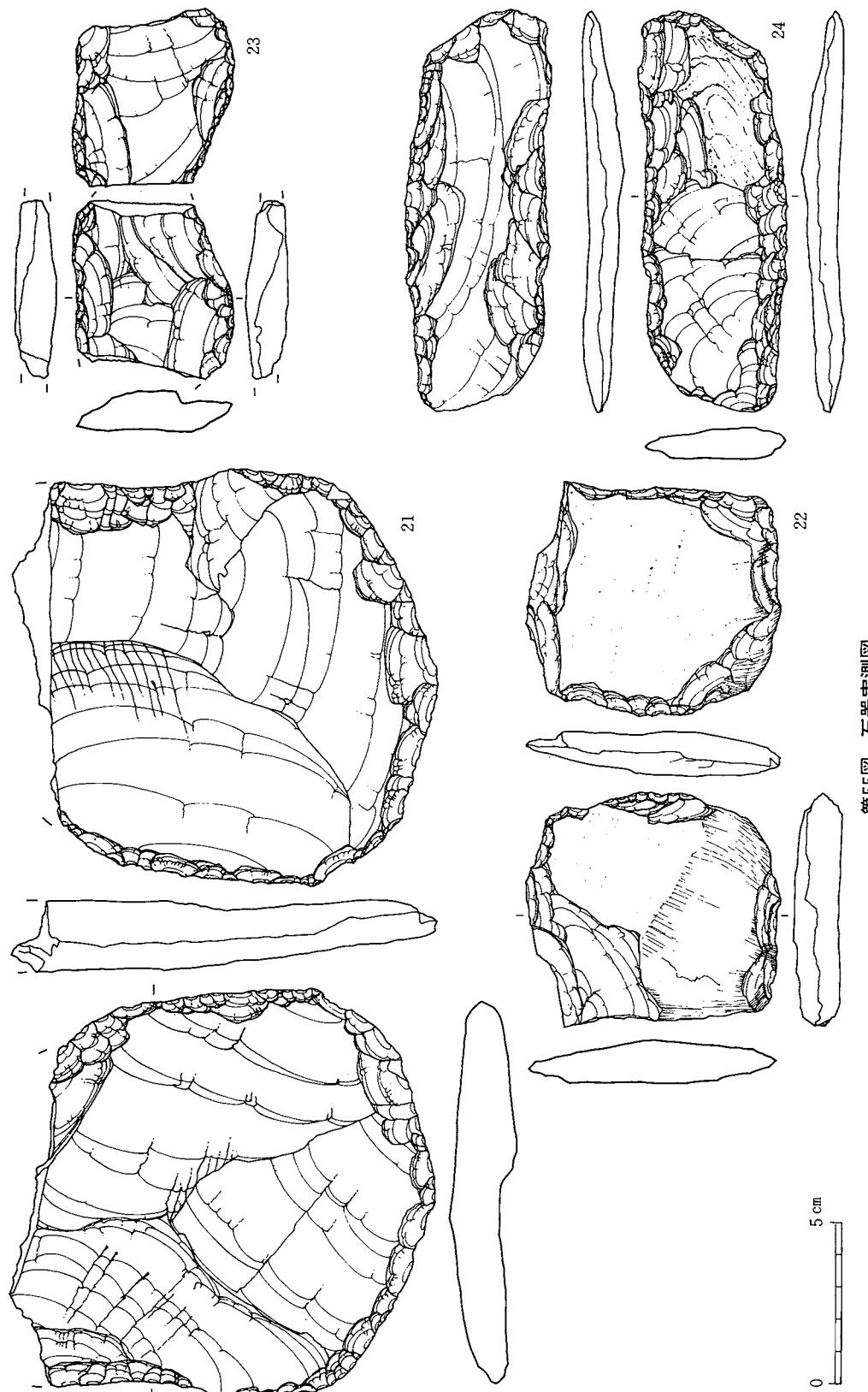


第53図 石器実測図

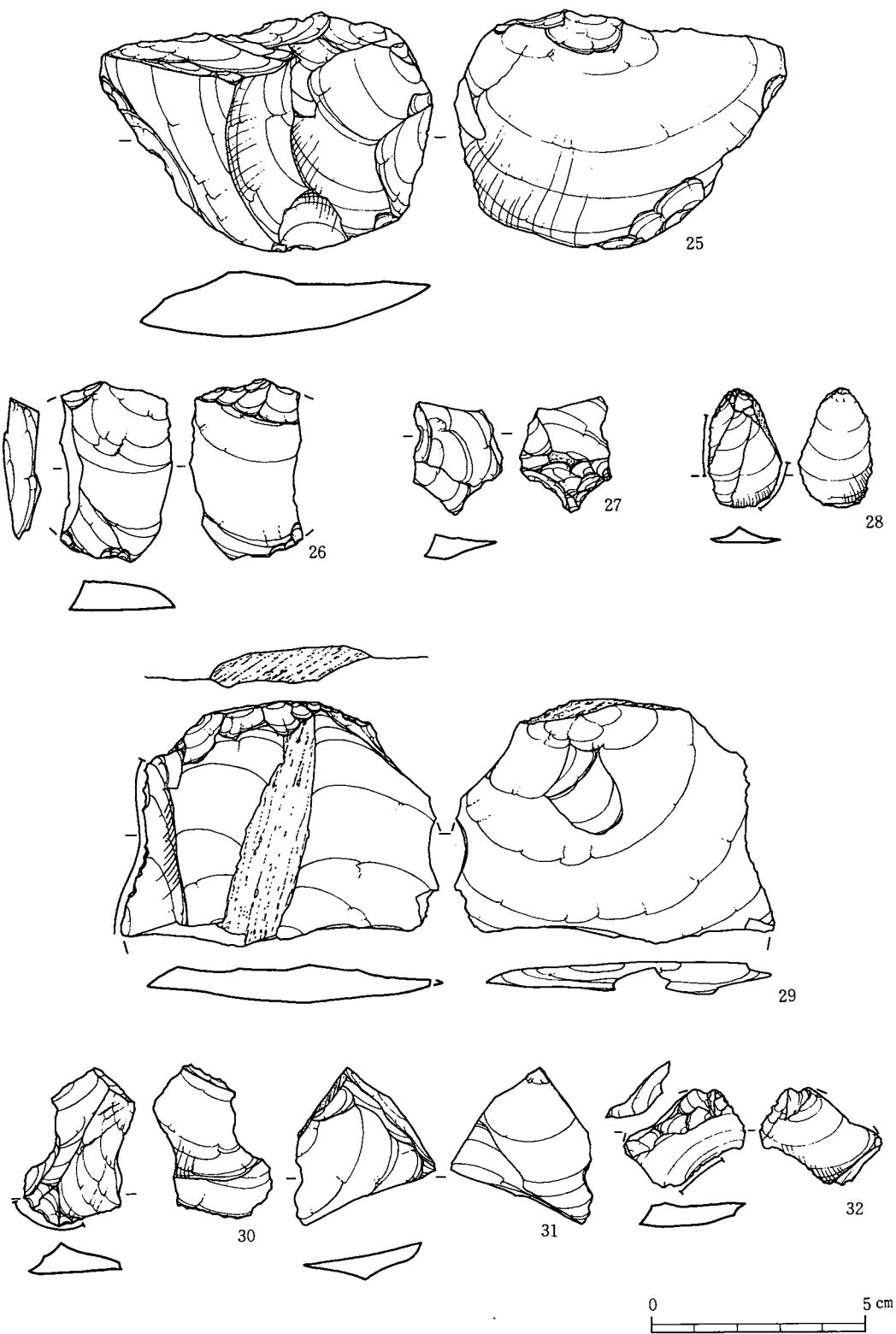


第54図 石器実測図

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



第55図 石器実測図



第56図 石器実測図

打製石斧（第53図16～第55図21）

打製石斧は、7号住居跡（16）と12号住居跡（19）からそれぞれ1点ずつと遺構外から4点の計6点（17・18・20・21）が出土した。資料はすべて欠損品である。その残存の部位は、刃部4点（16・19～21）と胴部2点（17・18）である。石斧の大きさでは小型品（16～18・20）と大型品（19・21）に分類されるが、それぞれに形状の差が認められる。すなわち、小型品は基部の幅がやや狭い短冊形で、大型品は刃部幅が基部幅に比べて広い形状である。刃部には片刃（16）と両刃（19～21）があるが、その外形はいずれも僅かに丸みを帯びた円刃である。刃部作出のための調整加工の状態は粗く、同様の加工が胴部などの縁辺に施され、全体的に作りは粗雑である。素材となる剥片は、大型の横長剥片である。使用痕としては刃こぼれ状の剥落が認められるが、16のように激しい磨耗痕が観察される例もある。

楔形石器（第55図22）

楔形石器としたものは、頭部に粗い剥落痕があり、刃部に激しい磨耗痕が観察される石器である。こうした痕跡のでき方は、磨耗痕が対象物との摩擦によって、また剥落痕が敲打具との衝突によるものと考えられ、これらの痕跡を持つ22の資料は、間接具としての楔的な使用法を推定できる。なお、菊池郡旭志村伊坂上原遺跡の報告で同様の使用方法を推定した円盤状石器（村井・木崎ほか 1986）との関連については今後の調査研究に委ねるが、その祖形として注目していくことも必要であろう。ごみ捨て場からの出土である。

石鎌（第55図23・24）

石鎌は、打製石斧の形状や調整加工に近い石器であるが、打製石斧とは刃部の位置が異なり、長い側縁部に刃部が設けられている。刃部作出の加工は入念で、丸みをもった作りである。23・24いずれも遺構外の出土である。

二次加工ある不定形石器（第56図25～27）

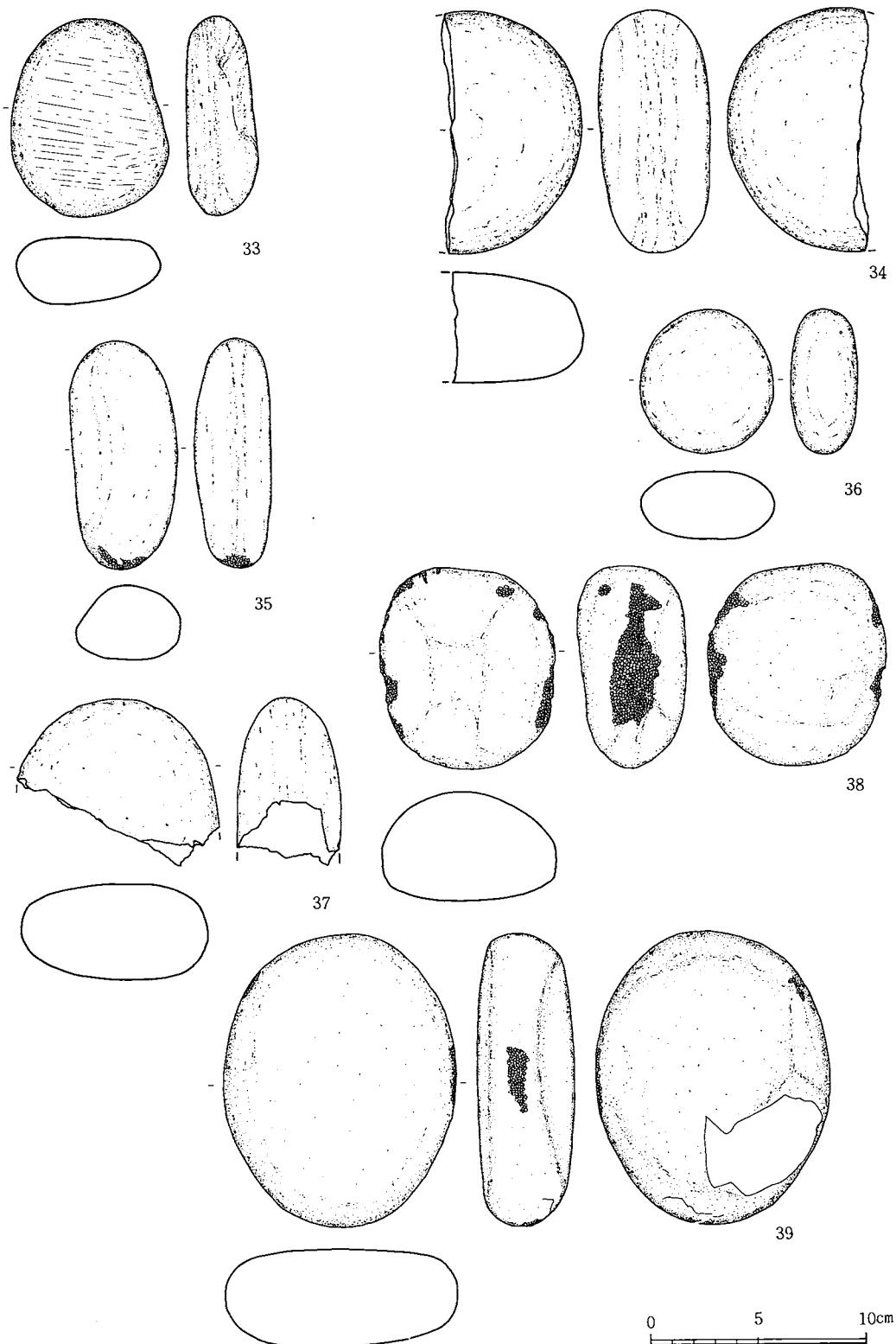
二次加工ある不定形石器は、剥片の縁辺に連続しない調整加工がみられる石器を取りあげている。1号住居跡1点（25）、12号住居跡2点（26・27）の計3点である。利用される剥片には、横長剥片（25）と寸詰りで横広の剥片（26・27）がある。

使用痕ある剥片（第56図28～32）

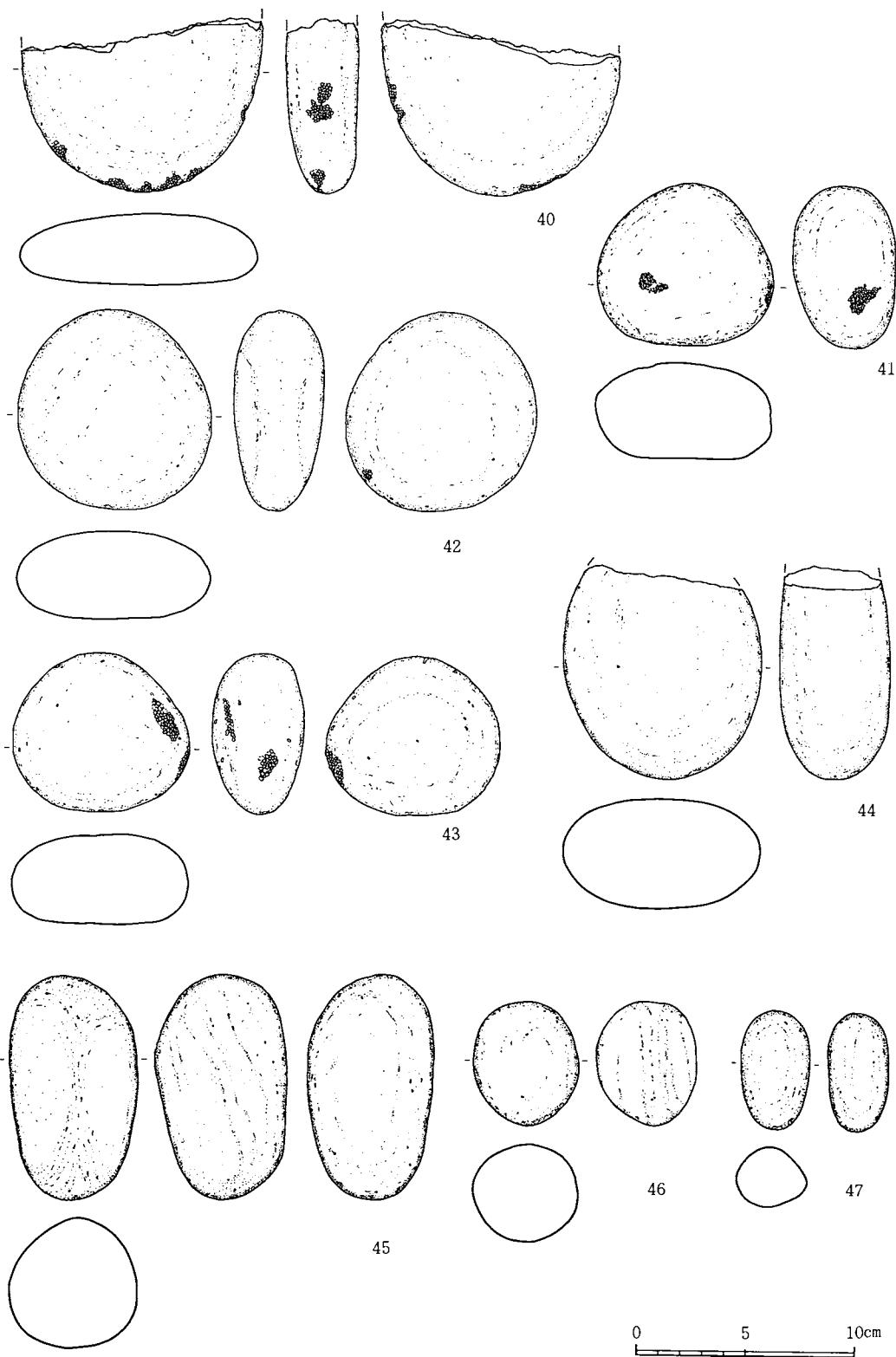
剥片の縁辺に刃こぼれ状の微細な剥離が観察される石器で、1号住居跡から3点（28～30）、12号住居跡から1点（31）、遺構外から1点（32）の計5点が出土している。小型のもの（28・30～32）と大型のもの（29）がある。

磨石・敲石（第57図33～第66図98）

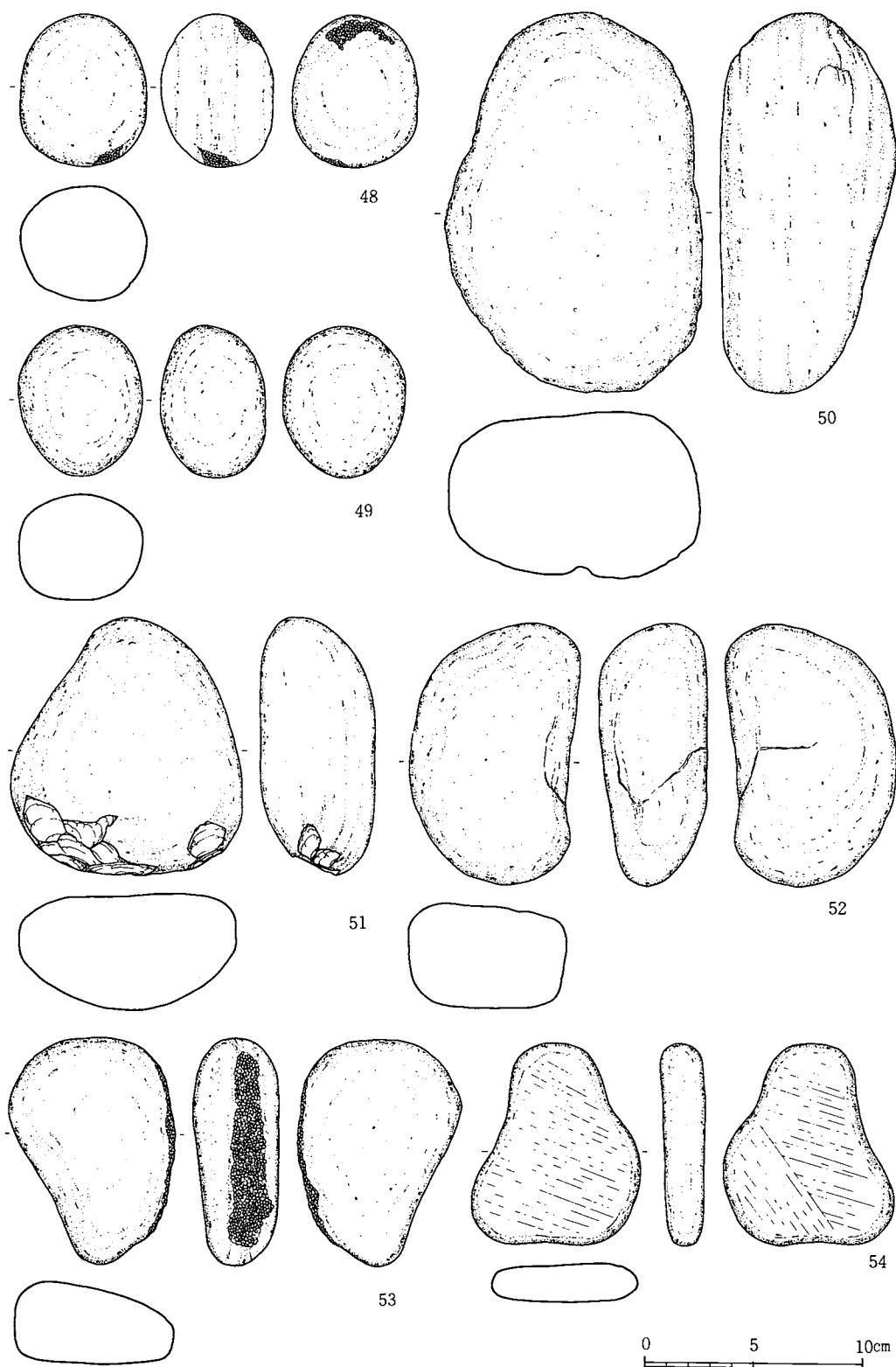
磨石・敲石は、全体で136点が出土し、出土石器全体の中で66.6%を占めている。図示したのは、遺構外から出土した石器を除いた66点で、1号住居跡2点（33・85）、5号住居跡1点（34）、6号住居跡1点（35）、7号住居跡2点（36・38）、8号住居跡15点（37・39～42・44～



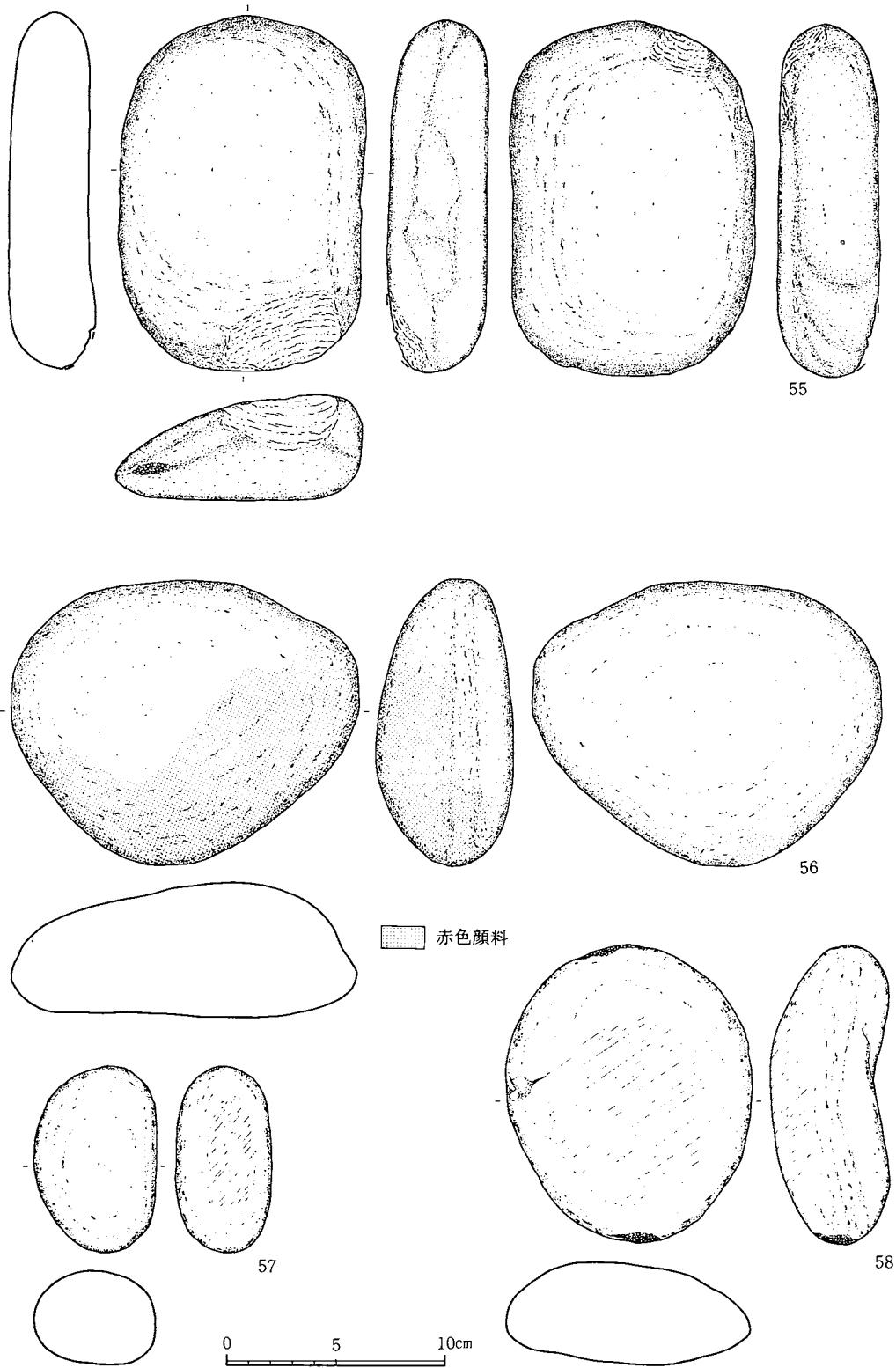
第57図 石器実測図



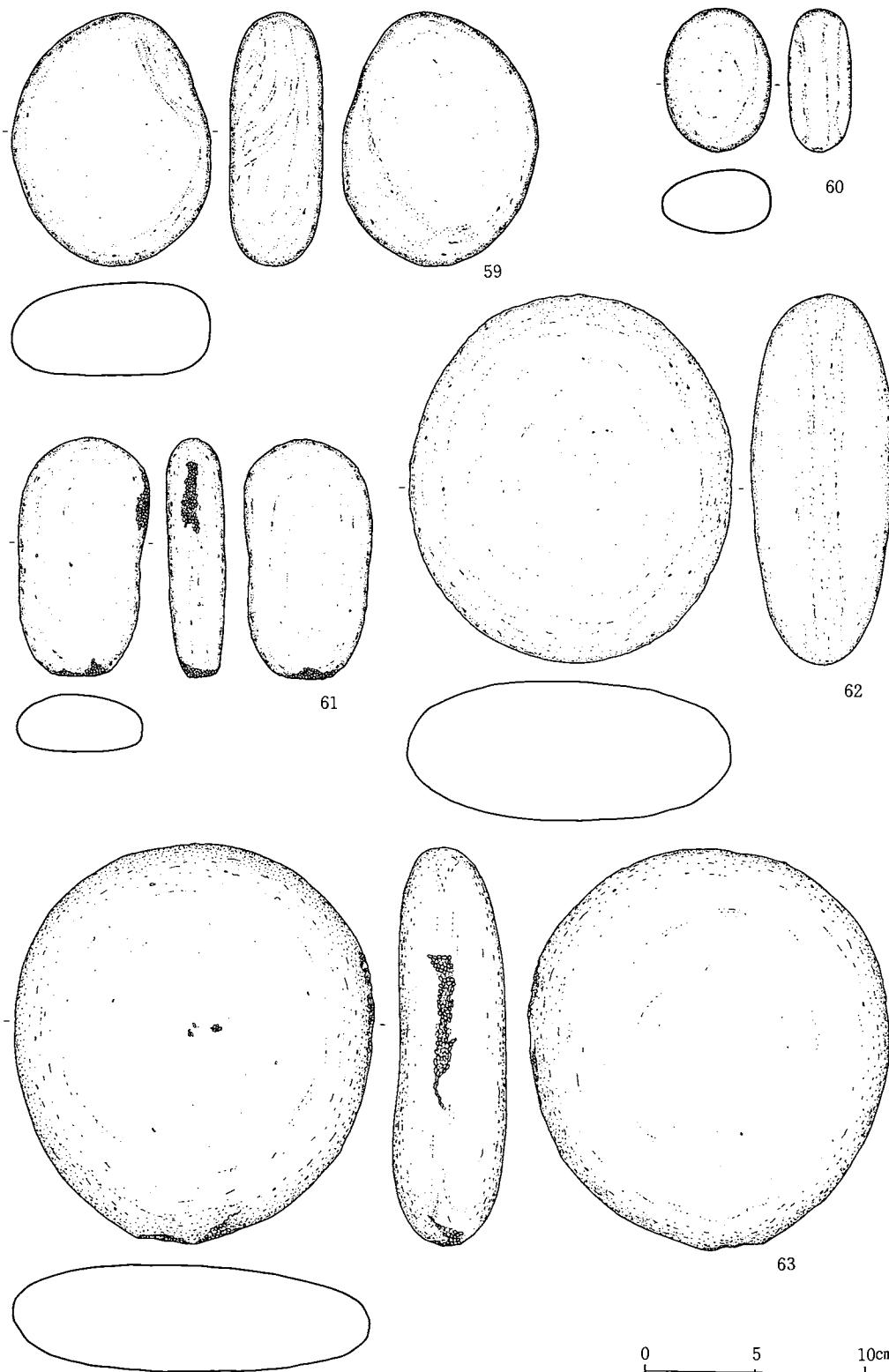
第58図 石器実測図



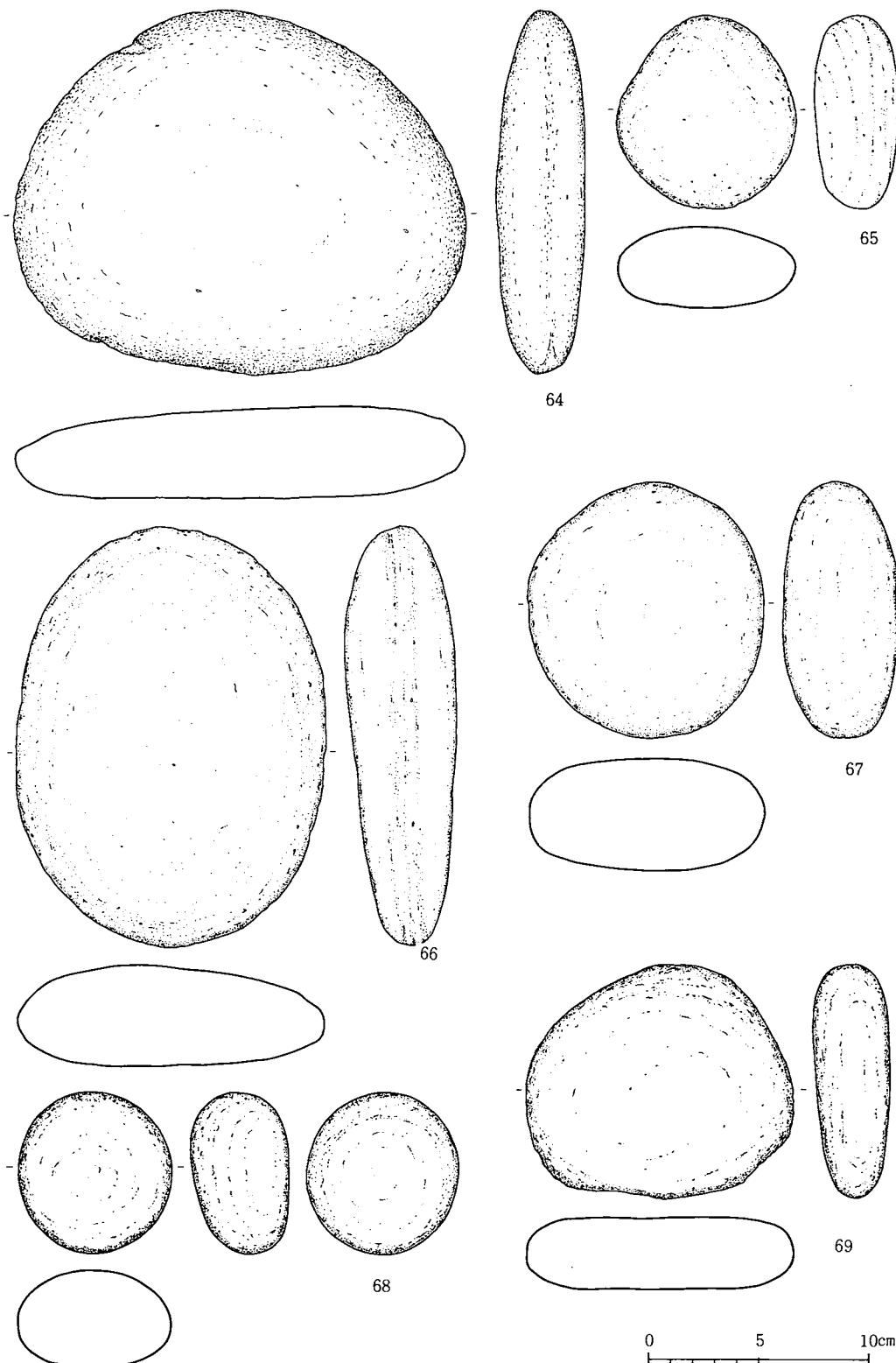
第59図 石器実測図



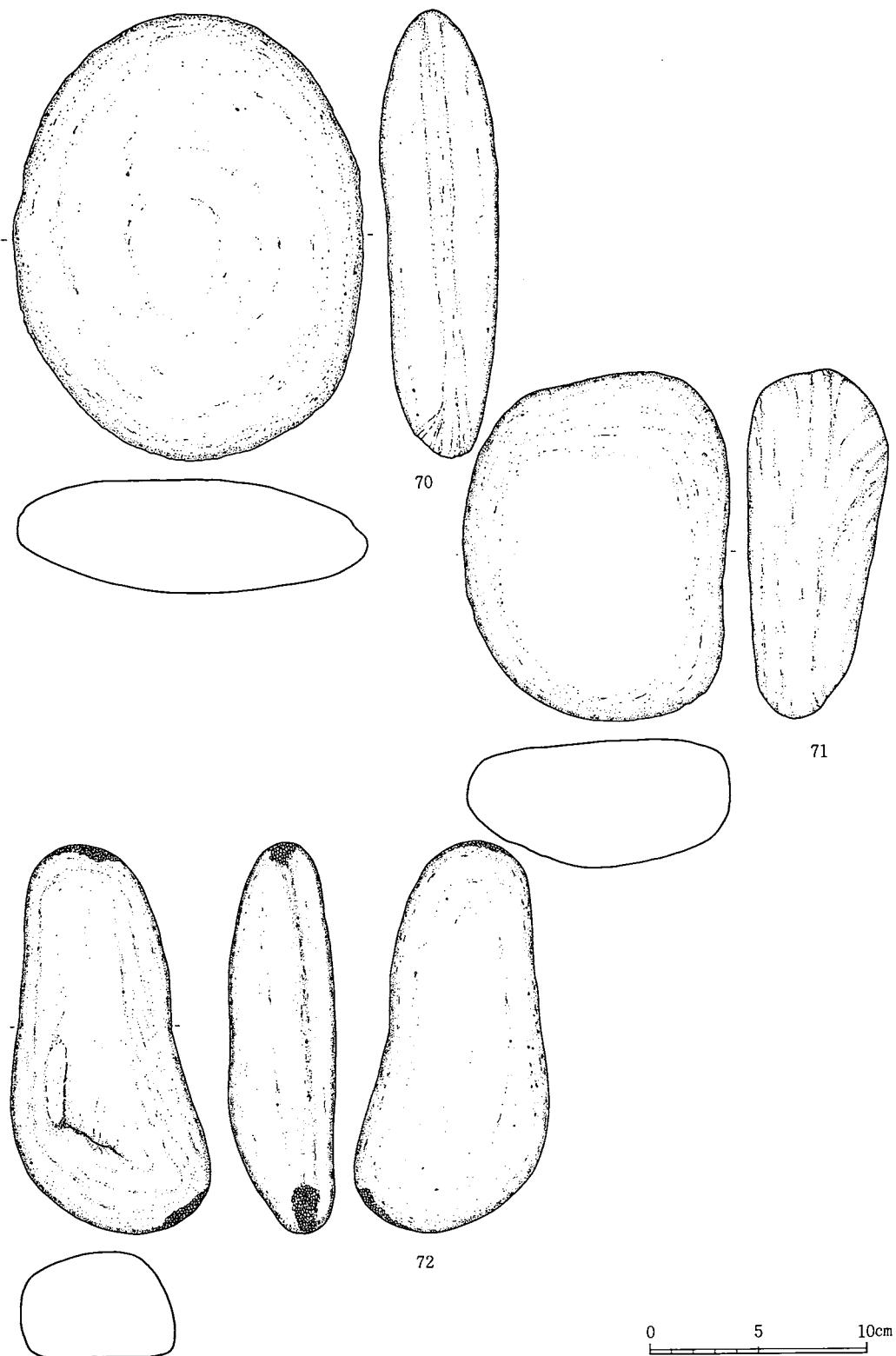
第60図 石器実測図



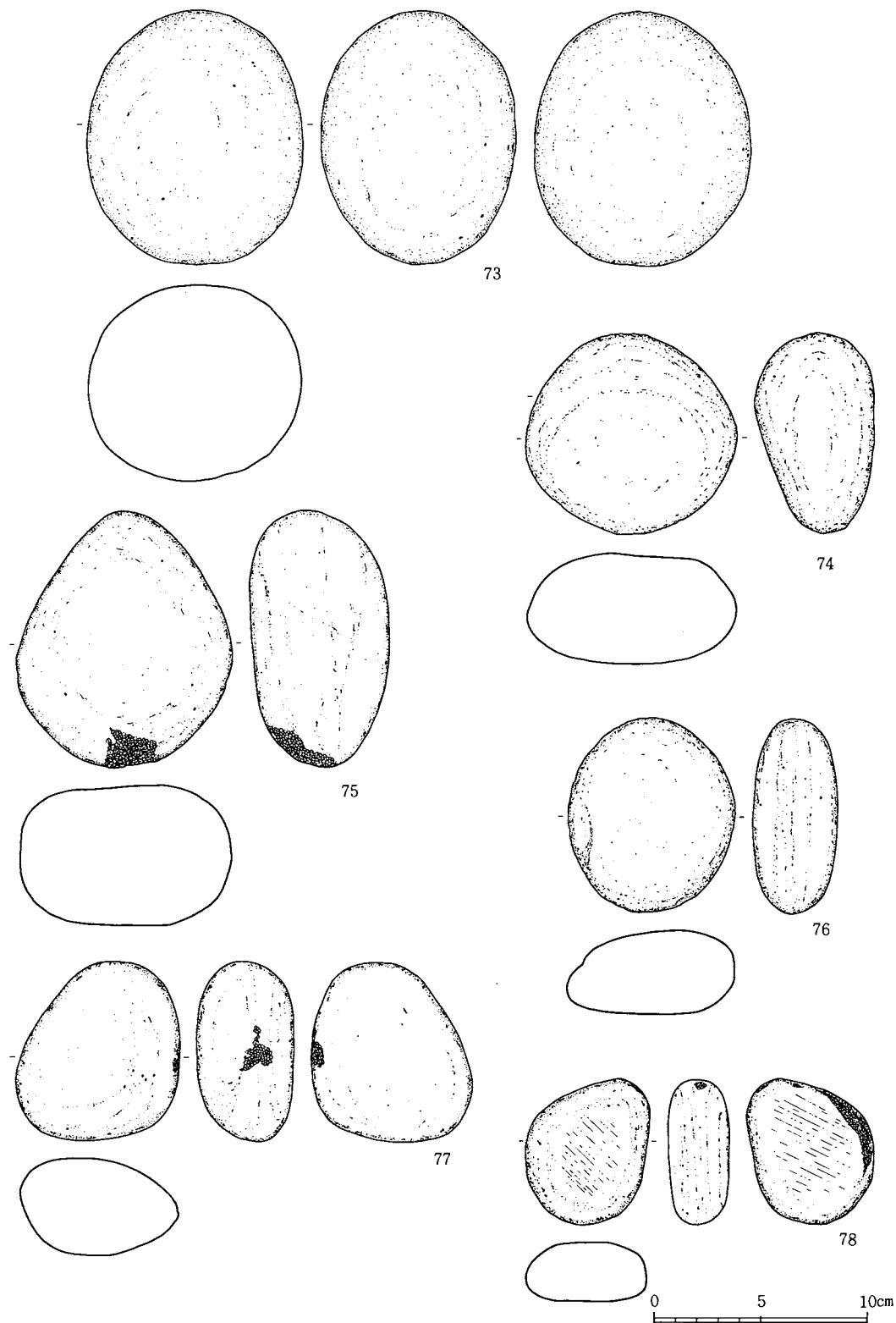
第61図 石器実測図



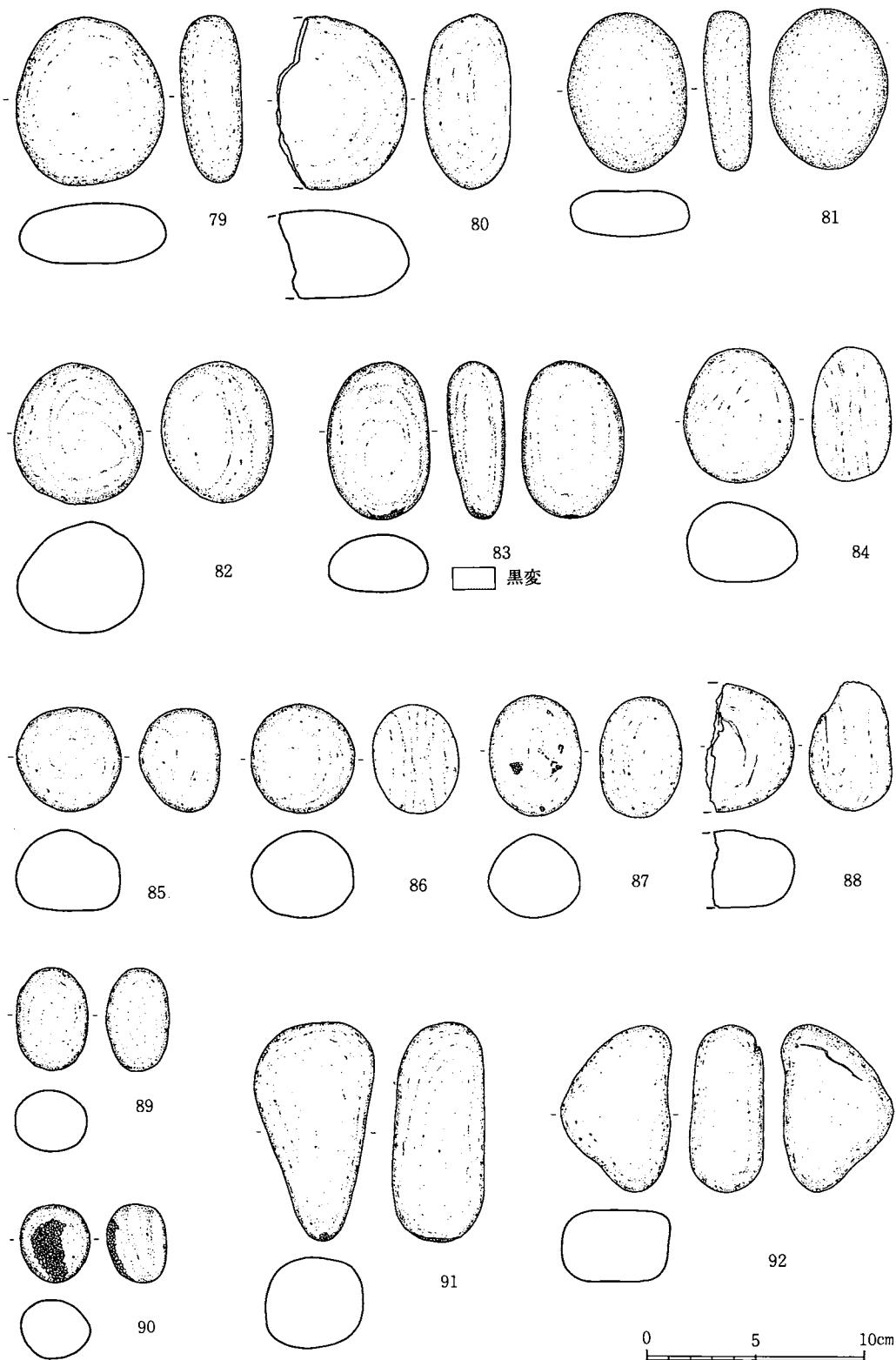
第62図 石器実測図



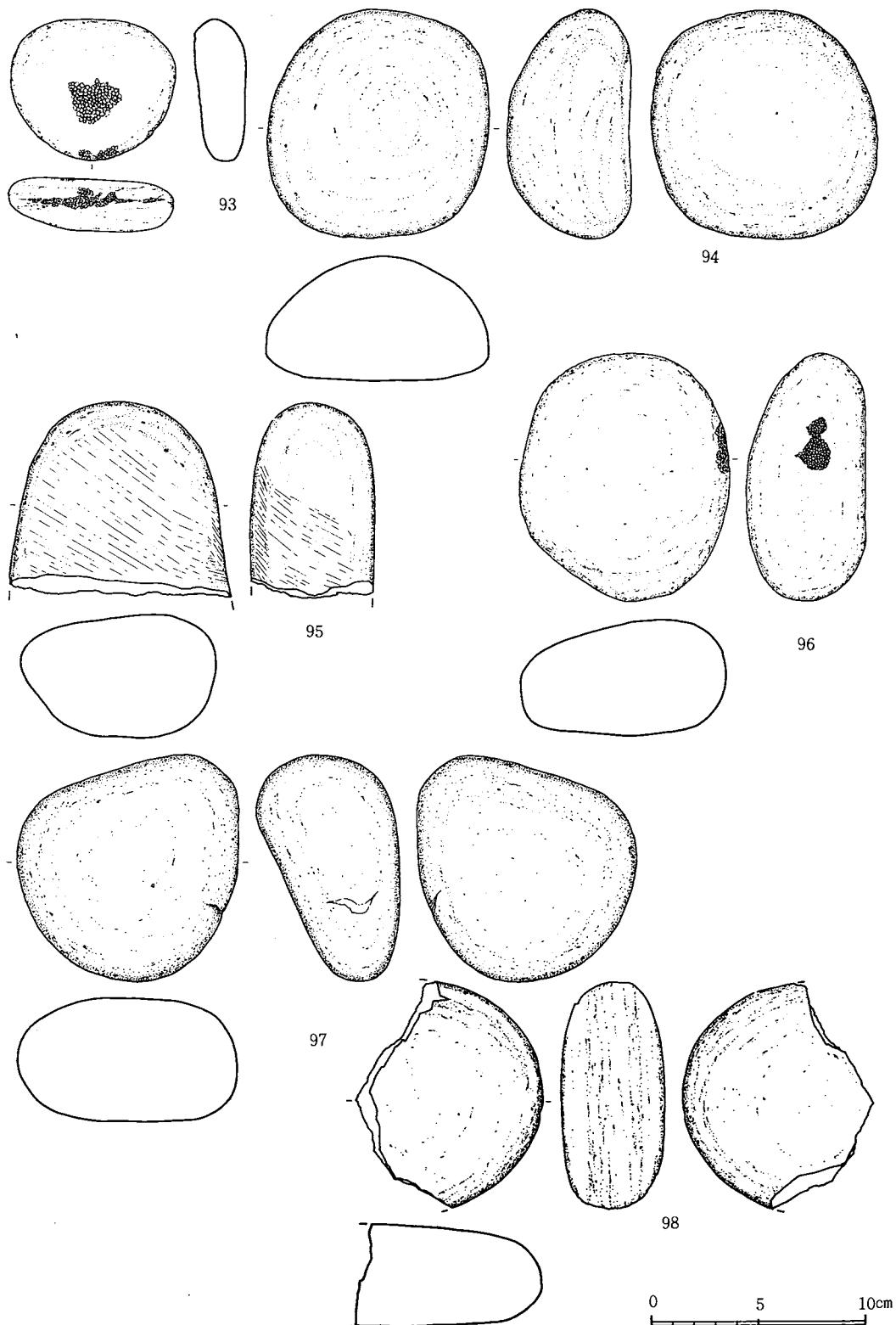
第63図 石器実測図



第64図 石器実測図



第65図 石器実測図



第66図 石器実測図

53)、9号住居跡3点(43・54・55)、10号住居跡1点(56)、12号住居跡2点(57・58)、13号住居跡3点(59~61)、ごみ捨て場30点(62~84・86~92)、谷部6点(93~98)である。住居跡の床面に密着して出土している資料は、8号住居跡の1点(50)と10号住居跡1点(56)、13号住居跡3点(59~61)であった。

これらの石器は、その形状によって第1類~第4類に分類される。

第1類

第1類は、平面形態が橢円形を呈するもの(33・36~40・44・49・55・57~60・64・66・69・70・71・73・76~78・81・83・84・87・89・93・95・96)で、大型・中型・小型のものがある。石器の表面に残されている痕跡には敲打痕や擦痕があるが、それらをもたずに磨痕のみのものもみられる。また、受熱資料の83には、帯状に表面を取り巻く煤状の黒変部分がある。恐らくこれは、石器の表面を巻いた帶(材質は不明であるが)の痕跡かと考えられ、その使用方法を探る上で注目される資料である。

第2類

第2類は、平面形態が円形を呈するもの(34・41~43・46・48・62・63・65・67・68・74・79・80・82・85・86・88・90・94・98)で、大型・中型・小型のものがある。石器の表面の痕跡には敲打痕があるが、磨痕のみのものもある。80は受熱資料である。

第3類

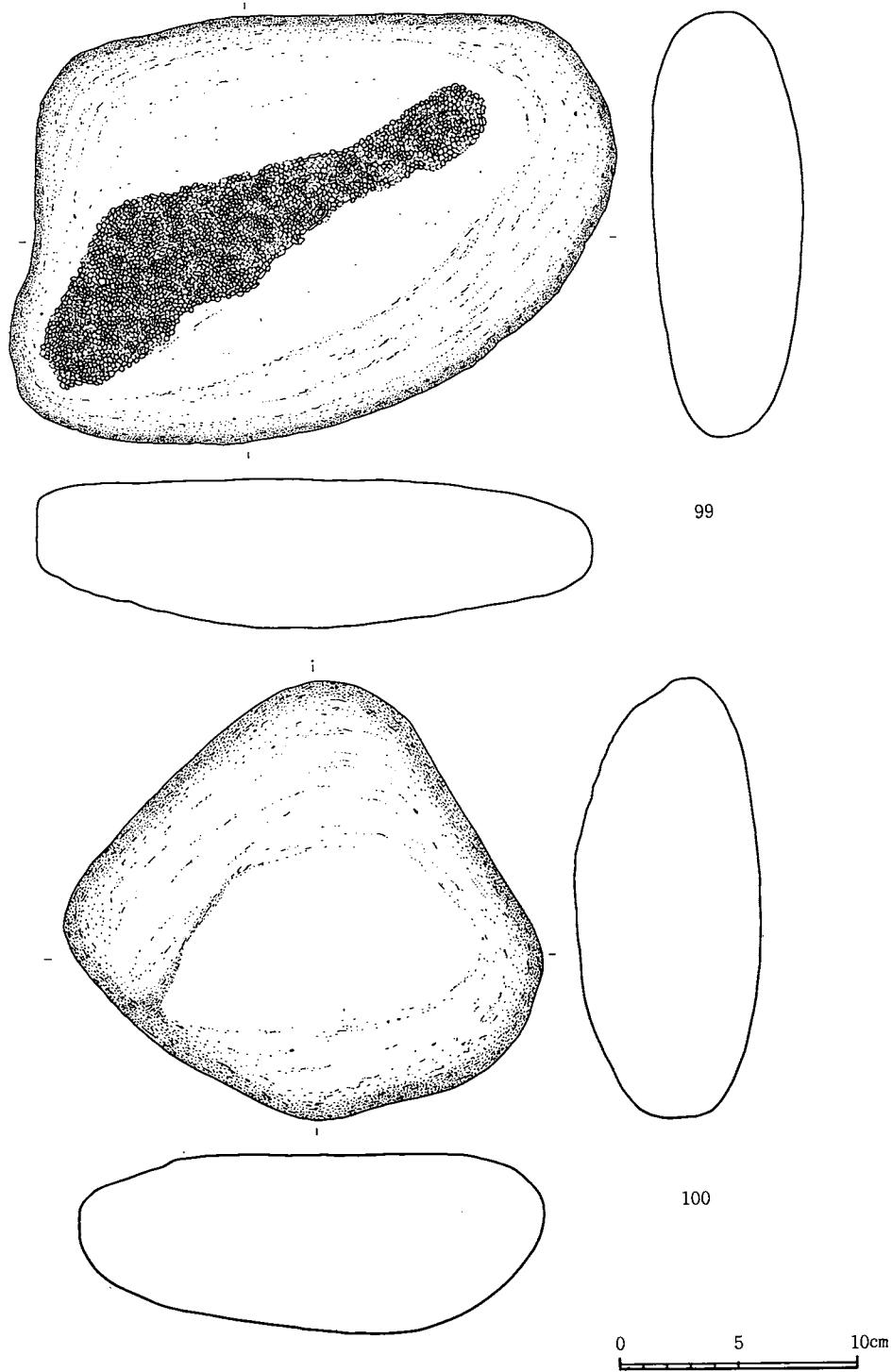
第3類は、不整形を呈するもの(50~54・56・75・91・92・97)である。比較的大型のものと中型のものがある。痕跡としては敲打痕や擦痕がみられるが、51のように敲打による剥落痕が観察されるものもある。また、付着物として56のような赤色顔料が観察される資料もある。これについては、ベンガラ製作にかかる作業に使われた可能性が高く、その意味から磨石・敲石の用途範囲の広さを示すものとして注目される。

第4類

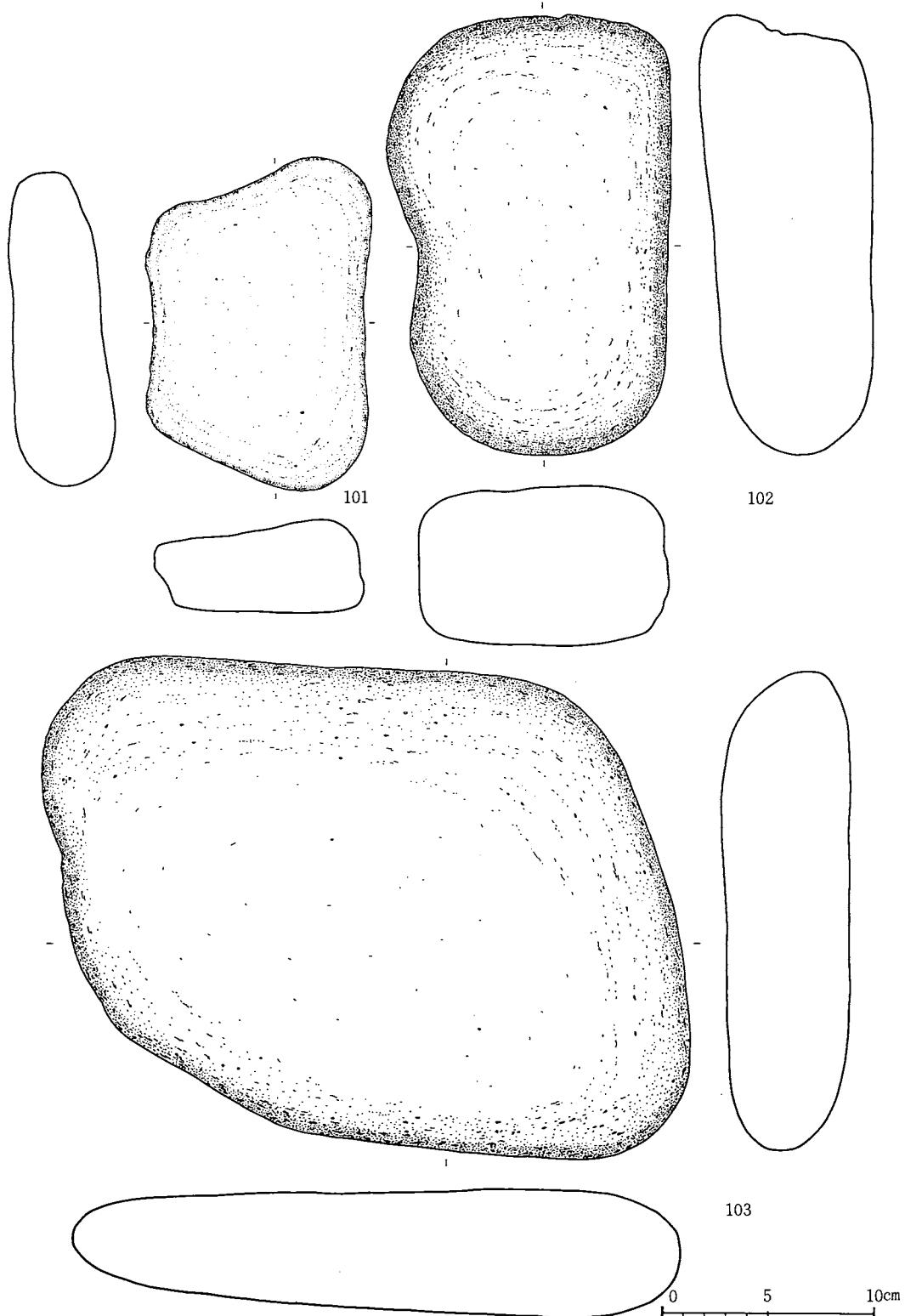
第4類は、棒状を呈するもの(35・45・47・61・72)である。敲打痕をもつものが多いが、磨痕のみのものもある。その大きさでは大型と中型がある。

石皿・台石(第67図99~第72図112)

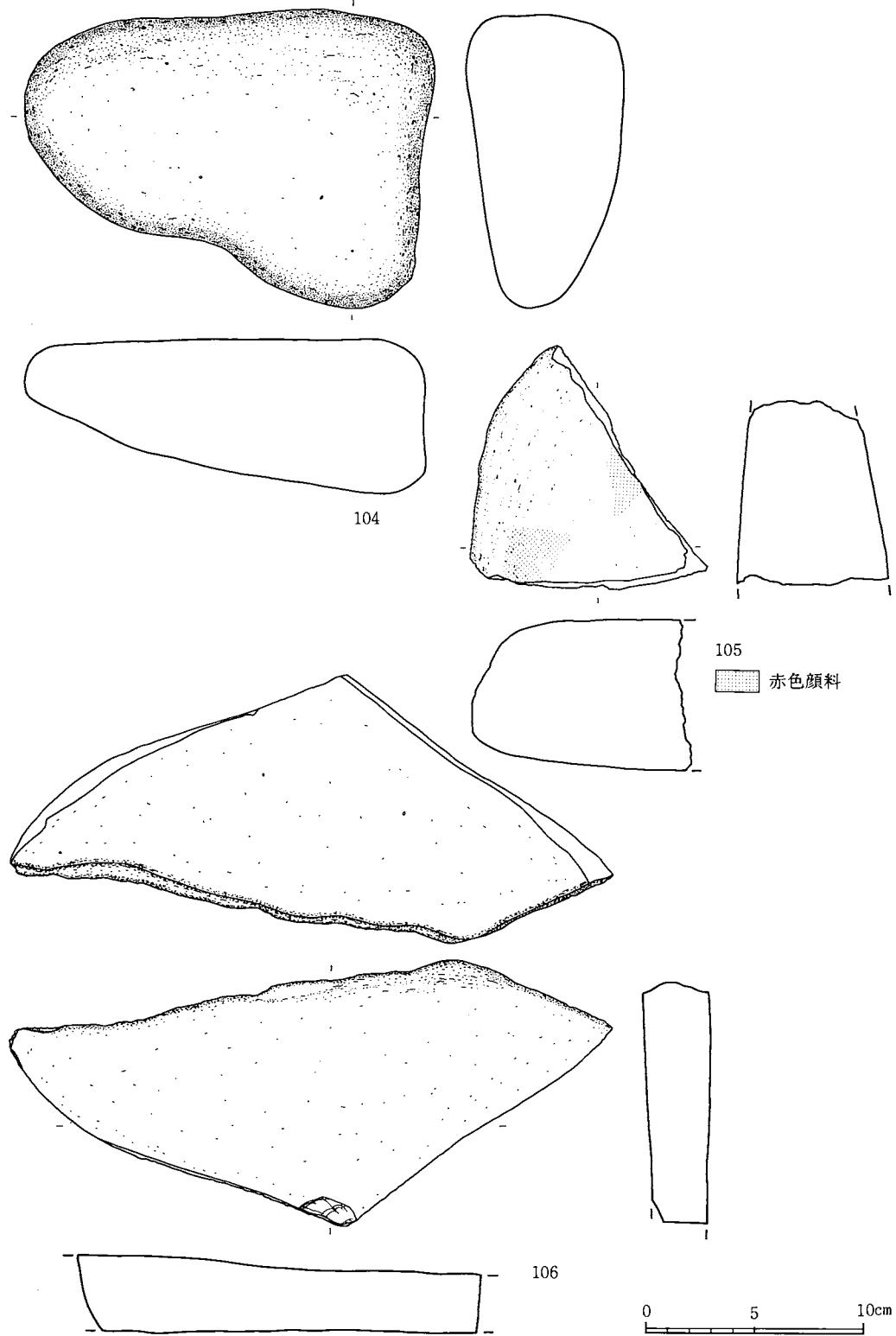
石皿・台石は、全部で19点出土している。その内訳は、3号住居跡1点(99)、4号住居跡1点(111)、6号住居跡1点(101)、7号住居跡2点(100・102)、8号住居跡2点(103・104)、10号住居跡1点(105)、ごみ捨て場2点(106・107)、谷部2点(108・112)、遺構外7点(109・110)である。住居跡出土のもの8点の中で、床面密着のものは4点(99・104・105・111)である。表面に残された痕跡では、99のように擦痕と敲打痕の両者がみられるものの他は、ほとんど擦痕のみである。また、105のように赤色顔料の付着が観察される資料もある。これは、56のような磨石・敲石と一緒に使用されたものと考えられ、磨石・敲石同様に石皿・台石の用



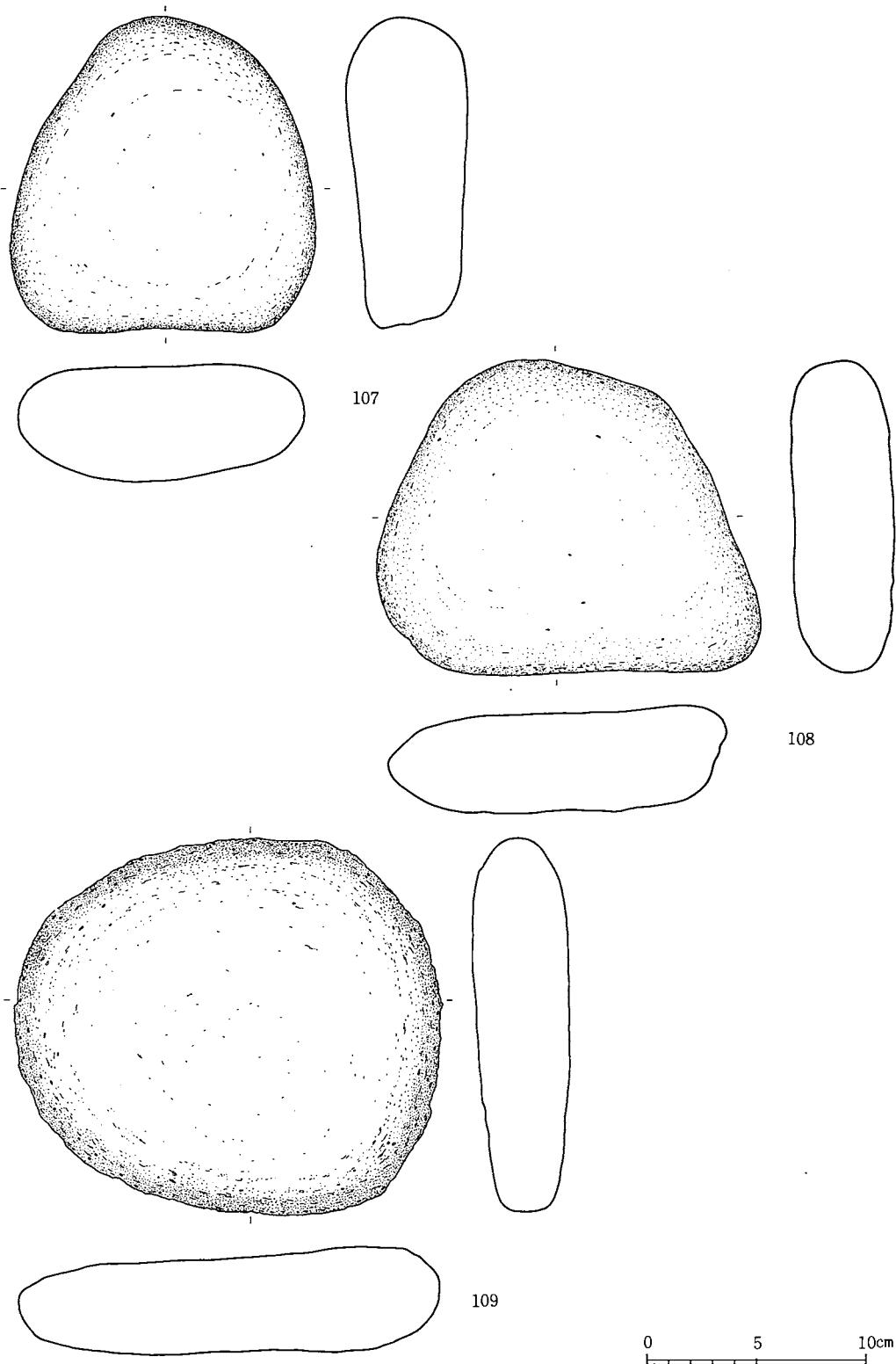
第67図 石器実測図



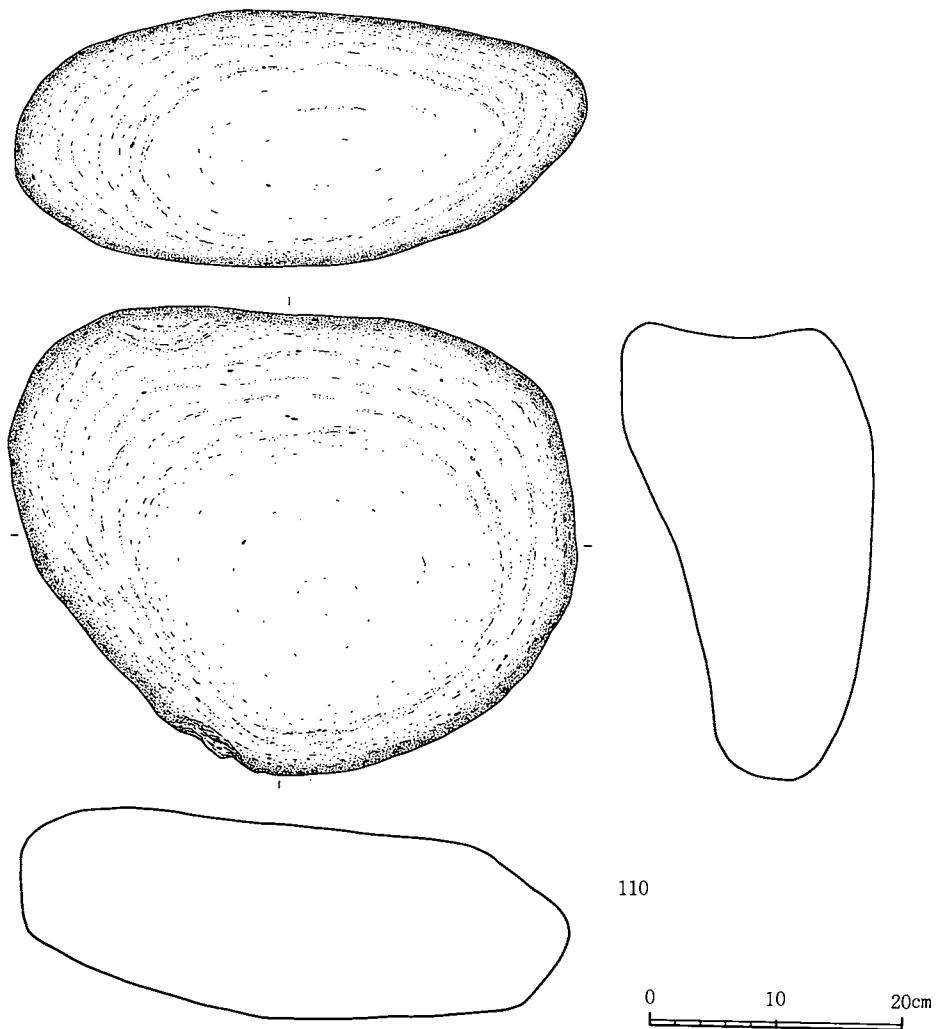
第68図 石器実測図



第69図 石器実測図



第70図 石器実測図

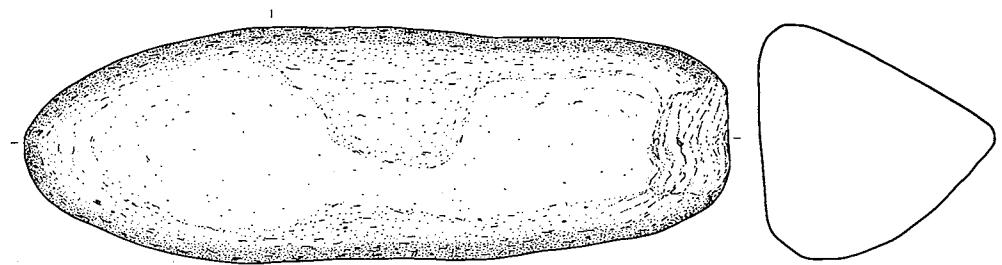


第71図 石器実測図

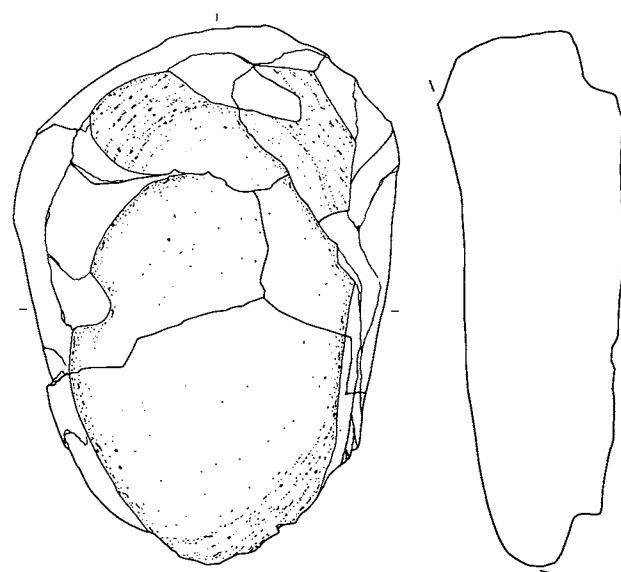
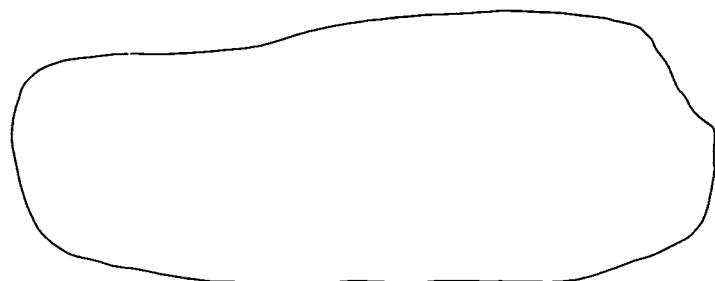
途範囲に関して注目される資料である。

石核（第73図113～115・第74図117）・剝片（第74図118～第76図131）

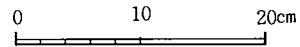
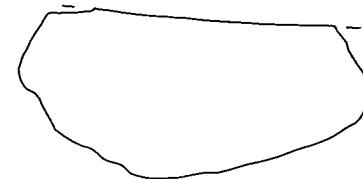
石核は、4点出土している。その内訳は、1号住居跡1点（113）、2号住居跡1点（114）、ごみ捨て場1点（115）、遺構外1点（117）である。剝片剝離の状態からみると、頻繁に打面を変えて、次々に剝離面を打面としていく多面体の石核（113）、両刃礫器状の交互剝離によって剝片剝離をおこなうもの（114・115）、石核の縁辺に沿いながら打面を移動しながらも剝離面を打面となさないもの（116）がある。剝離される剝片の形状は、縦に長い剝片から横に広い剝片まであり全体的に不揃いで、定形的なものが量産されるということはない。また大きさでは、大型の剝片が剥出される場合（115・117）と小型の剝片が剥出される場合（113・114・115）がある。116～118は、大型の剝片（118）と石核（117）との接合例（116）であるが、この遺跡で



111

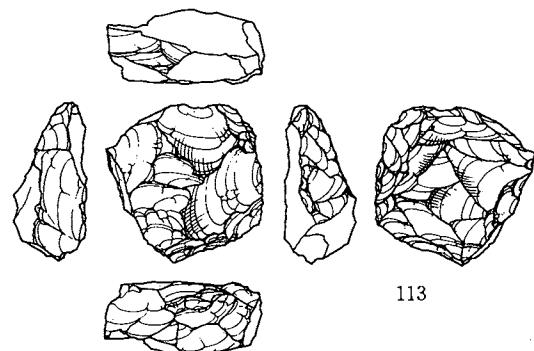


112

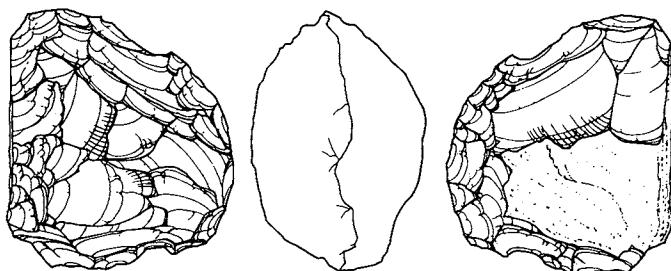


第72図 石器実測図

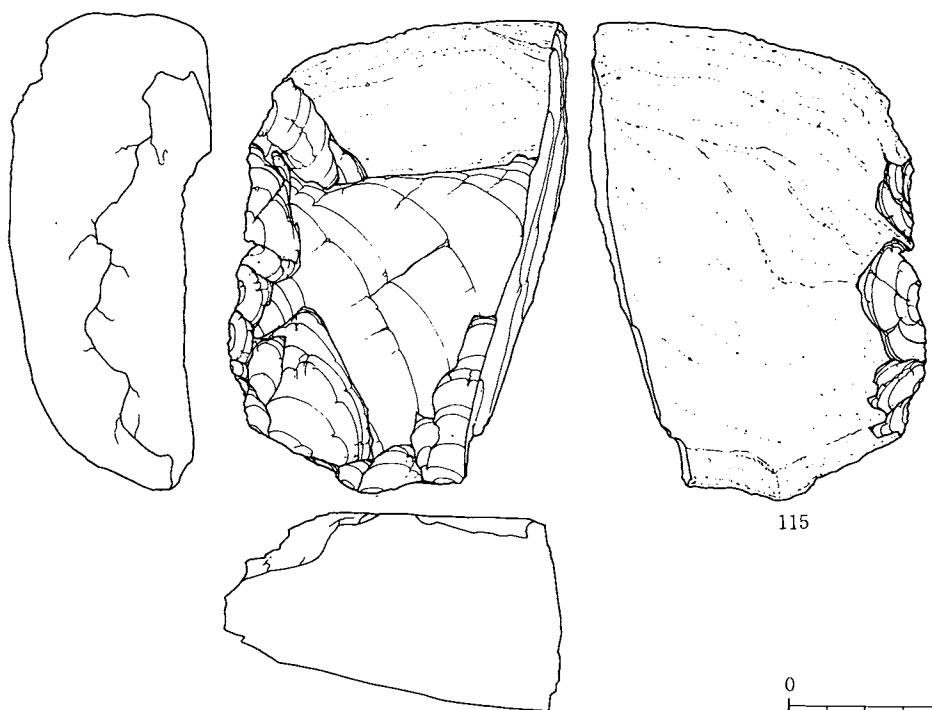
第2節 繩文時代後期の遺構と遺物



113



114

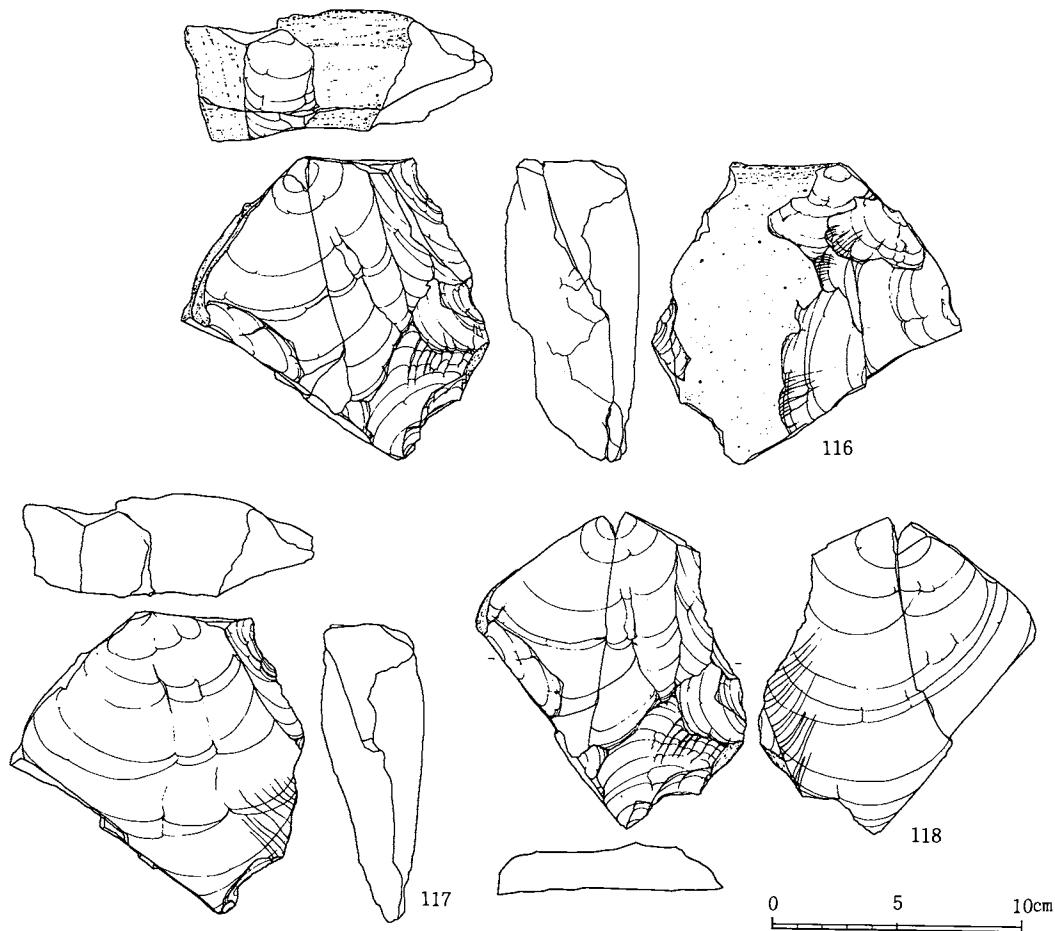


第73図 石器実測図

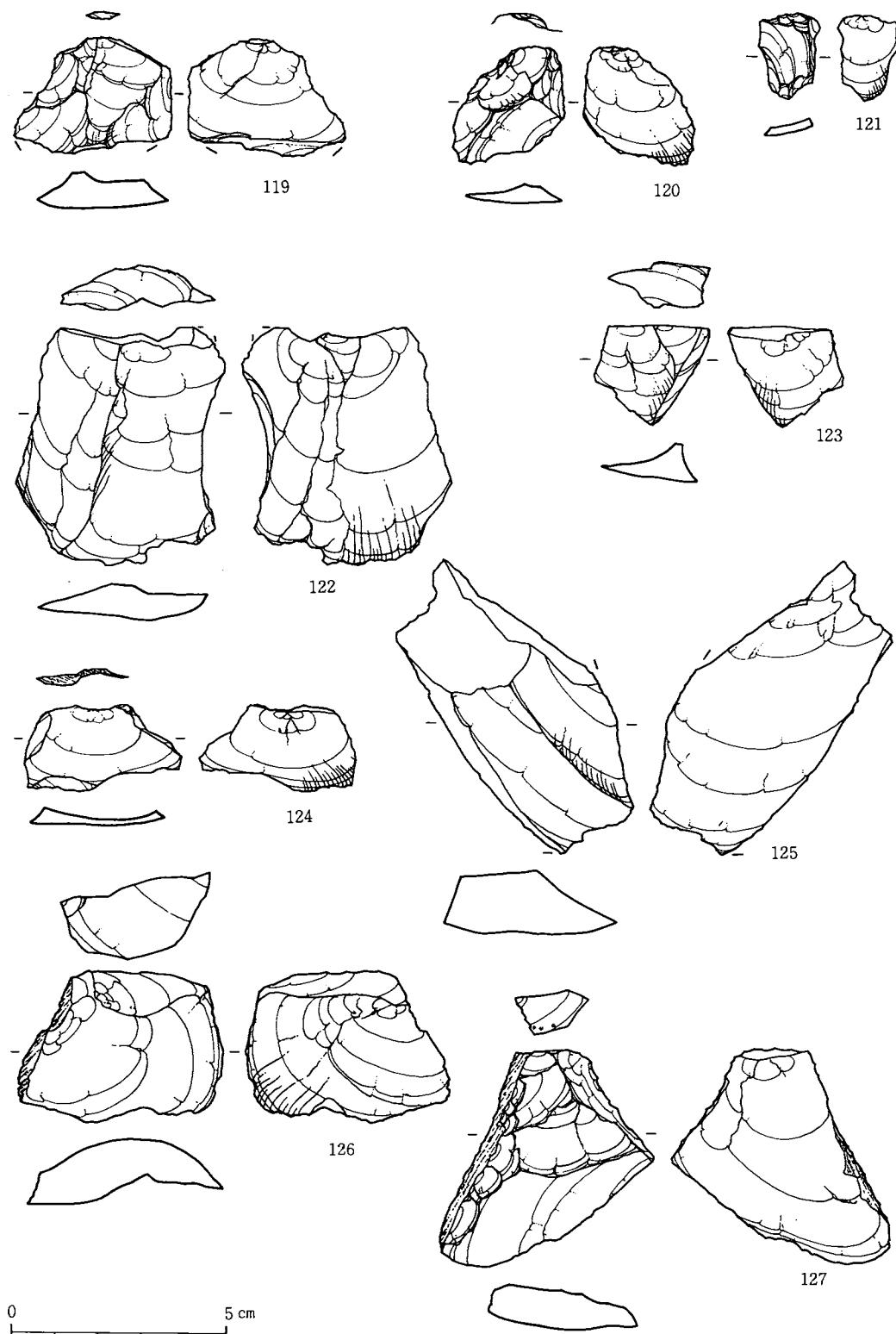
の剥片剥離技術を完全に復原できる程の資料数ではない。そこで、剥片についてみてみよう。

剥片は、1号住居跡2点(119・120)、6号住居跡3点(121~123)、8号住居跡1点(124)、9号住居跡3点(125~127)、12号住居跡1点(128)、13号住居跡1点(129)、ごみ捨て場2点(130・131)、遺構外1点(118)の計14点が出土している。すべて覆土中の一括である。剥片には、縦長剥片(118・128)や横長剥片(124・126・131)があるが、ほとんどのものはそれらに属さない寸詰りで幅広の剥片である。また大きさも不揃いで、大型(118)から小型(121・130)まであり、共通した形状を呈するものではない。

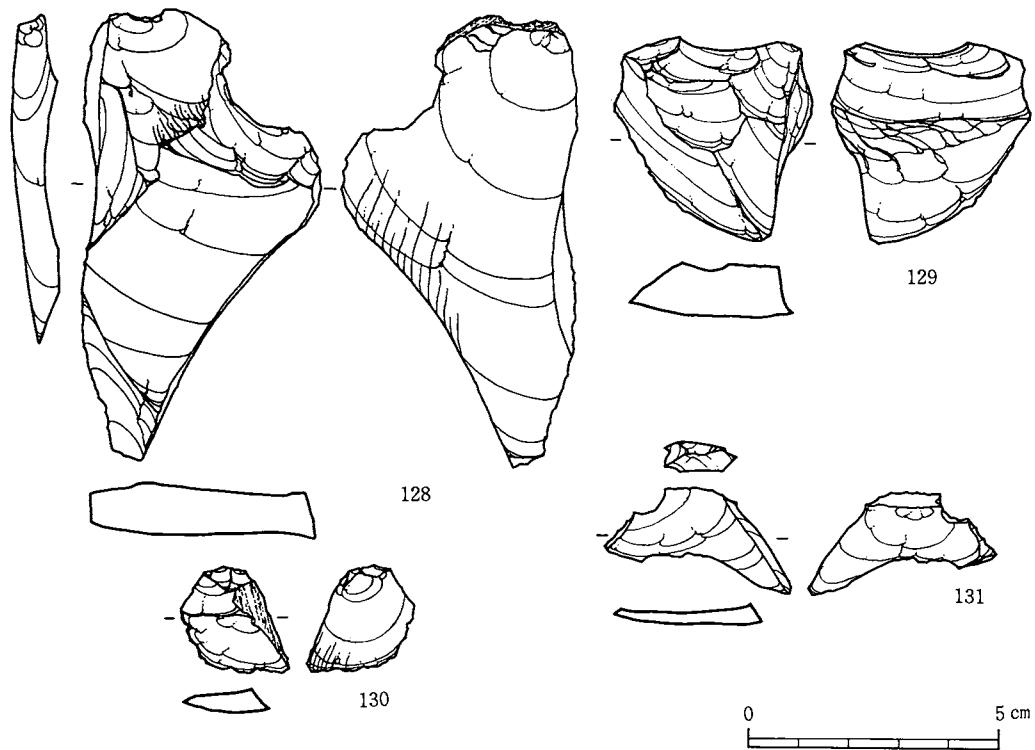
次に剥離面について観察してみよう。剥片の表裏面での剥離方向の関係では、求心的な剥離(118・119~121・127・131)と同一方向(122・123・125・129・130)、直行(124・126)、上下と横の3方向(128)がある。こうした剥離方向の違いがそのまま剥片剥離の状況を示しているのではないが、ある程度の推定は可能である。例えば、求心的な剥離のものは、113のような多



第74図 石器実測図



第75図 石器実測図



第76図 石器実測図

面体形の石核から獲得されるものや求心的剥離をおこなう板状の石核などと対応するし、同一方向のものは、単設打面の石核の場合もあるが、114や115のような石核でも生産される。また、直行するものも同様に、114や115に対応する場合もあり、さらに113のような多面体形の石核とも対応しそうである。

以上のように、六地蔵遺跡で出土した石核と剥片の間には対応関係があり、その意味から縄文時代後期における剥片生産技術の復原の一つの資料として重要なものとなろう。

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物

第5表 石器計測表

No.	器	種	石質	計測値			登録番号
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
1	石	鎌	安山岩	(1.50)	(1.41)	0.30	(0.54) 8号住攪乱
2	"		黒曜石	(1.88)	1.44	0.34	(0.66) 10号住
3	"		黒曜石	2.21	1.95	0.41	1.05 表採
4	石	錐	安山岩	(5.20)	0.80	0.60	(2.13) 8号住床直
5	石	匙	安山岩	3.23	5.75	1.18	13.63 8号住
6	"		安山岩	5.00	6.35	1.35	27.85 8号住2層
7	削	器	安山岩	6.69	7.00	2.20	85.10 1号住2層
8	"		安山岩	(3.82)	(2.10)	(0.80)	(5.32) 8号住2層
9	"		安山岩	(6.00)	(3.65)	(1.39)	(23.85) 2号住3層下部
10	"		安山岩	7.80	4.21	1.05	31.40 7号住一括
11	"		安山岩	6.40	6.18	2.00	51.65 12号住1層
12	"		安山岩	(5.20)	5.70	1.10	(32.27) III-G区一括
13	"		安山岩	(3.71)	(5.50)	(1.10)	(23.20) I-C区一括
14	"		安山岩	(7.63)	5.65	1.08	(51.48) 3号溝一括
15	磨製石	斧	砂岩	1.28	7.40	2.90	392.95 1号住1層一括
16	打製石	斧	砂岩	(6.98)	(10.02)	(1.55)	(100.72) 7号住1層
17	"		安山岩	(4.59)	(6.00)	(1.10)	(41.11) 一括
18	"		砂山	(7.30)	(7.15)	(1.40)	(95.85) 5号溝一括
19	"		安山岩	(12.70)	(13.50)	(1.50)	(244.80) 12号住1層
20	"		安山岩	(7.66)	10.27	(1.60)	(174.55) 表採
21	"		安山岩	(13.10)	12.65	(2.22)	(350.05) 表採
22	楔形石	器	頁岩	7.80	7.14	1.41	104.60 土器溜No.221
23	石	鎌	安山岩	4.96	(5.45)	1.32	(37.65) 7号溝一括
24	"		砂岩	4.55	12.30	1.30	69.85 5号溝一括
25	二次加工ある不定形石器		安山岩	5.59	7.80	2.00	61.83 1号住
26	"		安山岩	4.20	(2.61)	0.85	(9.37) 12号住1層
27	"		安山岩	2.71	2.15	0.72	2.90 12号住一括
28	使用痕ある剥片		黒曜石	2.78	1.75	0.52	1.85 1号住1層一括
29	"		安山岩	5.70	(7.50)	1.18	(45.27) 1号住3層一括
30	"		安山岩	3.68	2.68	0.81	4.77 1号住1層一括
31	"		安山岩	3.70	3.33	1.02	8.68 12号住1層
32	"		黒曜石	2.31	2.85	0.68	3.23 I-C区一括
33	磨石・敲石		安山岩	9.15	7.32	3.32	268.45 1号住1層
34	"		花崗岩	11.15	(6.55)	5.20	(544.15) 5号住覆土一括
35	"		砂岩	10.56	4.90	3.50	273.35 6号住一括
36	"		砂岩	6.62	6.18	3.10	154.20 7号住1層一括
37	"		砂山	(7.70)	(9.30)	4.90	(367.18) 8号住攪乱
38	"		安山岩	9.30	8.23	5.08	584.80 7号住1層一括
39	"		砂岩	3.60	10.90	4.50	1074.35 8号住2層
40	"		安山岩	(8.04)	(11.10)	(3.45)	(375.50) 8号住2層
41	"		砂岩	7.45	8.09	4.70	358.77 8号住攪乱
42	"		砂岩	9.12	8.90	4.20	486.10 8号住一括
43	"		安山石	7.30	8.12	3.75	305.50 9号住一括
44	"		砂岩	(9.82)	9.08	5.12	(662.65) 8号住攪乱

第三章 調査の成果

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
45	磨石・敲石	砂岩	10.40	5.90	6.10	531.80	8号住攪乱
46	"	安山岩	5.72	4.92	4.60	183.57	8号住攪乱
47	"	砂岩	5.48	3.20	2.80	66.45	8号住攪乱
48	"	砂岩	7.01	5.80	5.18	288.05	8号住2層
49	"	砂岩	6.88	5.74	4.80	270.10	8号住攪乱
50	"	安山岩	17.24	11.86	8.10	2141.30	8号住床直
51	"	砂岩	11.75	10.62	5.34	915.85	8号住攪乱
52	"	砂岩	11.98	7.89	5.00	728.00	8号住攪乱
53	"	砂岩	10.40	7.65	3.95	413.13	8号住攪乱
54	"	安山岩	9.28	7.85	2.04	213.78	9号住一括
55	"	安山岩	16.08	11.20	4.60	1312.24	9号住一括
56	"	砂岩	12.90	15.77	6.30	1689.60	10号住床直
57	"	砂岩	8.50	5.62	4.40	271.80	12号住1層
58	"	砂岩	13.55	11.18	5.40	1013.20	12号住1層
59	"	砂岩	11.45	9.00	4.27	640.25	13号住床直No.2
60	"	安山岩	6.44	4.88	2.85	110.85	13号住床直No.1
61	"	砂岩	10.84	5.90	2.70	237.85	13号住炉穴直上
62	"	砂岩	16.60	14.70	6.50	1969.53	1号土器溜No.227
63	"	砂岩	18.10	16.35	5.24	2299.15	1号土器溜No.249
64	"	安山岩	16.50	20.72	4.10	1738.50	1号土器溜No.203
65	"	砂岩	8.80	8.16	3.80	317.00	1号土器溜No.147
66	"	砂岩	19.02	14.13	5.25	1754.22	1号土器溜No.145
67	"	砂岩	11.67	10.79	5.25	880.90	1号土器溜No.276
68	"	砂岩	7.43	7.04	4.50	333.05	1号土器溜No.253
69	"	砂岩	10.70	12.15	3.50	658.70	1号土器溜No.224
70	"	安山岩	20.42	16.15	5.50	2066.60	1号土器溜No.96
71	"	砂岩	15.95	12.42	6.60	1775.55	1号土器溜No.243
72	"	砂岩	17.95	9.15	5.00	1120.30	1号土器溜No.258
73	"	安山岩	11.98	10.15	9.30	1458.35	1号土器溜No.142
74	"	砂岩	9.45	9.97	5.60	603.30	1号土器溜No.95
75	"	砂岩	12.01	10.15	6.18	1100.00	1号土器溜No.279
76	"	砂岩	9.10	7.85	4.00	397.65	1号土器溜No.285
77	"	砂岩	8.45	7.75	4.60	720.50	1号土器溜No.97
78	"	砂岩	6.95	5.92	2.90	183.57	1号土器溜No.144
79	"	砂岩	7.68	6.78	2.80	220.75	1号土器溜No.169
80	"	安山岩	(7.95)	(6.04)	(4.09)	(201.17)	1号土器溜一括
81	"	砂岩	7.28	5.45	2.20	132.10	1号土器溜No.289
82	"	安山岩	6.47	5.93	5.10	219.95	1号土器溜No.99
83	"	砂岩	7.15	5.18	2.70	130.56	1号土器溜No.280
84	"	砂岩	6.15	5.10	3.60	160.45	1号土器溜No.134
85	"	砂岩	4.74	4.77	3.70	114.05	1号住1層一括
86	"	砂岩	4.98	4.77	4.00	126.98	1号土器溜No.129
87	"	安山岩	5.50	4.25	3.80	100.18	1号土器溜No.110
88	"	凝灰岩	(5.87)	(4.10)	(3.80)	(66.04)	1号土器溜No.107
89	"	砂岩	4.70	3.30	2.90	57.70	1号土器溜No.181
90	"	砂岩	3.62	3.22	2.22	42.89	1号土器溜No.137

第2節 繩文時代後期の遺構と遺物

No.	器	種	石質	計測値				登録番号
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
91	磨製・敲石	砂岩	砂岩	10.80	5.55	4.30	325.32	1号土器溜No170
92	"	砂岩	砂岩	7.70	5.12	3.40	197.95	1号土器溜No158
93	"	砂岩	砂岩	6.68	7.80	2.45	191.15	谷部No.3
94	"	凝灰岩	10.75	10.60	5.90	726.20	谷部No.15	
95	"	砂岩	(9.15)	(10.48)	(5.96)	(841.01)	谷部No.29	
96	"	安山岩	11.59	9.89	5.60	757.70	谷部No.1	
97	"	安山岩	10.60	10.40	6.78	970.80	谷部No.14	
98	"	砂岩	(10.65)	(8.85)	4.90	(615.72)	谷部No.7	
99	石皿・台石	砂岩	18.16	25.80	6.42	4915.00	3号住床直	
100	"	安山岩	18.45	20.33	8.63	3665.00	7号住一括	
101	"	砂岩	10.70	15.60	5.19	1290.55	6号住一括	
102	"	砂岩	20.50	13.42	8.23	3795.00	7号住2層	
103	"	砂岩	23.50	30.58	6.57	7575.00	8号住攪乱	
104	"	砂岩	13.72	18.99	8.13	2520.78	8号住床直	
105	"	安山岩	(11.20)	(10.97)	(6.95)	(897.40)	10号住炉上部	
106	"	砂岩	27.87	12.29	3.62	1434.84	1号土器溜No.284	
107	"	砂岩	14.30	13.89	5.75	1687.85	1号土器溜No.251	
108	"	砂岩	14.23	17.54	4.97	1909.13	谷部No.27	
109	"	安山岩	17.10	19.55	5.12	2117.75	I-C区攪乱一括	
110	"	安山岩	37.16	45.74	20.40	42000.00	農道脇	
111	"	安山岩	18.70	56.80	21.55	33600.00	4号住床直	
112	"	砂岩	(43.00)	(31.20)	(15.80)	(25200.00)	谷部No.15	
113	石核	安山岩	4.19	4.20	1.90	34.30	1号住1T	
114	"	安山岩	6.75	5.91	4.65	195.87	2号住攪乱上部	
115	"	安山岩	8.91	12.42	5.18	695.15	1号土器溜No.287	
116	-	-	-	-	-	-	117+118接合	
117	石核	安山岩	12.00	11.72	4.20	502.05	3号溝一括	
118	剥片	安山岩	12.75	11.00	2.97	288.85	3号溝一括	
119	"	安山岩	(2.70)	3.63	0.90	(7.20)	1号住1層一括	
120	"	安山岩	2.77	2.61	0.67	3.15	1号住3層一括	
121	"	安山岩	2.00	1.42	0.47	1.02	6号住一括	
122	"	安山岩	5.50	4.87	1.18	23.55	6号住一括	
123	"	安山岩	2.33	2.70	1.06	3.95	6号住一括	
124	"	安山岩	2.01	3.65	0.50	2.05	8号住一括	
125	"	安山岩	(6.80)	(5.60)	(1.50)	(32.15)	9号住一括	
126	"	安山岩	3.50	4.75	2.12	29.70	9号住一括	
127	"	安山岩	5.01	5.00	1.20	22.11	9号住一括	
128	"	安山岩	9.00	5.75	1.25	43.70	12号住1層	
129	"	安山岩	4.00	3.99	1.40	16.05	13号住1・2層一括	
130	"	安山岩	2.10	2.13	0.61	1.60	1号土器溜一括	
131	"	安山岩	2.17	3.75	0.60	2.05	1号土器溜一括	

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代は、黒褐色土層である第Ⅲ層が包含層となり、遺構の覆土もこの土が主体をなしている。しかし、遺構の確認は、褐色土層（第Ⅳ層）でおこなった。確認された遺構としては、土坑と埋葬施設の二つがあり、それらは大きく3個所に偏在・分布している（第77図）。それは調査区の南西隅にみられる遺構群（土坑2基）とほぼ中央部にある遺構群（埋葬施設2基）、そしてさらに北東側へ離れた遺構群（埋葬施設2基）である。

1. 土坑

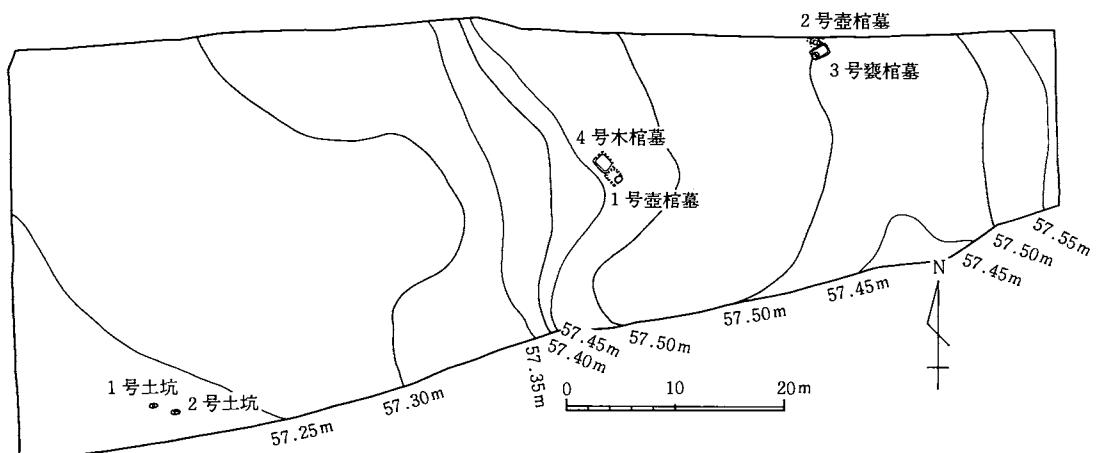
調査区の南西隅に、2基の土坑が東西に並んで検出された。西側のものが1号、東側のものが2号である（第77図）。

1号土坑（第78図上）

1号土坑は、弥生時代の遺構群の中で最も西側に位置する遺構である（第77図）。平面形態は楕円形を呈し、長軸1.05m、短軸0.63m、深さ0.25mを測る。覆土は、暗褐色土（上層）とさらに暗い色調の暗褐色土（下層）の2層に分層される。

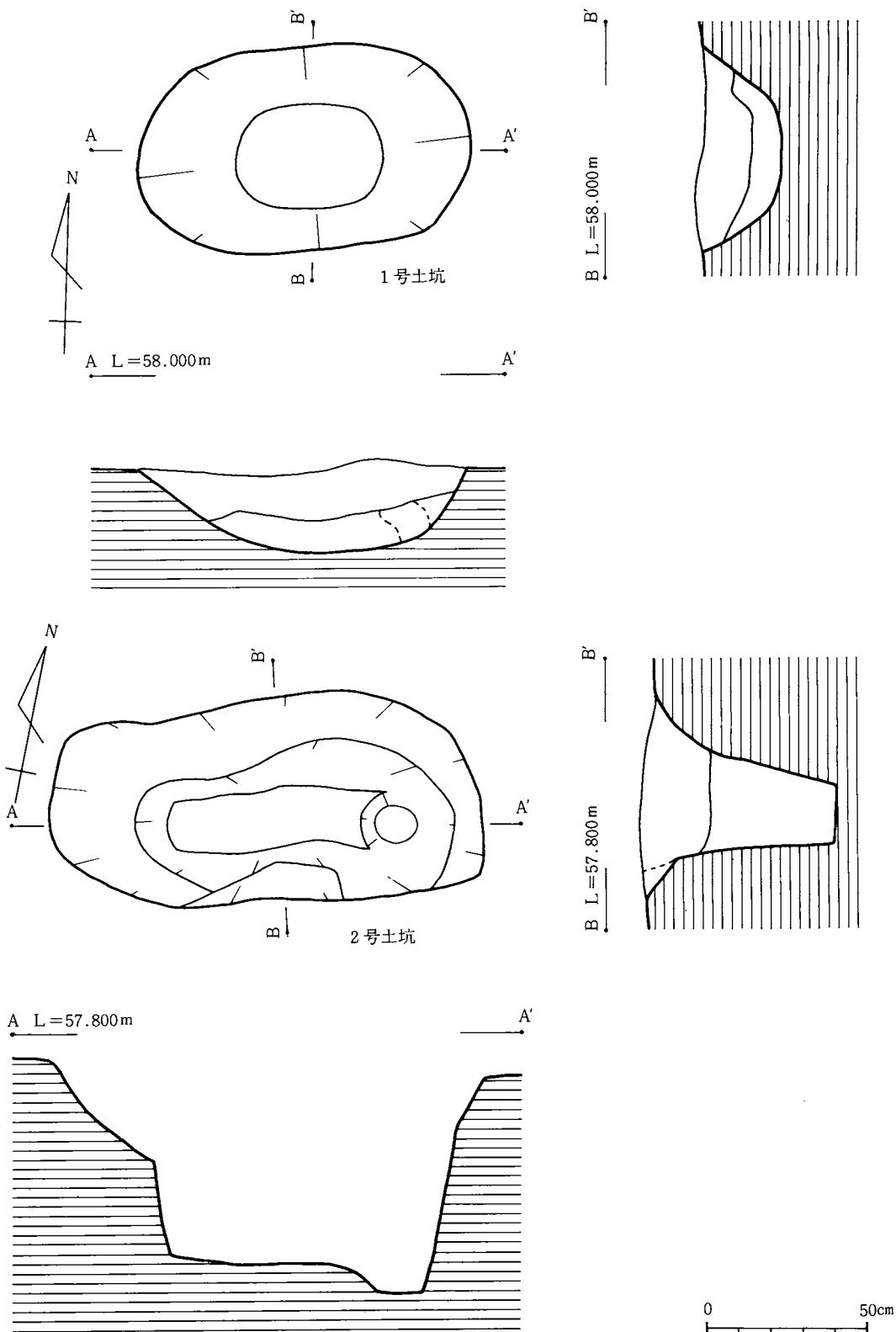
2号土坑（第78図下）

2号土坑は、1号土坑の東1.5m離れたところで検出された（第77図）。平面形態は、やや長方形に近い楕円形を呈している。その規模は、長軸1.35m・短軸0.63m・深さ0.74m、0.65mである。掘り方は2段掘りに近く、さらに底面が上下2段となる構造をとっている。覆土は、暗褐色土（上層）と褐色土（下層）の2層に分層される。



第77図 遺構配置図

第3節 弥生時代の遺構と遺物



第78図 土坑実測図

2. 埋葬施設

埋葬施設としては、甕棺1基と壺棺2基と木棺1基の計4基を検出した。そして、これらは2基ずつ2個所に分かれてみられる。すなわち、調査区のほぼ中央に壺棺と木棺の2基と、そこから北東へ約20m離れたところにある甕棺と壺棺の2基である（第77図）。

1号壺棺墓（第79図上・第82図1）

1号壺棺墓は、調査区の東半分に多く点在していた倒木痕の土層確認用試掘坑掘削時に検出された。したがって、土坑部分のほとんどを欠いている。検出された位置は、調査区のほぼ中央部にあり、後ほど述べる木棺墓と共に1群をなしている（第77図）。

上記した理由によって、壺棺を埋設した土坑の構造をすべて詳らかにすることはできないが、その平面形態が長方形を呈していることは他の埋葬施設との兼ね合いからも充分推定可能である。したがって、こうしたことを念頭に置けば、長方形の平面形態を呈し、さらにその底面から斜めに壺棺埋設用の横穴が穿たれるという土坑の構造を推定できる。

埋設された壺（第82図1）は、口径19.8cm、器高39cmを測る。胴部は丸みをもち、その最大径は中ほどよりもやや上位にあって27.4cmを測る。胴部上位には刻み目の凸帯が巡り、その部分から頸部まで急に内傾して肩をなす。その肩の部分と口縁部には籠状の工具での浅い削りによる豊穣が観察される。この部分では赤色の彩色を残していないが、それに関係する豊穣であろうか。ただ、全体的に彩色が観察される部分がないため、その存在を確認する手立ては無い。底部は、凸レンズ状に張り出している。

2号壺棺墓（第79図下・第82図2）

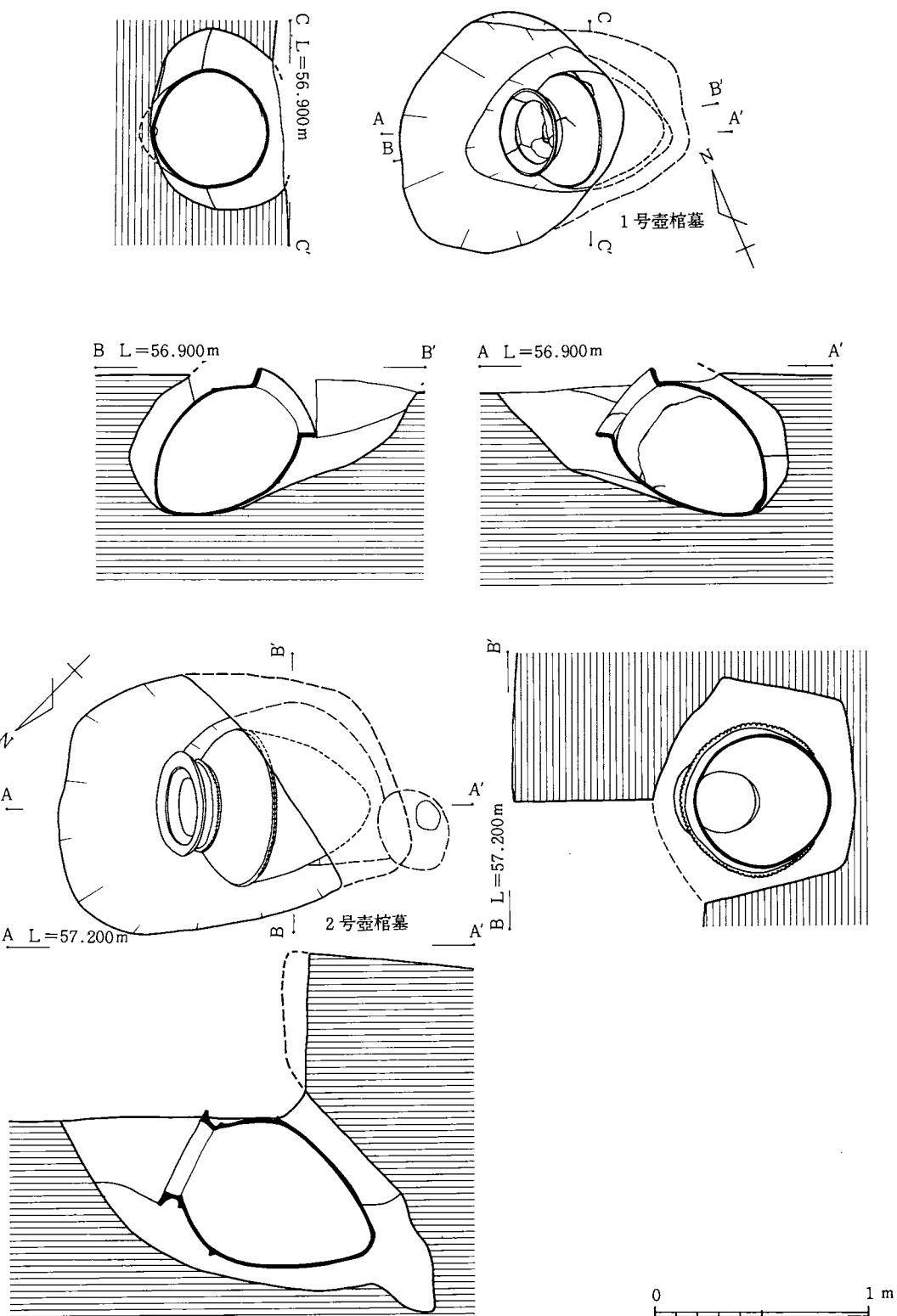
2号壺棺墓は、調査区の北東隅に位置し、次に述べる甕棺墓に隣接して作られている（第77図）。壺棺埋設用の土坑は、全体が大きく壊されているために詳しくは判らないが、1号壺棺同様に平面形態が長方形を呈し、その底面から斜めに掘られた埋設用の横穴をもつという構造をとることが推定できる。

埋設された壺（第82図2）は、外口径25.2cm、内口径18.6cm、器高45cmを測る。口縁の形状は、口唇部が発達し、内側と外側に突出した鋤先状を呈する。胴部は丸みをもち、その最大径は、中ほどよりもやや上位にあって36.6cmである。刻み目凸帯は、頸部と胴部上位に2条巡り、胴部は下位の凸帯から急に内傾し肩をなしている。底部は、凸レンズ状に張り出す。調整は、胴部上半部で比較的丁寧な撫で（僅かに刷毛目を残しているが）があり、胴部下半部では籠状工具による磨きが観察される。

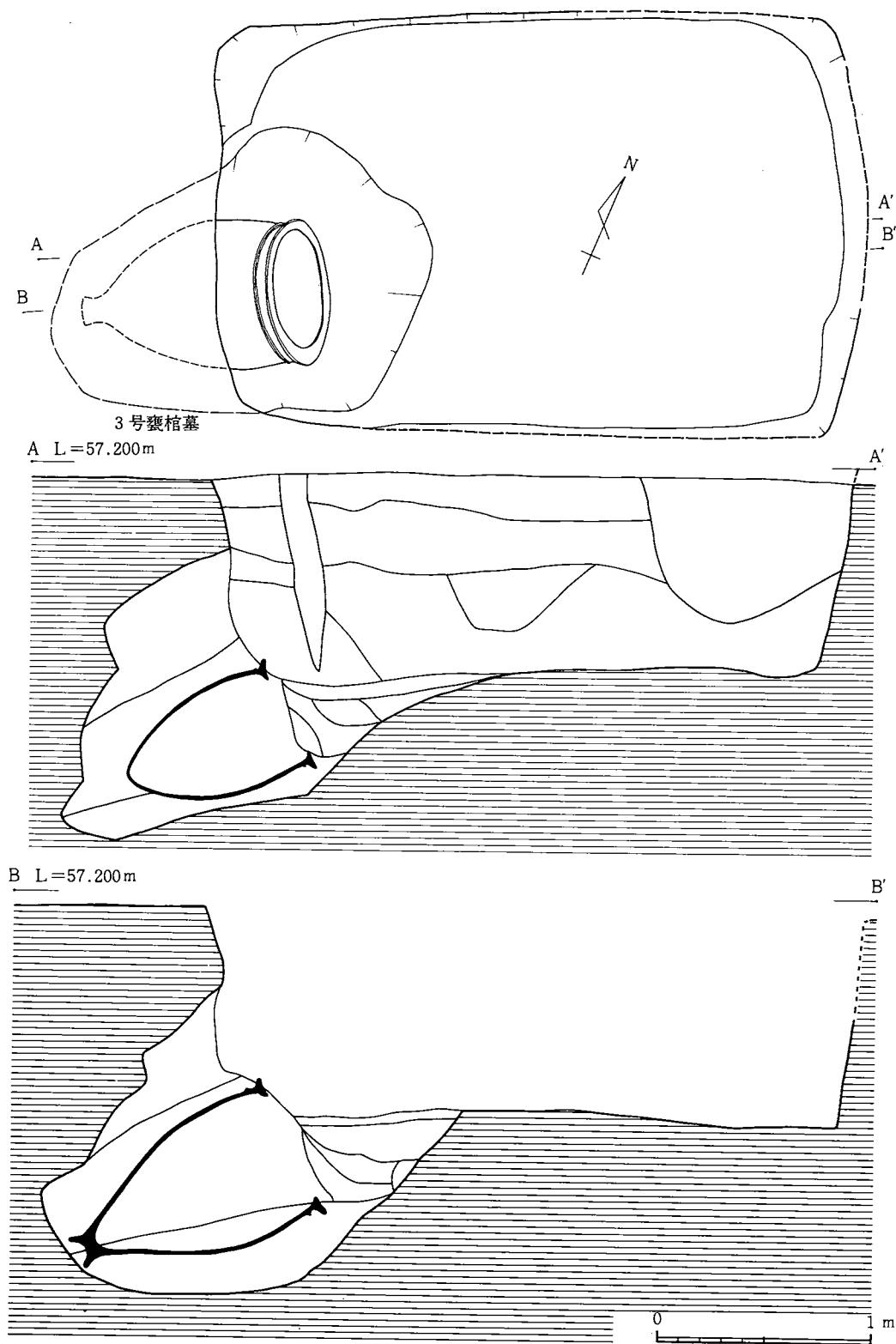
3号甕棺墓（第80図・第82図3）

3号甕棺墓は、2号壺棺の南にあり、それと接するようにして造られている（第77図）。甕棺埋設用の土坑は、平面形態が隅丸の長方形で、その底面の隅から斜めに穿たれた横穴をもつ構

第3節 弥生時代の遺構と遺物



第79図 壺棺墓実測図



第80図 壺棺墓実測図

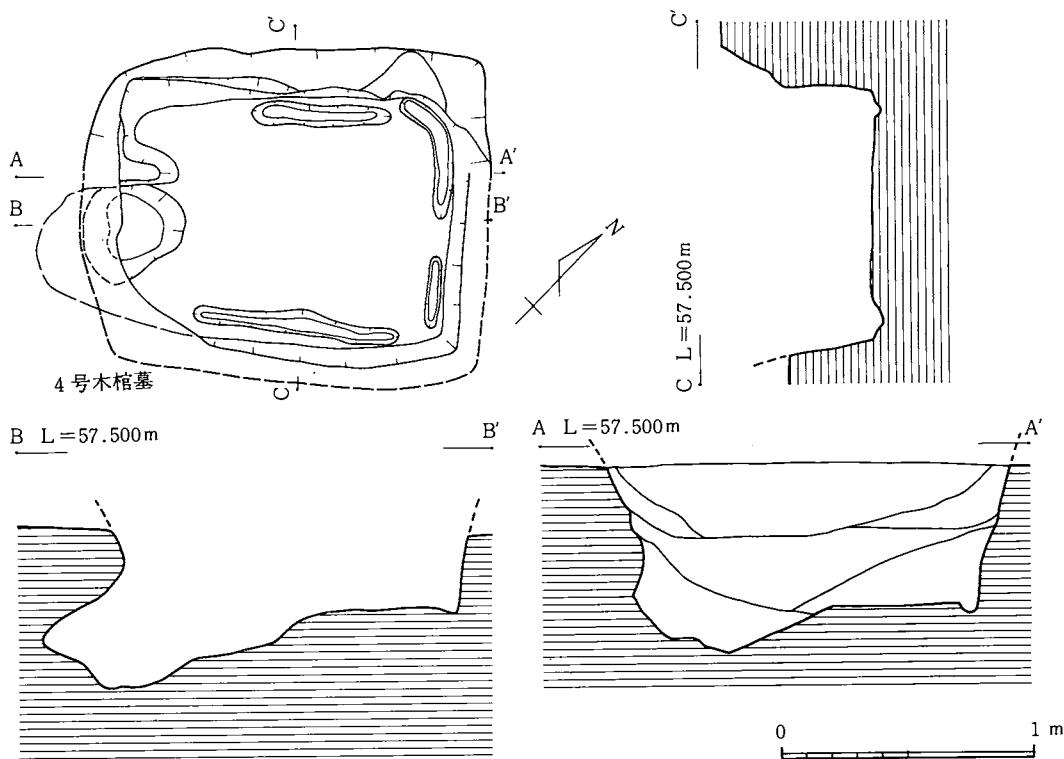
造で、その横穴内に葬棺が入れられている（第80図）。長辺3.05m、短辺1.95m、深さ0.92mを測り、横穴は上端線から外へ0.78mのところまで掘り込まれ、その底面は、確認面下1.69mにある。

埋設された土器（第82図3）は、肉厚の脚がつく台付き甕で、外口径34.2cm、内口径26.4cm、器高54.2cmを測る。口縁は、口唇部が外へ突出し、しゃくれながら内傾している。胴部は卵形を呈し、土器の最大径はその上位にあって33.8cmである。凸帯は、頸部直下に1条巡る。器面の調整は、丁寧な撫でによっている。また、器面では部分的に煤状の黒い付着物も観察される。器面の黒い彩色の残存であろうか。

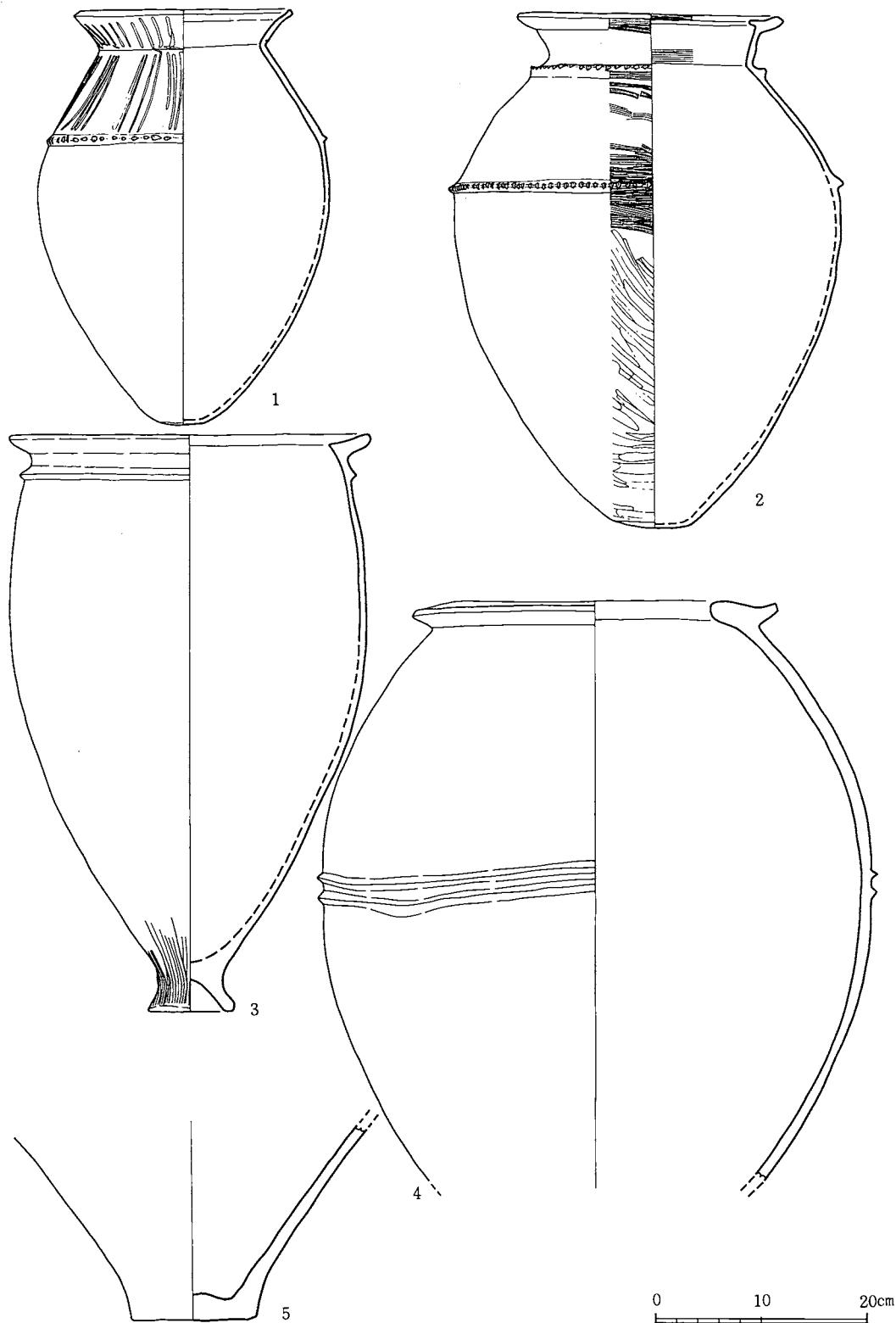
4号木棺墓（第81図）

4号木棺墓は、1号壺棺墓の北西にあり、それと主軸を同じくしながら接するように造られている（第77図）。土坑の構造は、上記している3号甕棺の埋設用土坑のものと全く同じ作りで、長方形の平面形態と底面隅より斜めに掘り込まれた横穴という二つの特徴を備えている。大きさは長辺3.26m、短边2.72m、深さ1.18mで、横穴は上端線から40cm外側へ張り出し、その底面は確認面下1.7mのところにある。底面には下端線に沿って幅16cmで深さ8cmの細長い溝が巡っている。

なお、この木棺墓が所属する時期については、共伴する土器を欠いているので明確ではない



第81図 木棺墓実測図



第82図 弥生式土器実測図

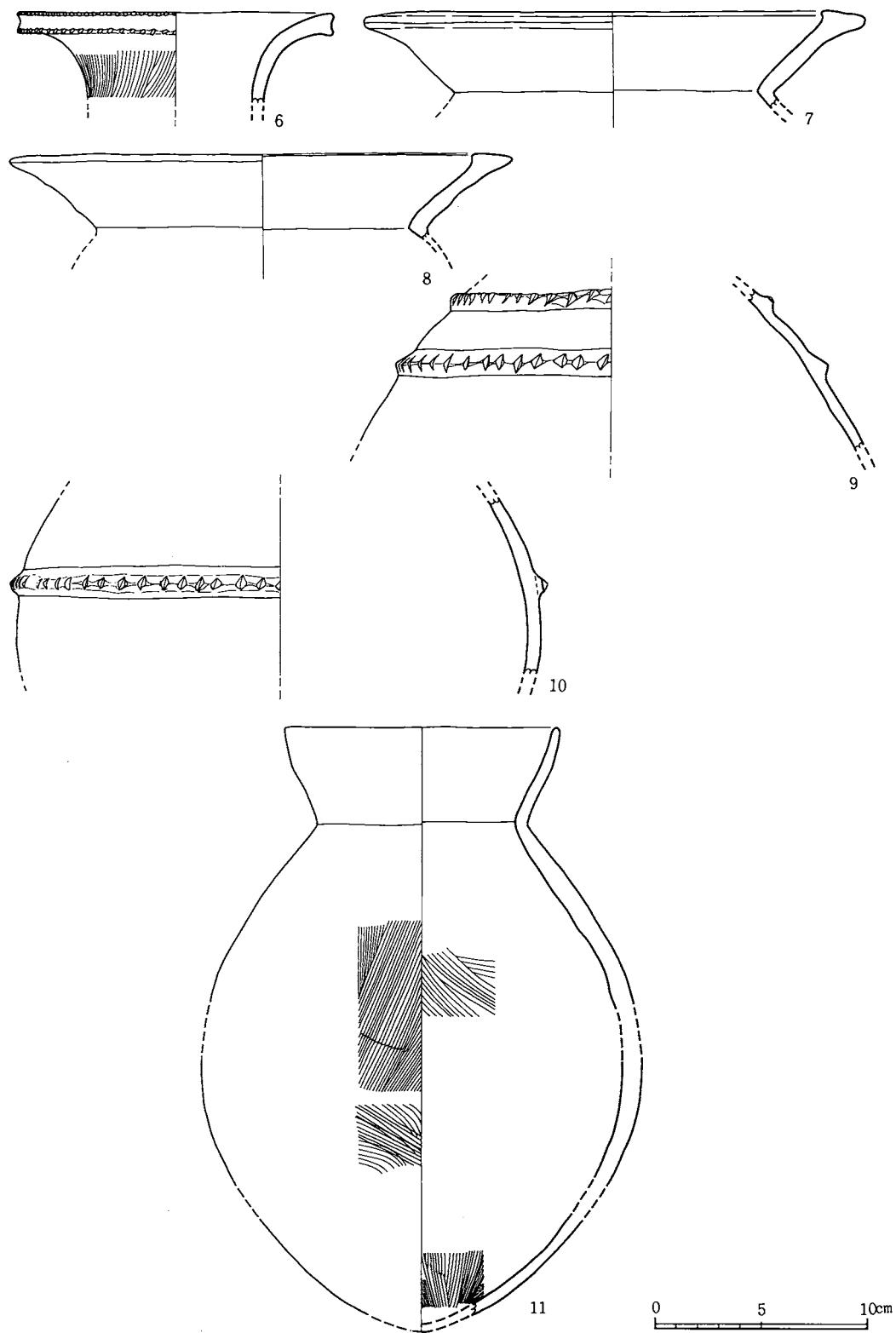
が、その構造が他の埋葬施設のそれと近似している点や1号壺棺墓と同じ主軸という点から、常識的には上記してきた埋葬施設とはほぼ同時期とする方が妥当であろう。

3. 遺構外出土の遺物（第82図4～第85図26）

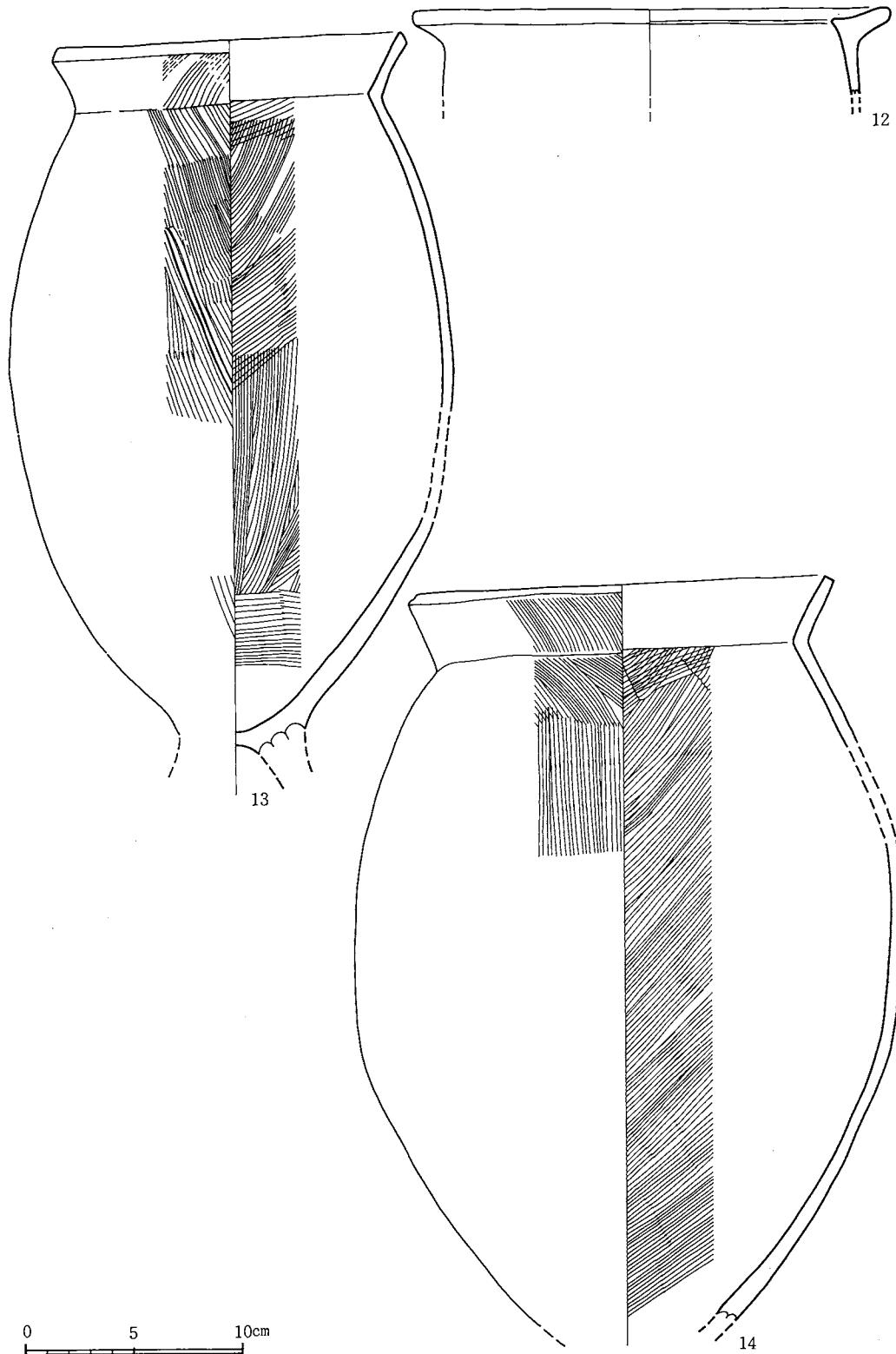
弥生時代の遺構や遺物が集中的に検出された個所は、調査区中央部から東側にかけてで、1号～4号の埋葬施設が分布している範囲であった。しかしながら、この一帯は次節で述べる歴史時代の溝状遺構や土坑、そして歴史時代におこった倒木の痕跡などによって大規模に破壊されていた。また、同様の運命を辿った包含層や遺構もいくつかあったと思われ、その結果、歴史時代の遺構や痕跡中から多量の弥生時代関係の遺物が出土したのであろう。したがってここでは、すべての資料を提示することはせず、比較的残りの良い資料に限って図示するに留めた。

4は、溝状遺構の覆土上層から出土した甕棺で、5は、4の底部である。口唇部が発達して内外に突出し、胴部が球形に張り出して最大幅の部分に2条の凸帯が巡るという器形をとっている。外口径34.6cm、内口径21.8cm、器高71.4cm（推定値）で、最大幅は胴部中位にあって41.8cmを測る。6～8は、壺形土器の口縁部である。7と8は同一個体と考えられるが、口唇部が肥厚している。9と10は、壺形土器の胴部で、1条ないし2条の刻み目凸帯が巡っている。11は、溝状遺構内より出土した完形に近い壺形土器である。口縁部は内湾しながら外反し、胴部は球形を呈している。口径25.8cm、器高56.8cmで、その最大径は胴部の中位にあって、41.6cmを測る。12は、口唇がしゃくれて内傾した口縁部の甕形土器である。13・14は、台付き甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、長胴化して最大幅が胴部の中位にある。恐らく長く伸びた脚台が付く土器であろう。15・16・17は、鉢形土器である。15・16には「く」の字に屈曲した口縁部が付く。15は、口径29.6cm、器高約28cmで、最大径33.2cmが胴部の中位にある。16は、口径30.6cm、器高約28cmで、最大径33.5cmが胴部中位にある。17は、口径27cm、器高20cmで、最大径は口縁部の下にあって29.3cmを測る。18～25は、底部及び脚台である。26は、溝状遺構に混入していた太形蛤刃の磨製石斧の刃部である。表面には石器製作時の敲打痕が残ってはいるが、丁寧に研磨を受けている。

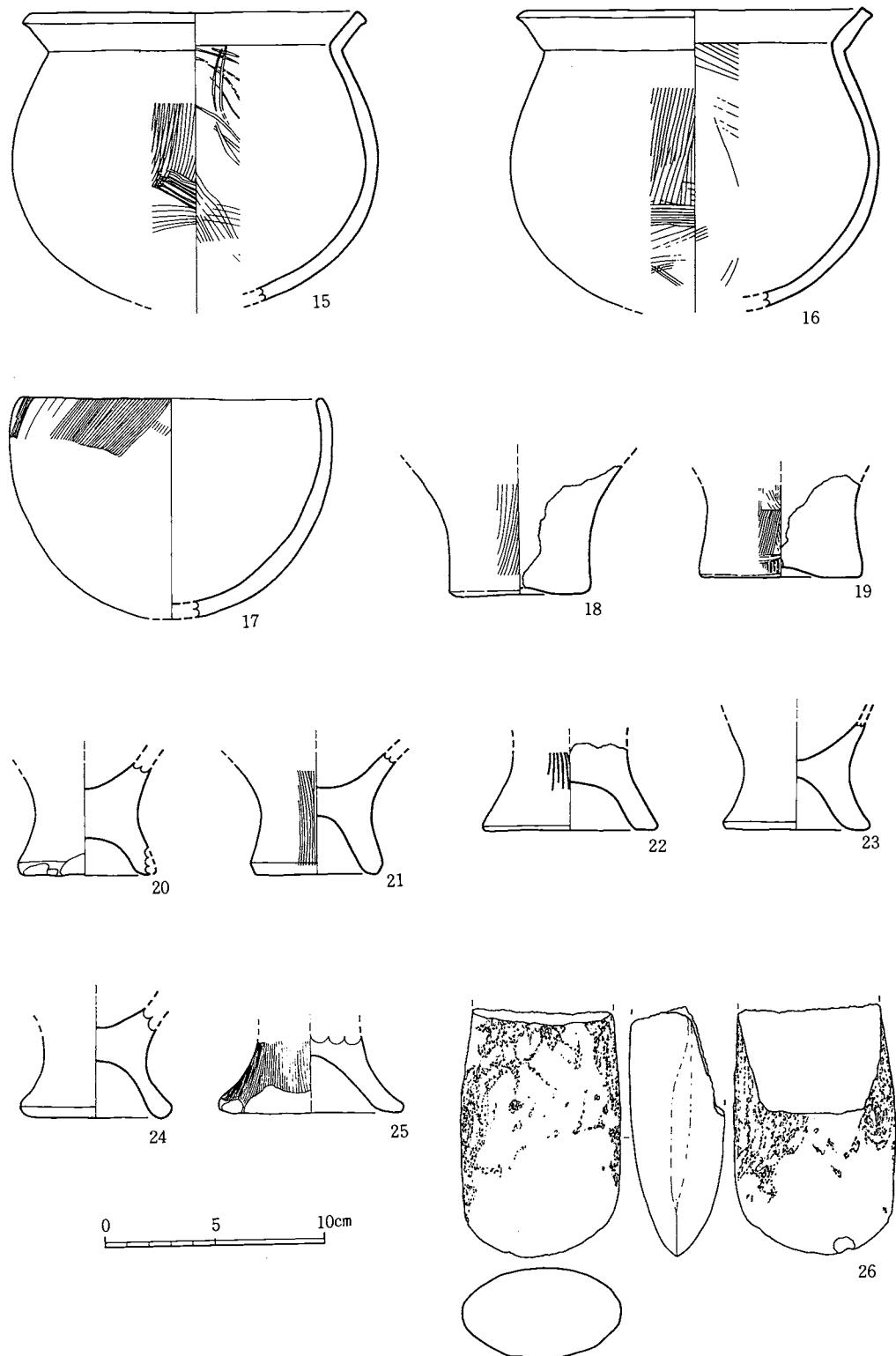
以上のように、調査区内から出土した弥生時代の遺物を概観すれば、中期の中頃から後期末にかけての比較的長い時期差が認められる。恐らく、この調査区周辺にはこの時期幅のそれぞれの時期に対応する各種の遺構が存在するものと考えられる。



第83図 弥生式土器実測図



第84図 弥生式土器実測図



第85図 弥生式土器・石器実測図

第4節 歴史時代の遺構

すでに第II章第2節「遺跡の概観」の中でも触れていたように、六地蔵遺跡周辺には中世～近世初期の頃の集落があったという伝承が残されている。そして、そのことを示すかのように第1次調査の際にこの時期の墓地が検出された。そして、今回の調査でもそうした伝承に関係付けられる遺構が検出された。

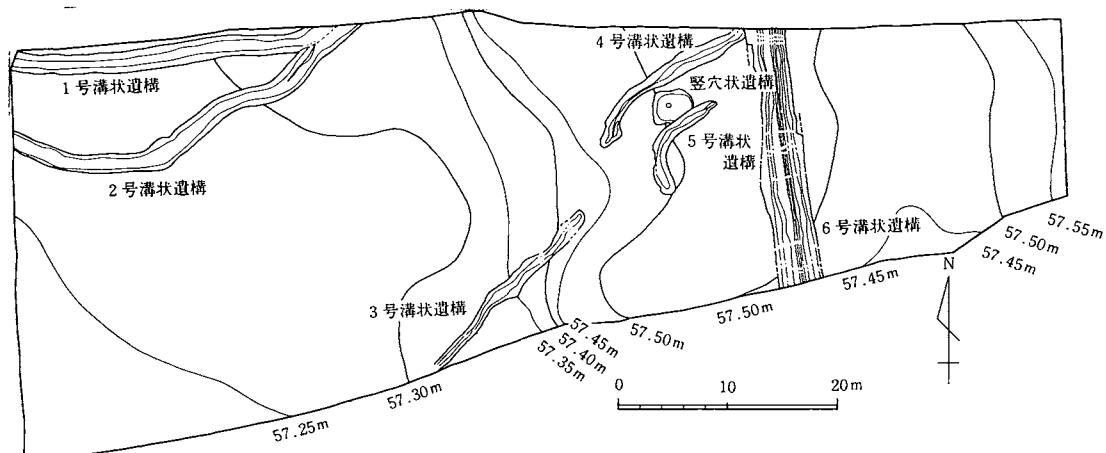
遺構としては、溝状遺構と大型の竪穴状土坑がある。溝状遺構は、調査区の北西隅に2本、調査区の中央部を斜行するように並ぶ2本とその1本と平行して走る1本、そして調査区の東側を南北に走る1本の計6本が検出された。また、竪穴状土坑は、調査区中央部に平行して走る2本の溝状遺構にはさまれて検出されている（第86図）。

1号溝状遺構（第87・89図）

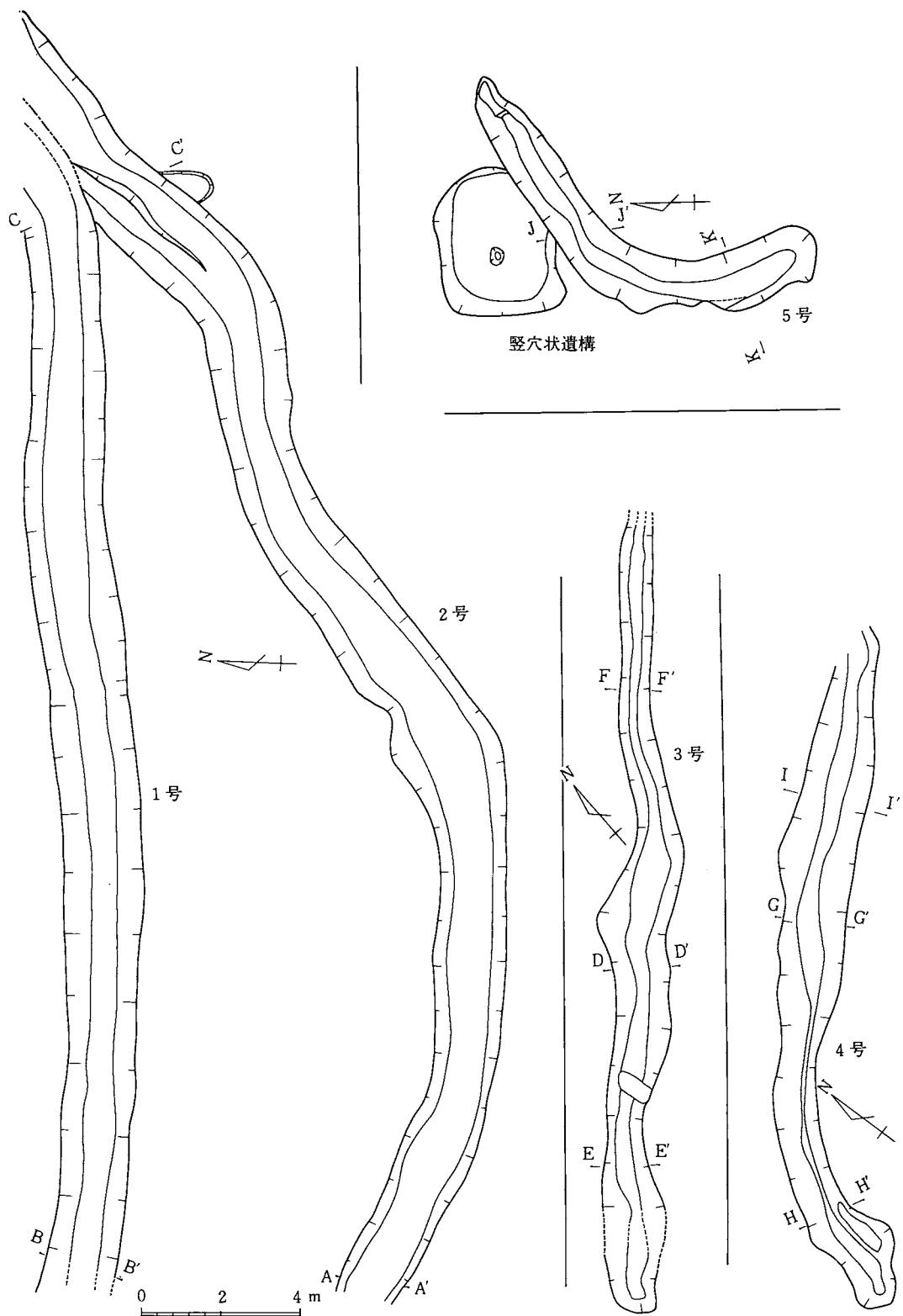
1号溝状遺構は、調査区の北西隅で調査区の北辺にそって東西に走り、その後調査区外へと逃げている（第86図）。溝の横断面形は逆台形を呈し、その幅は2m前後、深さは0.8m前後である。遺構内には幾枚もの硬化面が残されている（第89図）が、それぞれが溝状遺構全域にわたってみられるというわけではなく、あくまで跡切れ跡切れである。したがって、調査時においてそれらを面的におさえることはできなかった。なお、切り合った2号溝状遺構との関係は、土層観察によって1号溝状遺構が2号を切っていることがはっきりしている。

2号溝状遺構（第87・89図）

2号溝状遺構は、1号溝状遺構の南側にあり、その東側で1号に切られてさらに調査区外へと伸びている（第86図）。溝の横断面形は、逆台形を呈し、幅1.8～2.2mで深さ1.4～2.0mである。1号溝状遺構同様に、この遺構内にも何枚かの硬化面があるが、それぞれが遺構全域に広



第86図 遺構配置図



第87図 溝状遺構実測図

がることはない。したがって、調査ではそれらを面的におさえることはできなかった。

3号溝状遺構（第87・89図）

3号溝状遺構は、調査区中央部の南辺から現れて斜行し、中ほどで切れている（第86図）。溝の横断面形は、逆台形ないし深めの皿状を呈し、その幅0.8~1.6mで深さが0.3m前後である。硬化面は、遺構の肩の部分にのみ認められる（第89図）が、それは跡切れ跡切れに続くだけで連続していない。したがって、その硬化面を調査時に面的におさえることはできなかった。

4号溝状遺構（第87・89図）

4号溝状遺構は、3号溝状遺構に連続するかのように、調査区の中央で始まって北辺へ逃げている。その方向は、3号と同様に斜行である（第86図）。溝の横断面形は、逆台形を呈し、その幅1.1~2mで深さは0.4~0.64mを測る。硬化面はあまり存在していなかった（第89図）が、調査時の所見では部分的に認められている。

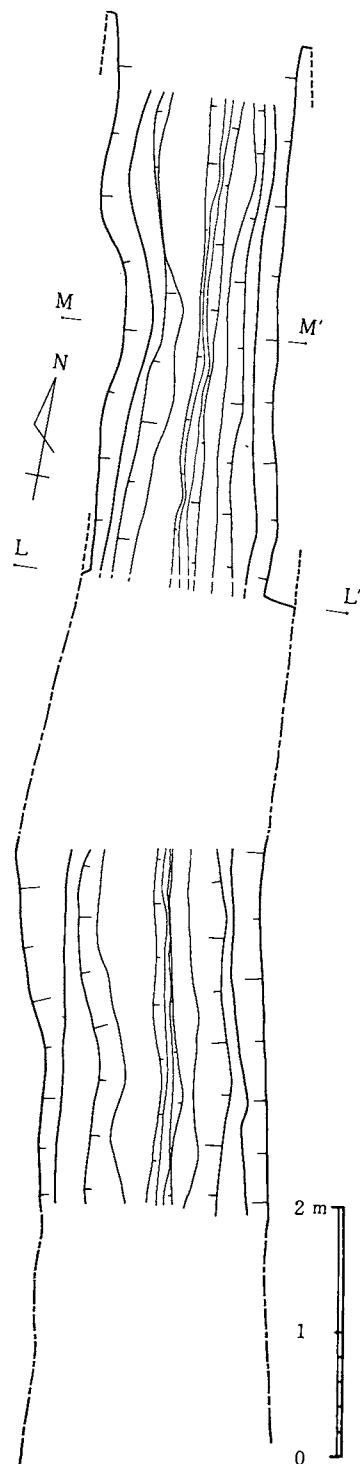
この遺構と3号溝状遺構との関係では、その規模や断面形が似通っているし、その走る方向がほぼ同一であるという共通点を見出すことができる。すなわち、これは二つの遺構の同時性を示すものであり、こうした意味からも、両者は時期的にも機能的にも一連の遺構としてとらえることが可能であろう。

5号溝状遺構（第87・89図）

5号溝状遺構は、4号溝状遺構とほぼ平行して走っている（第86図）。その長さは他の遺構と比べても短く、しかも弧を描いている。溝の横断面形は逆台形を呈し、その幅1.2mに対して深さ1.7mと深めの溝である。硬化面は、遺構内に何枚も確認されるが、遺構全域にわたって面的に連続するものではない。

6号溝状遺構（第88・89図）

6号溝状遺構は、この種の遺構の中では最も東側で検出された（第86図）。しかも規模は遺構中で最も大きく、その

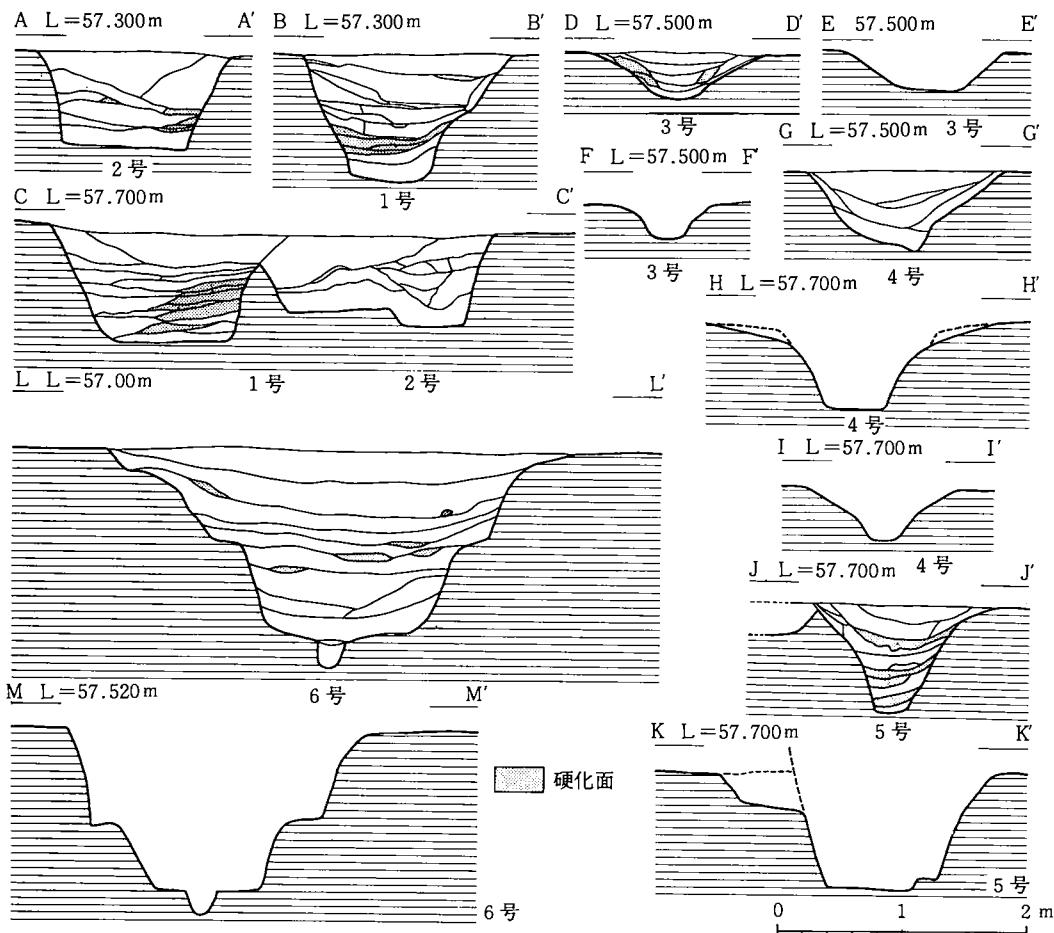


第88図 6号溝状遺構実測図

構造も特異である。遺構は、調査区を東西に分断するかのようにほぼ南北方向に走っている。掘り方は溝の中ほどで犬走り状の段を設けた台形で、その底面の中央部には幅10cmで深さ20cmの1条の溝がある（第89図）。これは、砂が埋土の主体であり、水通し用と考えられる。規模は、幅約2mで底面までの深さ1.5mを測る。硬化面は、連続しないものが遺構中でも数枚認められるが、底面では極めて良く発達している。このように、規模や構造などからもこの溝状遺構は、他の遺構とは一線を画されるものと考えられるが、詳細については充分な検討が必要であろう。

豊穴状遺構（第87図）

隅丸の方形に近い平面形態を呈する遺構が、5号溝状遺構に切られた状況で検出された。1辺が3.6m前後で、深さ0.2m前後である。底面の中央部近くには上部に焼土をもった径40cmの炉穴状の穴が穿たれているが、底面は焼けていない。また、硬化面の発達もない。覆土は単層で、歴史時代の遺構のそれと同質である。これは、性格不明の遺構である。



第89図 溝状遺構土層断面・断面図

第IV章 総括

発掘調査の結果、六地蔵遺跡は、縄文時代草創期・早期から中・近世におよぶ多種多様な遺構・遺物が包含された複合開地遺跡であることが判明した。それは、縄文時代草創期・早期にあっては包含層、縄文時代後期にあっては堅穴式住居跡や土坑などの本格的集落跡、弥生時代にあっては集落跡と墓地、中・近世にあっては墓地と溝状遺構という内容であった。そこで、今回の報告の主体をなす縄文時代について若干の私見を述べて、総括としたい。

1. 縄文時代草創期・早期について

六地蔵遺跡からは、少なくはあるが縄文時代草創期・早期に層する遺物が出土している。その内訳は、草創期の資料として細石核用素材1点、早期の資料として押型文土器1点、条痕土器2点、石鎌1点であった。

中九州の縄文時代草創期や早期の遺跡は、台地や丘陵地、それに山部中腹の狭い平坦面に立地することが一般に知られている（木崎 1985）。ところが、六地蔵遺跡は、そうした既知の概念からは程遠く、自然堤防状の地形といえ大河川の氾濫原上に立地している。例えば、この事実を例外的に扱うことも可能であろうが、先土器時代の集落との関係から積極的な評価を下すことも可能である。すなわち、河川における漁撈開始時期の問題である。と同時に、これは集落の季節性問題を伴うことであり、当該期の中九州における集落・生業研究の基礎資料になると考えられる。

中九州西部の先土器時代遺跡は、その立地の特徴によって台地や丘陵地上に占地するもの（台地・丘陵地占地型遺跡）と、山地中の狭い平坦面や山頂付近に占地するもの（山地占地型遺跡）に大別される。私は、この二つの遺跡型の関係について、前者の遺跡の一部を中心的な遺跡に、前者の遺跡の一部と後者の遺跡を派生的な遺跡とみる見解を示し、人間集団の移動性と回帰性の問題について何等かの接近を試みた（木崎 1985）。

一方、この先土器時代遺跡のあり方に類似する時代として、上記したように縄文時代早期がある。細部については台地・丘陵地の遺跡内で多少の違いがあるとは言っても、その本筋ではほとんど変化がない。集落の形態や、そこから発する移動性や回帰性などの人間集団の行動が、その二つの時代で程度の差はあるにしても本筋ではあまり変化を生じていないことを傍証するかのようである。またこの種のことは、熊本県狸谷遺跡（木崎 1987）や福岡県柏原遺跡群（山崎・小畠 1983、山崎 1987、1988）などの分析からも、季節性や移動・回帰性という考え方で示されているところもある。

このように、集落や人間集団の行動という点で、九州の先土器時代と縄文時代早期とは質的に共通性をもっていることが判るが、今回六地蔵遺跡で確認された事実は、当時の九州における

る縄文文化本質問題にとってまた新たな資料であろう。それは、河川に接近した場所への生活舞台の拡大という事実であり、すなわち携帯用漁具や定置漁具などを使用した川魚の捕獲活動の本格化を示すものかもしれない。このことを示す例として、熊本県闇谷遺跡（鶴島・和田 1988）で出土した釣針状の小型石製品の存在も見逃せない。

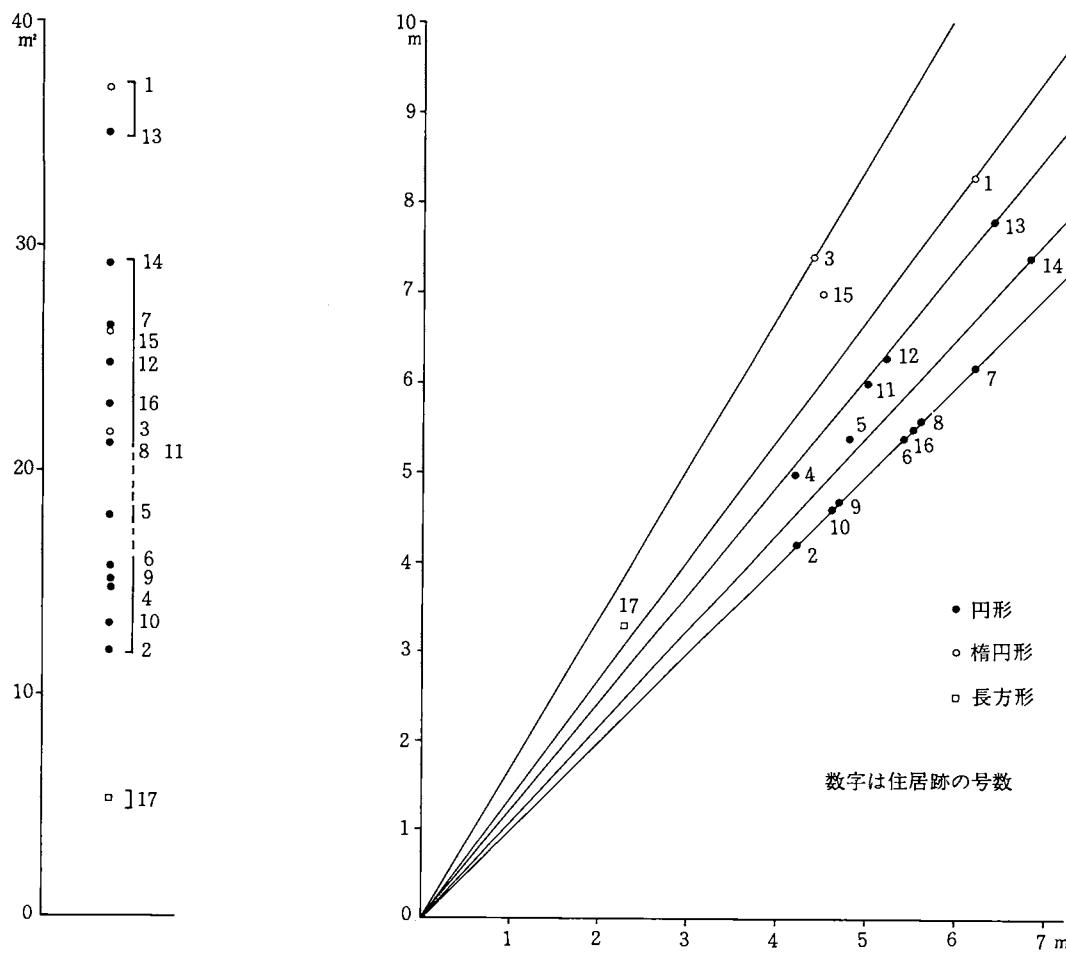
いずれにしても、先土器時代から縄文時代早期へ、縄文時代早期から前・中期へ、縄文時代前・中期から後・晚期へと、確実にその背景を違えてきたかに見える九州の原始社会を問題にする時、こうした遺跡の立地への目配りは当然必要となってこよう。

2. 縄文時代後期について

六地蔵遺跡の中心的な時期の一つに縄文時代後期がある。遺構としては、堅穴式住居跡17基と土坑1基が確認され、この他にごみ捨て場や埋没谷の存在など、当時の集落の立地や構成について重要な資料が提起されることとなった。

そこで、まず遺構の問題について触れることにしよう。

調査の結果、17基の堅穴式住居跡を検出したが、その分布はさらに西方へ伸びており（第6



第90図 堅穴式住居跡の規模(左・床面積 右・長幅比)

図)、調査で確認した部分は当時の集落の東端であることを示している。堅穴式住居跡の平面形の種類には、楕円形と円形と隅丸胴張りの長方形があり、さらに円形は正円形と長円形に分けられる。そして、この楕円形～長円形～円形とは、その長幅比において連続した傾向をもちながらもそれぞれにまとまりが見い出せる(第90図左)。

次に、それぞれの床面積をみてみよう。大きく3群にまとめることができる。床面積が35m²を超える住居跡(1号・13号)、ばらつきがあるが30m²～10m²の範囲内にあるもの(2号～12号・14号～16号)、5.3m²と極端に狭いもの(17号)である。

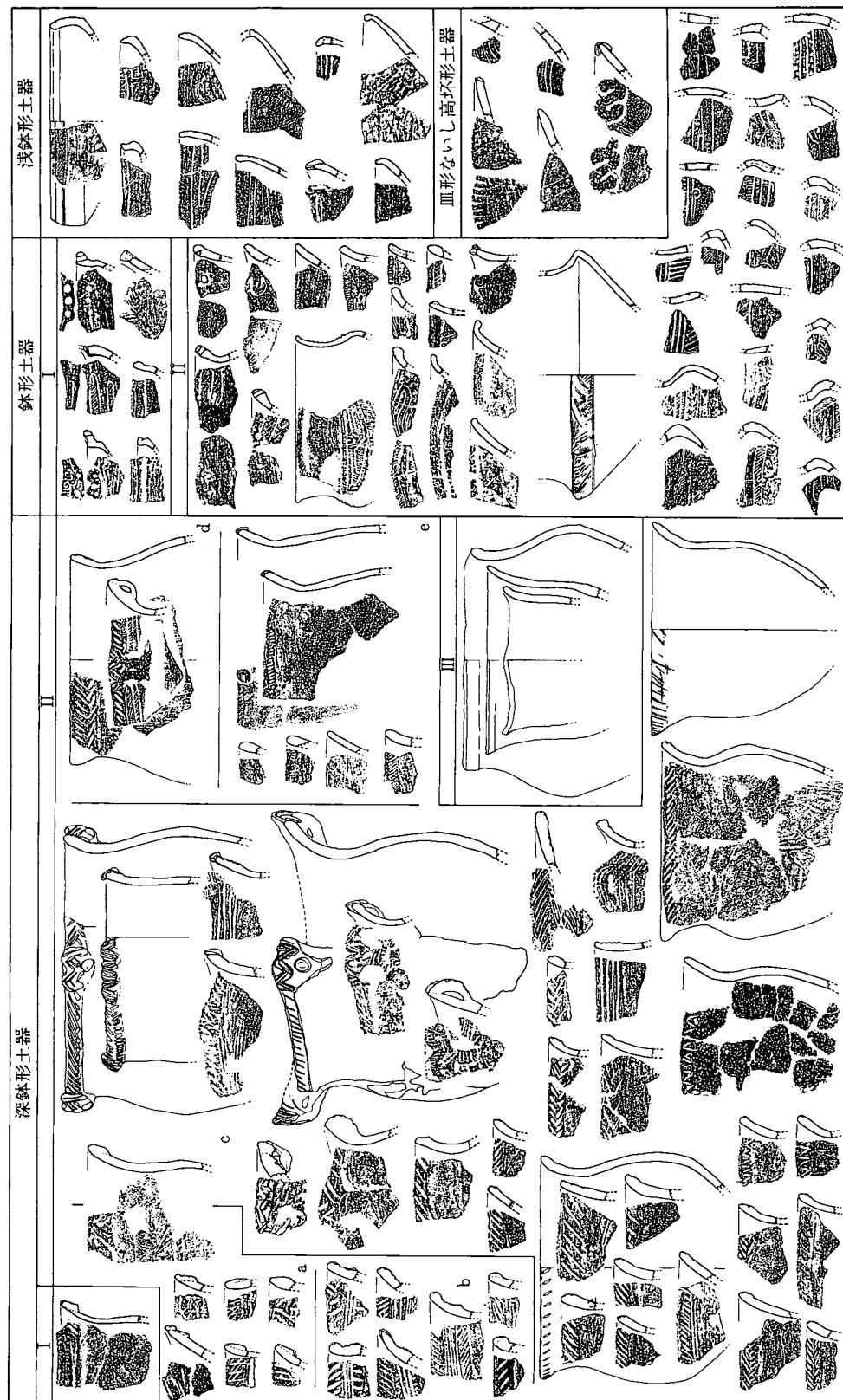
そこで、この床面積と住居跡との平面形態を総合してみよう。極端に狭い住居跡の平面形態は長方形で、円形と楕円形には前2者いずれもある。これによって長方形の堅穴式住居跡がその集落の中での位置とも関連して他の住居跡と明確に区別されるという根拠をもつ。また、1号(楕円形)や13号(円形)のように他の住居跡とは隔絶した規模のものも、やや異なった性格をもっているのかもしれない。以上のように、堅穴式住居跡にはその性格という点で大きく三つの様態があるようだ。整理しよう。大型の円形ないし楕円形住居跡、中規模の円形ないし楕円形住居跡、そして小型の長方形住居跡である。そしてこれらの住居跡は、それぞれに異なる機能を推定できる。恐らく、中規模の住居跡が標準的なものとなり、他の2様態の住居跡が特殊な性格をもつものであろう。しかし、その具体的なことについては資料不足で言及できない。

知り得る範囲での六地蔵遺跡における縄文時代後期の集落は、堅穴式住居跡と土坑、そしてごみ捨て場によって構成されている。しかし、その具体的な構成の仕方は不明であり、未掘部分にはさらに機能の異なる遺構群がみられる可能性が高く、同時併存関係も不確かであり、これをもって当時の集落の典型と見なすことは控えなければならない。ただ、確實に言えることは、集落内の住居跡に機能の点で幾つかの様態があることで、例えば17号住居跡のように位置を異にしたり、1号・13号や17号のように規模を異にするといったように、集落内に機能を異なる建物が数種類建築されていたことは確かなようである。そして、こうした集落構成は、すでに集落復原が進んでいる縄文時代早期の集落(青崎ほか 1981、木崎 1987、山崎 1987)や、調査例は少ないが中期や前期にはみられず、後期に入って現れるものである。その意味からもこの事実は重要で、後期後半から晚期前半にかけて成立する熊本県三万田東原遺跡や上南部遺跡のような大規模集落の原形となっていたものと評価できようか。

次に、土器についてみていくことにしよう。(第91図・第6表)

出土した土器は北久根山式土器に分類される土器が中心となるが、それらをみると、深鉢形土器(69.17%)、鉢形土器(25%)、浅鉢形土器(5%)、皿形ないし高環形土器(0.83%)の4形態に分類される。それぞれの形態ごとにみていく。

深鉢形土器は、大きく三つに細分される。それをI・II・IIIと呼ぶ。



第91図 土器分類図 ($S=1/8$)

深鉢形土器Ⅰは、ごみ捨て場から出土した194の土器をもって典型となす。資料が少なくて全体像は不明であるが、恐らく頸部がやや締まり、胴部上半部が僅かに張って底部へ至る器形を呈するであろう。文様は口縁部と口唇部の2箇所にあり、沈線文と連続の刺突文によっている。なお口縁部文様帶は、粘土帶の貼り付けによって頸部以下の無文部と明確に区別される。

深鉢形土器Ⅱは、六地蔵遺跡の中で主体的位置を占める土器である。口縁部が外反し、頸部が締まって胴部が僅かに膨らむ器形を呈し、橋状把手やM字状などの粘土紐が貼付される場合が多い。文様には沈線文や貝殻擬似縄文などがあり、口縁部文様帶の作出方法にも幾つかの種類があって、さらに細分が可能である。それをa～eと呼ぶ。

* II a の深鉢形土器は、9・59・88・249～251・292のように、口縁部文様帶部が段をもって明瞭に作り出されるものである。沈線文（斜行・縦位）が施文される。bは、口縁部を肥厚させて文様帶を作出する深鉢形土器である。83・88・90・147・148・160・161・191・263・267などが所属する。文様は斜行単沈線文や横走沈線文がある。cは、明確でない口縁部の文様帶に沈線文が施文される深鉢形土器である。沈線文には、斜行単沈線文・綾杉状文・逆「ハ」の字状文、横走沈線文などの種類がある。dは、明確に作出されない口縁部文様帶に貝殻擬似縄文地の沈線文が施文される土器である。209や255や262が該当する。eは、明確に作り出されない文様帶に貝殻擬似縄文や縄文が施文される深鉢形土器である。20～23・110・111・173・174・210がこれに該当する。

この形態に属する深鉢形土器には、前記しているように橋状把手や粘土紐の貼り付け文がみられる場合が多いが、すべての土器に共通する現象ではない。例えば、II a～II dでは橋状把手をもつ土器が多くあるが、II eの土器ではそうした例が見当たらないし、108のようにII cに分類される土器でも付かない場合もある。一方、粘土紐の貼り付けは、原則としてII aからII dまでの土器に付くが、II cに分類される108のように付かない可能性が高いものもあるし、橋状把手をもたずに粘土紐だけのものもある。このように、橋状把手や粘土紐貼り付けなどの装飾には、その組合せなどに複雑な様態がみられるようである。そこで、こうした様態を整理してみよう。

まず、橋状把手が付く土器をみてみると、粘土紐貼り付けが加わって同一の装飾をなすものと、橋状把手のみのものの2種類に整理できる。そして、橋状把手のみの土器には、粘土紐にかわって沈線文によるM字状表現が施文される。次に、橋状把手をもたない土器をみてみると、粘土紐が貼付される土器と貼付されずに沈線文によるM字状表現が施文される土器に整理される。以上のように、橋状把手と粘土紐貼り付けとの関係では、大きく4つの様態（貝殻擬似縄文との関係を加えれば8様態となるが）に整理できる。次に4つの様態をその特徴から関連付けてみよう。そうすれば、粘土紐貼付の2様態とM字状表現の2様態に再整理が可能であることが判る。

では、こうした装飾の組合せによる様態と土器の全体像との関係はどうであろうか。ところが、この問題は土器の装飾単位の問題に深くかかわることであり、出土した土器の中から、この問題を解決できる資料を見い出すことはできない。そうした中にあって、254は注目できる。この土器の装飾単位は、4単位ではなく、2か3の単位のいずれかである可能性が高い。そこで仮に、この土器の装飾を2単位としてみよう。そうすれば、前記していた4様態の関連問題ともあいまって、254の土器の粘土紐貼付の橋状把手に対応する部位に、粘土紐貼付による装飾がみられるという土器像が浮かび上がってこようか。そうは言ってもこれは仮定の問題で、今後の資料による追認を必要とするることは事実である。

深鉢形土器IIIは、無文土器である。器形は、土器ごとに個性が強く共通した特徴を見い出すことができない。また、他の分類土器の無文部との区別も現状では困難であり、口縁のみでの認定しか今のところ方法がない。

鉢形土器は、IとIIの2つに細分される。中に、赤色顔料が塗付された土器もある。

鉢形土器Iは、口唇部にも沈線文や連續刺突文が施文される土器で、恐らく肥厚した口縁部や口唇部と短かくて外反しない頸部から口縁部、そして肩部で折れ曲がって底部へいたるという器形を呈している。資料数としては少なく、31・72・125~127・181・187・335~337などが所属しよう。

鉢形土器IIは、口縁部と胴部に文様帶があるので、頸部から口縁部が大きく外反して胴部

第6表 遺構等別土器組成表

形態 遺構等	深 鉢			鉢		浅鉢	皿 ないし 高环	小 計	底		不 明	計
	I	II	III	I	II				平	脚		
1号住居跡	—	27	6	1	13	3	1	51	9	4	305	369
2号住居跡	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	37	38
3号住居跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
4号住居跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	14
5号住居跡	—	2	—	—	2	1	—	5	2	—	25	32
6号住居跡	—	5	—	—	3	—	—	8	1	—	42	51
7号住居跡	—	8	1	1	3	3	—	16	2	1	131	150
8号住居跡	—	51	1	3	10	1	1	67	8	16	473	564
9号住居跡	—	7	2	—	3	—	—	12	1	—	49	62
10号住居跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19	19
11号住居跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	7
12号住居跡	—	30	2	2	5	1	—	40	5	2	172	219
13号住居跡	—	3	1	—	—	—	—	4	2	1	15	22
ごみ捨て場	1	21	2	—	5	1	—	30	15	16	198	259
谷 部	—	5	—	—	4	—	1	10	5	3	59	77
そ の 他	—	54	12	3	30	5	2	106	25	8	—	139
計	1	213	27	10	78	16	5	350	75	51	1,549	2,025
%	0.17	61	8	3	22	5	0.83	100				

が強くないし丸く張り出した器形である。文様には、貝殻擬似縄文やR LないしL Rの原体の縄文があり、胴部では磨消縄文の手法がとられる場合も多い。資料が多ければ、さらに細分が可能であろう。

浅鉢形土器は口縁部がほぼ立ちぎみで、口縁部と胴部との境で強くないし丸みをもって折れて底部へいたる器形を呈している。資料に限りがあるて細分は困難であるが、沈線文や貝殻擬似縄文や縄文が施文されるものや無文がある。

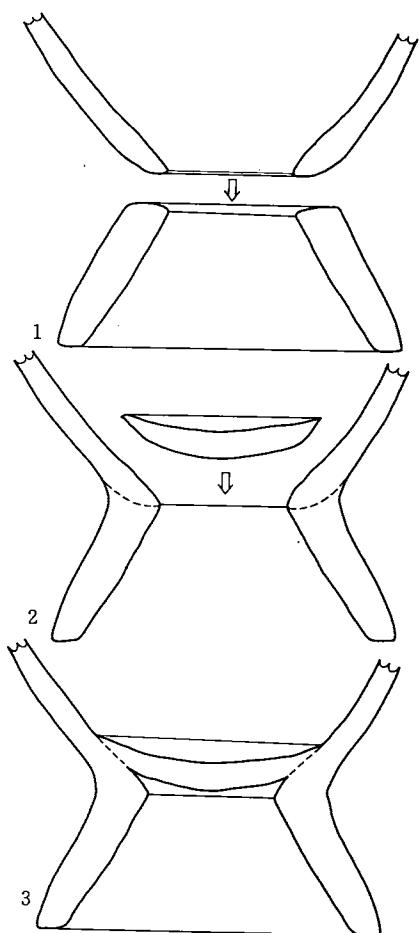
皿形ないし高環形土器も、資料が少なくて細分が困難な土器である。この種の土器は、脚台が付けば高環形土器となり、それがはずれると皿形土器となるが、六地蔵遺跡では口縁部が出土しているのみで、その特徴を明確に示す資料が無かったため、ここでは併記している。文様としては、土器の内面に貝殻擬似縄文が施文されたり、口唇部に沈線文が施文されたりする場合がある。

脚台には、有文と無文の2者がある。有文の脚台の文様は、沈線文や貝殻擬似縄文があり、357のように粘土紐の貼付や透穴がみられる場合もある。この手の脚台は、高環形土器の脚になる可能性が高い。

一方、無文の脚台は、229や230の土器が示すように、深鉢形土器の底部形態の一つであろうが、高環形土器のそれにならないという積極的な根拠はない。

次に、脚台の製作過程について触ることにする。脚台の製作過程は、3段階に分けられる(第92図)。最初の段階は、胴部と脚台部の製作である。そして、次の段階になって、この二つの部分が接合される。しかし、この段階ではまだ土器の底は作られてはおらず、最後の段階になって漸く粘土板が土器の底に据えられ、土器製作が完全に終了する。この間の時間経過に関しては判らないが、粘土板が土器本体から離れて検出される例が多いことから、粘土板と土器本体との接合は粘土板がかなり乾いた状態でおこなわれている可能性が高い。論の飛躍があるかもしれないが、土器製作時の分業の存在を予測できるかもしれない。

土器に関する記述を締め括る前に、その最後としてそれぞれの編年的関係についてみていくことにする。深鉢形土器Iは、IIよりも口縁部の作出法の特徴が古い様相を持っている。こうした視点から深鉢形土器IIをみれば、aはbよりも、bはcよりも古い様相を温存しているこ



第92図 脚台の製作過程

とに気付く。さらに、深鉢形土器Ⅰの口唇部文様の特徴は、鉢形土器Ⅰのそれに近似してもいるし、鉢形土器Ⅱは後続する土器への系譜を窺わせる。ここに、六地蔵遺跡の北久根山式土器は、古い様相をもった深鉢形土器Ⅰ・鉢形土器Ⅰとそれよりも新しい様相を示す土器群の共伴という特徴をもち、さらに深鉢形土器Ⅱでは文様帶の作出法によって段階的な変移性が認められるという特徴を有することが明らかとなった。と同時に、こうした事実は、六地蔵遺跡の土器群がさらに細分される可能性を示しているとも受け止められて興味深い。

出土した石器には、石鎌・石匙・石錐・削器・磨製石斧・打製石斧・楔形石器・石鎌・二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片・磨石・敲石・石皿・台石・石核・剥片があるが、この中で石鎌は堅穴式住居跡などからは出土しておらず、遺構や土器との共伴関係にやや疑問をはさむ余地が多分にある。したがって、石器組成を検討する際にはこうした遺構外出土の石器を除外する必要がある。第Ⅲ章の第4表に掲げている石器組成表は、それにあたる。

石核や剥片を除いた石器は、全体で99点が検出された。その内訳は、石鎌2点(2%)、石匙2点、石錐1点(1%)、削器5点(5%)、磨製石斧1点、打製石斧2点、楔形石器1点、二次加工ある不定形石器3点(3%)、使用痕ある剥片4点(4%)、磨石・敲石66点(67%)、石皿・台石12点(12%)で、石器組成の中で磨石・敲石が占める割合が突出している。このことは、ごみ捨て場から検出された資料が半数近くに及んでいることや他の器種が集落廃棄と共に持ち去られた可能性を考え合せても、やはり高い数値にかわりはない。磨石・敲石や石皿・台石の用途として、56や105のようにベンガラ製作に関係するものもあるが、それを示す資料の出現頻度は低く、当時の生業が植物質食料にかなりの程度で依存していたことを示すものであろう。

ところで、六地蔵遺跡が立地する場所は、これまで再三にわたって強調してきたように白川という大河川の氾濫原上である。こうした立地は、この遺跡と白川との強い因果関係に強い興味を持たせるが、それをはっきりと証明し得る資料が無い。例えば、骨製釣針などの有機物は土壤の酸性度によって消滅する可能性が多分にあるが、石製の網漁錘は当然残るはずである。そうはいっても、白川を前面にすえた自然堤防上に集落が営まれたことは、やはりそこに漁撈の存在を想定させてくれる。そこで一先ず、ここでは、現在もこの周辺でもおこなわれている梁漁(写真図版2-4)や、鮎漁などの網を必要としない定置漁具の使用による組織的漁撈を想定しておきたい。

資料不足が原因となる飛躍した見解ではあるが、集落の立地と石器組成から判断して、当時の六地蔵の集落は、植物質食料の採集や定置漁具などを使用した漁撈に大きく依存した生業形態が背景となって成立していたことを想定したい。

【参考文献】

- 青崎和憲ほか 1981 『加栗山遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集 鹿児島県教育委員会 鹿児島
- 江本直・浦田信智 1988 『曾畠』 熊本県文化財調査報告 第100集 熊本県教育委員会 熊本岡美詠子 1987 「九州における後期縄文土器について—北久根山式土器を中心にして」 『肥後考古』 第6号掲載 肥後考古学会 熊本
- 乙益重隆 1965 「縄文文化の発展と地域性 10 九州西北部」 『日本の考古学 II 縄文時代』 所収 東京 河出書房新社
- 加藤晋平・小林達雄・藤本強編 1982 『縄文文化の研究 8 社会・文化』 東京 雄山閣
- 木崎康弘 1985 「遺跡の概観」 『肥後考古』 第5号掲載 肥後考古学会 熊本
- 木崎康弘・隈昭志 『狸谷遺跡』 熊本県文化財調査報告 第90集 熊本県教育委員会 熊本
- 熊本市教育委員会編 1973 『昭和46年度 熊本市東部地区文化財調査報告』 熊本市教育委員会 熊本
- 小林久雄 1967 『九州縄文土器の研究』 熊本 小林久雄先生遺稿集刊行会
- 小林達雄ほか 1982 「縄文時代後期主要遺跡の分布—九州・中国・近畿」 『日本歴史地図 原始・古代編（上）』 所収 東京 柏書房
- 佐藤浩司・柴尾俊介ほか 1985 『下吉田遺跡』 北九州市埋蔵文化財調査報告 第39集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 北九州
- 島津義昭 1976 「西北九州の縄文後期社会—石器よりみた素描」 『どるめん』 第10号掲載 東京 JICC出版局
- 杉村幸一 1988 「縄文時代後期北久根山式土器の一考察」 『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史（中巻）』 所収 福岡 岡崎敬先生退官記念論集刊行会
- 田中良之 1981 「阿高式土器」 『縄文文化の研究 4 縄文土器II』 所収 東京 雄山閣
- 田中良之・松永幸男 1983 「寺の前遺跡縄文後期土器について」 『荻台地の遺跡』 所収 荻町教育委員会 大分県荻町
- 田中良之・松永幸男 1984 「広域土器分布圏の諸相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立」 『古文化談叢』 第14集掲載 九州古文化研究会 北九州
- 田辺哲夫・緒方勉ほか 1984 『沖ノ原遺跡』 五和町教育委員会 熊本県五和
- 鶴島俊彦・和田好史 1988 『村山闇谷遺跡』 人吉市教育委員会 熊本県人吉
- 富田紘一 1979 『昭和53年度 熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書』 熊本市教育委員会 熊本
- 富田紘一 1978 「旧石器・縄文時代の熊本」 『新・熊本の歴史』 1 古代（上）所収 熊本 熊本日日新聞社

- 富田紘一 1981 『上南部遺跡発掘調査報告書』 熊本市教育委員会 熊本
- 富田紘一 1986 「西山南麓の未紹介遺跡」 『戸坂遺跡発掘調査報告書』 所収 熊本市教育委員会 熊本
- 富田紘一・大城康雄 『吉原遺跡発掘調査報告書』 熊本市教育委員会 熊本
- 西健一郎 1980 「鐘崎式土器について」 『九州文化史研究所紀要』 第25号掲載 福岡 九州大学九州文化史研究所
- 西田正規 1984 「定住革命—新石器時代の人類史的意味」 『季刊 人類学』 第15巻第1号掲載 京都大学人類学研究会 京都 講談社
- 日本第四紀学会編 1977 『日本の第四紀研究 その発展と現状』 東京 東京大学出版会
- 日本第四紀学会編 1987 『日本第四紀地図』 東京 東京大学出版会
- 肥後考古学会編 1985 「特集：熊本の旧石器文化」 『肥後考古』 第5号 熊本
- 平岡勝昭 1986 『新南部・潤野遺跡』 熊本県文化財調査報告 第84集 熊本県教育委員会 熊本
- 平岡勝昭・鶴島俊彦 1983 『梅ノ木遺跡』 熊本県文化財調査報告 第62集 熊本県教育委員会 熊本
- 古森政次 1984 「菊陽町楠ノ木遺跡の調査」 肥後考古学会第178回例会資料
- 文化庁文化財保護部 1981 『全国遺跡地図 43 熊本県』 東京 財団国土地理協会
- 前川威洋 1979 『九州縄文文化の研究』 福岡 前川威洋遺稿集刊行会
- 丸山伸治・平井浩一 1988 『竜田陳内遺跡』 熊本県文化財調査報告 第98集 熊本県教育委員会 熊本
- 三島格編 1987 『浜ノ洲貝塚・丸子島古墳』 熊本日日新聞社・熊本県宇土郡三角町 熊本・三角
- 村井真輝・木崎康弘 1986 『伊坂上原遺跡』 熊本県文化財調査報告 第78集 熊本県教育委員会 熊本
- 山崎純男 1987 『柏原遺跡群 IV』 福岡市埋蔵文化財調査報告 第158集 福岡市教育委員会 福岡
- 山崎純男 1988 『柏原遺跡群 V』 福岡市埋蔵文化財調査報告 第190集 福岡市教育委員会 福岡
- 山崎純男・小畠弘己 1983 『柏原遺跡群 I』 福岡市埋蔵文化財調査報告 第90集 福岡市教育委員会 福岡

図版 1



1. 遺跡遠望（東方）
2. 遺跡遠景（東方）



3



4

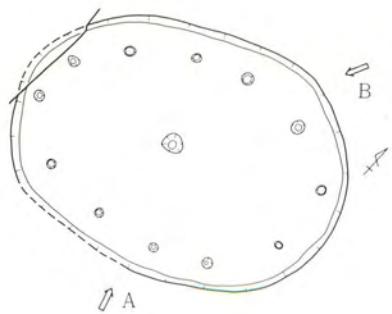
3. 遺跡遠景（西方）

4. 遺跡遠景（西方）白川にヤナが設置してある

図版 3



1号竪穴式住居跡
5. 写真右向A
6. 写真右向B



図版 4



7

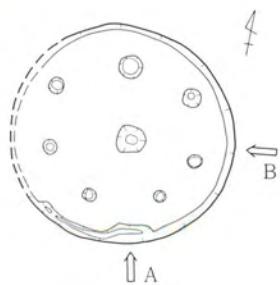


8

2号竪穴式住居跡

7. 写真方向 A

8. 写真方向 B



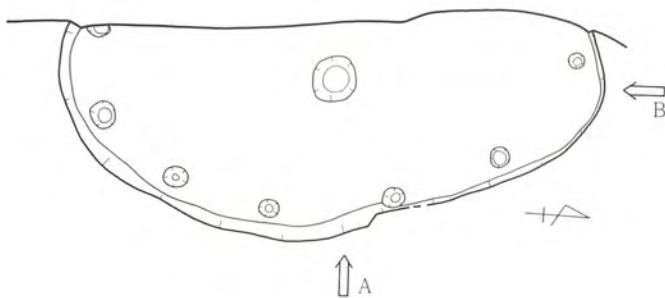
図版 5



9



10



3号竪穴式住居跡

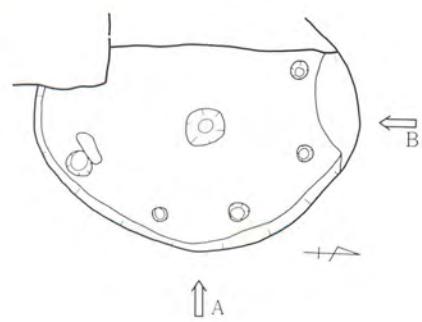
9. 写真方向 A

10. 写真方向 B

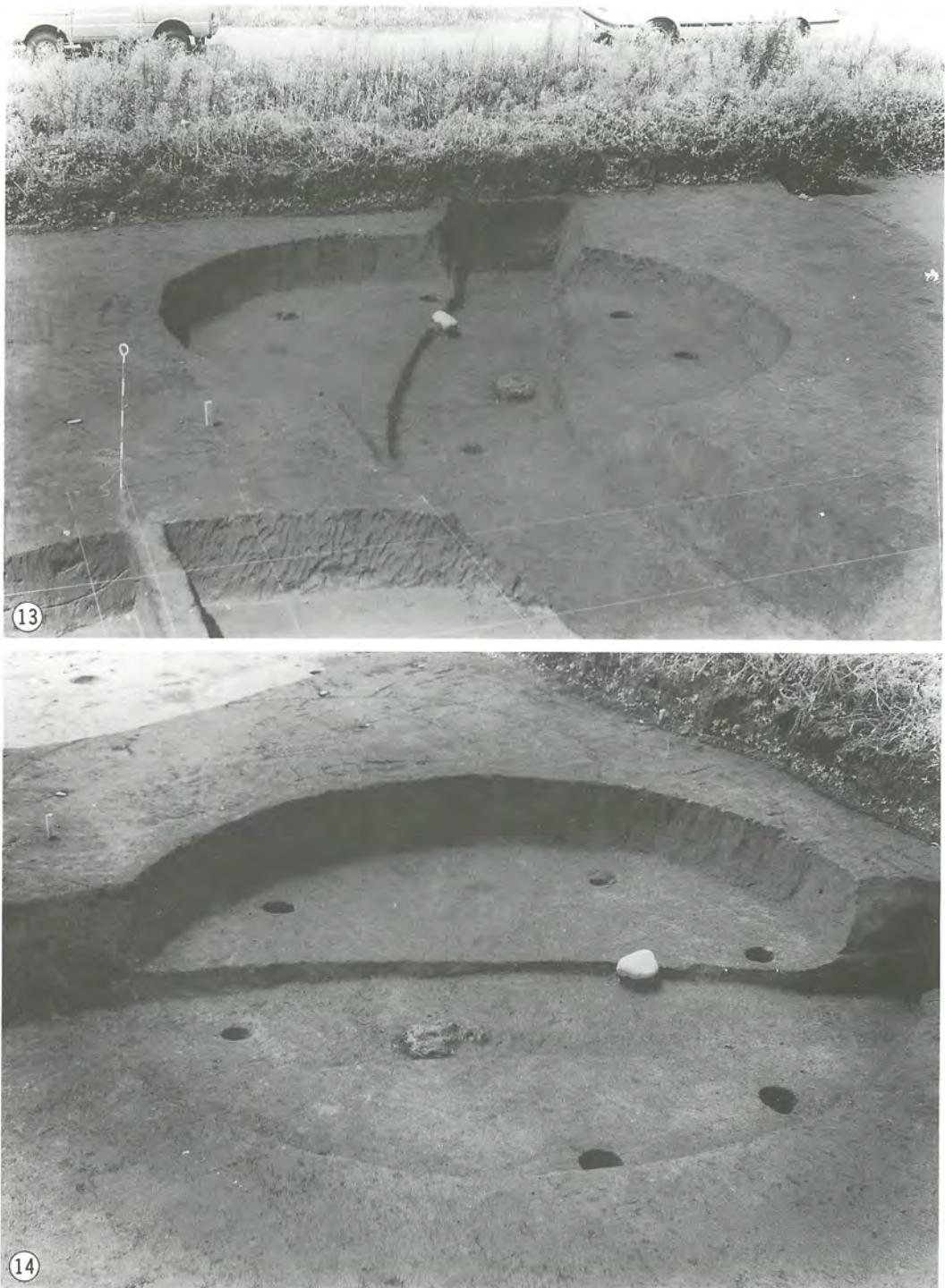


4号竪穴式住居跡

11. 写真方向 A
12. 写真方向 B



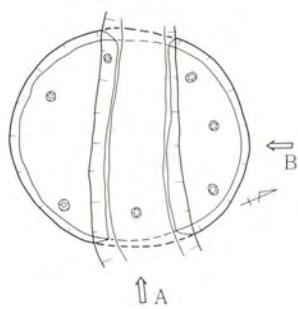
図版 7



5号竪穴式住居跡

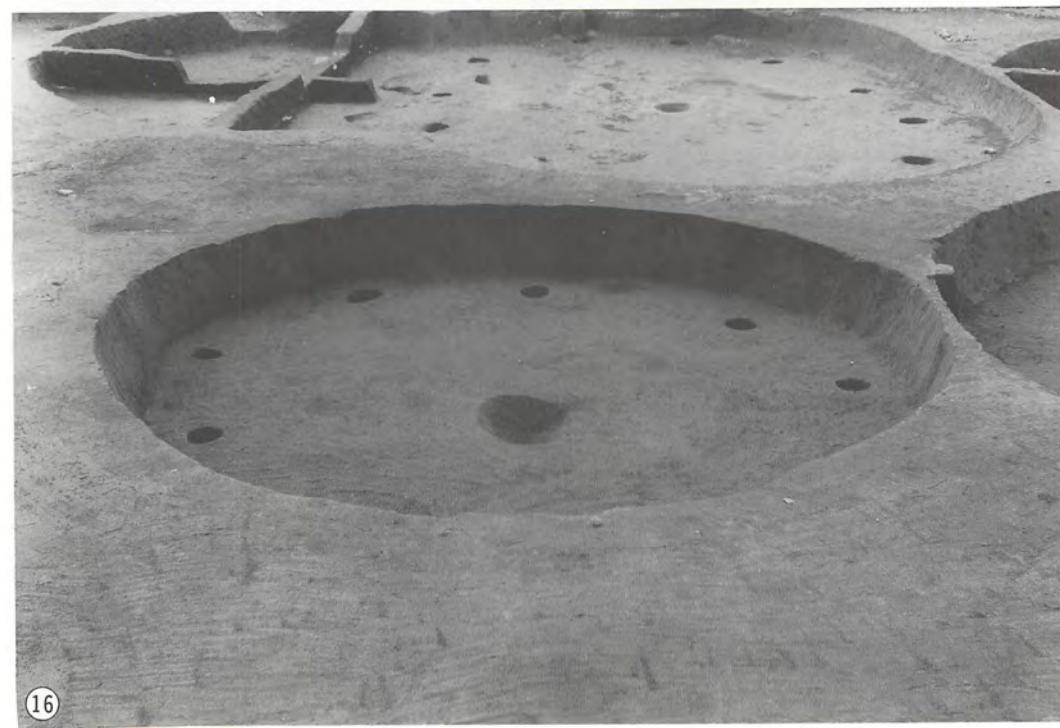
13. 写真方向 A

14. 写真方向 B





(15)

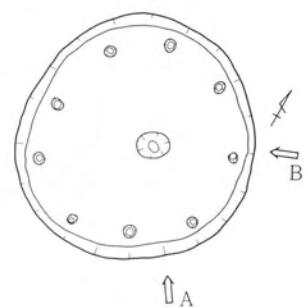


(16)

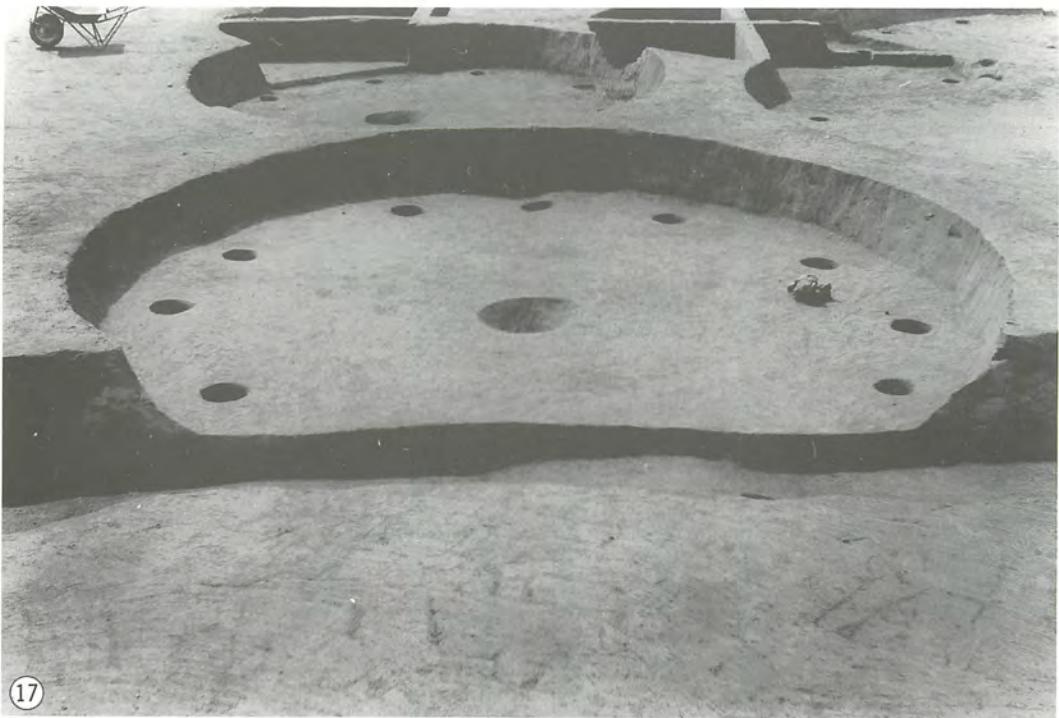
6号竪穴式住居跡

15. 写真方向 A

16. 写真方向 B



図版 9



(17)

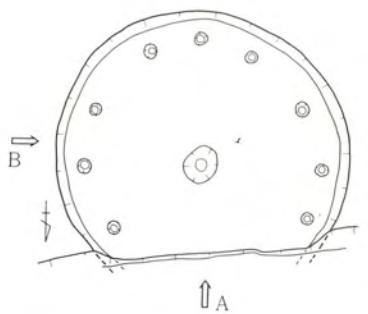


(18)

7号竪穴式住居跡

17. 写真方向 A

18. 写真方向 B

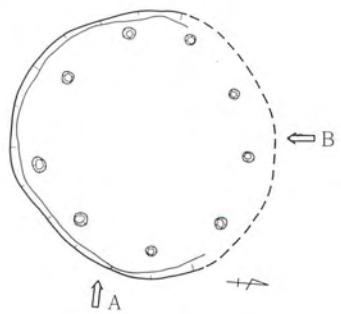




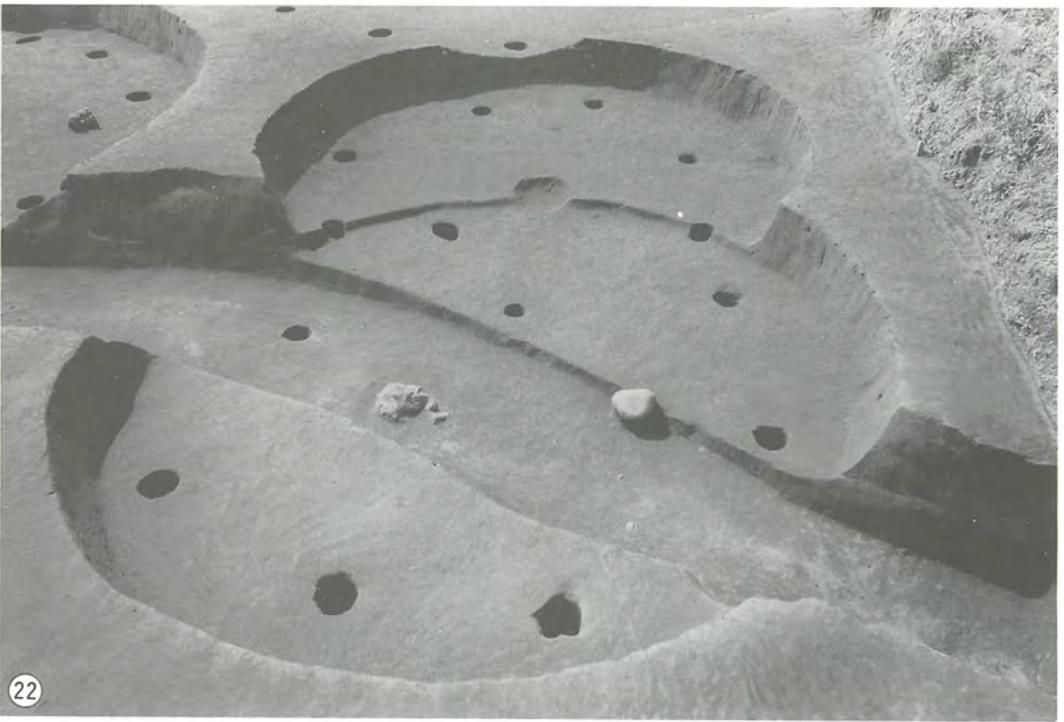
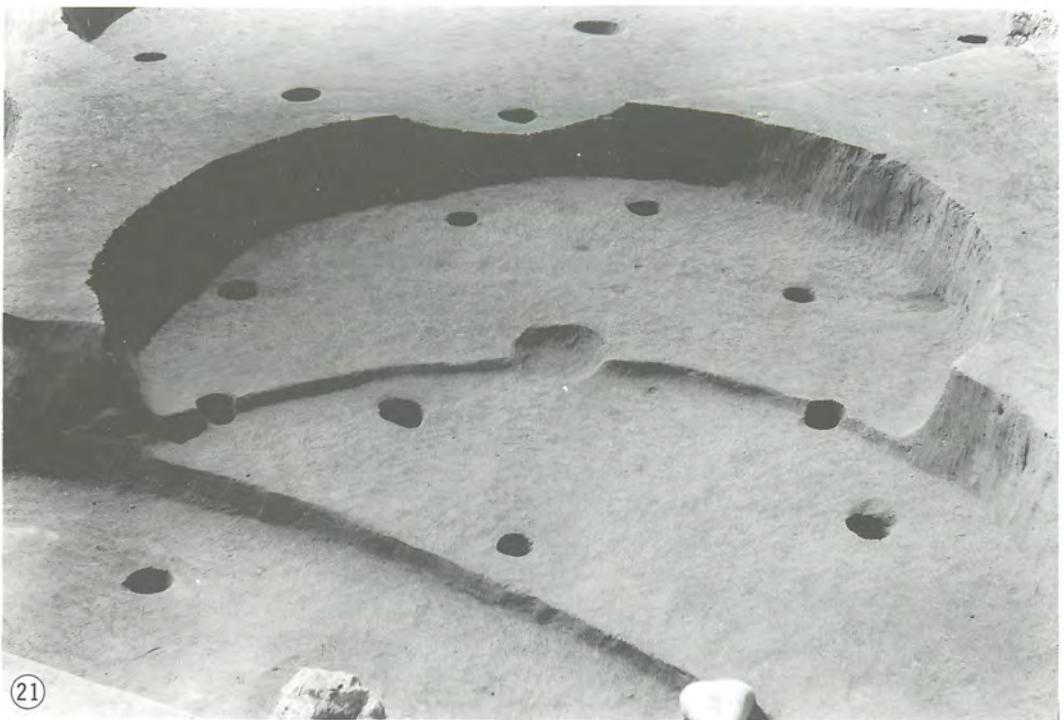
8号竪穴式住居跡

19. 写真方向A

20. 写真方向B



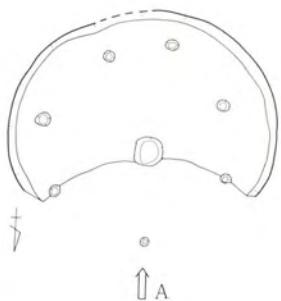
図版11



9号堅穴式住居跡

21. 写真方向A

22. 写真方向A. 5号住居跡との切り合い



図版12



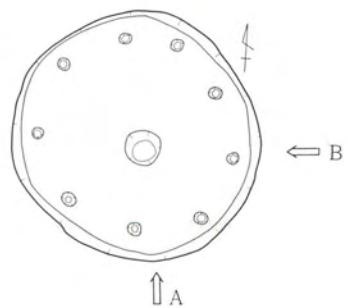
23



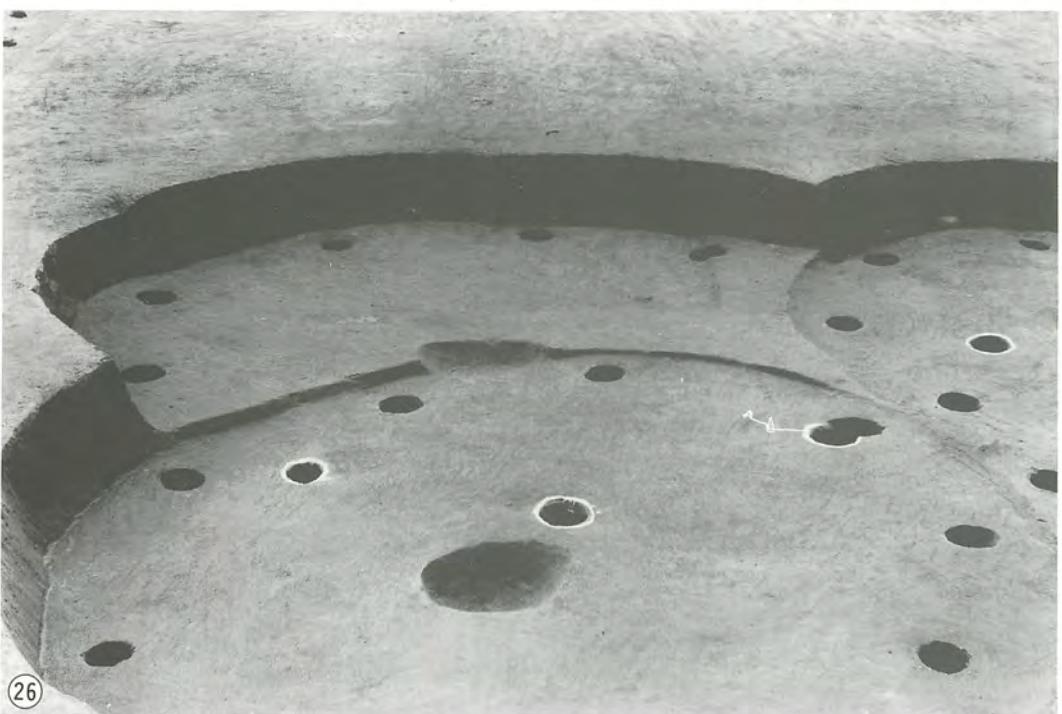
24

10号竪穴式住居跡

23. 写真方向 A
24. 写真方向 B



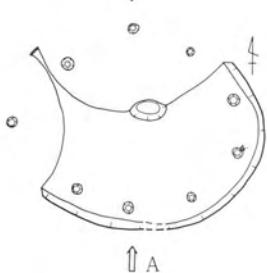
図版13



11号竪穴式住居跡

25. 写真方向A

26. 写真方向B





27

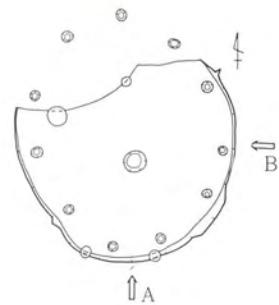


28

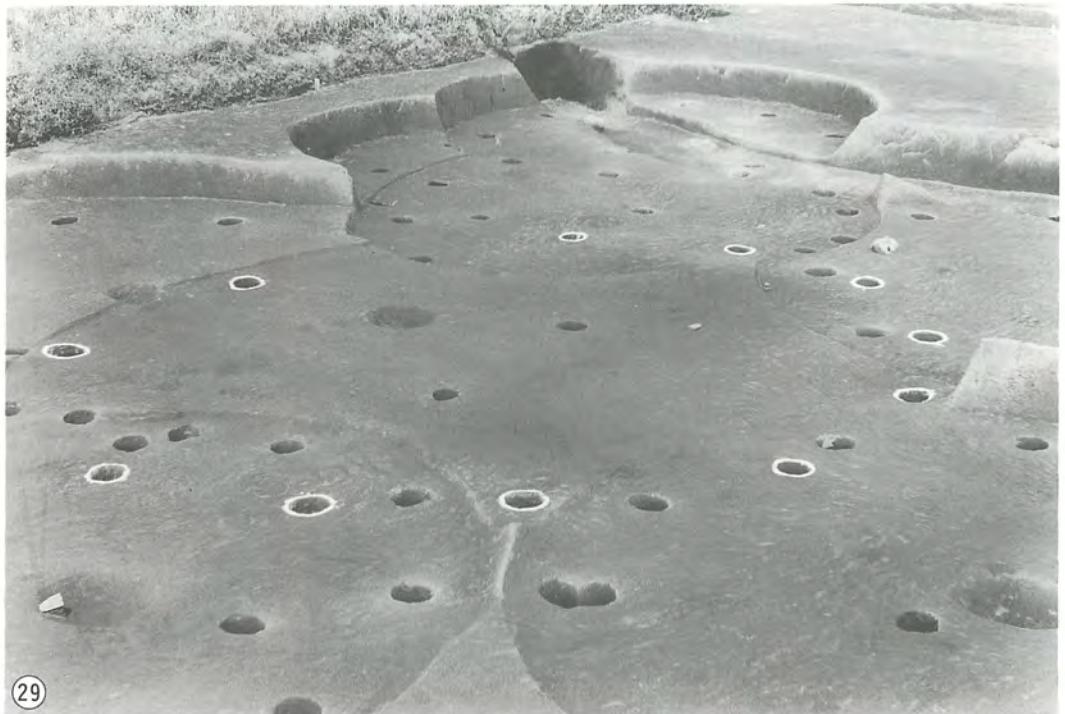
12号竪穴式住居跡

27. 写真方向 A

28. 写真方向 B



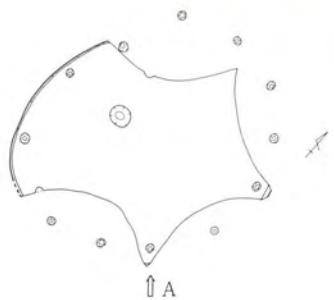
図版15

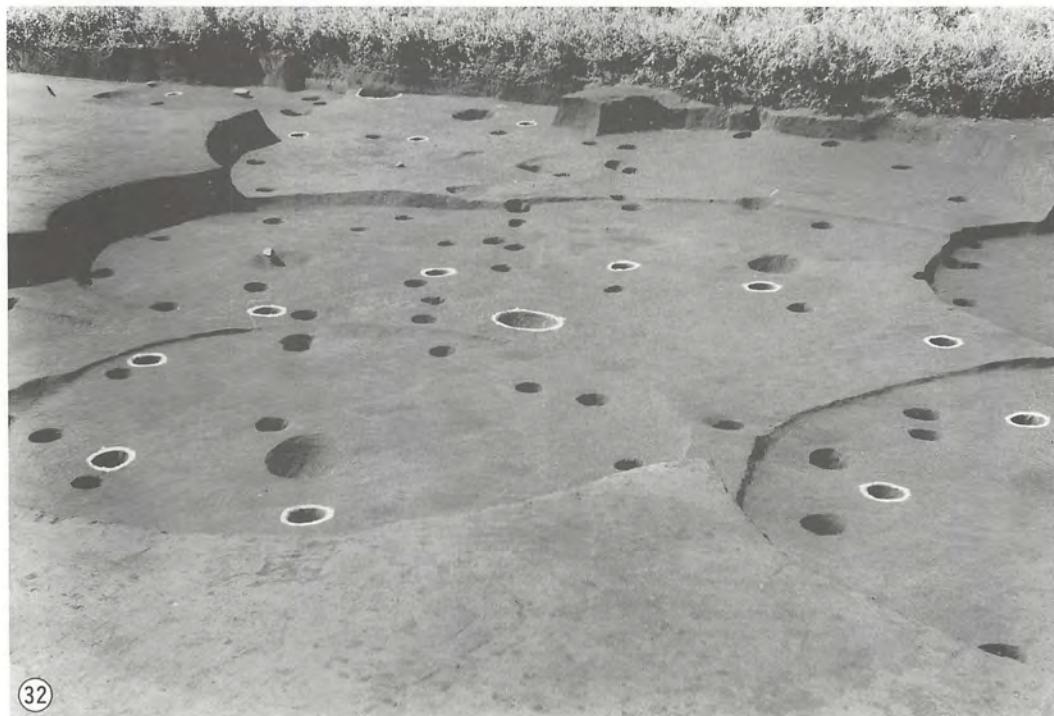


13号竪穴式住居跡

29. 写真方向A

30. 写真方向A. 切り合い状況





14号竪穴式住居跡

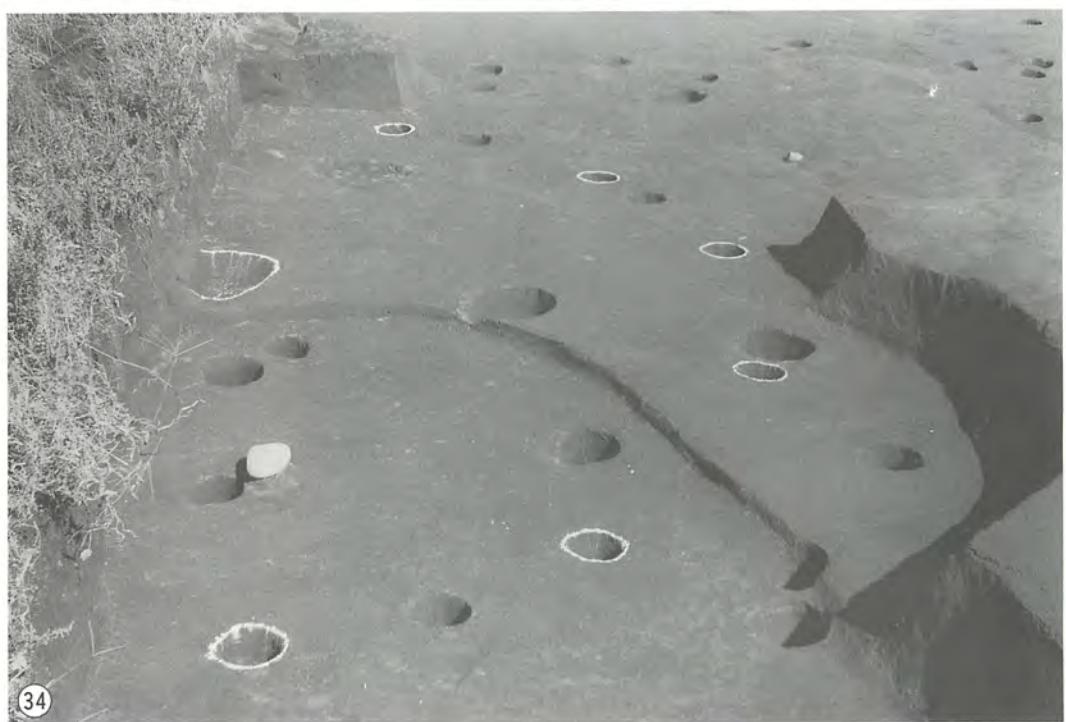
31. 写真方向A
32. 写真方向B



図版17



(33)

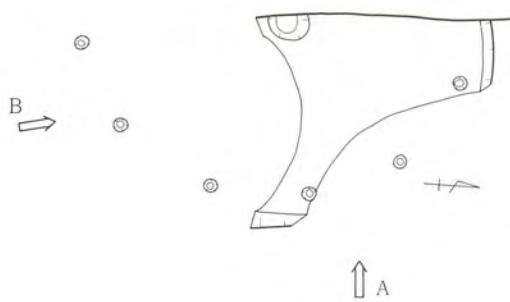


(34)

15号竪穴式住居跡

33. 写真方向A

34. 写真方向B

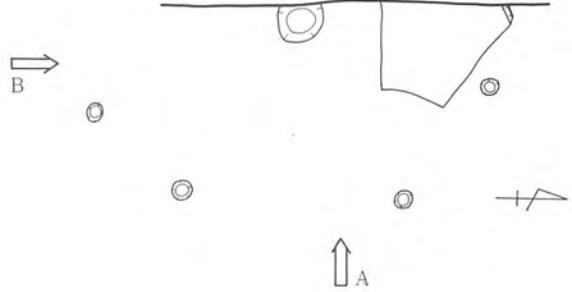




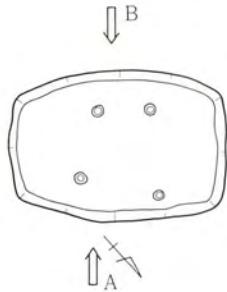
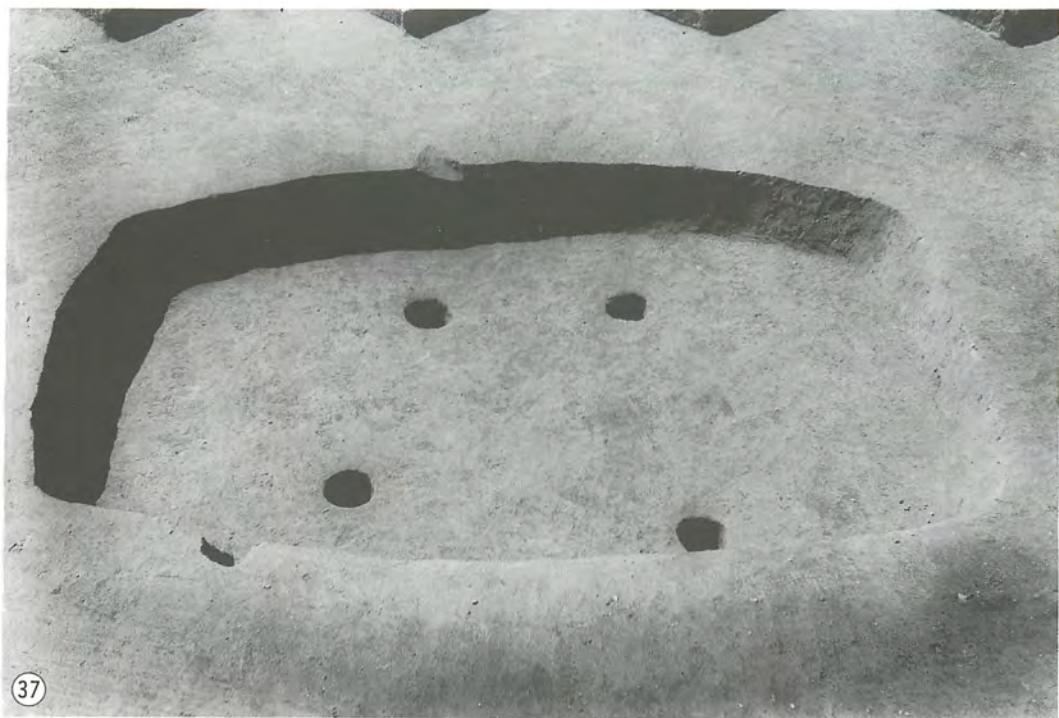
16号竪穴式住居跡

35. 写真方向 A

36. 写真方向 B



図版19



17号竪穴式住居跡

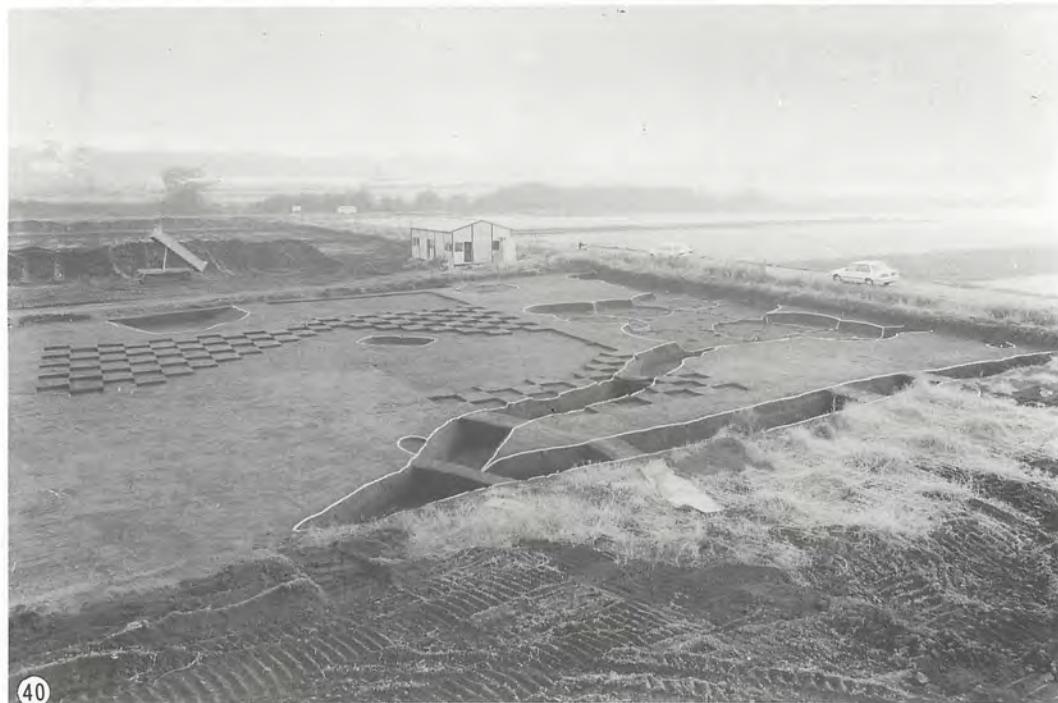
37. 写真方向 A

38. 写真方向 B

図版20



39

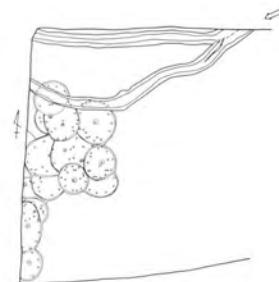


40

土坑と遺構調査終了風景

39. 1号土坑

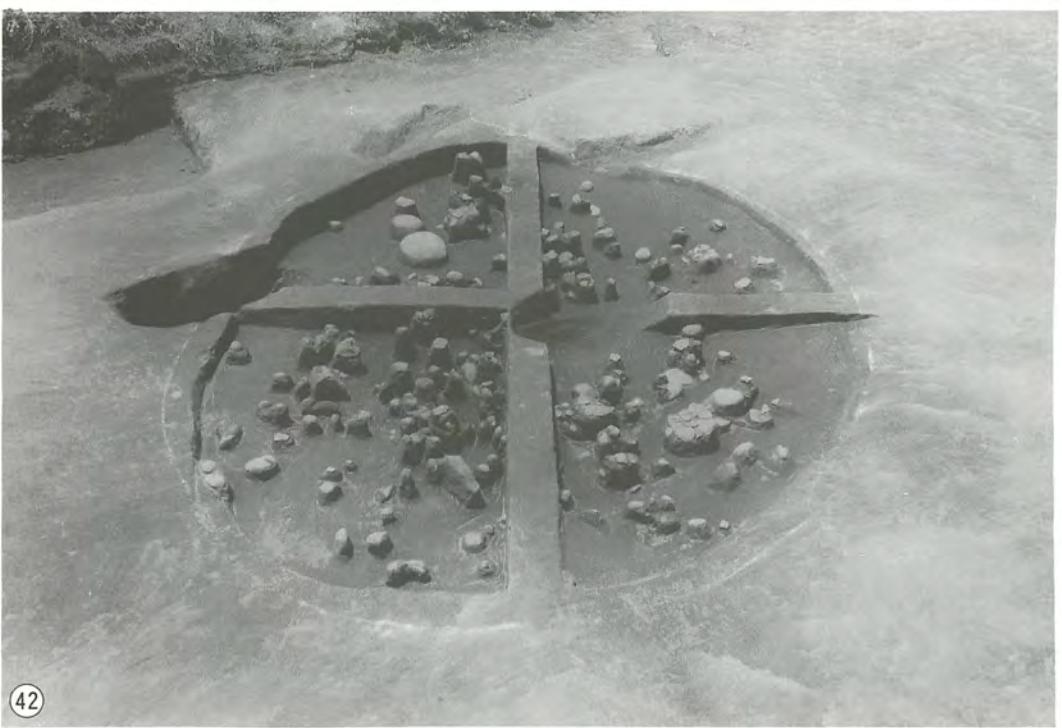
40. 遺構の調査終了風景



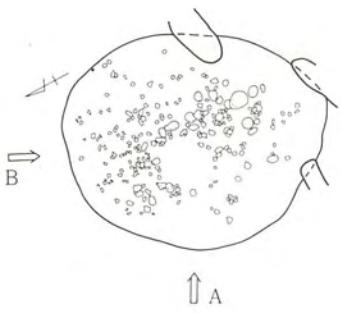
図版21



41



42



ごみ捨て場

41. 写真方向 A

42. 写真方向 B



43

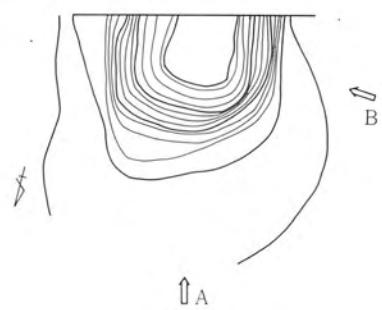


44

谷部（埋没谷）

43. 写真方向 A

44. 写真方向 B



図版23



45. 縄文式土器・石器 1～5



46. 縄文式土器 254



47. 縄文式土器 87



48. 縄文式土器 108



49. 縄文式土器 25



50. 縄文式土器 1～7 (3は別掲)



51. 縄文式土器 3



52. 縄文式土器 8～14 (10は別掲)



53. 縄文式土器 16



54. 縄文式土器 10・15



55. 縄文式土器 17～23



56. 縄文式土器 41～50



57. 縄文式土器 31～40

図版25



58. 繩文式土器 58~66



59. 繩文式土器 51~56



60. 繩文式土器 79~83



61. 繩文式土器 68~78



62. 繩文式土器 84~86



63. 繩文式土器 88~96



64. 繩文式土器 97~103



65. 繩文式土器 104~106



66. 繩文式土器 107



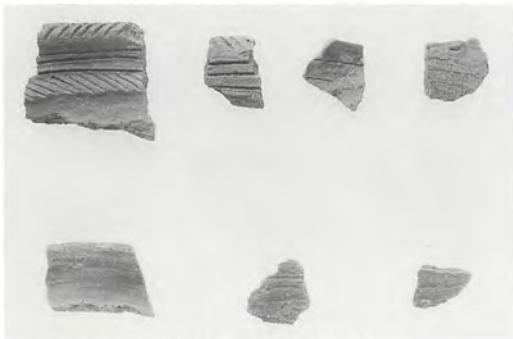
67. 繩文式土器 109～112



68. 繩文式土器 155～162



69. 繩文式土器 163～168



70. 繩文式土器 147～154(151は欠)



71. 繩文式土器 125～135



72. 繩文式土器 136～146(140・141は欠)



73. 繩文式土器 169～173

図版27



74. 縄文式土器 174



75. 縄文式土器 181～189



76. 縄文式土器 223～234(224.229.233は欠)



77. 縄文式土器 196～204



78. 縄文式土器 206～210



79. 縄文式土器 190～195



80. 縄文式土器 235～240



81. 繩文式土器 241～248



82. 繩文式土器 249～253



83. 繩文式土器 277～292



84. 繩文式土器 255～263



85. 繩文式土器 293～301



86. 繩文式土器 264～276

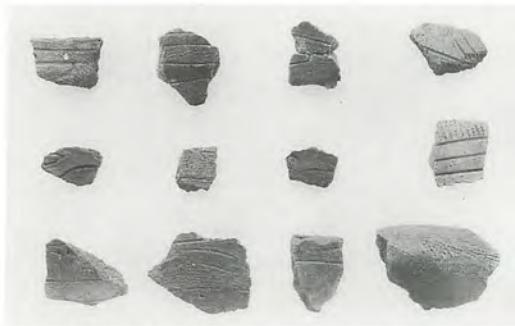


87. 繩文式土器 335～344



88. 繩文式土器 345～356

図版29



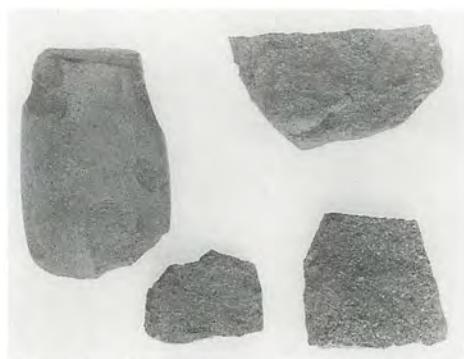
89. 縄文式土器 357～361



90. 縄文式土器 368～374



91. 縄文式土器 375～382



92. 石器 15～18



93. 石器 1～6



94. 石器 12～14



95. 石器 7～11



96. 石器 19・20



97. 石器 112

図版30



98. 石器 21~24



99. 石器 25~32



100. 石器 48~54



101. 石器 59~63



102. 石器 64~69



103. 石器 70~72



104. 石器 93~98



105. 石器 99

図版31



106. 石器 100



107. 石器 104~106



108. 石器 110



109. 石器 103



110. 石器 111



111. 石器 101・102



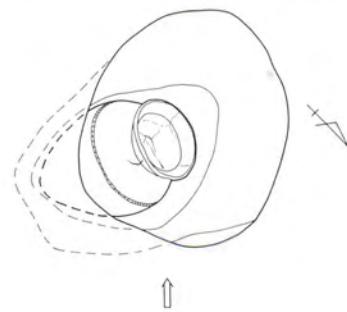
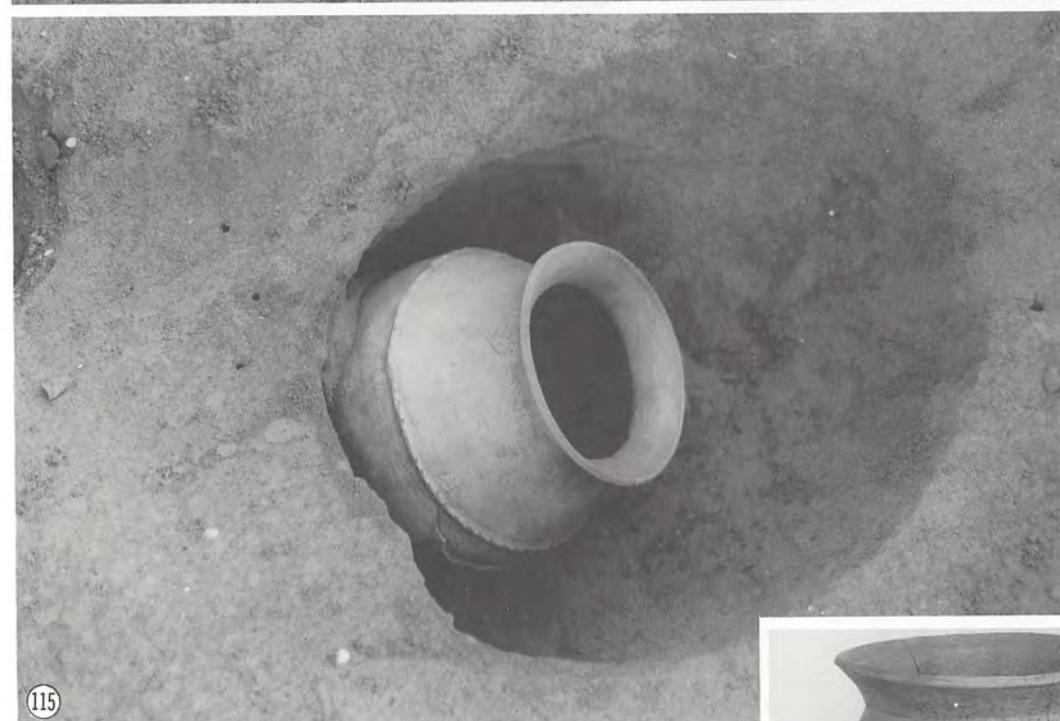
112. 石器 107~109



113. 石器 113~115

図版32

- 1号壺棺墓
114. 壺棺露出状況
115. 壺棺埋設状況
116. 1号壺棺



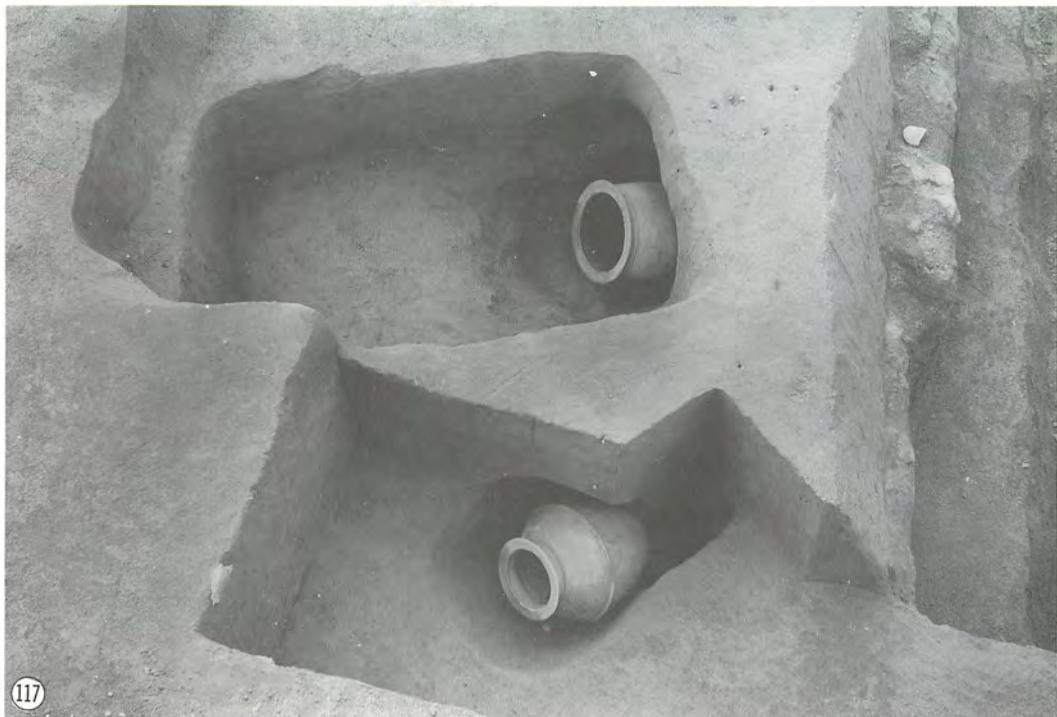
図版33

2号壺棺墓

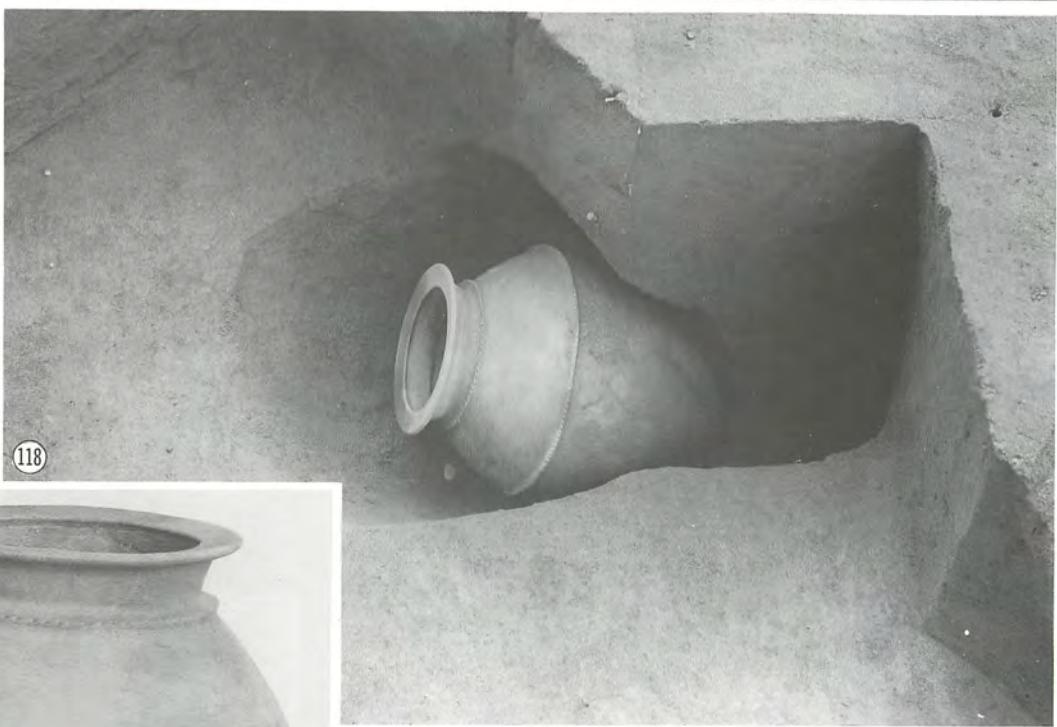
117. 写真方向B

118. 写真方向A

119. 2号壺棺



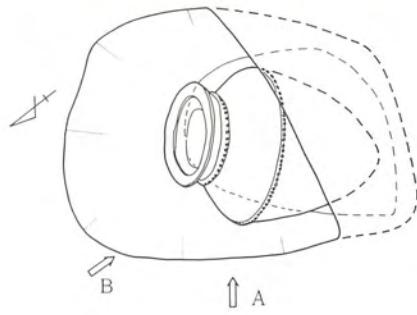
117



118



119



図版34

3号甕棺墓

120. 写真方向 A

121. 写真方向 B

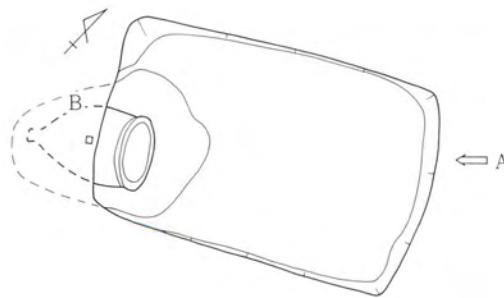
122. 3号甕棺



120



121



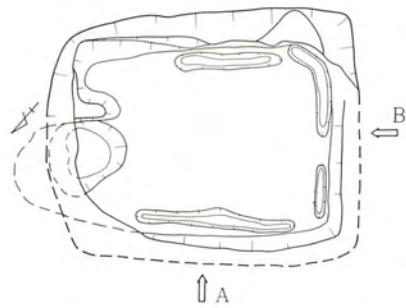
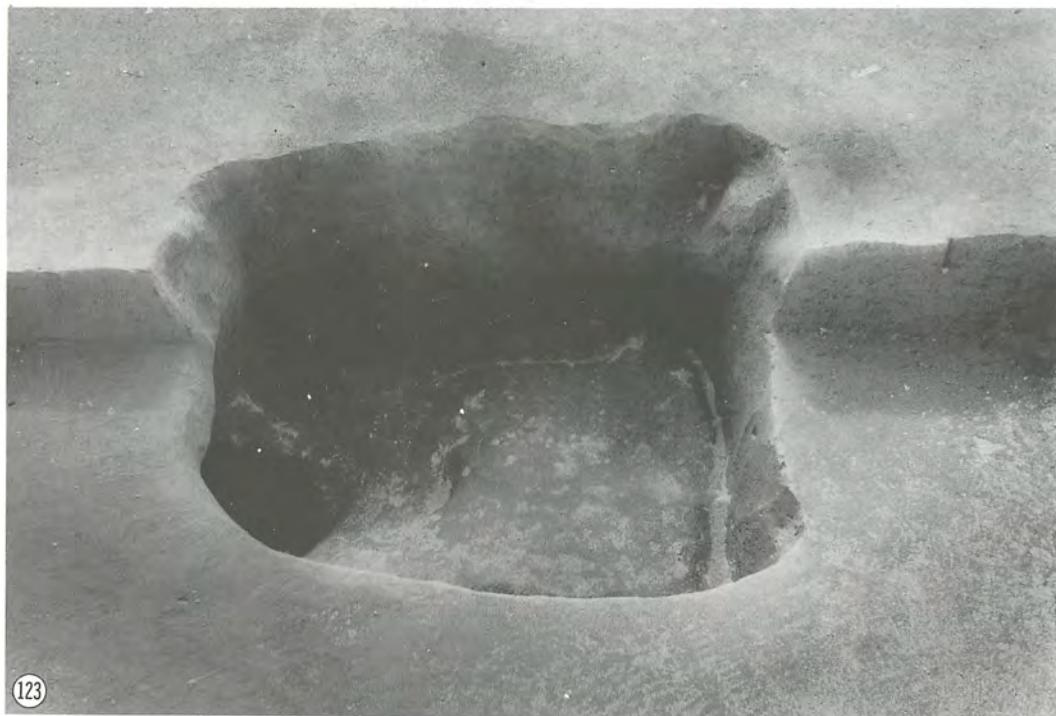
122

図版35

4号木棺墓

123. 写真方向A

124. 写真方向B





125. 弥生式土器 4



126. 弥生式土器 13



127. 弥生式土器 11



128. 弥生式土器 6～9



129. 弥生式土器 14



130. 弥生式土器 16



131. 弥生式土器 15



132. 弥生式土器 17



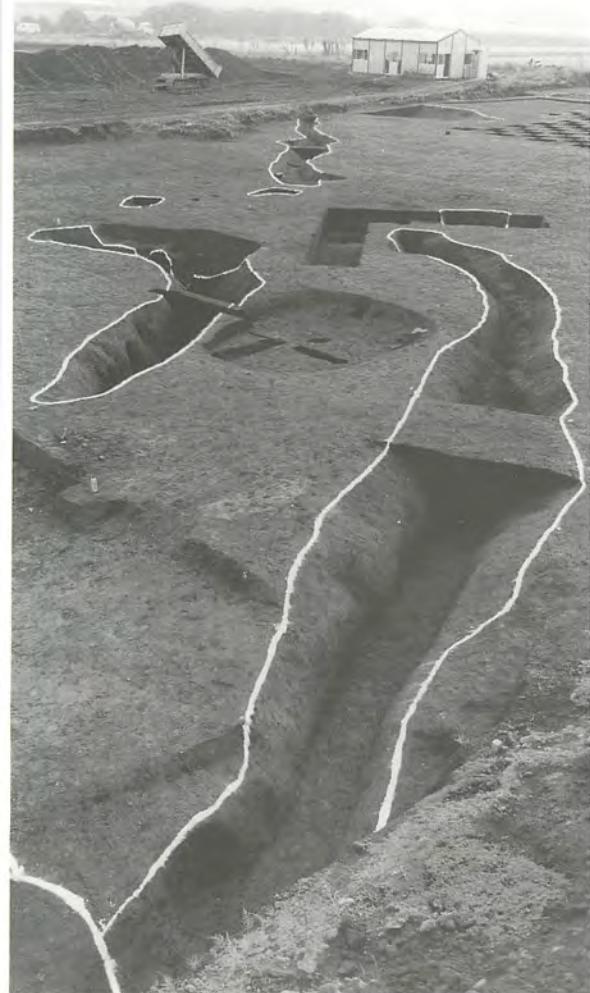
133. 弥生式土器 26

図版37

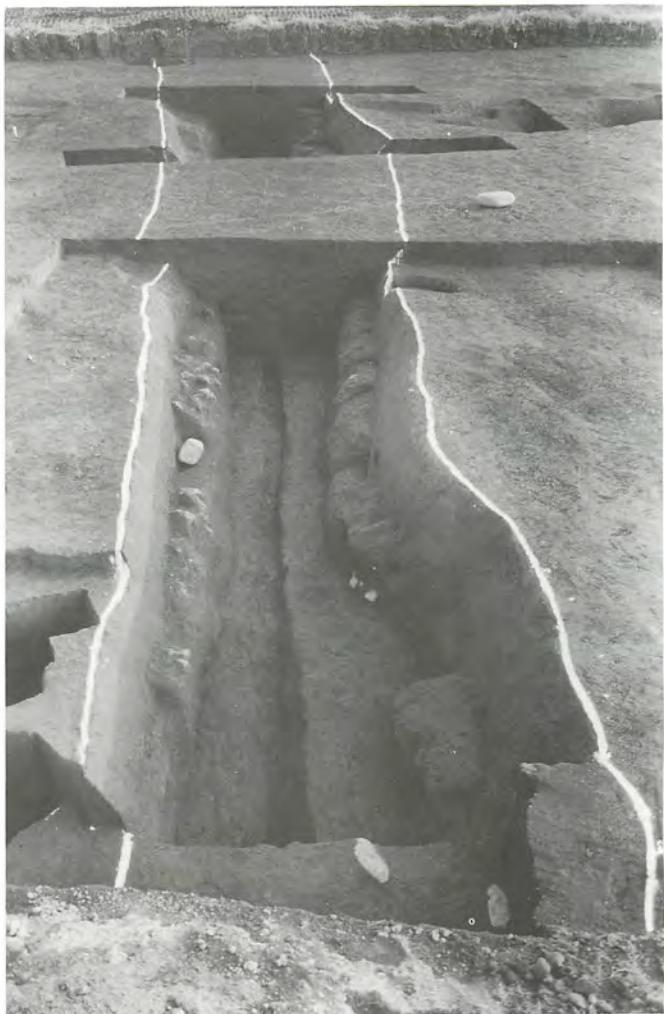


134. 1・2号溝状遺構

135. 3・4・5号溝状遺構



136. 6号溝状遺構



あとがき

已年に、六地蔵遺跡の報告書を出版することになり、何か因縁めいたことを感じます。それは、蛇と北久根山式土器との関係です。熊本県鹿本町成竹遺跡では蛇（まむし）の頭をかたどった土製品がみつかっていますが、北久根山式土器の一部だと考えられていますし、六地蔵遺跡から出土した北久根山式土器の中にも蛇を表現した装飾の土器が含まれています。このように、北久根山式土器と蛇はとても深い関係で結ばれているようですし、その土器を使っていた人々の蛇への思い入れも想像ができます。

さて、六地蔵遺跡の報告書を漸く出版にこぎつけることができましたが、本格的に整理を始めたのが昨年の12月です。時間的な制約は相当なものでした。そうした中で、報告書の様式がどうあるべきかを考えますと、事実報告に関しては特にしっかりしていることが望されます。こうした意味から、私は、事実報告を中心として報告書を仕上げたつもりです。何か言い訳じみているようですが、ここに盛り込むことができなかった報告者の所見については、再度吟味の上で公にしていきたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、いろいろな人たちからご協力をいただきましたので、芳名を記することで、感謝の意を表したいと思います。

【発掘調査】

上田よし子・上野とせ子・川端武・久保田マツ子・坂口圭太郎・阪田哲郎・沢田とよ子・紫藤貞喜・島村きみ子・田村ムツミ・林田ハツヨ・広野淳子・藤島千代子・松本静子・山下志保・吉川小夜子・吉川照子・米村朋浩・渡辺しまえ・渡辺まつの

【報告書作成】

上村孝子・江島園子・新改孝子・高島佳津子・中山安子・二ノ村映子・宮田日文・松本健郎・島津義昭・江本直・高木正文・野田拓治・西住欣一郎・赤木美文・瀬丸延子・加来恭子

熊本県文化財調査報告 第105集

六地蔵遺跡 I

平成元年3月31日

編集発行 熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 コロニーリントン
〒860 熊本市二本木3丁目12-37

63 教委 教文
0002 006

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第105集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：六地蔵遺跡1

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日